
生まれ変わりは貴族？

メイプル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わりは貴族？

【Nコード】

N5334K

【作者名】

メイプル

【あらすじ】

暗殺者として名を馳せた男、サヴァン。人の欲と裏切りが渦巻く世界で生きてきた彼が、謎の魔術師によって別の人の子供になって第二の人生をやり直すこととなった。しかし、サヴァンが飛ばされた世界はゼロの使い魔の世界だった。オリ主、チートな主人公が繰り広げる物語。原作が大きく変わっておりますので、その点をご了承ください。承いただいた上でお読みください。

第二の人生の始まり（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

第二の人生の始まり

「では、報酬だ」

彼の目の前に金貨の詰まった袋が置かれた。彼は袋の中に手を突っ込んで、それが全て金貨であるかどうかを確認してから受け取った。

「確かに。では」

彼はそれだけ言うと、その袋を持って酒場を出た。

彼の名前はサヴァン。それは通称であり、本名は誰一人として知らない。ただ知られているのは、彼が優秀な暗殺者であるということだけ。

サヴァンが殺してきた相手は貴族や王族などの大物が多く、その筋からは非常に恐れられていた。サヴァンに睨まれたら、絶対に逃げられないとさえ言われるほどだった。

但し、サヴァンに対して嘘を吐くのは絶対に厳禁とされていた。嘘を見破られたが最後、サヴァンは嘘を吐いた依頼人を絶対に許さないことでも知られていた。

サヴァンは酒場を出た後、一人で裏通りを進んでいた。裏通りに立ち込める臭いはゴミと汚物の臭い、表通りを華やかに見せるために汚いものは全て裏通りに捨てられていた。

「いい加減出てきたらどうだ？」

サヴァンは誰もいない場所に着くと、後ろを振り向かずになんと言った。彼は酒場を出た時から自分の後をつけてきている者の存在に気がついていた。

「さすがはサヴァン、と言ったところだな」

すると、前方と後方から十人近くの男たちが姿を現した。

「何の用だ？」

「悪いがその金貨を返してもらおうか」

「返せ……か。どうやら、あの依頼人の犬のようだな」

「死んでいくお前には関係ない！」

その声と共に、男たちは一斉にサヴァンに襲い掛かった。サヴァンは隠し持っていたナイフを先頭を走っていた男の眉間に突き刺し、上に飛び上がった。

「逃がすな！ 殺せ！」

「こっちの台詞だ」

サヴァンは懐に忍ばせていた爆弾を放り投げた。閃光と激しい音を立てて、爆弾は暗殺者を吹っ飛ばした。

「さて、次は裏切り者を……おっと」

すると、爆発の中からナイフが飛んできた。サヴァンはそれを難なく避けると、その方向を改めて見た。よく見ると、爆発で敵のほとんども死んでいたが、その中に一人だけ生きている者がいた。もつとも、左半身に大火傷を負っていて無傷というわけにはいかなか

つたが。

「生き残りがいたか。たいした奴だ」

だが、サヴァンは決して見逃すような甘い男ではない。彼は相手の姿を見つけると、すぐにそこに向かって駆け出した。

「炎弾！」

男は魔法で応戦しようとしたが、火傷による激痛でかなり集中が乱れているようだった。その証拠に、放たれた術も本来の威力を保てず、かなり弱々しいものだった。サヴァンはそれらをあっさりとかわして、男の心臓にナイフを突き立てた。

「が……あ………！」

短い断末魔を上げて、男は絶命した。サヴァンはだんだん周りが騒がしくなってきたのを見て、男たちの死体をそのままにしてさっきの酒場を目指した。目的は勿論、裏切った依頼人への報復である。暗い路地を走って、サヴァンは酒場にたどり着いた。他の客は飛び込んできたサヴァンに驚いたが、サヴァンはそんな周りの目を気にせず、さっきまで商談を行っていた部屋に一目散に飛び込んだ。

「逃げたか………」

さすがに敵も去るもの、暗殺者を放つても安心せずに真っ先に逃げたようだ。サヴァンは苦い思いを噛み締めると共に、敵の用心深さに少し感心もしていた。

「仕方ない。姿を消すか」

サヴァンはさっきの戦闘のせいで大きな騒ぎになってしまったため、依頼人への報復は諦めることにした。もともと、いつの日にかという思いだけは持ち続けていたが。

サヴァンは検問が敷かれる前に町を出た。最早野宿は避けられないが、町にいるリスクを考えれば外にいるほうがずっと捕まる可能性も低いので仕方のないことだった。

町を出た後はまず森の中に入った。獣がいるので危険性も高いのだが、人目に晒されることもないので逃げ切れる可能性が高い。

通常、暗殺者というものはフリーとそうでないものというものに分けられる。サヴァンは前者に属する暗殺者だった。

前者に属する暗殺者は、組織がバックについていないため、全て自分で処理しなければならぬが、後者は違う。

世の中にはギルドというものがある。商人ギルド、傭兵ギルドなど職種によって様々なものがある。その中には暗殺者ギルドという物騒なものも存在する。これは暗殺を請け負う窓口としての役目があり、請け負った暗殺に対して暗殺者を派遣して、その暗殺を速やかに遂行できるように逃げ場所の確保なども行っている。それによって、確実な暗殺の遂行を約束されているものなのだ。

前者は完全に信用商売なので、腕が立たないと依頼すら来ない。だからこそ、フリーで活動している暗殺者というのは数が少ないのだ。

また、前者はギルドに属していないがゆえに仕事を終えた後、消されてしまうことも珍しくないのだ。自分の身を守るのは自分の力だけ、その大前提でのみ生きているのがフリーの暗殺者なのだ。

「しかし、久しぶりにドジを踏んだものだ……」

焚き火の前で、サヴァンは珍しく愚痴を零していた。依頼人に裏

切られることなど今に始まったことではないが、その裏切り者の始末に失敗するなどここ最近ではありえないことだった。

「まあいいか」

サヴァンはあの依頼人のことは後回しにすることにした。当面はどこまで遠くまで逃げ切れるか、それが一番の課題となっていた。色々な国や地域で仕事を請け負っているため、その悪名は方々に轟いていた。ただ、今回の裏切り者を除いて仕事で手がけた相手は皆死んでいるため、その顔が知られることは今までなかった。

追っ手の心配があったため、その日は一睡もせず夜が明けのを待った。おかげで少々寝不足になったが、こんなことも日常茶飯事だった。

夜が明けると同時に、サヴァンは行動を開始した。まずは森を出てひたすら街道を北に向かって進んだ。目指す先は国境、そこを抜けて他国へ逃げるのが彼の目的だった。

いくら有名でも、仕事を控えている国ならば目をつけられることもないだろうと考えていた。

「いたぞお!!」

すると、いきなり兵士たちが現れ、サヴァンを追いかけてきた。

思ったよりも早い対応にサヴァンも舌を巻いたが、いちいち全員を相手にするのは面倒なので逃げの一手を選んでいた。

「逃がすなあ!!」

何処に潜んでいたのか、次から次へと兵士たちが姿を現してサヴァンを追いかけてきた。

(誰だ……この手際のよさは?)

今まで、色んな連中に追われたが、これほど手際のいい相手は初めてだった。まるで、初めから何処に逃げるかを知っているかのような兵士の配置、見事の一言だった。

「一発かますか……」

さすがに何の恨みもない兵士を殺しても一銭の金にもならないので、威嚇のために一発かますことにした。

「炎弾！」

兵士たちから数メートル離れた場所を狙って術を放った。当然、そんな離れた場所に撃つても兵士に当たるはずもなく、術によって舞い上がった砂煙が風に乗って兵士たちの目を眩ませた。

兵士たちは砂煙によってすっかりサヴァンの姿を見失い、その混乱に乗じてサヴァンはうまくその場を逃げおおせた。

「やれやれ。何とか逃げ切ったか……」

サヴァンは兵士の姿が見えなくなったところで、やっと一息をつくことが出来た。

「それにしても、何でこんなに手際がいいんだ？ 今頃はまだ町中を探していると思ったのに……」

この手際の良さには感心するしかない、サヴァンは誰だかわからない相手にただ賞賛を贈っていた。

しかし、ただ捕まっつてやるつもりもなかった。相手がその気なら徹底的に逃げ切つてみせる、それだけだった。

それから兵士による襲撃は時折あった。その度に相手を殺さないように細心の注意を払いながら逃げ回った。ここまでくると最早意地だけがサヴァンを支えていた。

(しかし、いい加減に何とかならぬものかね……)

サヴァンは意地で逃げ続けていたが、さすがにもううんざりしていた。最初こそ、相手の手腕を褒めたりもしていたが、今となってはただ面倒だと感じるだけだった。

「早いところ、国境を抜けるか……」

幸い、逃げ続けたおかげで国境までは思ったよりも早くたどり着くことができそうだった。今の調子で行けば今日中に国境を抜けることも出来そうだった。

「げっ……」

しかし、そんな希望は目の前に広がっている大兵团を見て、もの見事に打ち砕かれた。現在、国境には物凄い数の兵士が兵团を組んで待ち構えていた。

「どうやって逃げるか……?」

そう考えている時、兵团の中からひととき大きな声が聞こえた。

「いいか！ 犯罪者を絶対に逃がすようなことがあってはならない！ 何が何でも捕まえるぞ！」

(ん……？ この声って……)

サヴァンはその声に聞き覚えがあった。それを聞いてもう一度、兵団を見た。

「犯罪者を逃がしたらこの国の恥である！ 何としてもこの国で捕らえるのだ！ 駄目ならば始末してしまえ！」

「あいつ……！」

サヴァンは声を上げているその男に見覚えがあった。その男こそ、先日彼を裏切った依頼人その人であったからだ。彼は兵団の中心にいるその男を苦々しい思いで見た。

「どつりで手を回すのが早いわけだ……！」

兵団を指揮しているのが裏切りを働いた張本人なら、犯人を特定したように見せかけるのも簡単だし、どんな行動を取るかどうかの予測さえ簡単なはずである。

「裏切った拳句、まさか兵団までこさえてくるとは……！」

ここまで虚仮にされたことも今までで初めてのことだった。依頼人の中には当然貴族や王族もいたが、ここまで露骨な仕返しをしてくる手合いは初めてだった。

「とはいえ、兵士に手を出したらそれこそただではすまないし……！」

今まで表立った搜索が行われなかったのは、それが暗殺という秘

密裏に行われたものだからという理由が前提としてあったからだ。それに暗殺された相手を依頼人が病死なり何なり適当な理由をつけて誤魔化してくれたので、犯罪となっていないものも多々あった。

しかし、今回に関しては裏通りでの騒ぎという些細なものに過ぎないが、それでも表立って捜索する理由があるのでこれほど大規模な捜索が行われているのだ。そこまで初めから計算に入れていたと考えるだけで、サヴァンの怒りはどんどんそのボルテージを上げていった。

「あいつだけは始末しないと……」

サヴァンはもう国境を抜けることを後回しにして、ただあの裏切り者を始末することに全力を注ぐと考えていた。ただでさえ、この業界で裏切るなどという行為は死を意味するというのに、ここまであからさまに裏切ることなど誰が予想できようか。

「さてどうしようか……」

すると、街道を馬車が通っていくのが見えた。馬車の進んでいく先を見ると、あの兵団のご真ん中で止まった。そして、兵団に食料を配っていた。

「補給部隊か……使えるな」

サヴァンはあの補給部隊を見て報復の手段を考えた。すると、後続の補給用の馬車がどんどん続いてやってきた。

サヴァンはその一番最後尾にいる馬車を狙って、こっそりと荷台の中に忍び込んだ。

「あったあった」

荷台の中身はもちろん補給用の食料だった。肉やパンなどがたくさん積み重ねられていた。それを満足そうに見た後、サヴァンは薬の瓶を取り出して載っていた全ての食料にそれを振りまいた。そして、それが終わると逃げられなくなる前にと、急いで荷台から降りて再び状況を窺うことにした。

変化が起こったのは夜になってからだった。兵団の一部が急に慌しい動きを見せ始め、多くの兵士が持ち場を離れるという事態が起こったのだ。

「よし。今だ」

サヴァンはそれを見て迷うことなく兵団のいる国境へと突っ込んでいった。運も味方して今日は月も出ていない新月の夜、逃げるには正にうってつけだった。

「て、敵襲！ 敵襲！」

見張りの兵士の声を聞いて、他の兵士たちも一斉に動き出す。既に現場は混乱していて指揮系統は全く機能していなかった。

(こんなに効果があるとは……)

サヴァンが取った作戦は、兵士たちの食料に毒を混ぜることだった。もちろん、殺してしまっただけでは何にもならないので、激しい腹痛と下痢を引き起こすものを使用していた。それでも、多くの兵士を戦闘不能状態に陥らせるには充分であり、その効果は今日の前で実証されている通りのものだった。

「死にたくなければどけえ！」

更に弾幕を張るために炎弾を適当にぶっ放し、煙幕を張って逃げやすい状況を演出した。元々、指揮系統が全く機能していない兵士たちは、この煙幕で完全に混乱して同士討ちなどを始めていた。

「ええい！ 何をやっておる！？ あいつを殺すのだ！」

どうやら、肝心の手合いは毒入りの食べ物を食べなかつたらしく、氣勢のある声で兵士たちを再び纏めようとしていたが、それはサヴァンに居所を教えているようなものだった。

(借りは返させてもらう)

居所を確認したサヴァンは、男の姿を確認すると遠くからナイフを放った。

「うっつ！」

短い悲鳴、それだけでナイフが男に命中したことだけは確実だった。たとえ、ナイフが急所を外していたとしても、その刃には強力な毒が塗ってあるので命を落とすことは間違いない。つまり、ナイフが当たった時点で彼の作戦は成功していると言っているのだ。

作戦が成功したとなれば、あとはただ逃げるだけだった。彼はこの混乱に乗じて一気に国境を越えてしまおうと走り続けた。しかし、彼の進撃はここまでだった。

「何！？」

サヴァンは何者も寄せ付けずに進撃し続けていたが、突如目の前

に展開された魔法よってその身を囚われてしまった。

それは今まで見たこともない魔法だった。全身の自由が利かなくなり、その背後にはまるで渦を巻いているかのような黒い空間が広がっていた。

「何だ……この術は？」

サヴァンもこの術を見るのはこれが初めてだった。そもそも、現存する術でこんな術があるなどという話は一度も聞いたことがなかった。

彼は魔法についてはかなり勤勉に学んでいた。それは自分の身を守るためであつたし、相手の依頼を確実に遂行するための道具であつたからだ。その彼でも、今自分が受けている魔法は全く知らないものだった。

「くそっ……!!」

無駄かもしれないとは思いつながらもサヴァンは必死で抗った。千に、万に、億に一つの可能性があるのなら、それを遂行する。それがこれまで彼が生きながらえさせてきたからだ。どんな苦境に陥ろうとも一度足りとて、彼は諦めるといふことをしなかった。暗殺者という穢れた職業を生業としてきたが、それだけは彼が唯一自分に誇れる部分だった。

「あいつか……!!」

彼に向けて手をかざしている一人の魔法使いの姿が見えた。ロ―ブで顔も隠しているため、その姿ははっきりと見えなかったが、他はまだ混乱している状況なのでそいつが術を使っているのは明白だった。

『略奪者よ……』

すると、サヴァンは頭に直接変な声が聞こえてくるのを感じた。周りを見てみたが、変な真似をしている奴は見当たらなかった。

『お前はこの世を去り、新たなる世にて贖罪を果たせ』

「贖罪？」

『さらばだ。略奪者よ』

「な、何だあ!？」

その言葉が途切れたと思うと、サヴァンは黒い空間の中に引きずり込まれていった。

全力の力を持って最後の抵抗を試みたが、それも敵わず、意識はだんだんと深い闇の底へと引きずりこまれていった。

(ん……ここは、何処だ?)

サヴァンが目を覚ますと、見たことのない天井があった。

「おお! やったな、エレーネ!」

すると、見ず知らずの男がやって来た。金髪で口元に髭を生やしており、その身なりはきちんとしたものであり、サヴァンには相手が貴族であることは一目で見抜いていた。

「この子が私の跡取りか！」

(跡取り？ 何のことだ？)

サヴァンは男が何のことを言っているのか理解できなかったが、次の瞬間にはそれよりも驚くことが起こった。

「よし！ 私がお前のパパだ！」

男はそう言うと、サヴァンを軽々と抱き上げた。サヴァンは体つきはかなり痩せ型だったが、しっかりと鍛え上げられているので体重はそれなりに重いほうだった。それなのに、自分より体を鍛えているとは思えない男が軽々と自分を抱え上げていることに驚きを隠せなかった。

「今日からお前はヴァルデス、ヴァルデス・ウエストリ・コーラッドだ！」

(ヴァ、ヴァルデス？ この男はいったい何を……？)

その時、ふと顔を横に背けた時にサヴァンは見てしまった。

(じ、これが俺か？)

鏡の映っているのは間違いなく生まれたばかりの赤ん坊だった。そこには暗殺者として名を馳せたサヴァンの姿はなく、純粹無垢な姿をした赤ん坊がそこにいた。

「今日からお前はこのコーラッド家の跡取りだ！ 一緒に生きよう」

ぞ、我が息子よ！」

喜びの笑い声を上げる父と名乗る男と、自分の姿を見て愕然としている暗殺者、全く異なる感情を持った二人にこの時、親子としての絆が結ばれた。

領内視察（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

領内視察

ヴァルデス・ウエストリ・コーラッドが生まれてから五年の月日が経った。コーラッド家はゲルマニアに置いて伯爵家の称号を貰っている家柄だった。

しかし、その生活は決して裕福とは言いがたいものだった。コーラッド領では漁業がその主な収入源となっているが、それ以外の収入はほとんどなかった。領民の生活も漁業以外のものがないので、税金を払うだけでも一苦労する有様だった。

ヴァルデスはコーラッド家始まって以来の天才だと両親や領民たちからは評価されていた。一歳を過ぎたことには自由に歩き回る事ができ、一歳半の時には既に自由に言葉を話していた。

ヴァルデスの父コーエンは水のトライアングル、母のエレーネは風のトライアングルだった。魔法使いの家系としても中堅、本当にぱっとしない家系というのがコーラッド家が対外にもたれている印象だった。

「ヴァルデス！ ヴァルデスは何処だ！」

そして、今日もいつものようにコーエンの声が屋敷の中に響いた。

「旦那様、おはようございます」

ヴァルデスの部屋の前にはいつものように侍従長であるマリエルが控えていた。

「ヴァルデスはどうした？」

「ヴァルデス様はいつものようにお部屋にてトレーニングに励んでおります」

「またか……」

コーエンは思わず頭を抱えた。これがコーエンの頭を悩ませている種だった。

「マリエル。何故、あの子は魔法の鍛錬より体を鍛えようとするのだ？」

「はあ……ヴァルデス様がおっしゃるには、魔法を使うにしても体を鍛えておいた方が使い勝手がいいからということですよ」

「……そうか」

コーエンもその言葉には賛成だった。どんなに強力な魔法が使えようとも、それを使うだけの体力が無ければ無用の長物と化してしまうからだ。それはかつて内乱戦争に参加したコーエンはその身をもって理解していることだった。

しかし、世間では天才児と呼ばれているヴァルデスもまだ五歳の子供なのだ。そんな背伸びをして体を壊すのではないかと、両親はかねてから心配の種を抱えていた。それに世間の子供と同じように親に甘えてほしいという願望もあった。

「旦那様、こんなことを言うのは恐縮ですが……」

「何だ？」

「ヴァルデス様は軍人に向いているのではないのでしょうか？ 考えるより行動が先に出るあの性格といい、普段から体を鍛えようとするあの行動といい、全てが軍人向きではないかと私は思います」

「……やはりそう思うか？」

それはコーエンも思っていた。どう考えたって、あれらの行動が政治家向きだとは思えなかった。生まれながらの軍人といわれても誰一人として疑う者はいないだろう。だが、それはコーエンの望むところではなかった。

戦争の悲惨さは参加したコーエンが一番よく知っていた。あの悲惨さをせつかく内乱が収まって平和になった今の世の中で息子に味合わせたくないというのが親心というものなのだ。

「はい。後は魔法衛士隊か軍隊かって所ではないかと思えます」

「……そうだな。まあいい、とにかくヴァルデスは中なのだな」

「はい」

コーエンはそれを確認すると部屋の中に入った。すると、部屋の中ではヴァルデスが腕立て伏せをしていた。その背中にいくつもの鉄塊を乗せた状態で。

「あ、おはようございます。父上」

「うむ。朝から精が出るな、ヴァルデス」

内心では呆れていたが、それでも必死になって体を鍛えている姿を見てはコーエンも何も言えず、無難な挨拶に留まった。

ちなみに、ヴァルデスの背中に乗っている鉄塊は彼が自分で錬金して土の塊を変えたものである。彼が一番最初に覚えた魔法が錬金だったのは、両親を驚かせた。

何故なら、水と風の属性を持った両親から生まれた子供は、普通なら最初に覚えるコモンマジック以外の魔法は両親の属性に沿った魔法である確率が極めて高いからだ。それなのに両親と全く関係ない土属性の魔法を先に覚えたのだから両親の驚きは一人だった。

「ちよつと手を休めて私の話を聞いてくれぬか」

「はい」

ヴァルデスは腕立て伏せを止めて、改めて椅子に座ってコーエンと向き合った。

「お話とは何でしょうか？ 父上」

「うむ。お前もそろそろ領内を見て回ってもよい歳だと思う。だから、今日は私と共に領内を見て回るからついてまいれ」

（しかし、今頃になって初めて屋敷から外に出るのか？）

ヴァルデスはちよつと遅すぎるのではないかと感じていたが、それにはきちんと理由があった。このコーラッド領内は他の領に比べると平和なのだが、それでも不貞の輩はいる。そいつらから身を守るための人員は用意しているのだが、それでも幼いヴァルデスを連れ出すには不安が残っていた。

それゆえ、ヴァルデスが言葉のある程度理解し、少しでも魔法が使えるようになってから領内に連れ出そうというのが両親の考えだ

った。ただ、ヴァルデスは二人が思っている以上の早さでその二つの条件を満たしてしまっただが、彼が必死になつて鍛錬をしている様子を見て焦る必要はないと判断したため、当初予定していた今の時期まで引き延ばしていたのだ。

「わかりました、父上。お供させていただきます」

「うむ。お前もいずれはこのコーラッド家を継ぐ人間だ。領民の生活を見て、何が悪いのかを判断し、領民のために何が出来るのかを考えるのだ」

「はい、父上」

返事を返すヴァルデスを見て、コーエンは満足そうに頷いていた。

「まあ気負う必要はない。今はまだ政治のことはわからんだろうから、領民たちがどんな生活をしているのかをよく見ておきなさい」

「はい」

「では、朝食の用意も出来たようだから食堂に行こう」

コーエンが手を差し出すと、ヴァルデスはすぐにその手を握り返した。滅多に甘えてこないヴァルデスが唯一両親とのつながりを示すのが握手だった。この握手が両親にとっては何よりも嬉しいものだった。

食堂には既にエレーネが座って待っていた。その周りには侍従たちが控えていた。

「おはようございます。母上」

「おはよう、ヴァルデス。今日も元気ね」

「はい。元気です」

侍従に椅子を引いてもらい、ヴァルデスとコーエンは席に着いた。

「親愛なる始祖ブリミルよ、本日も我らにささやかな糧を……」

コーエンが代表して祈りの言葉を述べる、その間は誰も一言たりとも発することはない。始祖に捧げる言葉を妨げることは、これ以上ないくらい無礼な行為として考えられているからである。

「では、いただくのか」

その言葉を皮切りにして食事が始まった。コーラッド家も貴族としては零細であったが、それでも食事は平民に比べれば充分豪勢であると言ってもいいくらいのものだった。しかし、ヴァルデスはこの異常に量が多い食事が苦手だった。

まずは、朝からこんなに食べられないという量そのものが苦手だった。それは食べきれないということと、たくさん残してしまうことが非常にもつたいたいということだった。残された食事は使用人たちが食べることもあるのだが、それでも結構な量が残ってしまうので廃棄されてしまうことが多かった。食べきれないから捨てるという行為がヴァルデスにはどうしても許せないものだった。

かつて、暗殺者サヴァンとして生きていた頃はその日食べる糧にも困ったこともあった。今は裕福になったとは言え、それでも無駄をたくさん出す今の食事のあり方には納得いかないものがあった。

（もう少ししたら提案してみるか）

さすがに完全に養ってもらっている身で贅沢を言うことは出来ない。ヴァルデスはそういうところにはかなり律儀な男だということに、生まれ変わって初めて気がついた。

「ヴァルデス、今日も体を鍛えていたの？」

「はい。母上」

「相変わらず体を鍛えるのが好きなのね」

「将来、立派なメイジになるために必要なことだと思っております」

「そう。でも、平民の剣などの武器の鍛錬までしているのは何故なの？ 魔法が使えるればそのようなものなど必要ないのでは？」

「いいえ、母上。武器は時に魔法より強いと私は考えております。メイジも平民も同じ人間、頭を思いつきりどつかれれば簡単に死にます。だから、武器の扱いに慣れておけばその対処をすることもできます」

これは前の世界で学んだことだった。魔法はあくまで道具であって、絶対の力ではないことはサヴァンが一番よく知っていた。呪文を唱える間にナイフを投げられてしまえばそれまでなのだ。

「そうなの……でも、無理をしてはいけませんよ。あなたはまだ小さいのですから、ゆっくりと学んでいけばよいのです」

「はい。心得ました、母上」

朝食のときに会話をするのはマナー違反とされているが、元々が寡黙なヴァルデスなので少しでも会話する場を持つと、両親が考えた苦肉の策だった。ただ、最初は両親も少しマナーに反していることに戸惑いを隠せなかったが今ではこっちの方が好きになっていた。

賑やかな朝食というのは平民のものかと思っていたが、少し外れるだけでこんなにも食事というものが楽しくなるのかと少し平民たちの生活を取り入れてみようというのもヴァルデスが生まれてからコーラッド家で変わったことの一つだった。

楽しい食事が終わると、ヴァルデスはコーエンと共に馬車に乗って領内を見て回るようになった。穏やかな平原が続く風景、と言えば聞こえはいいのだが、ヴァルデスにはその風景が少し違って見えていた。

(これだけの平原地帯なら畑でも作ったほうが有意義だろうに……)

青々とした広大な草原地帯、言い換えれば、そこはまだ人の手が入られていない場所ということである。手を入れれば広大な畑に変えることが出来る場所であり、生産性の高い産業に使用する事だつて可能な場所なのだ。

「どうした？ ヴァルデス」

「いえ、ここを畑に変えたら儲かるかなと思ひまして」

「畑？」

「ええ。漁業しか主だった産業がないのなら、今からでも農業を展览展示せればいいのではないかと思ひまして……」

「なるほどな。確かにそうだが、これがなかなか難しくてな……」

「何故ですか？」

「畑にするにも金がかかる。かかった費用に対して、ペイするのにも時間がかかるからな」

それも納得いく話だった。ただでさえ、零細貴族であるコーラッド家の資金でこれだけの土地を畑に変えることは難しい話である。ヴァルデスは一気に全てを畑にするのは無理ならば、少しずつ畑に変えていこうと考えを改めていた。ただ、無理だと話している父の前でその話をするのもう少し後になることだったが。

「わかりました。仕方ないですね」

「まあいずれは取り組まなければならない課題ではあるのだがな」

馬車は更に街道を進んでいき、やがて小さな漁村にたどり着いた。人口はわずか数百人程度の小さな村だったが、ここで獲れる魚が大きな収入源となっていた。

「臭い……」

馬車を降りるなり最初にヴァルデスが感じたのは強烈な異臭だった。

「魚の臭いだ。いずれ慣れる」

「魚はいいんです。臭いのはゴミや汚物です」

初めて屋敷の外で嗅いだ臭いは、あの裏通りで感じていた臭いと
同じ類のものだった。本来ならば、気にもならない魚の臭いが汚物
やゴミなどの臭いが混じって最悪の悪臭になっていた。

「まあ、漁村というのはこんなものだ」

「こんなもの……なんですか？」

これが当たり前と言われると、何とも言えない気分になっていた。
前の世界でも色々なところに行ったが、それでもこういう漁村に
来たのはこれが生まれて初めてだった。

「これはこれは、領主様」

すると、この漁村の村長と思われる初老の男が二人の前に慌てて
やって来た。

「村長、最近はどうだ？」

「ええ。おかげさまで漁獲量も安定しております。これも領主様と
始祖ブリミル様のご加護があったからでしょう」

始祖ブリミル、何かあるとこの名前をよく聞くとヴァルデスは思
っていた。確かに、ハルケギニアの歴史を家庭教師からも勉強して
いたが、これほどまでに過度に信仰するのはどうか、と彼は内心で
は考えていた。

確かに魔法を生み出したという意味では偉大なのかもしれないが、
死後六千年を経た今でもこれほどまでに信仰されるのは面倒だった。
おかげで、下手なことを言えばロマリアあたりに睨まれて異端にさ
れてしまいかねない現実があるのだ。そのせいで、ロマリアがでか

い面をしていてるくなくことを考えない神官がいたりするのだ。

「そうか。それはよかった。最近、何か困ったことはないか？」

「それが……最近、ちよつと病人が増えまして」

「病人が増えたのか？」

「ええ。腹痛や吐き気などを訴える者がだんだん増えてまいりまして……漁獲量は安定しているのですが、このままでは病気で漁に出られない者が増えてしまいます」

「そうか……戻り次第、水のメイジを手配しよう。水の秘薬などもこちらで用意しよう」

「ありがとうございます、領主様」

「父上、それだけでは不十分かと思えます」

すると、ヴァルデスが意見を言い出したので、二人の視線が彼に注がれた。

「どういうことだ？ ヴァルデス」

「病人に対しての対処は問題ないと思いますが、病人を出さないための対処が不十分です」

「ならば、どうすればよいのだ？」

「まずはこの不潔な環境を一新する必要があります。ゴミや汚物を

排除し、また新しく出てくるゴミや汚物をきつちりと分別・処分できるように制度とシステムを作るべきです」

ヴァルデスは、これを機に色々実験しようと考えていた。前の世界では一介の暗殺者でしかないので、何かを変えることができなかったが、せつかく生まれ変わったのだから何かを変えてみたいという思いが強くて出ていた。

「……お前は腹痛や嘔吐の原因がゴミや汚物にあると言っただな？」

「はい」

「どうしてそう思う？」

「周りをご覧ください。細かいところは私にもよくわかりませんが、少なくともゴミや汚物にたかっている蠅や虫などが私たちの体に飛んできたりしているこの環境が人間の体に害を与えないとは到底思えません。可能性の域を出ませんが、少なくとも人間が生活していく上でよりいい生活環境を持つという意味ではいいと思います」

ヴァルデスの意見を聞いて、コーエンと少し唸りながら考え込むような仕草を見せた。村長は子供でありながらも、そこまでしっかりとした意見を述べている彼に驚きを隠せなかった。

「よからう。とりあえず、水のメイジと秘薬の手配を最優先させよう。お前はお前のやりたいことをしっかりとまとめ、私に報告しなさい。それを見てから検討しよう」

「ありがとうございます、父上」

「では村長、そのようにするからしばし待ってくれ」

「はい。ありがとうございます」

こうして、ヴァルデスは領内の政治・経済に関わることとなった。

ウィンドボナ来訪、皇帝との出会い（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ウィンドボナ来訪、皇帝との出会い

ヴァルデスが領内の政治に関わり始めてから様々なことが変わった。あの漁村の一件を皮切りに、衛生管理という観点で領内に芽吹いた。公衆便所やゴミ箱が設置されるようになり、指定された場所以外でのゴミや汚物の廃棄には厳重な処罰が科せられるという法律が出来た。

実際、ヴァルデスの提案したとおりのことをした結果、原因不明の腹痛や嘔吐の数は激減した。それが成果としてヴァルデスは領民たちにも評価されるようになり、その後に行った農地改革も着々と成果を上げていた。金銭的な問題があったので、一気に全てを行うということは不可能だったが、二十年計画で全てを変えていこうと考えていた。

おかげで、コーラッド領内は少しずつ豊かになり、領民たちの生活も少しずつだが裕福になっていった。税金の方も少し引き下げても充分に対処できるくらいになったので、領主であるコーエンの評価も上がっていた。

「ここがウィンドボナですか……」

今日は父と共にゲルマニアの首都であるウィンドボナにやって来ている。ここに来た理由は、コーエンの公務の報告のためだった。

ヴァルデスももう十一歳になっていた。武術の腕前は領内では並ぶ者がいなくなっていたし、魔法の腕前もスクウエアにまで上り詰めていた。双方がトライアングルの両親からスクウエアが生まれたので、両親はことのほか喜んだ。

それからヴァルデスには弟が生まれていた。現在三歳で、さすがにヴァルデスほどの才能はないようだが、それがかえって子供らし

いと両親からは愛されていた。ヴァルデスがあまり構ってもらえなくなっていたが、そんなことを気にするような彼ではなかった。自由になる時間が出来てかえって運がいいとさえ感じていた。

「では父上、私はウィンドボナの町を見て回ります」

「気をつけるんだぞ。貴族に手を出す者はいないと思うが、それでも決して治安がいいとは言えないからな」

「わかりました」

「まあ、お前ほどの強さなら問題はないと思うが、スリなどには注意しろ」

「わかりました。では、お氣をつけて」

「お前も氣をつけるのだぞ」

コーエンはそう言って城のほうへと消えていった。ヴァルデスはコーエンを見送ると、大通りを色々と見て歩いた。露店やウィンドウショッピングを見て回るだけでもかなり楽しめた。

コーラッド領にもいくつかの町はあるが、これほど盛況な町はなかった。ただヴァルデスの尽力により、町の清潔さにおいてはコーラッド領のほうを上回っているのを見て少し嬉しくなった。

「申し訳ございません！」

すると、大きな声で必死に謝っている女の声が聞こえた。声のする方向を見ると、既に人だかりが出来上がっており、ヴァルデスはその人だかりを掻き分けて一番前に出た。

「貴様！ 貴族にぶつかるとはどういう了見だ！」

人だかりの中心にいるのは三人の貴族と平民の母子だった。どうやら、平民の子供が貴族にぶつかつたのでそれを母親が必死になつてかばい立てをしているといった様子だった。

「本当に申し訳ございません！ 母親の私が謝りますので、どうかこの子だけは！」

「ならん！ その子供には礼儀というものを教えなければならん！」

はつきり言つて見苦しいという一言以外の何物でもなかった。ヴアルデスは反吐が出るような気持ちでいっぱいだったが、他の貴族に喧嘩を売るような行為は父の名に傷をつけてしまうことにもなりかねないので、とりあえずは自重していた。

しかし、貴族たちの言い分はほとんどエスカレートして言った。必死で謝り続ける母親の姿がとても可哀想になつていたが、貴族が相手なので誰も何も言えないような状況になつていた。

平民は貴族に勝てない、それがこのハルケギニアの常識だった。その常識のせいで、貴族が平民を虐げるといふ行為が日常のように行われるといふ悪習をも生み出していた。これも始祖信仰による弊害というものだった。

「ええい！ その子供をこちらに渡せ！」

「お願いします！ 娘だけは！ 娘だけはお許してください！」

「離せ！ 我らに逆らうつもりか！」

横暴がエスカレートしていく様に、周りの表情も最悪の状況を想像し始めて暗くなっていった。道行く貴族も、当たり前のことであるがゆえに誰一人として止めようなどとは思ってもいないようだった。

「ええい！ よこせ！」

一人の貴族が母親の顔を殴った。

「ママ！」

「平民が我ら貴族に逆らうからこうなるのだ！」

「さあ！ 来い！」

「いい加減にしろ！」

ヴァルデスはそう言って、人だかりの中央に飛び込んだ。ヴァルデスに全員の視線が集中した。

「何だ？ 貴様は」

「それだけやればもう充分でしょう。子供を連れて行くほどのことじゃない」

「我らに意見するというのか！ 我らはツエルプストー辺境伯とも付き合いがあるのだぞ！」

「だから何だ？ ぶつかったことに関しての謝罪はもう充分のはず

だ。これ以上はただの鬨り合いだ」

「黙れ！ さつきから聞いていれば我らに対しての無礼の数々、断じて許さんぞ！」

「だったら……どうだというんだ？」

周りの人ばかりも一触即発の雰囲気を感じ取って、徐々に距離をとるようになっていった。ヴァルデスは冷静を装っていたが、内心ではかなり怒りで煮え滾っていた。

(こいつら……本当に腐っているな)

かつて、自分が暗殺してきた貴族や王族たちの姿が彼らと重なった。自分が軽蔑してきた貴族の姿がそこにあつた。

「どうやら君も貴族のようだが、少々礼儀を知らぬようだ。我々が……！」

男が口上を述べていたが、ヴァルデスはそんなものを聞く耳持たず、その男の腹に目いっぱいいの力を込めて拳をめり込ませた。男はその一発で白目をむき、口から泡を吐いて気絶した。

「悪いな。礼儀知らずなので先手を打たせてもらったよ」

「貴様あ！」

仲間が倒されたことで残っていた二人も完全に激昂した。二人同時に杖を抜いてヴァルデスに向けたが、既にヴァルデスもそこから動いていて、二人の懐近くにまで詰め込んでいた。

身長的に男たちの顎には届かないので、肘を腹に叩き込み、残った一人の腹に蹴りを叩き込んだ。二人とも、最初の一人と同じように目を剥いてその場に倒れた。

「馬鹿が。こんな場所で魔法が使えらるでも思っただのか」

わずか十一歳の子供が完全に貴族を見下しているその姿が平民たちには痛快に映った。それも魔法を一切使わずに叩きのめした姿は、本当に平民の心に訴えかけるものがあった。

「き、貴様……！」

すると、最初の一人が目を覚まして起き上がってきた。まだダメージは残っているのか、その足や全身が震えていた。

「まだやるつもりか？」

「こ、こんなことをしてただで済むと思うのか？」

「知るか。礼儀を教えるといったのはあんたたちだろ？」

ヴァルデスはもうこの男のことはほぼ眼中になかった。それどころか、相手をするだけで自分の品格がどんどん貶められているような気さえしていた。

「それとも……まだやるか？」

ヴァルデスが拳を握ると、男は少しひるんだ。

「そこまでだ」

すると、いつの間にか人だかりの向こうに馬車が止まっていた。しかし、ヴァルデスはその馬車に刻まれている紋章を見て驚きを隠せなかった。その馬車に刻まれていた紋章はゲルマニア皇室のものであったからだ。

「まさか……」

「この決闘、余が預かるう」

「か、閣下!？」

ヴァルデスは慌てて膝をついた。勿論、家督も継いでいない一伯爵の息子に過ぎない彼が皇帝に会ったこともあるはずもないが、あの馬車と目の前に立った男の風格と喋り方から想像するのは容易だった。

ヴァルデスの言葉とその仕草を見て、周りの平民たちも慌てて彼に倣って膝をついた。

「ほう……喧嘩っ早いだけではなく、頭の回転もいいようだな」

アルブレヒト三世もヴァルデスの聡明な態度に少なからず驚いていた。一度も会ったことのない彼が、謁見の間でもなく、こんな道端で会っただけの男をすぐに皇帝と見抜く目を持っているあたり、なかなかのものだと評価していた。

「恐れ入ります、閣下」

「名前は？」

「ヴァルデス・ウエストリ・コーラッドと申します」

「コーラッドの息子か。なかなか聡明な息子だと噂では聞いていたが、噂どおり、いやそれ以上だな」

「私如きに過度なお褒めのお言葉、恐悦至極に存じます」

「ところで、どうしてさっきの戦いで魔法を使わなかったのだ？」

話しながらもアルブレヒト三世はヴァルデスを見定めようと、その鋭い視線は全くぶれることがなかった。

「あんなに人が多い場所で魔法は使いにくいと判断しただけでございます。それに魔法は使う瞬間が一番隙だらけになりますので、そこを突く戦い方を選んだだけでございます」

「……なるほど。なかなか合理的な戦い方をするようだな」

「恐れ入ります」

「だが、私の足元で騒ぎを起こした罪は大きい」

（きたか……！）

ヴァルデスもさすがに無傷で済むとは思っていなかったが、アルブレヒト三世が直々に姿を現すなどは全く予想だにしていなかった。出来る限り、父の名前に傷がつかないようにと考えていたが、今となってはそれさえ怪しいものだった。

「よって本来ならば議事に掛けるところだろうが、皇帝の名を持つ

てお前にはこの場で罰を与える」

「ははっ……！」

皇帝直々に下される罰、それがどんなものであるかを想像して回りはまるで水を打ったように静まり返った。

「コーラッド伯爵嫡男ヴァルデスよ。我、帝政ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世の名において命ずる。貴様は本日只今より、城中に上がり、執務官補佐及び私の護衛見習いを命ずる」

「あの……恐れながら申し上げてもよろしいでしょうか？」

「よかるう。聞こつ」

「執務官補佐と護衛見習いということは……」

「お前ならわかっていると思うだろうが、一番我に近い存在になるということだ。まあ、見習いという立場ではあるがな」

「しかし、家督も継いでいない有象無象の輩に過ぎない私をお傍に置いては、側近の方々が閣下に対していい感情を持たないのではないのでしょうか？」

「そこまで言える時点で、お前はそこらの貴族より充分有能であることを証明しているようなものだ。それに、ゲルマニアの伝統は実力主義だ。実力があれば年齢など関係ない。側近もそういう連中であるから気にすることはない」

アルブレヒト三世は考えを改めようとはしなかった。むしろ、さ

つきよりも積極的にヴァルデスを自分の手元に引き込もうとさえしていた。

「さて、そういうことだ。勘違いしては困るが、これは名誉ではなくお前に科せられた罰だ。断るなどという選択肢はない、せいぜい私に尽くせ」

「は、ははっ！」

「お前の父には私から直接伝えておこう。思わぬことになっただろうが、お前が引き起こしたことなのだからしっかりとその責任を取れ」

「ははっ！ このヴァルデス、閣下に一命を捧げる覚悟でお仕えさせていただきます！」

「よかるう。貴様の覚悟は確かに聞いた。ならば、しっかりと我についてまいれ」

「ははっ！」

ヴァルデスはアルブレヒト三世の後に続いて歩いていった。そして、城に向かう馬車の殿について共に城に向かった。

ちなみに、この時の貴族たちは結局咎めなしとなったが、喧嘩した相手がアルブレヒト三世に気に入られたという事実があり、それにつつわるエピソードがゲルマニア中を駆け巡ったため、ツェルプストー辺境伯の耳にも入ることになりお叱りを受けることとなった。それ以来、無闇に平民に手を出すことはしなくなったそうだ。

城に到着すると、まずはコーエンとの会話の席が設けられた。その席にはアルブレヒト三世も同席していたので、コーエンもさすがに緊張を感じずにはいらなかった。

「そのようなことがあったとは……恐れ多くも、不肖の息子が閣下にご迷惑をおかけいたしましたして誠に申し訳ございません」

「そう固くならずともよい。その罰として、お前の息子にはしばらく城中で働いてもらうのだからな」

「ははっ！ 是非、こき使ってやってください！」

「うむ。なかなか優秀な男ゆえ、しっかりと鍛えてやる。もっとも、安全の保障はしないがな」

「かしこまりました！ ヴアルデスよ、領内の事は私がしっかりと監督するゆえ、心配せずに仕事に励むのだ」

「はい。父上」

「では、閣下。私はこれで失礼させていただきます」

「大儀であった」

「ははっ」

コーエンは最後に一礼をして、アルブレヒト三世の執務室を後にした。それから入れ違いになる形で、二人の男が執務室に入ってきた。

「閣下、お召しにより参上仕りました」

「うむ、ご苦勞である。お前達二人を呼んだのは他でもない。お前たちでこの男を鍛えてやれ」

「この少年を……ですか？」

魔法衛士隊の制服に身を包んだ男が訝しげにヴァルデスを見た。さすがに精銳揃いと言われる魔法衛士隊にこんな少年を入れると言われれば、誰だって同じような反応をするだろう。

「ガンザス。お前が疑問に思つのも納得できることだが、実力の方はわしが保証しよう」

「閣下御自らが少年の保証人ですか……」

「不満か？」

「滅相もございません。ですが、ゲルマニア史上……いや、世界中の王国の歴史においても、王が保証人になるということは前代未聞のことです」

「たまたま前例がないというだけのことだ。優秀な人材は登用する、それがゲルマニアという国だ」

「かしこまりました。では、その少年は魔法衛士隊で面倒を見まし

「よう」

「いや、その少年は魔法衛士隊と執務官で面倒を見てほしい」

「両方で……ですか？」

アルブレヒト三世の言葉に、執務官の長であるオルフは眉をひそめた。

「軍務と執務、どちらにも適正がありそうだからな。二人で協力して少年の教育に努めろ」

「しかしこまりました」

こうして、ヴァルデスの王宮生活が始まった。

園遊会へ（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

園遊会へ（前編）

「おはよう」

『おはようございます！ ヴァルデス隊長！』

稽古場に姿を現すと、隊員たちは全員が揃ってヴァルデスに挨拶してきた。

ヴァルデスが王宮に上がってから三年の月日が経った。ヴァルデスは十四歳になり、体つきもかなり大きくなった。一般的なメイジなどとは比べ物にならないほど鍛え上げられた体をしていた。

ヴァルデスは最初こそ、元からいた隊員たちに歳があまりにも若いからと侮られていたが、訓練や実戦ですぐに頭角を現し、今では新設された第二魔法衛士隊の隊長を務めるまでになっていた。

第二魔法衛士隊は、元から存在する第一魔法衛士隊の補助的な存在として新設された。だが、直轄領での魔物退治や盗賊退治などかなり武勲を挙げており、決して補助部隊だからと侮られることもなくなった。

この第二魔法衛士隊は別名牙部隊とも呼ばれていた。その凶暴なまでの攻撃性と、妥協を許さない徹底した仕事振りを見てそう呼ばれるようになっていた。だが、凶暴と言われるまでの攻撃性とは対照的に軍規を徹底させることについては第一魔法衛士隊よりも遙かに厳しかった。下手に規則を破ろうものなら、ヴァルデスによるきついお仕置きが下されるので隊員たちは絶対に規則を破るようなことだけはしなかった。

ちなみに、隣国トリスティンにおいて『烈風力リン』という伝説にもなっているマンティコア隊という魔法衛士隊の隊長になった人

物が、何よりも重要視していたのが規律の徹底だった。鋼の規律、その言葉にはヴァルデスも共感しており、新たな隊作りに取り入れていた。

「何か問題は？」

「いいえ。今のところ何もありません」

「なら結構だ。しっかりと訓練に励むように」

『ははっ！』

まだ十四歳なのだが、ヴァルデスが持っている有無を言わさない力によるカリスマ性がこの隊を隊として成立させていた。誰一人として、ヴァルデスに疑問を抱くものはおらず、今では心酔する者がいる始末である。

ヴァルデスは牙部隊の隊長であると同時に、執務官という肩書きも持っていた。同時進行でヴァルデスの教育は行われていたが、ヴァルデスは二人が思っている以上の速さでその両方を見事に修めていた。ただ、牙部隊の隊長という役職に就いたため、今では執務官の仕事はあまり行っていなかった。

「隊長」

すると、一人の兵士がヴァルデスのところにやってきた。

「何だ？」

「閣下が至急謁見の間に来るようにとの仰せです」

「わかった。ご苦労」

「はっ！」

兵士は敬礼をして持ち場へと戻っていった。ヴァルデスもその後
に続いてすぐに謁見の間に向かって急いだ。

「ヴァルデス・ウエストリ・コーラッド。閣下のお召しにより参上
いたしました」

「うむ。早速だが、こんな書状が我に届いた」

アルブレヒト三世はそう言うと、傍にいた兵士に書状を持たせて
ヴァルデスに渡した。

「トリステイン王国での園遊会ですか……」

「うむ。マリアンヌ太后め、ガリアやアルビオンにまで招待状を出
したようだ」

「そうになると、かなり大掛かりな会になりますね」

「まあ、招待されて行かないわけにはいかぬからな。参加するつも
りだ」

「なるほど」

「お前もついて参れ」

「しかし、護衛は第一魔法衛士隊が行うのでは……？」

牙部隊はあくまで第一魔法衛士隊の補助的な存在であり、第一魔法衛士隊が国をあげるときには国家の守護を第一任務にしていた。その隊長であるはずの自分が、ここを外れるというアルブレヒト三世の意図がよくわからなかった。

「私の護衛は第一魔法衛士隊が行う。お前には伯爵家嫡男として我について来いということだ」

「父ではなく、ただの嫡男である私が……ですか？」

「お前のことがどうやら他国にも知れ渡ったようだ。メイジでありながらほとんど魔法を使わず、それでいて素手でスクウェアを圧倒するほどの実力を持つ男として有名なのだそうだ。ついだからお前のお披露目も済ませてしまおうというわけだ」

「それでゲルマニアの力を各国に鼓舞するというわけですか」

「お前のそういう察しのいい所が我は好きだ。出発は明後日だ、それまでに準備を済ませておけ」

「ははっ！」

その話から一週間後、一行はゲルマニアからトリステインにやって来ていた。さすがにマリアンヌ太后が自ら開いた園遊会というだけあって、その規模はここ近年ではもっとも大きいものだった。

「さすがマリアンヌ太后が自ら開いただけのことはある。有名貴族たちが勢ぞろいって感じですね」

その面子の中にはゲルマニアのツエルプストー辺境伯もいた。トリスティンのヴァリエール公爵もこの園遊会に参加しているとの事なので、妙な喧嘩が勃発しないか、両家の仲の悪さを知る者は気が気でなかった。

「お前はこういうパーティーは初めてか？」

アルブレヒト三世は隣に控えているヴァルデスに訊ねた。個人参加とは言え、牙部隊の隊長であるヴァルデスが隣にいることは何にも不思議なところはないので誰一人として文句を言うものはいなかった。

「はい。残念ながら、今までこういうパーティーに参加する機会がなかったのです」

「ならば、是非ここで色々な貴族と顔をあわせておくがいい。顔を広いことは決して悪いことではない」

「かしこまりました」

「但し、ツエルプストー辺境伯とヴァリエール公爵にだけは必ず顔を見せておけ」

今までアルブレヒト三世がこんな風に何かを強制するようになったのを見せたことがなかったので、ヴァルデスは少し驚いていた。

「何故、ヴァリエール公爵とツエルプストー辺境伯に……？」

「あの両家はよく小競り合いを起こすからな。今後は小競り合いが起きそうになったらお前が処理しろ」

「……とどのつまり、面倒ごとの仲介役をするために顔合わせをしておけということでしょうか？」

「そのとおりだ。察しがよくて本当に助かる」

(七面倒な役割を……)

ヴァルデスはそう思ったが、決して表情には出さなかった。これもまた城中に上がってから覚えたことだった。

「私は他国の王族たちに挨拶してくる。お前はあの二人に挨拶したら自由に過ごしておけ。ヴァリエール公爵とツエルプストー辺境伯に顔を合わせておけば、他の貴族から寄ってくることだろうしな」

「ははっ」

アルブレヒト三世はそう言ってパーティーの人込みの中へと消えていった。ヴァルデスはまず、同じゲルマニア貴族であるツエルプストー辺境伯から挨拶することにした。ヴァリエール公爵はとりあえずツエルプストー辺境伯の後ろ盾が出来てから挨拶したほうがいような気がしていたからだ。それに、トリステイン貴族はゲルマニアを蛮人の国と陰口を叩くこともあるので、付き合うには色々と警戒が必要なのだ。

「ツエルプストー辺境伯、はじめまして」

「ん？ ああ、ヴァルデス殿か。はじめまして」

ツエルプストー家現当主、ラダックはヴァルデスの姿を見ると笑顔で返してきた。燃えるような赤い髪に褐色の肌、ツエルプストー一族の特徴を色濃く受け継いでいた。

「いつぞやはツエルプストー辺境伯にもご迷惑をおかけいたしました」

「？」迷惑？」

「あの、もう三年ほど前の話になりますが……」

「ああ。平民との争いの件か、あれは貴殿に非は無い。むしろ、あの馬鹿者どもの方が問題だったのだからな」

「そう言っていただけとありがたいです。今後とも是非よろしく願いたいします」

「ああ。こちらこそよろしく頼む。お父上にもよろしく」

「必ず伝えます」

二人は互いに友好を結ぶと、その証明として握手を交わした。ゲルマニアの大物貴族であるツエルプストー辺境伯と握手を交わしている姿は、すぐに周りの注目を集めて、「あの若い男は誰だ？」と囁き声が聞こえてきた。

握手を交わした後、周りのざわめきが落ち着く前にヴァリエール公爵に接触を図った。

「ヴァリエール公爵、お初にお目にかかります」

「……君は？」

金髪と口元には同じ金髪の髭、右目にかげられたモノクルがきらりと光っていた。その鋭い眼光も貫禄を示していたが、残念ながらアルプレヒト三世ほどではなかったため、ヴァルデスはさほど威圧感を感じなかった。だが、それを鵜呑みにするほど迂闊な男というわけでもなかった。

「ヴァルデス・ウエストリ・コーラッドと申します。ゲルマニア貴族、コーラッド伯爵家の嫡男でございます」

「ほう……君があの子部隊の隊長を務めているヴァルデス殿か」

アルプレヒト三世が言っていたことが事実だということ、ヴァルデスはここで初めて知った。自分の名前が他国にも知れ渡っているなどとは思ってもよらなかったが、事実であるということを知るとかつて暗殺者時代に轟かせた悪名のことを思い出させた。

「私如き若輩者を存じ上げていただき光栄でございます」

「ご両親もご子息がご立派になられてさぞお喜びであろう」

「ありがとうございます。まだ若輩者ゆえ、至らぬ所があると存じますが、何卒よろしく願いたします」

「うむ。ご丁寧な挨拶、痛み入る」

ヴァリエール公爵はヴァルデスの挨拶が気に入ったのか、手を差し出してきた。ヴァルデスはかさずにその手を握り返した。ツェルプストー辺境伯と握手を交わしたかと思えば、ヴァリエール公爵と立て続けに握手を交わしているのでさすがに周りの貴族もヴァルデスを無視するわけにはいなくなつた。次は自分だ、と色々な思惑が飛び交っていた。

「娘もここに来ていたのだが、姿が見えんな……せつかくだから君にも紹介したかつたのだが……」

「どうぞお気になさらないください。また機会があればその時にも」

「うむ。すまないな」

「いえ。本日はお知り合いになれて光栄でした」

「私もだ。また会おう」

「はい」

ヴァリエール公爵と別れた後、国を問わずに様々な貴族がヴァルデスに挨拶をしに寄つてきた。さすがに少々面倒ではあつたが、これを疎かにすると味方がいないなんて事態にもなりかねないので、浅く広く付き合いを広げていった。

「おお、アンリエッタ姫だ」

すると、招待客からどよめきが起こつた。彼らの視線の先にはこのトリステイン王国の王女であるアンリエッタ姫がいた。トリステ

インに咲く一輪の可憐な花、という表現もあながち間違っではないな
いとヴァルデスは思った。それと同時に、あれがうちの閣下が狙っ
ている女か、とも思っていた。

ゲルマニアは新興国であるが故、始祖の血筋を引いている人間が
いないのだ。これほど国の規模が大きくなったというのに、皇帝が
未だに閣下と呼ばれている理由はそこにあるのだ。なので、ゲルマ
ニアは国家としての地位を磐石にするために始祖の血を取り入れよ
うと考えていたのだ。その筆頭候補がアンリエッタ姫なのだ。

「何と可憐だ……」

招待客の間からため息が漏れているが、ヴァルデスはあまり興味
がなかった。他人の容姿など人によって違うのが当たり前であり、
そこで優越を決めるといのが彼にはよくわからなかった。

招待客の注目がアンリエッタに向かったことで、ヴァルデスに挨
拶に来る者がいなくなったのでその隙に彼は一時的に園遊会から離
脱した。

「やれやれ……パーティーというのはああいうものなのか？」

静かな湖畔を一人で歩く、月が湖面に反射して何とも幻想的な雰
囲気を作り出していた。園遊会の喧騒を遠くに聞き、やっとこの国
に来てから一息つくことが出来た。

元々の目的は達成されたため、残りの時間はもうここでのんびり
過ごそうかとさえ考えていた。

「ん？」

すると、湖畔に誰かやって来た。湖面に反射した月明かりがちよ

うど影を作り出し、相手の顔を確認することは出来なかった。かろうじて、そのシルエットから相手が女性だとわかる程度だった。

ヴァルデスは特に相手のことを気にしていなかった。とりあえず不審者ではないだろうか、という程度の警戒はしていたが、自分から何かを仕掛けるということはしなかった。件の女性は、湖畔の近くで身に着けていたドレスや下着を全て脱いで水浴びを始めた。

「ただの水浴びか……ん？」

すると、今度はその少し離れた木々の陰からそれを見つめている気配に気がついた。相手はヴァルデスには気づいていないようだが、貴族や王族ばかり集まっている園遊会なので妙なことが起こっても不思議ではない。それがひとたび起こると、国家同士の戦争にさえ発展しかねないのだ。とりあえず、堂々と水浴びしている彼女は後回しにして、陰で見つめている不審な相手を優先した。

音を立てぬようにこっそりと相手の背後に回りこんで、隠し持っていたナイフを握る。そして、一気に踏み込んで相手の腕を取って後ろから喉笛に刃をちらつかせる。

「何者だ？　こんなところで何をしている？」

ドスを効かせた低い声、真正面から見ればただの茶番にしか聞えないが、この状況下なら相手を恐怖に陥れるには充分だった。相手は小さな呻き声を上げるだけで、何にも反撃できなかった。

「そこにいるのは何者です！？」

すると、水浴びをしていた彼女が二人に気づいて声を上げた。ヴァルデスは男の腕を締め上げたまま、ゆっくりと彼女へと歩み寄った。

「水浴び中に失礼いたします。あちらの木の陰から覗き見ている不審な輩を捕らえました。失礼ですが、ここはマリアン又太后主催の園遊会の会場、本日は水浴びなどの行為は原則的にお控えいただくのが礼儀かと存じ上げます。恐れ入りますが、貴女のお名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？ ミス」

「彼女はこの国のアンリエッタ王女だよ」

「アンリエッタ姫？」

すると、雲が動いて月明かりがその女性の姿を映し出した。その姿は恐怖におびえているアンリエッタ王女だった。

「……なるほど。では、お前は誰だ？」

「僕はウェールズ。アルビオン王国ジェームズ一世の息子のウェールズだ」

「ウェールズ様？」

「その証拠は？」

「僕の懐には紋章が刻まれた短剣がある。それが証拠だ」

男の言葉どおりにヴァルデスはその懐を探って短剣を取り出した。刃を抜いて柄の部分を確認すると、確かにアルビオン王家の紋章が入っていた。

「……失礼いたしました。ウェールズ殿下、アンリエッタ姫」

ヴァルデスは刃を収め、その場に膝をついて謝罪をした。

「いや、時と場所を考えない行動を取っていたのも事実だ。君は職務に忠実だったただけだ、むしろ誇りに思うといい」

「ははっ。もつたいなきお言葉、光栄でございます」

「ところで」

すると、今まで黙っていたアンリエッタが口を開いた。

「どちらの隊の所属でしょうか？ あなたは……」

「これは紹介が遅れました。私は帝政ゲルマニアのコーウッド伯爵家嫡男のヴァルデスと申します」

「ほう。君がああ牙部隊の若き隊長か、噂は聞いているよ。腕前も噂に違わぬものようだな、身を持って体験したよ」

「大変失礼いたしました」

「あの……服を着たいので後ろを向いていただけませんか？」

すると、アンリエッタが恥ずかしそうに俯いていた。

「これは失礼。ヴァルデス君、我々は退散しよう」

「ははっ」

「じゃあ、アンリエッタ。また後で」

ウェールズはアンリエッタにそう言うと、ヴァルデスを伴って園遊会の会場に向かって歩き出した。

園遊会へ（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

園遊会へ（後編）

「しかし、君ほどの人物に会えるとは思わなかったよ。アルブレヒト閣下がゲルマニアの若き期待の星をこの園遊会に伴ってくるとは思わなかったよ」

「私も直前になって命令を受けました」

「ははは。恐らく、君を見せることでゲルマニアの勢いを見せつけようと考えたのだろう。今においても未来においても、その勢いに衰えがないことを証明するために君を伴ったのだろう」

「私如きを伴ったところでたいした意味はないように思いますが……」

「それだけ君に期待しているということだろう。さっきのはただの建前だろう」

「そう思われているのなら光荣です」

ヴァルデスはそう言って一礼をした。園遊会の会場に戻ると、ウエールズ王子の登場に会場が沸き立った。そして、何故かその隣にヴァルデスが一緒にいるのを見て訝しげな視線で見つめる連中も多かった。

「ウエールズ、そちらの方は誰じゃな？」

すると、一人の老人がこちらにやって来た。その佇まいからその人がジエームズ一世であることは明白だった。

「父上、こちらの方はゲルマニアの若きエースであるヴァルデス殿です。先程、知り合いになりました」

「ほう。ゲルマニアの……。息子が世話になったようじゃな、わしがアルビオン国王ジエームズ一世じゃ。よろしく」

「は、はい。ヴァルデス・ウエストリ・コーラッドと申します。お会いできて光栄でございます、ジエームズ陛下」

ヴァルデスが慌てて頭を下げた。膝をつかないのは彼はアルブレヒト三世の臣下であるため、忠誠を誓うことができなかつたからだ。もつとも、他家の王族に会った時のマナーを心得ていないというのも一つだったが。

「ふむ。その若さで一部隊の隊長を任されるとは、両親もさぞ喜んでおろう」

「恐れ入ります」

「では、失礼する」

ジエームズ一世はそう締めくくると、ウェールズを伴ってその場を去っていった。それと入れ違いになる形で、アルプレヒト三世が挨拶回りを終えてやって来た。

「見ていたぞ。いつの間にアルビオンの王と王子に近づいたのだ？」

「それがその……」

ヴァルデスは湖畔での出来事をアルブレヒト三世にかいつまんで話した。全てを聞き終えた後、彼は面白そうに笑いながらこう言った。

「なるほど。アンリエッタ姫の水浴びか、それはよいものを見たな」

「はあ……」

「で、どうだった？」

「どうだった……と申しますと？」

「アンリエッタ姫だ。お前、彼女の裸身を見たのであろう。それがどうだったと聞いておるのだ」

（下心か。まあ、こういうところをストレートに語るこの方は嫌いではないが……）

「そうですね……まあ、歳の割には肉付きのよい体をしておりましたので、元気な子を産んでくれるのではないかと存じます」

「そうか、それならばよい」

あくまでアルブレヒト三世が欲しているのは始祖の血筋なのだ。それは別にアンリエッタ姫でなくてもかまわないのだが、一番手近なところにおいて女性であるのが彼女だということ狙いを定めているのに過ぎないのだ。元より、王族は愛だの恋だのを語る資格がない生き物なので、政治的な意味において彼女を欲しているのだ。

「ですが、アルビオンのウェールズ殿下はなかなかの強敵かと存じ

ます」

「ほう。アンリエッタはウェールズに懸想しているとしても言うのか？」

「さあ？　ただ、一番無防備な格好でいたにも拘らず、私には相当の警戒心を持っていたようですが、ウェールズ様にはそれほど警戒をされてはいないようでした」

「アンリエッタとウェールズは従兄妹の関係だから、特に気にする間柄ではないのではないか？」

「いくら従兄妹同士でも、普段は全く顔も合わせない男に裸を見られて気にしないと思いますか？」

「……なるほど。言うとおりで」

それを聞くとアルブレヒト三世はまた小さく笑った。

「勝算がとおりですか？」

その余裕たつぷりの姿を見て、ヴァルデスは思わずそう訊ねてしまった。

「わしがウェールズに負けているところがあると思うのか？」

「強いて言うなら……若さでしょうか？」

「若さなど何の意味も持たぬ。特に王族の婚姻に関しては、な」

それは正論だった。王族の婚姻など政治的戦略の一つであり、それ以上でもそれ以下でもない。王族のいい男というのは、国力のある国家を持っているということなのだ。

「おっしゃるとおりで」

「お前もいずれはゲルマニアの中枢にその身を置くことになるだろう。若輩者と言われる今のうちに色々と学んでおくがよい。ゲルマニアに戻り次第、お前にはダンスの講師をつけ、我の名代としてパーティーに参加してもらおう」

「ははっ」

「さて、そろそろ夜も更けてきたな。一通りの挨拶も済んだことだし、今夜はこの辺で帰るとしよう」

「かしこまりました」

「お前は残れ」

「はい？」

「我の名代だ。せいぜい最後まで付き合ってやるがよい」

(何か……面倒ごとばかり押し付けられている気がする)

ヴァルデスはそう思ったが、その場はただ頭を下げるだけで終わらせた。アルブレヒト三世はマリアンヌ太后に挨拶して、園遊会から宿舎へと戻っていった。ゲルマニアのアルブレヒト三世が帰ったということ帰る機会を窺っていた他のゲルマニア貴族たちもそれ

に便乗してどんどん帰っていった。おかげで、この会場に残ったゲルマニア貴族はヴァルデスだけになってしまった。

「居残り役か？ 宮仕えの悲しさという奴だな」

すると、今度は体格のいい中年男性が彼に声をかけてきた。髪も立派な口髭もその色が蒼だった。それはその者がハルケギニア最大の国家、ガリア王国の王族であることを示していた。

「お察しの通りで。失礼ですが、ガリアの王族の方で……？」

「うむ。余はガリア王ジョゼフだ。ヴァルデス殿」

「ジョ、ジョゼフ王！？ 失礼いたしました！」

「かまわん。失礼だと思ったが、先程のアルブレヒト殿とお前の会話が耳に入った。お前、パーティーに参加するのはこれが初めてとのことだそうだな。ならば、俺のことを知らなくても仕方あるまい」

ジョゼフはそう言って豪快に笑った。

(この男……うちの閣下より読めぬ……)

ヴァルデスはジョゼフという男がいまいちよくわからずにいた。正直、先程のウェールズやジェームズ一世に関してはヴァルデスなりの感想を持つことは出来たが、このジョゼフだけはどう評価していいかよくわからなかった。開けっぴろげな馬鹿に見えるが、その瞳には野心が見える。それがヴァルデスのジョゼフに対する人物像の判断を止めていた。

「陛下の寛大なお心、恐れ入ります」

「下手な世辞はよせ。そんなこと微塵も思っていない。お前の目は、この余という男がどれほどのものであるかを今も必死に推し量ろうとしている」

「……陛下の慧眼、まことに恐れ入りました」

ヴァルデスは素直に謝ることにした。それと同時に、自分という男がジョゼフにはすっかり理解されてしまったと負けを感じていた。

「下手な意地は張らず、余計な波風を立てぬか。アルプレヒト殿が可愛がるわけだな」

「恐れ入ります」

「どうだ？ 主君もいないことだ、少し私の酒に付き合え」

「喜んでお付き合いさせていただきます」

「では、こちらへ」

ヴァルデスはジョゼフと共にテーブルの一角に二人で座った。その姿は方々から注目を集めることになった。特にガリア貴族からの視線が痛々しいくらいにヴァルデスに向けられていた。

「ふん。雀たちが気にしているようだな」

「恐れ多くも、ジョゼフ陛下と席を共にしていればそれは仕方ないかと存じます」

「お前もいずれはゲルマニアの中枢に立つことになるだろう。これぐらいのことには慣れておいたほうがよい」

「勉強になります」

「では、今日の出会いを祝して」

「乾杯」

二人はワインの入ったグラスで乾杯して、まずは最初の一杯を一気に飲み干した。傍に控えていた侍従がすぐにグラスに次のワインを注いだ。周りの貴族は何を話しているのだろうと必死に聞き耳を立てていた。

「美味しいですね」

「ガリアのビンテージだ。気に入ってもらえて何よりだ」

ジョゼフはそう言うと、すぐに注がれたワインも飲み干した。

「しかし、その若さで魔法衛士隊の隊長になったか。まるで、若い頃のシャルルを見ているようだ」

「お亡くなりになったシャルル殿下ですか」

「ああ。シャルルは魔法衛士隊には入っていなかったが、魔法の才能は他の追従を許さなかった。わずか十二歳でスクウェアになった。それは当時の貴族たちの間でかなり騒がれたものだ。お前はどうかのだ？」

「一応、十一歳で風のスクウェアです」

それを聞くと、ジョゼフは大きな声で笑い声を上げた。

「ふふふ。お前もシャルルと同じ風のスクウェアか。しかも、シャルルより一年も早いとは……本当に若い頃のシャルルを見ているようだ。その聡明なところもそっくりだ」

「そうですか」

「聡明で魔法の腕前も確か、対して私は魔法を使えず馬鹿だった。誰もが次の王はシャルルだと思っていた」

そう言ってまたワインを飲み干した。その様子に聞き耳を立てていた貴族たちも段々と関わらないほうがよさそうだとその場を離れていった。

「だが、父が今わの際に指名した次の王は俺だった。誰もがそれには驚かされていた、もちろんこの俺自身もだ」

「非の打ち所のない完璧な弟と何をやっても駄目な兄、普通に考えれば誰だって前者を選びますからね」

「お前のその齒に衣着せぬところは非常に好ましい。俺の周りには俺の機嫌を伺うだけの連中ばかりだからな」

ジョゼフが最初の一杯以外口をつけていないヴァルデスに飲むよう促すため、グラスを少し前に押し出した。ヴァルデスはその意図を理解して、グラスに注がれていたワインを飲み干した。

「誰もが王はシャルルであると思い、父は病のため乱心していたと思った。この俺でさえそう思ったぐらいだ。だが、シャルルはそんな俺に笑顔を向けて、俺に祝いの言葉を述べた。それも俺が今まで見てきた中で最高といえるほどの笑顔でな」

「……心中お察しします」

すると、今まで笑顔をを見せていたジョゼフの表情が曇った。

「お前に、俺の心がわかると言うのか？」

「残念ながら、凡人に過ぎない私には陛下のお心は深すぎて理解することなど出来ません。ですが、同じ凡人であるシャルル殿下のお心なら察することが出来ます」

「凡人……お前もシャルルも、その若さでスクウェアメイズであり、歳に似合わぬほどの聡明なところもある。それを凡人とのたまうか」

「はい。残念ながら、私が生きているシャルル殿下とお会いする機会は一生ありませんが、それでも陛下のお話を伺えばおおよその見当はつきます」

「では、お前はシャルルがどう思っていたと言うのだ。言ってみろ」

「恐らく、シャルル殿下はさぞ悔しかったことでしょうね」

「悔しい？」

ジョゼフはその言葉に眉をひそめた。

「私がシャルル殿下の立場ならそう思ったことでしょう」

「その意味は？」

「シャルル殿下はお話を聞く限り、相当の努力をなされていたお方のようです。十二歳でスクウェアメイジになられたあたり、相当努力したことが伺えます」

「そうだな。奴は幼い頃より必死になって努力していた」

「だが、次の王として指名されたのは自分ではなかった。自分が兄に劣っていることを承知して、必死になってこれまで努力を続けてきたというのに、それが報われることはなかった。さぞかし、悔しかったことでしょう」

「シャルルが無能な俺より劣っていると思っていた？ どうして？」

「確かに魔法の面では陛下を上回っていたことでしょうが、それ以外のことは陛下に劣っていたと思いますよ。だからこそ、必死になつて努力を続けた。でも、亡きお父上はその努力を認めなかった。殿下が見せた笑顔は、殿下なりの最後の矜持というところでしょう」

「では問おう、シャルルが俺に負けていたものとは何だ？」

ジョゼフはヴァルデスを射抜くような目で見つめていた。その険悪な雰囲気を取りも察していたし、ワインを注ぐためにいる侍従はここから逃げたいといわんばかりの表情をしていた。

「シャルル殿下が陛下に負けていたもの、それは王としての資質そ

のものです。王に必要なのは魔法ではありません。王に必要なのは、清濁併せ呑むだけの腹と政治的手腕とそれを活かすだけの頭の回転の速さです。ジョゼフ陛下にはそれが備わっていたが、シャルル殿下にはそれがなかった。だから、必死になって努力したと思います」

「王としての資質……」

「もし、私が陛下と兄弟として生きていたなら、絶望の中で毎日を過ごしていたでしょう。その重圧に押しつぶされないために必死に努力していたと思います。同じ……凡人ですから」

ヴァルデスはそう締めくくってワインを飲み干した。ジョゼフはしばらく黙りこくってしまい、空を見上げていた。そして、大きくため息をついて言葉を続けた。

「そんな風に考えたことはなかったな。いつも優秀な弟と比較された駄目な兄、そんな風にしか考えられなかった」

「所詮、私の言ったことは私の考えでしかありません。今となつては、それを確認する術もありませんが……」

「お前のように考えることが出来たなら、過ちを犯すことなどなかったのかもしれない」

過ち、その一言に心当たりはあったがヴァルデスは口を挟まなかった。これはガリアの問題であり、ゲルマニアの貴族である自分がどうこう言える話ではないからだ。

「我ら兄弟のところに、お前のような者がいればもつと互いを分かり合えたかもしれない……今となつてはもう手遅れだが」

「過去は所詮過去でしかありません。終わってしまったことは変えることは出来ません。変えることが出来るのはこれから先のことだけですよ……ごちそうさまでした」

ヴァルデスが席を立ってその場を離れようとした時

「今度」

背中から聞こえたジョゼフの声に振り返らずに足を止めた。

「お前を私の客として招待しよう。もっとも、その時は俺が王であるとは限らないがな」

ジョゼフのその言葉を聞いて、ヴァルデスを振り返りジョゼフに對して一礼をしてからこう述べた。

「心より……お待ち申し上げております」

ヴァルデスはそう言ってジョゼフの前から去った。残されたジョゼフは何をするわけでもなく、ただその場に残っていた。ここが園遊会の会場であることも忘れ、ただ自分の時間を呆然と過ごしていた。その心に何を思っているのかは、彼しか知らない。

やがて、夜も更けていき園遊会からは次々と招かれた客たちが姿を消していった。王族・貴族たちがいなくなる中、ただ一人残っていたジョゼフを月が優しく照らしていた。まるで、彼を慰めているかのようだ。

ガリアの姉妹（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ガリアの姉妹（前編）

トリスティンでの園遊会から二ヶ月が経った。その後、二週間にも渡って続けられた園遊会は盛大なうちに幕を閉じた。ガリア王ジョゼフは、あの日以外にその姿を現すことはなかった。理由は病気との事だったが、それが真実であるかどうかは誰も知らない。

ゲルマニアに戻ったヴァルデスは、アルブレヒト三世が手配したダンスの講師にダンスを習い、皇帝の名代として貴族のパーティーに足を運ぶようになっていた。ついに皇帝の名代を務めるまでになっているヴァルデスに、他の貴族たちもさすがに無視できなくなっていた。

パーティーに参加するだけが彼の仕事ではない。牙部隊はその間もしっかりと動いており、数多くの盗賊や魔物を討伐してその評価を上げていた。おかげで軍人としての名前も更に知れ渡っていた。

虐殺、冷酷、非情などという二つ名が勝手に一人歩きしていたが、ヴァルデス自身は一度も二つ名をかたつたことはない。そもそも、二つ名と呼ばれるものに意味はないとさえ考えていた。

二つ名などなくても充分だと考えていたし、決闘する時にしか使わない名前など邪魔以外の何物でもない。現に、仕事をしていていちいち二つ名を名乗る貴族などゲルマニアでは滅多にいない。自分で名乗らないからこそ、物騒な名前だけがどんどん一人歩きしていたのだ。

「ガリアから招待状が？」

「そうだ。ゲルマニア王室宛に届いたが、ジョゼフ王が招待しているのはお前だ」

「ジョゼフ王が？」

「お前、あの園遊会でジョゼフ王と知り合いになったようだな」

その言葉を聞いて園遊会でのことを思い出していた。確かに誘うとは言っていたが、こんなに早くその言葉が実行されるとは夢にも思っていなかった。

「ええ、まあ……」

「一応、ガリア王からの正式な招待状だからな。適当に遊んで来い」

「使者としての活躍に期待するとかそういうのは……？」

「ない。そもそも、何のメリットもない外遊に何を期待しろというのだ。ジョゼフの気紛れに付き合っただけやるのも一興だ」

「かしこまりました」

とのやり取りがあったのは二週間前まで遡る。一応、特使扱いとすることになったので王室の紋章入りの馬車なども用意してもらうほどの高待遇での外遊となった。

「よく来たな。ヴァルデス殿」

ヴェルサルテイルの謁見の間、玉座にはジョゼフが座っており、その周りをガリア王国の高官たちが固めていた。

「ジョゼフ陛下にお招きいただきましてまことに光栄でございます。して、このたびはどのような御用でしょうか？」

「そうかしこまらずともよい。あの園遊会の場で共に酒を酌み交わした仲ではないか」

「しかし、この謁見の間はジョゼフ陛下のみならず、歴代のガリア王たちの威厳が詰まった場所。その場所で陛下に無礼な口を利くことなど……」

「相変わらず堅い男だな。まあいい、そういうことならば余の執務室にて話そう」

ジョゼフはそう言って玉座を立った。

「これより余と特使殿はちょっと重要な話し合いがある。その話を見聞きした者には、ガリア王ジョゼフの名の下に厳罰を下す」

そう言うジョゼフの目には王としての威厳に満ちていた。王としてのカリスマ性に満ち溢れ、下の者に有無を言わせぬその姿は、決して無能などとは無縁のものだった。その姿は紛れもなく王の姿そのものだった。

「では、特使殿。余の執務室へ」

「ははっ」

ヴァルデスも立ち上がり、共に玉座の脇にあった執務室へと入っていった。普段と全く違うジョゼフのその姿に、家臣たちはただただ驚くばかりだった。

「さてと、すまんがサイレントをかけてくれ」

「かしこまりました」

ジョゼフの言葉に従って、ヴァルデスは部屋にサイレントをかけた。これで部屋の中の会話を外の者が聞くことは出来なくなった。

「念入りですね」

「今回ばかりは雀たちに聞かれないからな」

「それほどまでしての頼みごととはいっただい……？」

「ああ。実はお前にちょっと仲良くしてもらいたい相手がいる」

「仲良くしてもらいたい相手？」

「一人は我が娘イザベラ」

「イザベラ姫ですか」

噂では相当性格のきつい女であると言われていた。気に入らないことがあると周囲に当り散らし、侍従や用人たちの間からかなり恐れられている人物だというのがヴァルデスの確認している情報だっ

た。

「もう一人はシャルロット」

「シャルロットってまさか……シャルル様のご息女の……」

「そっだ」

（イザベラ姫とシャルロット姫とは……またとんでもない組み合わせだな）

ヴァルデスはイザベラとシャルロットの仲の悪さもしつかりと情報として抑えていた。シャルル殿下が亡くなって以来、シャルロット姫は裏仕事を主に行う北花壇騎士団に配属され、馬車馬のように扱き使われているとの話だ。おまけにとんでもなく無茶な仕事ばかり振り分けるとの事なので、二人の仲は最悪とのことだった。

おまけに、シャルル殿下が亡くなり、その奥方様も何者かが飲ませた毒によって自分を失って以来、明るかった性格も百八十度変わってしまった、暗い性格に変わってしまったとのことだった。

「そのお二人ですか……」

「言いたいことはわかるが、何とか頑張ってくれ」

「しかし、ガリアの人間でもない私がどうこうできるとは思えませんが……？」

「お前でなければ駄目だ」

ヴァルデスが何とか断ろうと頭を悩ませていたが、ジョゼフはそ

の企みを見抜いているかのように却下した。

「何故でしょう?」

「他の者ではイザベラはおるかおとなしいシャルロットでさえ付き合いを持つことができんだろう。だが、お前なら何とかなる可能性がある」

「その根拠は?」

「お前が……シャルルに似ているからだ」

ジョゼフはその瞳をヴァルデスに向けていたが、その瞳に映しているのは亡きシャルルの姿だった。あの優しい弟と似たヴァルデスなら何とかなるかもしれない、ジョゼフはそう思っていた。

あの園遊会以来、ジョゼフの中で何かが変わった。立ち居振る舞いこそ普段と何も変わってはいないが、その心境には間違いなく変化が起こっていた。それが今回のイベントをジョゼフに決意させたのだ。

「左様ですか……」

「出来る範囲でいい。その範囲で付き合ってやってくれ」

「……努力します」

「すまない」

話が終わり、ヴァルデスがサイレントを解くと部屋をノックして

いる音に気がついた。

「入れ」

一言の返事もなく入ってきたのはシャルロットだった。眼鏡をかけて、その小柄な体より長い杖を持っていた。ただ、その目は感情を全く映しておらずまさに無表情、まるで人形のようなという印象を受けた。

「来たか」

「……」

王であるジョゼフの言葉にも全く返事を返そうとしなかった。その姿を見るだけで、ジョゼフに対して全く忠誠心を持っていないことがはっきりとうかがい知ることが出来た。

「まあいい。こちらはゲルマニアより特使としてお越しいただいたヴァルデス殿だ。ガリアに滞在していただく間、お前に護衛を命ずる。いいな？」

「……」

言葉で返事は返さず、頷くことでシャルロットは肯定の意思を示した。

「では特使殿、先程のお話、よしなに」

「かしこまりました」

ヴァルデスは一礼をして部屋を出た。そして、改めてシャルロットと向き合った。

「では、よろしくお願いいたします」

「……タバサ」

「え？」

「私の……名前」

「そ、そうですか」

シャルロットがどうして違う名前を名乗っているのかは理解できなかったが、そのあたりの詮索はあえてしなかった。

「では、タバサ殿。案内していただきたい所があるのですが……」

「……何処？」

「イザベラ姫にご挨拶がしたいので、イザベラ様のところへ連れてついでにだいてよろしいですか？」

びくっ

その言葉を聞くと、タバサは眉を軽く上げた。表情こそ見なかったが、全身から不快な思いをしているというのがにじみ出していた。

「……わかった」

何とも緊張感を漂わせてくれる護衛であるが、ヴァルデスはそれを気取られないように後について歩いていった。謁見の間があるグラン・トロワを出て、プチ・トロワに向かった。

「こ、これはシャルロット……」

「タバサ」

呼び出しの兵士がその姿を見て、本名で呼ぼうとしたら彼女はすかさずそれを訂正した。

「し、失礼いたしました。イザベラ様に御用でしょうか？」

「私じゃない。彼」

タバサが杖でヴァルデスを指した。

「あ、あの、どちら様でしょうか？」

「失礼。ゲルマニアより参りましたヴァルデス・ウエストリ・コーラッドと申します。是非とも、イザベラ様にご挨拶をさせていたいただきたいのでお取次ぎを願いたいのですが」

「あ、牙部隊の……かしこまりました。お伺いを立てますので少々お待ちください」

呼び出しの兵士はそう言うと、侍従たちに話して部屋の中にいるイザベラにお伺いを立てた。

「どうして、イザベラ姫に……？」

「え？」

「今のガリアはジョゼフ王に権力が集中している。ジョゼフ王はイザベラ姫をほとんど無視しているのは、貴方ほどの人なら知っているはず」

「私の事をご存知で？」

「有名」

「そうですね……」

あまり感情を表に出さないタバサとの会話には少々普段と勝手が違うので戸惑ってしまうが、それでもヴァルデスにはタバサが悪い子でないことぐらいは理解できた。それと同時に、感情を殺しすぎて甘え方を忘れてしまっていることも。

「帝政ゲルマニア特使、ヴァルデス・ウェストリ・コーラッド様！」

すると、呼び出しの兵士から名前を呼ばれたのでヴァルデスは部屋の中へと入っていった。そこにはタバサのショートカットではなく、ロングヘアーで綺麗なドレスに身を包んだ女性がいた。その周りには侍従たちが控えていた。

「お初にお目にかかります、イザベラ様。私、帝政ゲルマニアの伯爵家嫡男、ヴァルデス・ウェストリ・コーラッドと申します」

「ああ。噂は色々と聞いてるよ」

イザベラはとて一国の王女とは思えないような口調で、ヴァルデスに言葉を発した。噂以上の態度にさすがのヴァルデスも驚かされたが、すぐに気を取り直して挨拶を続けた。

「私如き一介の伯爵家嫡男のことをご存知いただき、光栄でございます」

「なるほど。噂どおり、いや、噂以上の男ってことかね。しかし、何でそいつと一緒にいるのかい？」

イザベラはタバサを見て憎々しげそう言った。

「ジョゼフ陛下より私の護衛としてついでにただいております」

「そうかい？ まあいい、あんたいける口なんだろう？ ちょっと付き合いな」

すると、イザベラは部屋に隠してあったワインを取り出し、グラスに注いだ。

「喜んで」

「そうこなくちな。じゃあ、出会いを祝して乾杯ってところかい」

「乾杯」

ワイングラスを鳴らして、二人はワインを一気に飲み干した。

「やるねえ。さあ、次だよ。次」

イザベラはヴァルデスの飲む姿を気に入ったのか、上機嫌でグラスにワインを注いだ。

「あんたも飲むんだよ」

イザベラはタバサにもワインを勧めたが、タバサはイザベラと目を合わそうともしなかった。

「仕事中」

「人形が人間のいうことに逆らうんじゃないよ」

「まあまあ。タバサ殿はお仕事熱心なのでしょう。イザベラ様のお相手は私が務めさせていただきます」

「ふん」

イザベラは何処か面白くなさそうにワインを一気に飲み干した。

「イザベラ様、そんな表情をされては、せつかくの綺麗なお顔が台無しですよ」

「下手なお世辞は聞きたくないよ」

「ははは。これは手厳しい」

ヴァルデスはそう言ってワインを飲み干した。

「無能王の無能な娘である私に何で挨拶に来たんだい？」

「社交辞令とお考えいただければ結構ですよ。ジョゼフ王のお嬢様
ですの。」

「正直だね」

「何のメリットもない対談に嘘をついても仕方ないですから」

「うちの雀たちに聞かせてやりたいね。あんたの爪の垢でも煎じて
飲ませれば、少しはましになるのかな？」

イザベラはそう言うとヴァルデスのグラスに追加のワインを注い
だ。どうやら、イザベラはヴァルデスのことが気に入ったみたいだ
った。

「さあ？　ただ、私の爪の垢を飲ませたらゲルマニアに寝返るかも
しれませんよ？」

「そんな根性のある奴がうちにいたら褒めてやるよ」

「まあ、名誉にこだわる貴族がうちの国で成功するとは思えません
けどね」

「実力でのし上がったあんたならではの言葉ね」

イザベラは会話のところどころで笑顔を見せるようになっていた。
タバサも他人を虐げるときのような厭らしい笑顔ではなく、本当に
楽しそうに笑うイザベラを見て表情こそ変えなかったが少し驚いて
いた。

「どうだい？　ゲルマニアからうちに亡命するつもりはないかい？」

「あんななら父も喜んで家族ごと面倒を見てくれるだろうさ」

「残念ながら、ゲルマニアの自由な気風があつたればこそその成功だと思ひますので、その提案は謹んでお断りさせていただきます」

「ふん。あの皇帝に忠義を尽くすかい、律儀なこつたね」

イザベラは予想していたとおりの回答だったので驚きはしなかったが、その答えに少し残念そうなるものをおわせていた。

「お前もこつという風になつたらいいのにねえ。人形」

「……別に」

「ま、体もまだまだお子様のお前じゃこんな風になるのは無理かね」

イザベラはそう言うと、腕を組んで自分の胸を寄せてあげた。少なくとも、初対面の男の前でやるようなものではない扇情的な格好だったが、ヴァルデスは元々あまり興味がなかったので気にもしていなかった。

「まあまあ。イザベラ様、タバサ殿も立派なレディですよ」

「……あなた、少女趣味かい？」

イザベラは何とも生温かい目でヴァルデスを見ていた。タバサもその言葉を聞いて、何処か引いたような感じでヴァルデスを見ていた。

「さあ？」

「さあつて、あんた自分のことがわからないのかい？」

「人の見た目を気にしたことがないので……」

「じゃあ、何で判断するんだい？」

「その人物を気に入ったか気に入らないか、ただそれだけだと思いますよ。だから、見た目はあんまり問題じゃないんですよ」

「単純な考えだね。恋愛に関しては子供と変わらないじゃないか」

「それ以外に必要なものがありますか？」

ヴァルデスの言葉にイザベラは返す言葉がなかった。彼女とて、他人に堂々と語れるほどの恋愛などしたことがないので、それに対して反論するだけの材料を持っていなかった。王族なのだからそれは仕方がないことだった。タバサはそのイザベラの姿を見て、普段の溜飲が少しだけ下がる思いを感じていた。

「イザベラ様もタバサ殿も、見た目や色々なことで男を判断できるようになってきているのなら、どちらも立派なレディになっているということですよ」

「……」

二人はヴァルデスの言葉に何も言い返せなかった。それどころか、二人とも何処となく頬を赤く染めていた。

「さて、ご挨拶のつもりが長居してしまいましたね」

「何だい、もう少しゆっくりしていきなよ。時間はあるんだろ？」

「時間はありますが、若い女性の部屋にあまり長くいるとイザベラ様に悪い噂が立ってしまうかもしれないので今日はこの辺で失礼させていただきます」

「そうかい……だったら、明日もここに来な」

「明日はリュティスの町を見て回ろうと思っております。よろしければ、イザベラ様もご一緒なさいますか？」

「そうだね……それも面白そうだね」

「では、明日お迎えに参ります」

「楽しみにしているよ」

ヴァルデスはイザベラに一礼をして部屋を出た。

ガリアの姉妹（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ガリアの姉妹（後編）

「凄い」

「え？」

イザベラの部屋を出た後、ヴァルデスの宿泊用に用意された部屋に向かう途中での出来事だった。

「イザベラが……貴方を気に入ってた」

「そうでしょうか？」

「そう」

タバサもさつきとは違って、少しでも好意的になっているようだった。会話の端々にその変化が見て取れた。

「レディ」

「え？」

「貴方は私とイザベラをレディと言ってた」

「ええ」

「でも、私はイザベラの人形。レディじゃない」

タバサはそう言うと少し悲しそうな表情を見せた。

「タバサ殿も立派なレディですよ。決して人形なんかじゃない」

ヴァルデスはそう言うとタバサの頭を軽く撫でた。タバサは少し驚いて払いのけようかと思っただが、その手が心地よかったのでされるがままにすることにした。

「……お父様」

「え？」

「貴方は……お父様に似てる」

「……そうですか」

「うん」

タバサは目を閉じて頭を撫でられる心地よさを享受した。ヴァルデスもまるで妹が出来たみたいなきもちがして、それが悪いものではないと感じていた。実際、実家に自分の兄弟がいるがウィンドボナ勤務になってからは一度も顔を合わせたことがなかった。

「ところで、ガリアに来たのは何故？」

「ちょっとした仕事です。もっとも、ガリア王にお会いしたのもう終わったようなものですが」

「じゃあ、もう帰るの？」

「うちの閣下からも少し遊んで来いと言われてますから、ガリア

を少し観光してから帰ろうと思います」

「そう……」

感情の起伏が乏しいタバサが明らかに少し寂しさを抱えているのがわかった。ヴァルデスは笑顔を浮かべながらタバサと向かい合った。

「まだガリアにいますので、その間の護衛をよろしくお願いします」

「……うん」

タバサはまた頬を赤く染めていた。

「へえ。これがリュティスの町ですか。さすがに大陸最大の町と言われるだけありますね」

馬車の中から町並みを眺めながらヴァルデスは言った。町を走る馬車にはガリア王室の紋章が刻まれており、道行く人達は慌ててその馬車を妨げないように道をあけていた。

「ただでかいだけだよ。私はあんまり好きじゃないね、この町は」

馬車の中にはヴァルデスの他に、イザベラとタバサも乗っていた。

「どうしてですか？」

「町はでかいけど、あんまり綺麗じゃないからね。もう少し綺麗な
ら考えてもいいけどね」

「なるほど。私もその意見には賛成ですね。町が大きくとも、環境
が汚ければ病気などにかかりやすいですからね」

「そうなのかい？」

「ええ。実家の領地では、汚物やゴミの処分については厳しい法律
を敷き、それを処分する設備にお金を投資したおかげで病気はかな
り少なくなっています。最近はウィンドボナでも同様の取り組みが
行われています」

ゲルマニアでは、コーラッド領での成果を見てウィンドボナでの
衛生管理を現在は国家事業として進めていた。表通りの方は順調に
清掃事業が進んでおり、汚物処理の施設なども建設されていたが、
裏通りはまだ手を加えられていなかった。

また、汚物などを発酵させて肥料として利用する技術も開発され
ていた。それは農作物の生産において多大なる貢献をしていた。こ
れらは全てコーラッド領では既に当たり前のように実用化されてい
るものばかりだった。

通常、貴族は自分の領で開発された技術をあまり他の人間に教え
たがらないものなのだ。そうするとせつかくの利益独占のチャンスを
失ってしまうことになるからだ。

しかし、ヴァルデスの意見もあってコーラッド家はその技術を進んで国家に提供していた。そのおかげで、皇室においてのコーラッド家の信頼は強くなっていった。

「蛮人の国と陰口を叩かれている国が、一番進んでいる国とはね…
…皮肉もいいところだ」

「我が国も必死で色々と新しいことを始めている最中でございます」
「泰然として、何の変化も起こそうとしない国よりはましたよ」

イザベラは流れ行く景色を見てそう言った。二人が会話している間、タバサは何も言わずに黙っていたが、二人が楽しく喋っているのが何となく面白くなかった。イザベラもそんなタバサの視線には気がついていたが何も言わなかった。イザベラはイザベラで、タバサのその反応が楽しくて仕方がなかった。

「そう言えば、あなたの二つ名は何て言うんだい？」

「二つ名……ですか？」

「あんたほどのメイジなら二つ名がもうあるんだろ？ 噂では色々
と物騒なものを聞いているが、本当の二つ名は何て言うんだい？」

「別に、特に必要性を感じていないので決めていません」

その言葉にさすがに二人も驚いていた。どんなに無能なメイジでも必ず二つ名を持っているものだし、それをつけたがるのが普通なのだ。ヴァルデスほど優秀なメイジが二つ名を決めていないなど信じられなかった。

「あなた……メイジなのに二つ名を決めていないのかい？ 信じられないね」

「貴族同士の決闘でしか使わないようなものを決めてみましょうがないでしょう。子供同士の喧嘩ならともかく、実際に家の名誉を賭けた戦いなど今の世の中ではまずありません。だから、決める必要がないんです」

その言葉は事実だった。家同士の名誉を賭けた決闘など現在ではほとんど行われることはなかったし、自分の名前を名乗るときに二つ名を使うことなどほとんどないからだ。もともと、トリスティンでは今でも頻繁に使われているらしいとの話ではあったが。

「でも、一応は決めておいたほうがいいんじゃないかい。何なら私が決めてやろうか」

「イザベラ様なら私の二つ名をどうつけますか？」

「そうだね……暴虐なんてどうだい？」

「……それはまた物騒ですね」

「あなたの実力と徹底した戦いぶりを現したい二つ名だと思うけど……」

「……確かに周りに畏怖を与えたいと思いますが……。タバサ殿はどう思いますか？」

すると、今まで蚊帳の外にいたタバサにも声をかけられて、タバ

サは戸惑いながらも少し考えて言った。

「……迅雷」

「迅雷？」

「雷のように早く戦いに勝つ……風のスクウェアだし雷も関係している」

「なるほど」

「何言ってるんだい、そんなおとなしいのはこいつには似合わないよ」

すると、イザベラが茶々を入れ始め、タバサとのならみ合いに発展していた。ヴァルデスもこうなった二人に対して関わるつもりはなく、ただ黙って事の成り行きを見守っていた。

「……邪魔」

「人形が私に対して随分偉くなったじゃないか。何だい？ この男のことが気に入ったのかい」

「……彼の護衛が私の任務。貴女は邪魔」

「ふん。あんたはただの護衛、私はこの男をもてなす王女。どっちの方が立場が上だと思ってるんだい？」

言い争いはどんどんエスカレートしていった。もうヴァルデスでは止めることはおるか、下手に口を挟むとんでもない被害を被る

かもしれないのでただただ静観に徹した。

「だいたいお前って奴はそんな無表情だから人形みたいなんだよ」

「貴女にそんなこと関係ない。私は私」

「人形が人間の男に恋をしたかい？」

「貴女だって人のことは言えないはず」

(女の喧嘩はこうも怖いものなのか……)

正直、ヴァルデスにとっては盗賊や魔物を相手にしているほうがよっぽど気が楽だった。女の喧嘩というのは、男の喧嘩と違って妙な威圧感を周りにも与えるものである。ヴァルデスはこの一件でそのことを嫌と言うほど思い知ったし、二度と近づくまいと心に決めた。

「はあ…はあ…はあ……」

「ふう…ふう…ふう……」

互いの罵り合いが一通り終わった後、ようやく馬車の中に静寂が訪れた。相当険悪なムードのままではあったが、さっきよりも幾分かはましになっていた。

「ったく、どこまで強情なんだい、エレーナ」

「え？」

タバサはイザベラの口から出たその言葉を聞いて、思わず彼女の顔を見た。

「あ……」

言ったイザベラもタバサの反応を見て、無意識のうちに口にしたその言葉に栓をするかのように口元に手を当てていた。

「お二人とも、本当に仲がよろしいですね」

ヴァルデスがそう言うとイザベラは彼に厳しい視線を向けた。

「何処が……」

「お二人とも、もう立派なレディです。そろそろもう一度互いのことを分かり合おうとしてもいいのではないですか？」

ヴァルデスの言葉を聞いて、イザベラとタバサは互いに顔を見合わせた。今度はさっきのような悪口は出てこず、ただ互いをじっと見つめていた。

「では、女の話合いに男は邪魔なだけですから私は失礼いたしました」

「お、おい」

ヴァルデスはそう言うと馬車を降りてリュティスの町の中へと消えていった。追いかけてよいかとも思ったが、あまりにもその動きが早かったため、もう何処にいるかもわからなくなっていた。

馬車に残された二人は互いに何も言わずに黙りこくっていた。ヴァルデスがいなくなつて、話しかけるきっかけを失ってしまったのでどうしていいかわからなくなつていたのだ。

しかし、その沈黙を破つたのはイザベラだった。

「おい」

「……何？」

「その……何だ……」

「言いたいことがあるならばつきり言つて」

「いいかい？ あいつがどうこうつてわけじゃないけど、お前と私は何も変わらないよ」

「そう」

「それとあいつは渡さないよ」

「そこは譲れない。そもそも次期ガリア女王候補である貴女がゲルマニア貴族の彼と結婚することは出来ない」

タバサの言うことは正論だった。ただでさえ、貴族たちからはいいイメージがないゲルマニア貴族であるヴァルデスとイザベラがいい関係になることなどありえない話だった。

「そんなこと、お前に言われるまでもない。後で何とかすればいいだけの話だ」

「何とかできるとは思えない」

「だからと言って、何もしないであんたに譲るなんて事だけはないから覚悟しな」

「そっ」

「いいかい。今もこれからも私とお前の関係は変わらないんだよ、エレーヌ」

「……！」

タバサはまたイザベラを見た。今回、イザベラはタバサを見なかったが、その頬が少し赤く羞恥の色に染まっていた。タバサはそんな彼女の姿を見て動揺もしたが、少しだけ懐かしさも感じていた。

結局、二人はその後は何も語らなかったが以前よりも確実にその距離は縮まっていた。町の見物を終えて戻ってきたヴァルデスはその姿を見て、とりあえずは成果があったと一安心していた。

「お前に依頼したこと、一応の成果があった。礼を言おう」

ガリアを出立する日、謁見の間にてジョゼフとの最後の対面の席での言葉だった。とりあえず、今後は自分でもできることを進めていくつもりだと語っていたので、とりあえず自分の役目が終わったことにヴァルデスはひとまずほっとしていた。

こうして、ヴァルデスは意気揚々とゲルマニアに戻っていった。

しかし、その後でジョゼフが裏で色々と工作をすることになるのだが、ヴァルデスがそれを知るのはもつとずつと後になった。

ガリアの姉妹（後編）（後書き）

初めての後書きです。

この作品もたくさんの方々のご支援をいただけて、本当にありがとうございます。うございます。

昨日、掲載初日のPVが31000件、お気に入り登録件数が50件超えという結果を残せました。

皆様の期待を裏切らぬよう、これからも努力してまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

トリステイン魔法学院（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

トリステイン魔法学院

「トリステインに行くのか？」

園遊会から二年が経ち、ヴァルデスも十六歳になっていた。その頃にはヴァルデスの名前はゲルマニアではもう大物としての地位を確立していた。

ちなみに、あれからガリアには何度か外遊していた。いずれもジョゼフからの正式な招待であり、そのエスコート役にはイザベラ、護衛兼エスコート役にはタバサが常についていた。

ガリア国内では政治的な動きがあり、ジョゼフによって自らが取り潰したオルレアン家が再興され、タバサ…もとい、シャルロットが再びガリア王族の一員にその名を連ねた。オルレアン家再興によって、かつてオルレアン家を支援していたがために潰されることとなった貴族家も再興された。また、シャルロットの母の治療もジョゼフの手によって進められているとの事だった。どういうわけか知らないが、効果があると思われる薬を現在調達しようと尽力しているらしい。

「はい。一応、あそこは規則も厳しいので学ぶにはいいかと……」

現在、執務室で話されているのはヴァルデスの進学の件についてだった。貴族はこれぐらいの年齢になると、何処かしらの魔法学院に通うのが通例とされている。それはヴァルデスも例外ではなかった。

ゲルマニアにも魔法学院はあるのだが、どうにも校風が自由すぎるのであまり自分には合っていない気がしていたので、彼はトリス

テインにある魔法学院に入学しようと考えていた。

「まあ、無難なところか」

「では、ご許可いただけますでしょうか？」

「ああ。どの道、何処かに通わなければならないんだ。却下する理由がない」

「ありがとうございます」

ヴァルデスはそう言って一礼をした。

「言うまでもないだろうが、お前は既に我の名代を務めるほどの男だ。お前の行動一つにゲルマニア全てがかかっているといっても過言ではない。それだけは決して忘れるでないぞ」

「はっ。閣下からのお言葉を肝に銘じまして勉学に励みます」

「まあ、三年間の休暇を満喫して来い」

「へえ……ここがトリステイン魔法学院か」

馬車の窓から見えるその大きな建物にヴァルデスは思わず感嘆の

声を漏らした。五本の塔を建て、それを五角形、すなわちペンタゴンの形にして五系統を表していた。ただ、その姿は学校というよりもさしずめ要塞のようだった。

ちなみに、貴族は見栄を張ってなんぼという言葉があるぐらい見栄を張る生き物である。だから、旅行するだけでも大行列を組んだり、たくさんの荷物を運んだりするものであるのだが、ヴァルデスはそんなこと全く気にしていなかった。

従えている馬車も僅か二つ、自分が乗る用のものと荷物を運ぶためのもの。基本的に必要最低限の家具は学院で用意しているとの事なので、持ってきているのは武器と僅かな衣服とお金、そして薬の材料だけだった。少なくとも、傍目から見てもそれがゲルマニアだけでなく世界中に名を轟かせている男が乗っているなどとは誰も思わないだろう。

学院の門の前では馬車が列を成していた。その全てが入学するためにやってきた生徒のもののだが、手続きするのにもなかなか時間がかかるらしく、あまり思うように馬車は進んでいなかった。

「どうやら、もう少しかかるようですね」

「も、申し訳ありません」

馬車の中から御者にそう言うと、御者は物凄く恐縮した声で謝っていた。

「別にあなたのせいじゃない。しばらく寝ていますので出番が来たら起こしてください」

「か、かしこまりました」

ヴァルデスはそう言うと、再び座って目を閉じた。ゲルマニアを出立する前日まで、ずっと仕事をしていたので彼にも疲労が溜まっていた。通常業務に平行して後任者に業務の引継ぎなども行わなければならなかったため、普段よりもずっと忙しかった。

ヴァルデスは学生になるという理由で牙部隊の隊長の職を辞していた。隊員たちからはかなり残念に思われていたが、さすがにこれだけはどうにもならないので早いうちに諦めもついていた。隊員たちも自分たちが学院に通っていた過去があつたからこそその納得だった。

(それにしても、本当に前日まで働かされるとは……)

ヴァルデスがゲルマニアで行った最後の仕事は、貴族の粛清だった。ゲルマニアでは、アルブレヒト三世に対して反感を持つ貴族たちが徒党を組んでいるという噂がごく一部で囁かれていた。元々、親類一同を幽閉してまで今の磐石な地位を築いたアルブレヒト三世にしてみれば、この噂ほど面白くないものはなかった。ヴァルデスに噂の真偽を大至急調べるように命じ、それが事実であつたためにその貴族たちは粛清されることとなった。

しかし、徒党を組んでアルブレヒト三世に反旗を翻そうとしていたのは事実だったが、少しだけ噂とは違う部分があつた。彼らはアルブレヒト三世にのみ反旗を翻そうとしたわけではなく、貴族社会そのものに反旗を翻そうとしており、ある組織に属しているということがわかった。組織の名前はレコン・キスタ。結局組織についてわかつたのは名前のみ、それ以外のことは結局わからずじまいで終わってしまったのだ。

結局、一抹の不安を抱えたままになってしまったが、その仕事を

最後に、ヴァルデスの隊長としての職務は終わりを告げた。

「ヴァルデス様、いよいよ次でございます」

「ん……」

御者から声をかけられてヴァルデスは目を開けた。考え込んでいる間に馬車はかなり進んでおり、学院の門がかなり近くまで来ていた。

「やっとか……」

すると、前の馬車が動き出して自分の番になった。

「名前を伺います」

「ゲルマニアのヴァルデス・ウエストリ・コーラッド様です」

こういう時、貴族がわざわざ自分から名乗るようなことはせず、従者がその代弁者として手続きを代行するものである。ヴァルデスもそれに倣って馬車の中からは一言も発しなかった。

「確認が取れました。ようこそ、トリステイン魔法学院へ」

門番から門を通る許可が下りると、馬車は別の兵士に案内されて指定の場所に止めた。

「やれやれ、ようやく着いたか」

「お疲れ様でした。ヴァルデス様」

馬車から降りると、同じようにやってきた貴族たちと荷物を運び込む使用人たちでいっぱいだった。

「ようこそ。トリステイン魔法学院へ」

すると、一人の侍従がやって来た。

「私、この学院でメイドをやっているシエスタと申します」

「メイド？ ……ああ、侍従のことか」

侍従まで国によって呼び方が違うものなのか、と思った。

「はい。お荷物をお部屋にお運びいたします。お部屋場所はご存知ですか？」

「いや。まだ学院の案内図を見ていないんだ。よろしく頼む」

「かしこまりました。では、こちらへどうぞ」

「ああ」

ヴァルデスはシエスタの後に続いて男子寮の中に入った。寮の中もたくさん使用人で溢れていた。それぞれが貴族の部屋に荷物を運び、慌しく動いていた。

「この光景は圧巻だな」

「この時期は、毎年新入生の方々がいらっしやいますので」

「こんなに忙しいものなのか？」

「皆さん、お持ちになるお荷物が多いですから」

こんな肉体労働を安賃金で行うあたり、ヴァルデスは頭の下がる思いでそれを見ていた。

「こちらがお部屋になります」

「ありがとうございます」

「では、失礼いたします。本日の昼食は既に終了しておりますので、夕食からご参加ください。お席は特に決められた場所がございますが、一年生、二年生、三年生で場所は区切られておりますので制服の色を見てご判断ください」

「わかった」

「では、失礼いたします」

シエスタは一礼をして部屋を出て行った。ヴァルデスは特にやりたいこともないので、そのままベッドの上で横になった。窓から流れる景色も穏やかなもので、これまでの忙しい生活を忘れさせてくれるには充分すぎるものだった。

（休暇……か）

ヴァルデスは学院に入ることをアルブレヒト三世に告げた席で言われた言葉を思い出した。少なくとも、彼にとってヴァルデスの学

院への入学はただのステータス作りの意味合いしか持たず、身になるようなことはほとんどないと考えていた。世間体を考えて、その一言がなければ彼は今でも牙部隊の隊長を行っていたはずである。だからこそ、アルブレヒト三世はヴァルデスの学生生活を指して休暇と言ったのだ。

「失礼いたします」

すると、使用人が荷物を運んできた。

「ああ。荷物はそこに適当に置いておいてよ」

「かしこまりました」

すると、使用人は荷物を置いて早々に部屋を立ち去った。まだまだやることがたくさんあるため、ヴァルデス一人に構っていられないというのが彼らの本音だろう。

「さて……つと」

ヴァルデスはベッドから起き上がって、持ってきた荷物の整理を始めた。もつとも、僅かな衣服と武器はすぐに整理が終わった。問題なのは、持ってきた秘薬の材料の方だった。

「これはこつちで……あれは……」

かつては暗殺者として様々な毒や薬に手を出していたこともあったし、父が水のトライアングルということもあってこつちの世界の秘薬作りにも詳しくかった。そのおかげで、薬や毒に関しては他人よりもはるかに多くの知識を持っていた。それゆえ、コーラッド領で

は一般には出回っていない新しく、それでいて安い薬も出回っていた。それらがヴァルデス考案のものだということは本人と家族以外は誰も知らないことだった。

「こんなところか」

ヴァルデスは整理を終えるとようやく一息ついた。薬の材料などは至る所に隠して傍目からはわからないようにした。一応、学院の規則では薬の材料は特定の場所にて保管することが条件となっているのだが、それをやるのは面倒なのでそうしたのだ。他の学生たちもおおむね似たようなことをしているらしいとの事なので問題視されることはないと考えていた。

すると、いつの間にか窓から夕日が差し込んでいた。

「そう言えば夕食があると行ってたな……」

ヴァルデスは学院指定のマントを羽織り部屋を出た。廊下にはさつきまで溢れていた使用人の換わりに、入学してきた貴族の子弟たちで溢れていた。全員が同じ方向に向かっていているのを見て、着いていけば食堂に着くだろうと思ってそれについて歩いた。

「それにしても、たくさんいるんだな……」

ゲルマニアで同年代の子と会うのはほとんどなかった。せいぜい、年代が近いところでガリアのイザベラやシャルロットだけだった。

しかし、彼女たちと比べると周りの連中はどうにも子供じみている。良くも悪くも、あの二人はレディと呼べるくらい精神的には成長していたが、ここにいる彼らはまだまだ子供だった。

彼らの後をつけていくと、目的どおりに食堂に着くことが出来た。既に上級生たちは全員着席しており、一年生が全員着席するのを待っていた。

時間はかかったが、一年生が全員集合するとようやく食事が始まった。

「しかし……」

ヴァルデスは目の前に並べられた大量の食事に驚きを隠せなかった。食べてみて、味は確かに最高と言っても差し支えないものだったが、それでもこれだけの量は食べきれない。実家にいたときよりもはるかにその量は多かった。

「やあ。君は何処から来たんだい？」

すると、隣に座っていた金髪の男が声をかけてきた。

「ゲルマニアだ」

「留学生かい？ 僕はギーシュ・ド・グラモンだ」

ギーシュは胸の開いたシャツを着ており、他の生徒たちとは少し違った出で立ちをしていた。確かに顔は美男に属するのだろうが、どうにもそれを活かさきれていないのではないかとヴァルデスは思った。

「グラモンというと、軍閥家系のグラモン家か？」

「ああ。僕はそこの四男なのさ」

「ほう。それはなかなか立派な家系だ」

「ありがとう。君の名は何て言うんだい？」

「ヴァルデスだ。ヴァルデス・ウェストリ・コーラッドだ。よろしく」

すると、ギーシュの表情が変わった。

「ヴァルデスって……あの牙部隊の隊長の……？」

「元、だ。学生になるから隊長職は辞してきた」

「そ、そうかい。君ほどの有名人と同級生になれるなんて光栄だよ。これからよろしく」

「ああ。こちらこそよろしく」

名前を聞くと、ギーシュは少し引きつったような笑みを浮かべていたが、ヴァルデスと握手を交わした。

「それにしても、君ほどの大物も入ってきたって事は今年は大当たりの年ってことだね」

「も、ってことは他にも誰かめばしいのがいるのか？」

「ああ。ほら、あそこ」

ギーシュが指差す先には、桃色のピンクブロンドの髪をした小柄な少女がいた。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
ヴァリエール公爵家の三女さ」

「ああ。ヴァリエール公爵の娘さんか」

「トリステインでもっとも有力な貴族の娘だからね、教師たちの扱
いも違うみたいだよ」

「なるほど」

確かにトリステインきつての大物貴族の娘ならば、教師たちの反
応が違うのも無理はない。名前だけならばヴァルデスのほうが圧倒
的に売れているのだが、この学院はトリステイン王国のものであり、
そこで働く教師たちもトリステインの人間なのだ。外国の人間と自
国の人間、どちらを優先するかわれれば考えるまでもないこと
である。

「ところで、君はどうしてこのトリステイン魔法学院を選んだんだ
い？ ゲルマニアにもあったと思うけど」

「ゲルマニアは元々軍事でのし上がってきた国家だからね。学校の
校風もどうも自由すぎるところがあるから合わないと思ったんだ」

「へえ」

「リュティスのほうに来ないか、と誘われたが、妙な借りは作りた
くなかったからこっちにしたいんだ」

「リュティスってことはガリアかい？ 誰に誘われたんだい」

「ガリアのジヨゼフ王」

「ガ……！」

他国の王の名が出てきて、ギーシュはさすがに驚きを隠せなかった。二人の会話をこっそりと盗み聞きしていたほかの生徒たちも同様の反応を見せていた。

「どうしてジヨゼフ王から……？」

「色々あってね、仕事で顔を合わせる機会がちよくちよくあったし」

「そ、それは羨ましいね」

「そうでもないぞ？ いちいち言葉尻を捕まれないように考えながら喋らなければならないから面倒なことこの上ないよ」

「でも、一国の王と顔を合わせる機会があるなんて羨ましいよ。僕ならアンリエッタ姫にお会いできたら天にも昇る気持ちになるだろうね」

「うちの閣下にジヨゼフ王、二人のおじさんよりも綺麗な女性に会うほうがよっぽどいいだろうね」

「そういう意味ではないんだけど……」

ヴァルデスはそう言ってワインを飲んだ。

「ま、せっかくの休暇なんだからゆっくりと楽しむさ」

「学院での生活が休暇かい？ 勉学に勤しむ場だよ」

「うちの閣下曰く、学生生活と休暇は同じものらしい」

「さすがゲルマニアの皇帝閣下、豪快というか何と云うか……」

「必要なこととそうでないことの区別だけは凄いからね。それも冷酷と言えるまでに」

それがアルブレヒト三世が周りから恐れられ、侮られない理由だった。自分の親族でさえ幽閉してしまう冷酷さに家臣たちは畏怖を抱き、またそれと同時に対照的な畏敬の念も抱いているのだ。

ギーシュはその光景を想像して少し寒気を覚えた。あまり係わり合いになりたくない人間であり、ゲルマニアという国が蛮人の国というイメージを強めていた。

「ま、付き合い方さえ間違わなければいい人だよ。うちの閣下」

「そ、そうかい。でも、僕には一生縁がなさそうだ」

「知り合わないに越したことはない。まあ、一般的な意見だとそうなるかな」

「君も……色々大変だったんだね」

「まあね」

ヴァルデスはグラスにワインを注いで一気に飲み干した。

「ま、しばらくは顔を合わさずに済みそうだ。これからよろしく」

「ああ。こちらこそよろしく」

改めてヴァルデスはギーシュと握手を交わした。

こうしてこの魔法学院での最初の友人、ギーシュ・ド・グラモンと知り合うこととなった。

トリステイン魔法学院（後書き）

アクセス数とお気に入り登録件数が物凄い勢いで伸びていたので驚きました。

本当に皆様、色々ありがとうございます。

これからも頑張ってくださいですのでよろしくお願いいたします。

二人の『ゼロ』（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

二人の『ゼロ』

「私が風の魔法を諸君に教える『疾風』のギターである」

ヴァルデスが最初に受けることになったのは『疾風』の二つ名を持つギターであった。なかなか鋭い眼光で生徒を値踏みしているような感じがあった。

「今年の生徒たちは不作のようだ。ほとんどがドットばかり。ライオンやトライアングルも極僅か、今年の生徒で唯一のスクウエアはヴァルデス君だけ」

そう言うつと、生徒たちの視線がヴァルデスに集中していた。ギターはただ引き合いに出したただだが、生徒たちの視線がとても痛々しかった。

「ヴァルデス君」

「はい」

「君も私と同じ風のスクウエアだったな」

「ええ」

「得意な術は何かね？」

ヴァルデスにとって、魔法はただの道具という思いが強いため、得意も不得意もあまり関係ないような気がしていたが、さすがに相手が教師なので変なことをいうわけにはいかず、無難だと思うとこ

るで返事を返した。

「ウィンディ・アイシクルや遍在ですが……」

「ほう。遍在が得意かね？ ならば、実演してもらってもよいかね？」

「はい」

ヴァルデスは渋々呪文を唱えて、自分の遍在を十体ぐらい作り上げた。それを見ると、さすがに生徒たちから感嘆の声が上がった。ギトーもまさか十体も作り上げるとは思わなかったので、ヴァルデスの実力に対し寒気を感じていた。

「よ、よろしい。もういいぞ、席に座りたまえ」

「はい」

遍在を消してヴァルデスは席に座ったが、既に同じクラスの生徒たちからは注目の的となっていた。この一件は一気に学院中を駆け巡り、学院内での彼の立場を知らず知らずのうちに築き上げていた。

正直、彼にとってはどうでもいいことだった。城内での立場ならば色々と考えなければならぬが、学院での立場を考えることなど何の意味もないと考えていたからである。

「いやあ、やっぱり君は本当に凄いなだね」

昼休み、唯一の友達であるギーシュとその話題で話していた。

「ま、一応は魔法衛士隊にいたから」

「そう言われても、噂を聞くのと実際に見るのでは大きな違いがあるからね。これで、君の実力を疑う人間は誰もいなくなるさ」

「平穩無事、休暇なんだからそれが一番なんだけどな」

ヴァルデスは紅茶を飲みながらそう言った。二人が会話をしている姿を周りの生徒たちもその様子を観察していた。特に女子生徒たちの視線が多かった。

「お話中のところ、よろしいかしら？ ミスタ」

すると、二人のところへ一人の女子生徒がやって来た。赤い髪に褐色の肌、シャツのボタンを開けて胸元を大きく開いてはだけさせていた。ヴァルデスは何にも感じなかったが、ギーシュの目はその豊満な胸に釘付けになっていた。

「その髪……もしかしてツエルプストー家の……」

「はい。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーと申します。ヴァルデス様」

「様は結構。もう魔法衛士隊の隊長じゃないし、今は君と同じただの学生だ。気軽にヴァルデスと呼んでくれ」

「じゃあ……そうさせてもらおうわ」

キュルケはそう言うのと明るい笑顔でそう言った。切り替えの早い性格、それはヴァルデスに好感を与えていた。キュルケは手近な席

から椅子を持ってきてその輪に加わった。

「でも、どうしてトリスティンに留学を？」

「規律の厳しい学校という話だからね。俺もあんまりマナーとかそういうのに詳しいわけじゃないから、学ぶにはちょうどいい環境だと思っただけさ。それより、ツエルプスター家の君こそどうしてここに？」

「実家で結婚させられそうになったの」

「結婚？」

「相手は公爵家のおじいちゃん。さすがに、そんなおじいちゃんと結婚なんてしたくないからトリスティンに来たの」

「なるほど」

政略結婚に年の差など関係ないが、さすがにあまりに離れすぎている相手だと敬遠したくなる気持ちはわかった。もともと、それを言うとアルブレヒト三世とアンリエッタ姫もかなり歳が離れているのだが。

「ところで、ルイズって娘知ってる？」

「ヴァリエール公爵の三女だろうか？」

キュルケはヴァルデスの答えを聞くと頷いた。

「あの子、未だにコモンマジックも使えないのよ」

「コモンマジックも使えないか、まるでイザベラ様みたいだな」

イザベラの名前が出ると、キュルケとギーシュは互いに顔を見合
わせた。

「イザベラってまさか、ガリアのイザベラ姫かい？」

「ああ。あの方も魔法が苦手なんだ。もっとも、全く使えないとい
うわけじゃないけどな」

「ガリアの王族を引き合いに出せるあたり、さすがと言ったところ
ね」

二人はヴァルデスの顔の広さにただただ驚くしかなかった。学生
の身で他国の王族と知り合いになる機会など、普通では考えられな
いからだ。自国の王ですら会うのが難しいというのに、他国の王に
会う機会などよほど高い地位や身分でない限りはまずないといつて
もいい。

「で、そのルイズ嬢がどうしたんだ？」

「別に。ただ、面白いなっただけ」

「いい趣味とは言えないな。それは」

「我がツエルプストー家とヴァリエール家は不倶戴天の敵同士よ。
馴れ合うつもりはないわ」

そのことはヴァルデスもアルブレヒト三世から何度も聞いていた。

あの両家の小競り合いが原因で国同士が争うこともしばしばあったことも聞いており、今は問題が起こった際は仲裁をするようにと言いついて付かっている。仲裁役をやらされている立場としては、決して笑い話で済むようなことではなかった。

「ははは。レディの罵り合いは美しくない、この話題はもうやめようではないか」

ギーシュがその話題を無理やりに終わらせた。ヴァルデスはその配慮に少し感謝していた。

あんまり長くこの話題を続けて、それが人伝にルイズの耳に入っただけで喧嘩などということになると、結局苦労するのはヴァルデスということになるのだ。学生同士の喧嘩とは言え、あの両家に関しては子供の喧嘩だけで済むとは限らないからだ。それだけ両家の間に禍根を残しているのだ。

「ま、いくら魔法が使えないからって失敗で爆発を起こすんだから相当のものよね」

「失敗魔法で爆発……？」

キュルケが何気なく言った一言にヴァルデスは食いついた。

「爆発するの？」

「ええ。レビテーションでもフライでもいつも爆発するのよ。ほら、聞いたことないかしら？ 時折、授業中に激しい音がしているのを」

「ああ……」

ヴァルデスもその音を聞いていたのだが、まさかレビテーションやフライの失敗による爆発だとは夢にも思っていなかった。てっきり、何かもつと凄い術の練習で生じた轟音か何かだとずっと思っていたのだ。

「あれか」

「そう。最初は公爵家の令嬢ということで、周りも遠慮していたんだけど、立て続けに失敗して一度も成功しないから今では『ゼロ』のルイズ、なんて陰口も叩かれているわ」

「君も言っているのかい？」

「もちろん」

ヴァルデスの問いに、あっけらかんと言うキュルケに、ヴァルデスは思わずため息を漏らした。

「喧嘩だけはしないでくれよ。仲裁するのは俺なんだから」

「あら？ どうして？」

「皇帝閣下からツエルプストー家とヴァリエール家が小競り合いを起こしたら、被害が大きくなる前にお前が仲裁して何とかしろって命令が出るからね。もつとも、ツエルプストー家とヴァリエール家にそんな話がいつているかどうかは知らないけど」

「多分いつてないと思うわ。私はそんな話を聞いたことがないもの」

キュルケの言葉を聞いてヴァルデスは頭を抱えた。こんな調子な

らば、近いうちに本当に面倒ごとを起こしてくれそうな嫌な予感し
かしくなかった。

「しかし、『ゼロ』か……」

「どうかしたのかい？」

「いや……いいなと思っただけだ」

ギーシュの問いかけにヴァルデスがそう返したので、二人はその
意図がよくわからずにいた。

「魔法成功率ゼロだから、『ゼロ』のルイズ。何処がいいの？」

「意味はともかく、ゼロって二つ名はいいと思ったんだ」

「ゼロがいいの？」

「色々な意味が持てるだろ？ それに、俺はまだ二つ名を決めてい
ないし、ちょうどいい機会だから俺の二つ名はゼロってことにする
かな」

「正気かい？ 二つ名だったらもつと格好いいものにすればいいじ
やないか。ちなみに、僕は『青銅』だ」

「私は『微熱』よ」

普通、二つ名というのは属性に合わせたもので考えられるもので
ある。例外がないわけではないが、それでも数少ないものであるこ
とは言うまでもない。

「いや、やっぱりゼロにしよう。今日から俺は、『ゼロ』のヴァルデスだ。喧嘩売って立ち上がった者はゼロ、俺の名にびったりだと思わないか」

「「確かに……」」

そういう意味合いならば、ゼロという二つ名にもかなり剣呑なイメージが付きまどってくる。ヴァルデスにはそういう剣呑なイメージの二つ名がよく似合う、それが言葉にはしなかったが二人の意見として共通するものだった。

「その爆発もちよつと気になるけどね」

「それってどういう……」

すると、授業開始を知らせる鐘の音が鳴り出した。

「授業が始まる。また後でな」

ヴァルデスはそう言って教室へと向かっていった。ヴァルデスとギーシュたちのクラスが違っていたため、こうして会うことが出来るのは放課後や朝の時間だけなのだ。

ギーシュとキュルケはヴァルデスが何を言いたかったのかがよくわからないまま、その場を離れた。だが、二人にとっては些細なことであるため授業を受け始めるとすぐに忘れてしまった。

「さてと……」

真夜中、宿舎の明かりがほとんど消え、月明かりだけが夜の学院を照らしていた。そんな時刻にヴェストリの広場にやってくる一つの影があった。

「とりあえず練習してみるか」

ヴァルデスは腰に下げた剣を抜いた。もちろん、この剣もただの剣ではない。ヴァルデスが錬金によつて作り上げたものであり、並大抵のメイジが作るより遥かに立派なものだった。おまけに固定化もかけられているので強度の方もかなりのものだった。

そして、この剣は武器であると同時にメイジの杖でもあった。武器として使いながら魔法も使える、ヴァルデスに合った戦い方を追求した結果、こういう形になったのだ。

敵もまさか剣が杖でもあるとは思ってもよらず、普通の平民相手だと思つて痛い目に遭わされ続けていた。このあたりは、ヴァルデスの作戦勝ちとも言える。

剣を水平に構え、静かに呪文を唱えた。刃毀れ一つない刃に月明かりが反射して、幻想的な雰囲気を作り出していた。

「はあっ！」

ヴァルデスが唱えたのはファイアー・ボール。それは一直線に壁に向かって飛んでいき、その間もヴァルデスは次の呪文を唱えてい

た。

「エア・ハンマー！」

飛んでいくファイアー・ボールに向けて風の呪文を叩きつける。ファイアー・ボールは爆発という現象を引き起こして消えた。事前にサイレントを周りにかけておいたので、その際の爆音が誰かに聞かれることはなかった。

「やっぱり爆発を起こすんならこうだよな……」

昼間話題に上ったルイズの爆発のことを、ヴァルデスは気にかけていた。彼が今まで練習してきた魔法の中で、いきなり爆発を引き起こすような術は一つとして存在していなかったからだ。

「いきなり爆発を引き起こす術か……」

それはヴァルデスにとっては非常に魅力的な術だった。何の過程も経ずにいきなり爆発を引き起こす、この術があれば好きなときに事故を演出することができる。暗殺者ならば喉から手が出るほど欲しい術といっても過言ではない。前の世界にだってこんな術はなかったのだ。

この術は術者を立証するのが不可能な術と言ってもいい。今のところはルイズが使えるので、誰が使ったかの特定は非常に簡単なのだが、これを覚えてしまえば誰が使ったかはわからない。大勢の人が見ている前で使える術なのだ。

「やっぱり一度本物を見てみないと駄目か……」

元々、一度の見たことも聞いたこともない術だけに、初めから出来るなどとは思っていなかった。試しに不可能に挑戦してみただけである。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールか……どんな人物なのだろうか？」

ヴァルデスはしばらくその場に立ち尽くしていたが、やがて夜も更けて肌寒くなっていったので部屋へと戻っていった。

二人の『ゼロ』（後書き）

おかげさまで昨日10万PVを突破しておりました。

たくさんの皆様にご支援いただき、誠にありがとうございます。

これからも楽しく読める作品を作ってまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

次回はルイズ初登場、それにあの人も登場します。

ご期待ください。

合同授業（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

合同授業（前編）

「何よ？ あんた」

翌日、件のルイズとは食堂で顔を合わせる事になった。小柄で何処となく小動物を思わせる風貌をしていたが、どうにもその厳しい目つきが全てを台無しにしていた。

「失礼。私はヴァルデス・ウェストリ・コーラッドと申します。どうかお見知りおきを」

「ああ、貴方が……」

ルイズもヴァルデスの名前は知っていたようで、それだけ言う椅子に座った。ヴァルデスはそのままルイズの隣に座って彼女との会話を続けようとした。

「何？」

「いや、せっかくだすからもう少しお話をしようと思ひまして」

「私と一緒にいると貴方の評価まで落ちるわよ。知ってるでしょ？ 私の嫌な二つ名」

ルイズもさすがに自分について回っている悪評にうんざりしているようだった。いや、それどころか絶望にも似たような雰囲気漂わせていた。

「嫌な……と言われるとちょっときついですね」

「どろしてよ？」

「私の二つ名も『ゼロ』ですから」

「あんた……喧嘩売ってるの？」

ルイズはヴァルデスが下手な慰めを言っているのだと思い、それが却ってルイズを苛立たせていた。

「そんなつもりは……実際に私の二つ名がゼロなのだから仕方ないじゃないですか？」

「何であんたほどの人がゼロなんて不名誉な二つ名なのよ」

睨みで人を殺せそう、ヴァルデスはルイズの視線を見て思わずそう思ってしまった。これほどまでに鋭い視線は、未だかつて向けられたことのないものだった。

「喧嘩で負けたこと無し、立ち上がった相手がないからゼロです」

「……まあいいわ。で、何で私に話しかけてきたのよ」

「二年前のマリアンヌ太后様主催の園遊会でヴァリエール公爵にご挨拶させていただいたことがございます」

「お父様と？ 貴方もあの園遊会にいたの？」

「ええ。貴方も、ということはルイズさんも？」

（あの園遊会でヴァリエール公爵が連れてきていた娘って言うのはルイズだったのか……）

ヴァルデスは二年前のあの園遊会でのことを思い出していた。確かに、ヴァリエール公爵は娘を連れてきていていると言っていたが、それがルイズだとは思っていなかった。恐らくは、長女であるエレオノールあたりを伴っているものだとばかり思っていたのだ。

あの園遊会はマリアンヌ太后主催の国家的なイベントであり、そこに連れてくるのは当然長子であるのが一般的だからだ。まだ幼いルイズは候補から外していたのだ。

「ええ。幼少のみぎりに姫様のお相手を務めさせていただいたのよ。その縁であの園遊会にいたのよ」

「なるほど。まあ、そういうわけがありまして、学院で同じ学年になるという縁がありましたのでご挨拶させていただきました」

「そう……わかったわ。それとルイズでいいわ」

「では、私もヴァルデスでかまいません」

食事の席での会話はこれだけだった。さすがに朝食の席で長い会話をするだけの時間はなかったが、これはこれで最初の接触としては充分成功といえるものだった。それにルイズが非常に扱いにくい性格をしているとわかったことも大きな収穫だった。

良くも悪くも貴族であり、非常にプライドが高い。怒りの沸点も低く、下手なことを言うだけで激昂する。典型的な子供、それがヴァルデスの抱いたルイズの人間像だった。

(しかし、そうになると魔法を見せてとは言えないな……)

ただでさえ、魔法にコンプレックスを抱いているルイズにそんなことを言おうものならどんな酷い目に合わされるか、それがわからないほどヴァルデスは子供ではなかった。ルイズとヴァルデス、口喧嘩をすればヴァルデスの勝ち揺るがないだろうが、勝つまでに味わう精神的ストレスは多大なものとなるのだけは間違いない。

(どんな切り口で近づくか……)

やり方さえ間違えなければ、非常に扱いやすい相手ではあるが、ひとたび間違えるとどうしようもないくらいこじれてしまう。ゼロか百か、極端であるがゆえ、かえってとっかかりがないものなのだ。だが、とっかかりさえ掴んでしまえば、ヴァルデスの思うとおり、事を運ぶことの出来る人物でもある。

そんな時だった。ヴァルデスに救いの一言が聞こえてきたのは。

「えー、皆さんもこのトリステイン魔法学院に入学して間もないので、まだまだ知らないことも多いでしょう。それにまだまだ知らない同級生も多いことと思います。そこで、この学院では毎年この時期に合同授業というものを行っております」

(合同授業?)

普段は左耳で聞いて右耳から聞き流していた教師の言葉も、この時だけは真剣に聞き入っていた。

「知つての通り、このトリステイン魔法学院にはトリステイン王国だけでなく様々な国から生徒として入学しています。他国の留学生

とも交流を持ついい機会になると思いますし、自身の实力を知りたい機会にもなります。誰がどれほどの実力を持っているか、またどのようなメイジを目指していくかの指針になったという先輩方も多くいます」

この催し物がどれほどの効力を出すのかは疑問だ、とヴァルデスは思った。交流を持つにはいいかもしれないが、これが果たして将来の指針になるかと言われれば、その答えはノーである。生徒同士を見るよりは、魔法衛士隊でも呼んでその技術を見せたほうがはるかに勉強になる。その他にもその分野のエキスパートを客員講師が何かで呼んだほうがはるかにましである。合同授業でのメリットは、生徒同士での交流が深まるというその一点だけだとヴァルデスは結論付けていた。

「本日より一週間の間、実技の授業は全て他クラスとの合同授業となります。皆さんも他のクラスに負けないようにしっかりと魔法の研鑽を積んでください。以上です」

(合同授業か……チャンスだな)

授業ならば堂々とルイズの魔法を見る機会はある。わざわざお願いをしなくてもいいし、ルイズの怒りを買うこともない。ヴァルデスにとって一番最高の条件が揃っていた。

「聞いたかい？ 合同授業だって」

すると、同じクラスのレイナールが話しかけてきた。

「ああ。そんなイベントがあったんだな」

「他のクラスの奴が君の実力を目の当たりにしたら腰を抜かすだろ
うさ」

「逆にそうでなければ、魔法衛士隊の名が泣くというものだけだね」
「さすがに余裕だね」

ヴァルデスに言わせれば、今までの環境が環境なだけに生徒の実力の低さに驚くことのほうが多かった。それまでがかなり特殊な環境であったことは、ヴァルデスにとっては幸運と呼べるべきものはあったが。

「ところで、君は今度のスレイプニールの舞踏会には参加するんだ
ろ？」

「ああ。仮装舞踏会か、一応そのつもりだ」

「君、ダンスって出来るかい？」

「無理やり講師をつけられて覚えさせられた」

「いいなあ。僕ってそういうの一度も習ったことが無いんだよ」

「舞踏会の前に練習する機会があるんだろ？ だったら、そこで覚えればいいだろ」

ヴァルデスはアルブレヒト三世の名代で様々なパーティーに参加していたので、正直なところ、パーティーや舞踏会などを辟易しているところがあった。出来れば参加したくない、それがヴァルデスの本音だった。

「君は出来るからいいけどさ、僕のようにダンスを習ったことの無い生徒にとってはかなり厳しい問題なんだよ」

レイナルの言うことにも一理あった。貴族にとってダンスというのはいつの交渉手段を言っても過言ではないくらい重要視されているものだった。ダンスが出来なければ女性の相手を務めることも出来ず、その結果として自分の顔売り込むことが出来ずに弱小貴族と呼ばれる部類に落ちていくことさえありうるのだ。だから、この場合はヴァルデスの考えの方が間違っているのだ。

それにこの学院内においてのダンスは女の子を口説くための重要な手段なのだ。学生である彼らに、ダンスを通じて交渉するなどというような高度なことが行えるはずもなく、学院内の女の子を口説いて彼女にするために必要なものであるのだ。これも一種の交渉と言えなくも無いのだが、自分の目の前のことしか考えなくていい彼らにはまず恋愛の相手を見つけること、これが何よりも優先されることなのだ。もちろん、これは女子にも言える。

「今回は無理でも、次のフリッグの舞踏会までに上出来なんじゃないのか？ そんなに慌てる必要も無いだろ？」

「君はわかっていないな。いいかい？ 女の子の数は限られているんだよ。いい女の子は誰だっけ目をつける、如何に早くお知り合いになるかが重要なんだよ。そのためにダンスを早く覚えなさいといけないんだよ」

「……頑張ってくれ」

「ああ」

ヴァルデスは他の同年代の子たちより恋愛に関しては大きく遅れていた。同年代の子達が興味を持つことに興味を持たず、むしろ達観していると言ってもいいくらいであり、そのあたりは前の記憶が生きていることにも関係していた。

ヴァルデスは今まで色んな任務をこなしてきた。その中にはたくさんの人を殺すような任務もあったが、彼は歳若くしてそれをあっさりと実行し、人を殺すということを受け入れていた。外見の年齢より自身が熟成しているので、本来ならばレイナールのように女の子のことを考えていてもおかしくない年齢でも年齢どおりの行動をとらないのだ。

「さてと、そろそろ授業に行かないと遅れるぞ」

「ああ。わかった」

ヴァルデスは教室を出て、ヴェストリの広場に向かった。本日最初の授業から実技の授業なので、いきなり他クラスとの合同授業だったのだ。

「お、どうやら合同授業の相手はソーンのクラスの連中のようにだよ」

レイナールがそう言うと、ヴァルデスもそのクラスの面々の顔を確認した。確かに、そこにはソーンのクラスにいるギーシュやキユルケも杖を持ってその場にいた。

「ん？」

すると、その面々の中に見慣れているが、今まで学院で一度も見

たことのない後姿があった。

「まさか……」

ヴァルデスはレイナールから離れて、その人物のところに向かって歩いた。

「あの……」

すると、その人物はヴァルデスの声を聞いて振り返った。

「あ……」

「何でここに……？ シャ……」

「タバサ」

そこにはガリア外遊で何度も顔を合わせているシャルロットだった。どういいうわけか、シャルロットは偽名のタバサを未だに名乗っていた。

「お家は復興されたのでは……？」

一応、相手が偽名を名乗り続けているので周りに聞こえないように配慮しながら小声で聞いた。

「そう。でも、本名だと色々面倒」

「なるほど」

オルレアン家は正式なガリア王家の流れを汲んでいるので、他国の姫君が入学するということになれば教師だけでなく同級生も気を遣わないわけにはいかなくなるだろう。それを嫌っての偽名ということならば納得は出来た。

「でも、どうしてリュティスじゃなくてトリスティンに？」

「あそこはイザベラが通っている。一緒だと面倒」

「なるほど」

イザベラとシャルロットのかつての間柄を知っている者は決して少ないわけじゃない。王宮に出入りする貴族から他の貴族に噂は伝わっており、その二人が一緒の学校にいるとなればその精神的負担はかなりのものとなるだろう。

「ねえ」

「何でしょう？」

「入学式にいなかった」

「ああ……」

実は、ヴァルデスは入学式を欠席していた、もとい、さぼったのだ。理由は風邪ということにして入学式の間はずっと部屋で眠り続けていたのだ。だから、タバサがその姿を見ていないのは当然なのだ。

「ちょっと風邪を引きまして」

「大丈夫？」

「ええ。もうすっかりよくなりました」

「そう」

タバサはそう聞いてほっと一安心した。ヴァルデスはその姿を見て、少しばかり騙したことに罪悪感を覚えた。

「おや？ 君はその子と知り合いなのかい？」

すると、その様子を見てギーシュがやって来た。相変わらずフリルのついたシャツの胸元を開いており、いつもどおりの格好でそこにいた。

「ああ。ちょっとした知り合いなんだ」

「そう言えば、同じクラスなのに名前も知らないな。僕はギーシュ・ド・グラモン。君の名前を覚えてもらえないかな？ ミス」

「タバサ」

（しかし、偽名にするにももう少しいい名前があるような気がするが……）

ヴァルデスの考えていることはギーシュも感じ取ったようで、明らかに偽名だと感じてはいたがそれについて追求するということはしなかった。その勘の良さはギーシュにとって非常によいものだった。もっとも、勘の良さと間の悪さは決して反対語同士ではなく、

全く別物であることが彼にとっては不運なことなのだが。

「そ、そうかい。同じクラスになったのも何かの縁だし、これからよろしく」

「……わかった」

「じゃ、じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

ギーシュはそう言ってその場を去っていき、別の生徒と交流を持ち始めた。こういう手の早さは、ある意味ではなかなか見事といえる。人とすぐに打ち解けるといいうのは立派な交渉術である。ヴァルデスはそれを地でやっているギーシュを少し羨ましいと思った。ギーシュとは対照的に、ヴァルデスはそれらを全て計算で行っていた。もちろん、好感の持てる人間にはそれなりに本音を晒してはいたが、それでも皇帝の名代としても振舞うことが多くなった彼にそういう相手は少なかった。

「ところで、ミス・ヴァリエールのことを知ってるか？」

「……何故？」

「ちょっと気になってね」

「……やっぱり少女趣味？」

タバサはヴァルデスを睨むような目で見つめた。もともと、ヴァルデスにとつてはそんなタバサの視線も睨まれているうちには入らなかった。イザベラと彼女が喧嘩している時のほうがもっと怖いのを彼は知っていたからだ。

「そういうのじゃないよ。彼女の魔法に興味があつてね」

「爆発？」

「そう」

「どうして？ 貴方も噂は聞いているはず」

タバサはヴァルデスの意図がわからず首をかしげた。見る人が見ればかなり可愛らしいその姿も、ヴァルデスには何の効果も成さなかった。彼は究極の鈍感と言っても差支えがないほど、女性の仕草などには無関心だった。

「自分でも噂を聞いて色々と試してみたけど、噂のようなことにはならなかったからね。一度本物を見ておきたいんだ」

「……そう」

「さあさ！ 授業を始めますぞ！」

すると、ヴェストリの広場に授業の講師がやって来た。

合同授業（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

合同授業（後編）

「えー、皆さん。私が皆さんに火の魔法を教えるコルベールと申します。よろしくお願ひします」

すらりとした細いからだと高い身長、それでいて優しそうな表情。男としての好条件を揃えていそうだが、唯一の欠点として髪の毛がかなり薄くなっている。それが、全員がコルベールに抱いた印象だった。それに、『破壊』を司る火の系統を教える教師にしては優しすぎるような気もしていた。

「さて、誰かこの私に火の系統の特徴を開帳できる人はいるかな？」

「はい。火の系統の特徴は『破壊』と『情熱』ですわ」

その問いの答えたのはキュルケだった。

（そう言えば、ツエルプストー家は火の系統のメイジを多く輩出している家系だったな）

ヴァルデスはかなり前に誰かから教えてもらったことを思い出していた。

「ミス・ツエルプストー。火の系統の特徴が『破壊』というのは正解だ。もっとも『情熱』はどうだかわからないが」

「あら？ 情熱というのは炎のように一気に燃え上がるものですね。よろしければ、今度私がお教えいたしましょうか？ ミスタ」

キュルケが男子生徒をたくさん誘惑していることは既に学院内の噂になっていた。教師にまで挑発的な言葉を掛けているところを見ると、その噂が真実であるということは誰の目から見ても明らかだった。

「ははは。それはちょっと遠慮しておこうか」

「あら、残念ですわ」

さすがは年の功、コルベールはいともあっさりキュルケの誘惑をかわしていた。

「さて、ちょっと脱線しましたので話を戻しましょう。一般的な火の系統の特徴の解釈は『破壊』です。だから、火の系統を扱う人は少し喧嘩っ早い人が多いとか、激昂しやすい人が多いと言われていますが、決してそういうことではないので皆さん勘違いしないように。たまに、得意とする系統で差別をする人が大人でもいますが、それは大きな間違いであり、恥ずべき行為です。皆さんは決してそういう大人にならないように」

その話は聞いたことがある、ヴァルデスは誰から聞いたかも覚えていなかったがそれだけは覚えていた。もつとも、地位や身分が全てを決める貴族社会でそんなことで差別ができるわけがない。あくまで差別の理由付けとして使われるだけなのだ。

「では、今日は火の系統魔法で一番基本のドットスペルであるファイアー・ボールを練習しましょう。では、ミス・ツエルプストー。講釈ついでお手本を見せていただけますか？」

「わかりましたわ、ミスタ」

キュルケは一步前に出ると、呪文を唱えてバレーボール大くらのファイアー・ボールを作り上げた。

「ほう。なかなか見事です。ミス・ツエルプストー」

「ありがとうございます。ミスタ」

「さて、それでは一人ずつやってみましょうか」

コルベールは一人ずつ生徒を立たせて順番にファイアー・ボールの練習をさせていった。出来ない生徒もいるにはいたが、大抵の生徒が術を成功させていった。

「ほう！ ミスタ・コーラッドはなかなかのものですね」

ヴァルデスが作り出したファイアー・ボールは周りの生徒よりもかなり大きなものを作り出していた。両親に火の系統はいなかったが、それでも他系統の術の練習も怠ってはいなかった、その成果である。

「ありがとうございます」

「では、次はミス・ヴァリエール」

ルイズの名前が出た瞬間、明らかに周りの雰囲気が変わった。

(なるほど……噂は全生徒に伝わっているということか……)

すると、ヴァルデスの服の裾が引っ張られた。裾を握っている手

の先を見ると、それはタバサだった。

「どうした？」

「危険」

「危険？」

「そう」

「……なるほど」

そう言うと、ヴァルデスは周りに聞かれないよう小声で呪文を唱え始めた。タバサもそれに倣って呪文を唱え始めた。

「ミス・ヴァリエール。緊張せずに落ち着いてやりなさい」

「は、はい！」

（あんなに緊張してたら普通の奴でも成功しないな）

ヴァルデスはそう感想を抱いたが、とりあえずは成り行きに任せることにした。一応は対策も立てているので大丈夫だろうと思っていた。この時までには。

「ファイアー・ボール！」

その瞬間、激しい爆音と爆風、そして爆発によって生じた煙が辺りに立ち込めた。

「うわあ！」

「きゃあ！」

他の生徒たちが混乱する中、ヴァルデスとタバサは冷静そのものだった。ただ、その姿は無残なものだったが。

「まさか……これほどとは……な」

「迷惑」

二人とも、爆発の瞬間に風を生じさせて爆発による衝撃と炎を避けようとしていた。しかし、ルイズの爆発は二人が作った風の障壁をも打ち破るほどの威力を持っていたことは完全に計算外の出来事だった。

風の障壁のおかげで炎などは二人に襲いかかってこなかったが、爆風によって飛んできた砂や煙などは防げずに、顔中が煤だらけになり、着ている衣服もかなり薄汚れていた。

「なるほど。噂になるわけだ」

「……感想は？」

「素晴らしい、その一言だね」

「何故？」

「準備したのにこの結果だよ、俺たち」

ヴァルデスは思った以上の結果に満足していた。ここ近年、自分

の結果を裏切るようなことはほとんど起こっていないと言ってもいくらい何も起こらなかった。自分の予想を裏切る結果に、心から興奮を感じていた。

「でも、どうするの？」

「是非覚えたいね、あの魔法」

「わかったの？」

「いいや。最初から最後まで一語一句聞き逃さなかったけど、唱えている呪文は普通のファイアー・ボールなんだよね」

「なら、無意味」

「でも、他の連中よりも呪文の唱え方はスムーズだったし、あれでどうして失敗するかがわからないんだよね」

ヴァルデスはルイズの魔法の失敗の原因がさっぱりわからなかった。何処かが悪いからこそ、失敗として爆発という現象が起こるのだと仮定していただけに、この結果は意外というものの以外の何物でもなかった。

（呪文は完璧、なのに失敗する？ どうなっているんだ？）

結果は期待していたもの以上だったのに、爆発が起こる理由がわからなければ何の意味もない。結局、わかったことは自分が期待していたもの以上のものであるが、自分には使えない術ということだった。

「さあさあ、皆さんも落ち着いたところで授業を再開しますよ」

すると、生徒たちの同様が落ち着き始めた頃にコルベールが授業再開を宣言した。彼だけは周りと違って、顔や衣服も全く乱れておらず、爆発が起こる前と変わらぬ姿でそこにいた。

「どうして……?」

「爆発が起こる直前、何を唱えているかはわからなかったけど速唱で呪文を唱えていたからね、それが功を奏したってところだろ」

ヴァルデスは、爆発が起こる寸前のコルベールの様子もちゃんと見ていた。どんな時でも周りをしっかり見るその能力は、前の世界での暗殺者としての必須能力の一つであり、この世界でも常にそれを実行し続けていた。周囲の状況を確認することで、その状況に応じた確な判断が出来るというものである。これはヴァルデスの強さの根幹を成すものの一つとも言えた。

「準備がいい」

「まあ、教師だからね。恐らく、前の授業か何かでミス・ヴァリエールの爆発に巻き込まれて対策を練ったんだろう」

あの威力は想像では決して測れないものだから、ヴァルデスは心の中でその一言を付け加えたが、それを口にはしなかった。口にすると余計な波風が立ってしまいそうな予感がしたので彼は口をつぐんでいた。

「なるほど」

「まあ、一度経験しておけば対処できないわけじゃないけどね」

経験しておくことは悪いことではない、この言葉の意味を今ほど重く受け止めたこともない。もし、戦場でいきなりこの爆発魔法を経験していたら防ぎようがなかった。ヴァルデスは素直にそう思っていた。

その後の生徒たちはみんな無難な結果を出して授業は終わりを告げた。ヴァルデスもそれに合わせてヴェストリの広場を去ろうとしたときだった。

「月が真上に差し掛かる頃、ヴェストリの広場」

「え？」

すると、すれ違いざまにタバサはそう言った。ヴァルデスがそれについて訊ねようとしたときは、既にタバサは遠く離れた場所にいた。

真夜中、ヴェストリの広場では虫の音色だけが静かな音楽を奏でていた。既にかんりの生徒が就寝しており、宿舎塔の窓から零れてくる明かりの数も少なかった。

ヴァルデスも入浴を済ませてその広場でタバサを待っていた。

「お待ちせ」

すると、約束の主が姿を現した。タバサも湯上りでそのままこちへ来たのか、全身が薄っすらと朱に染まっており、髪の毛もまだ濡れていた。まだまだ体の発育が未熟なタバサでも、その姿には確かに女の色気を持っていた。

「いえいえ、私も今来たところです。シャルロット様」

「様、はいらない。シャルロットでいい。でも、みんなの前ではタバサ」

「かしこまりました」

「丁寧語も要らない。普通に喋って」

「しかし」

「いいから」

「……わかった」

「座って」

タバサに促される形で、二人はその場に座った。時折そよぐ風が火照った体には心地よかった。

「それにしても、シャルロットがここにいるとは思わなかったよ」

「私も……貴方がここにいるとは思っていなかった。ゲルマニアにいるものだと思ってた」

「あそこは自由すぎますから。それにシャルロットと同じく、俺がゲルマニアの学校だと周りが嫌でも気にするからな」

皇帝の名代、それは一時的であつても皇帝そのものになるという意味なのである。それはイザベラやシャルロットのような姫が持つ権限よりもはるかに大きな権限を持つことになる。つまり、名代を務めている間はヴァルデスがゲルマニアそのものなのだ。ヴァルデスの発言はゲルマニアの決定そのものと対外的には判断されることになる。

全て本人が意図しないところで進んでいたことだが、既に怪物と呼ばれていてもおかしくなくらいに、ヴァルデスはわずか数年の間にのしあがっていたのだ。本人は全く知らぬことだが、ゲルマニア貴族でヴァルデスに堂々と意見できるほどの者は存在しなかった。できるとすれば、血縁関係のある公爵家にあたる者なのだが、それはアルブレヒト三世がみんな幽閉してしまったので、実質的に出るとすればツエルプストー辺境伯ぐらいである。

「納得」

「まあ、そういうわけだ。ここなら俺が皇帝閣下の名代でも気にしないだろうからな。ゲルマニアは他国から見くびられているから」

「でも、一番進んでいるのはゲルマニア」

タバサの言葉どおり、ゲルマニアは今未曾有の大成長を遂げている最中なのだ。衛生管理という意識の芽生えと、汚物の肥料への再利用などが農業の発展にかなり寄与することとなり、食料自給率が上がっていたのだ。それに伴い、新しい酒などの生産も行われるようになり、それが他国でかなり人気を得ていた。

また、もともと盛んだった鉄鋼業も更に成長を遂げており、ゲルマニアは今、好景氣を迎えているのだ。

「まあ、誰も見向きしていないところを發展させるのがゲルマニアの特徴だから」

「その着眼点は素晴らしい。停滞氣味のガリアから見れば羨ましい」

ガリアは大国ではあったが、景氣のほうはそれほどいいというわけではない。むしろ、大国である分、人が多いので職にあぶれる人が多かった。おかげで、浮浪者の数もトリスティン、ロマリア、ガリア、ゲルマニア、アルピオンの中で最も数が多かった。ちなみに、次点にいるのはロマリアである。あの国はあの国で、宗教国家であるがために儲かるのは坊主ばかりなのだ。お布施や始祖信仰をお題目に様々なところから搾取しているので、一番国力のない国なのだが、教皇がいるという理由から他国になめられないのだ。それがなければ、とつくの昔に破綻していてもおかしくないのがロマリアの現状だった。

「いつかはゲルマニアも不況を迎えることになるだろうけど、最低限生きていけるくらいに生活水準や社会制度を作らないといけないな。それをしないと、国は戦争をしなくても滅びを迎えてしまう」

「そう……」

(やっぱり、ヴァルデスは将来、ゲルマニアの……)

シャルロットはその言葉にヴァルデスの今後の行く末を見た気になった。少なくとも、ゲルマニアが彼をどのように使っていくかは、

これまでの彼の立場を考えれば想像に難くなかった。

(このまま……負けたくない)

「どうかしたのか？ シャルロット」

「……ううん。なんでもない」

ヴァルデスは急に黙りこくったシャルロットが気になって声を掛けたが、本人が何ともないと云ったのでそれ以上の詮索はしなかった。お互いの間に沈黙が流れたが、シャルロットは何も言わないまま彼に頭を預けた。

「シャルロット？」

「……」

ヴァルデスが話しかけてもシャルロットは何も言わなかった。彼に頭を預けていたので、彼からはシャルロットの顔が薄っすらと紅くなっているのは見えなかった。

ヴァルデスはどうすることが正しいかなどはわからなかったが、ただいつもと同じようにシャルロットの頭を撫でた。元々小柄なシャルロットなのでたまたま撫でやすい位置に頭があつたからなのだが、その幼い風貌から何処か妹のようにも感じていたこともあつた。撫でられている間もお互いに何も喋らなかつたが、シャルロットは心地よさそうに頭を撫でられ続けていた。

何も語らず、ただ月明かりが二人を優しく照らし、虫の音色が二人を祝福する。

そんな穏やかな夜だった。

合同授業（後編）（後書き）

ようやくタバサ登場しました。次回はスレイプニールです。
これからもよろしくお願いいたします。

スレイプニールの舞踏会（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

スレイプニールの舞踏会

トリステイン魔法学院に入学してから一ヶ月、あの合同授業も終わり、ヴァルデスの周りは平和そのものだった。ルイズの爆発は相変わらずであり、トリステイン魔法学院ではもうお馴染みのものとなっていた。あの後も、何度か授業でルイズの爆発を見てきたが、結局その術を解明することは出来なかった。

あの夜以降、タバサとは時々ヴェストリの広場で会うことが多くなっていた。会話はそれほど多くなかったが、それでも学院内であり友達がいない者同士なので安らげる場でもあった。

だが、それによる弊害が一つ出てきていた。なるべく人と会わない夜を選んで、人が来ないような場所を選んでいたのだが、それでも二人の逢瀬を目撃した生徒が複数いた。その生徒たちから二人のことが噂となって学院中を駆け巡った。

ゲルマニアきつての大物貴族と素性の怪しい娘との人目を忍んだ逢瀬、さながら恋愛小説の一説をそのまま現実化したような話に、刺激を求めている生徒たちはすぐに飛びついた。噂だけがどんどん膨らんでいくが、誰一人としてその真実を確かめようとはしなかった。

理由は二つある。一つは真実が明らかになった時、実は大したことじゃないことなんじゃないかと周りは考えていたからである。大物貴族と素性の怪しい娘との恋など小説の世界でしかありえないことだと、彼らもわかっているのである。

そして、もう一つの理由は誰も本人たちにそれを聞く度胸がないからである。元々無口で友達も少ないシャルロットに好き好んで聞

こうとする人もいなかったし、かと言ってゲルマニアの大物であるヴァルデスにそれを尋ねて不敬扱いにされたら目も当てられないからである。それゆえ、噂が噂を呼んでどんどん膨らんでいったが、周りの生徒たちはそれでよしとしていたし、肝心の本人たちも何も言ってこないから噂にしているうちは安全だろうと境界も見切っていた。

しかし、何事にも例外はあるものなのだ。そしてここにも。

「しかし、君とミス・タバサはどういう関係なんだい？ ヴアルデス」

今日もフリルのついたシャツを着て胸元に杖として使っている薔薇を胸元に差した男、ギーシュ・ド・グラモンが食卓の席で噂の真相を確かめようとヴァルデスに訊ねていた。勘がいくせに、こういうことに関して気が回らない。それも彼の持ち味の一つだった。

「特に何もない。たまたま気があっただけだ」

ヴァルデスはヴァルデスで何も言わなかった。一応、タバサの正体がガリア王国のシャルロット姫なので余計なことを喋ってそれが露見することを恐れたのだ。ただ、それがかえって噂に拍車をかけていることは本人も気づいていなかったが。

「誰にも言わないさ。ただ、真夜中に女生徒と逢瀬を重ねているって相当噂になっているし、先生たちの間でも話題に上っているらしいよ」

「それはまずいな……」

噂で済んでいるうちはいいが、教師から呼び出しがかかるなんて事態になるとかなり面倒なことになる。下手をすればシャルロットの素性まで明らかにしなければならなくなる。そうになったら、ことは自分たちでなくトリステイン・ゲルマニア・ガリアの三国間で大問題という形になってしまふのだ。もつとも、タバサなんて明らかでない偽名で受け入れている時点で魔法学院としては承知しているのかもしれない、ともヴァルデスは考えていた。

「だから、ここですっかりと噂の真相を明らかにしておいたほうがいいだろ？」

「……真相と言われても、本当に何にもないんだが」

「……君もなかなか慎重だね。まあいい、この話はこれまでにしておこうか。それより君も今夜のスレイプニールの舞踏会、君も参加するんだろ？」

「ああ。一応な」

「君はどんな姿になると思う？」

スレイプニールの舞踏会では、マジック・アイテム 真実の鏡という魔法道具で理想の姿に変えて舞踏会に参加する。だから、それぞれがどんな姿になつたかはわからなくなるので、積極的に色んな相手と会話をする機会が生まれるというものであり、交流を深めるにはちょうどいいイベントなのだ。

「さあな？ 理想の姿なんて考えたこともないな。お前は？」

「僕はもう僕こそが理想の姿だよ。これ以上なんてありえないよ」

「そうか」

ギーシュらしい回答である。とはいえ、ヴァルデスは理想の姿などというものを思い描いたことがないと改めて思っていた。今まではただ目の前のことに必死になってやっていただけであつて、今の姿は相対的に作り上げられたものなのだ。現実主義者であるヴァルデスらしいといえはらしいのだが、理想一つないことに少々感傷的な気分にもなっていた。

「理想の姿か……ちょっと興味があるかな」

理想の姿に少しだけ興味を抱いたヴァルデスだった。

「では、一人ずつこのカーテンを通り、真実の鏡の前に立つのじゃ。そうすれば、真実の鏡は君たちの心の中にある理想の姿を読み取つてその姿へと変えてくれる。誰がどんな姿になるかはわからぬから、知りたければ積極的に話しかけることじゃ」

オールド・オスマン、この学院の学院長がずらつと並んだ生徒を前にしてそう言った。生徒たちはオスマンの言葉を聞いてどんな姿になるのだらう、と口々に話し合っていた。

一人ずつカーテンの中へと入っていき、舞踏会の会場へと進んで

いった。

「いよいよ、君の番だね」

「ああ」

「すぐに後を追いかけるから、出て行った先で待っていてくれ」

「わかった」

ヴァルデスはギーシュとそう約束するとカーテンの中に入った。

「これが……」

そこには全身を映すくらい大きな鏡があった。ヴァルデスはその前に立ってその姿を映した。鏡は、ヴァルデスの姿を確認すると薄っすらと光を放ち、やがてヴァルデス本人も光を放ってその姿を変えた。

「これは……俺か？」

そこに映っていたのは、かつてサヴァンと名乗っていた頃のヴァルデスだった。

（改めて見ると……人相が悪かったんだな、俺）

狙われたら最後、絶対に逃れることの出来ない最強の暗殺者。鏡など滅多に見たことがなかったので、昔の姿など記憶の中でさえ曖昧なものだったが、こんなに人相が悪ければ恐れられるのも無理はない。ヴァルデスはそう考えた。

「やれやれ……理想の姿が昔の俺か……」

まるで皮肉のようだ、ヴァルデスはこの姿を見てそう思った。あの魔術師によつてこの世界に飛ばされてから十六年、最早思い出すこともなかったあの魔術師のことを久しぶりに思い出していた。

（贖罪か……あいつは何をさせたかったんだ？）

疑問が次々と湧いて出たが、後が支えているのでヴァルデスは舞踏会会場に進んだ。

会場には様々な人物に変わった生徒たちがいた。有名な魔法使いに、魔法衛士隊の者、それに何人かの女子がアンリエッタ姫に化けていた。憧れの対象というのはそれほど大差があるわけではないようで、アンリエッタ姫の例のように同じ人物に変身している生徒も多くいた。

だが、そんな中でさえ、サヴァンの姿をしたヴァルデスは異彩を放っていた。その禍々しい雰囲気はどう考えても舞踏会の雰囲気とは合っておらず、ただただ浮いているだけだった。

「ひょつとして、君がヴァルデスかい？」

すると、カーテンの向こうからギーシュがその姿を現した。彼は本当に普段と全く変わらぬ姿で舞踏会の会場に来ていた。

「ああ」

「な、何か、随分と危険な香りのする男だけど、この姿の主はどう

「いう男なのかな？」

ギーシュの問いかけにヴァルデスは少し考えてからこう言った。

「そうだな。見かけたら即座に逃げて絶対に関わってはならない相手というところだな」

「そ、そんなに危険な男なのかい？」

「こいつは相手がメイジでもひるまない。ドットもスクウェアも使う術が違っただけという認識で平然と殺せる。それだけの実力の持ち主だ」

「メイジ殺しというわけか」

平民の中にも身体能力だけでメイジを圧倒する者がおり、それをメイジ殺しと呼んでいる。但し、彼らは正々堂々と真正面からメイジを圧倒するのに対し、サヴァンは目的のためには毒殺などの回りくどい手を平気で使う点からもつと性質が悪いといえる。

「まあそんなもんだ。ただ、殺し方の手段を選ばない奴だから毒殺とかも平気でやってのける男だ」

「メイジ殺しの実力を持ったプロの暗殺者か。確かに関わってはならない人物だね。でも、何でそんな男の姿に？」

ギーシュに疑問はヴァルデスにとつての疑問でもあった。何故、自分の理想がこの姿なのか、さつきからそれをずっと考えていた。

「さあな。ただ真正面から戦っても今の俺よりずっと強いつて言う

「ことだけは確かだ」

「真正面から戦って尚、君よりも強いのか。世の中にはとんでもない化け物もいたもんだね」

「確かに……な」

ヴァルデスは今の自分とかつての自分の実力を比較した時、いつもかつての自分に軍配が上がっているのを感じていた。あの頃よりもまだ体が若いということもあったが、実力はまだまだ自分の満足するところには到底及んでいなかった。記憶だけはサヴァンのものを持っていたが、その戦闘力までは引き継がれているわけではなく、全てゼロから鍛え上げて今の姿になったのだ。それでも過去の自分には到底及ばなかった。

（もしかしたら、強くなりたかって目標がこの姿なのかもしれないな）

ヴァルデスは少しそんなことを思ったが、すぐに考えを切り替えてギーシュとの会話に集中した。

「それより、本当に真実の鏡の前でも姿が変わらなかったな。お前」

「言っただろ？ 今の僕の姿こそ美しさの理想なんだ。これに勝るものは考えられないよ」

ギーシュは全く恥じる事無くそう言い切った。そこまで自分に自信が持てれば自意識過剰を通り越して、むしろ天晴れとさえ言える。

「まあなんにしろ、自分に自信があることはいいいことだ」

「さすがヴァルデス。君ならそう言ってくれると信じていたよ」

(やっぱりあまり周りには理解されていなかったのか?)

ヴァルデスはそう思ったが、それを聞くのはなんだか可哀想な気がしたのでその言葉を飲み込んだ。それから改めて周りを見回した。

「それにしても、俺が言えた口でもないが、色んな理想の姿があるんだな」

「ははは。まあ、誰しも夢はあるからね。その夢の化身がああ姿と
いうことだね」

「お前は夢はないのか?」

「まさか。もちろんあるさ。僕は魔法衛士隊に入って出世すること
な」

これは別にギーシュが特別というわけではない。どの国でも魔法
衛士隊はメイジの花形であり、それを夢見るのは当然のこととの認
識が多かった。

「僕は四男だからね。自分で身を立てないといけないのさ」

「なるほど」

「君こそ、何か夢はないのかい?」

「俺は……気がついたら夢も語れない場所にいるからな」

ヴァルデスはもう個人の感情を優先できる立場ではなくなっていた。個人の感情と引き換えに、今の彼には様々な特権が与えられている。それは一介の貴族をはるかに凌ぐものであり、それゆえに彼に課せられている責任も非常に大きいのだ。

「……今まで君の事を羨ましく思っていたけど、今の話を聞くと、少し可哀想に思えるよ」

「そう思ってくれる人間も周りにはあまりいなからな。感謝するよ」

これはヴァルデスの周りに如何に多くの敵がいることを表している一言だった。とんとん拍子に出世しているように見えても、その影では他の貴族による足の引つ張り合いもあつたのだ。特に、皇位継承権を持つ有力貴族たちがその筆頭に立っていた。

アルブレヒト三世は、そういう面でのヴァルデスへのフォローは一切しなかった。あくまで、自分が望んでいることを忠実にこなせるかどうか、その一点でヴァルデスを評価していたし、それこそが彼の皇帝としての地位を磐石なものにしてきたことだからだ。しかし、自分の名代を務める男にはそれだけでは足りないことは彼も承知しており、だからこそヴァルデスの全てを評価してそういう地位にすえたのだ。自分が認めた男だからこそ、その程度の政敵ぐらい自分で何とか出来ないようでは話にならない、と彼は考えているのだ。

「それにしても、アンリエッタ姫になっている女子が多いけど、女子はそんなにお姫様になりたいのか？」

「わかってないな、君は。女の子は誰しもお姫様なのさ」

「……含蓄のある言葉ありがとう」

「どういたしまして」

ヴァルデスがギーシュに唯一負けている点があるとすれば、女心の機微に敏感なところである。ギーシュは女の子の些細な変化も見逃さずに褒め称えることが出来るが、とことん鈍感なヴァルデスはそれに気づくことが出来ないのだ。もつとも、今の彼は下手に相手を褒め称えるようなことさえ出来ない立場ではある。むしろ、女の子のほうに彼を褒め称えなければならぬのが普通なのだ。

「さて、僕はそろそろ女の子たちと話をしに行くけど、君はどうするんだい？」

「こんな姿だからな、今回は飲食に集中して、次のフリッグの舞踏会でダンスの腕を披露することにする」

「そうかい？　じゃあ僕は行くよ」

「楽しんで来い」

ギーシュはそう言って人の輪の中に入っていった。ヴァルデスは壁際に寄りかかって、適当に並べられた料理を食べ、ワインを楽しんでいた。壁際にはダンスがまだ踊れないほかの生徒たちもおり、その中にもアンリエッタ姫の姿をした子もいたので何ともおかしな光景だった。

「おや？」

すると、その中にもつと奇妙な子を見つけることが出来た。見た目は蒼い髪の綺麗なご婦人の姿なのだが、ダンスも踊らず、一心不乱にテーブルに並んでいる料理にがつついていていた。おまけに、食べ方もあまり綺麗とは言えなかった。

(凄いな……あの食分量……)

単純にその子が食べている食事の量に驚いていたのだが、ここでヴァルデスは変身した姿のご婦人の髪の色が蒼だということに気がついた。

(もしかして……)

ヴァルデスは今後婦人の姿をしている生徒に心当たりがあり、珍しく自分から近づいていった。

「失礼。ミス」

声をかけられてその子は食べるのをやめたが、訝しげな目でヴァルデスを見ていた。

「……誰？」

「やっぱりタバサか」

姿こそ違えど、真実の鏡は声まででは変えられない。口調や声色で、そのご婦人の正体をヴァルデスはすぐに見破った。

「ヴァルデス？」

「ああ」

「その姿は？」

「……差し当たって、乗り越えなければならぬ相手といつところだな。タバサの姿は？」

「……お母様」

「なるほど」

一度も会ったことはなかったが、タバサの母親はこういう姿をしているとヴァルデスは知ることが出来た。

「踊らないのか？」

「必要ない。それに料理が美味しい」

タバサはヴァルデスに会ってからはさっきのように料理にがつくことはなくなり、行儀よく少しずつ口へと運んでいった。

「そうか」

「貴方は踊れるの？」

「ああ。仕事で覚えさせられた」

「そう」

「ほっほっほっ。舞踏会を楽しんでおるかの？」

すると、二人の前に年頃の綺麗な娘の姿をした者がやって来た。胸は大きく、腰は細く、お尻も大きく女としての外見の三大要素を満たしていたが、その口調があまりにも年若い娘には似合わないものだった。

「まさか……」

「……オールド・オスマン？」

「ほっほっほっ」

二人の言葉を聞いて娘の姿をしたオールド・オスマンは笑みを浮かべた。

「どうして娘の姿？」

「数百年も男をやっておるとな、たまには違ったものになってみたというものなのじゃよ。ミス・タバサ」

百年どころか数百年は生きているといわれているオールド・オスマンがそう言くと、不思議に納得してしまっていた。重ねてきた年月の重みというものが、無言の信頼というものをオスマンに与えていた。

「どうしてわかったんです？ このご婦人がミス・タバサだって」

「まあ、見抜く方法はいくつもあるということじゃよ。ミスタ・コーラッド」

「なるほど」

「それに剣呑な雰囲気を放つ男と容姿端麗なご婦人、その取り合わせがまるで小説のようじゃったから興味を持っただけじゃよ。もっとも、果たして噂どおりの関係かどうかをわしは知るつもりはないがの」

学院内の噂はそのほとんどがオールド・オスマンの耳に入る。それだけ学院内のことに気を払っているということもあるが、噂の相手がゲルマニア貴族のヴァルデスとガリア王族のシャルロットということでオスマンは一応の警戒をしていた。オスマンは学院において、唯一タバサの正体を知っている人物だからだ。

（食えない人だな。目は口とは反対のことを語っている）

ヴァルデスはオスマンの言葉が嘘であると見抜いていた。確かに、学院として特に何かをするというわけではないだろうが、噂の真偽だけは確かめようと二人をしつかりと見定めていた。二人の前に現れたことは決して偶然というわけではなかったのだ。

「さて、それでは舞踏会を楽しむんじゃよ。では」

オスマンはそう言って人の輪の中に姿を消していった。もっとも、あれだけ目立つ容姿をしているので男子生徒の注目が集まっているところを見れば彼を見つけることは容易だったが。

「やれやれ、忙しい人だな」

「そうね」

ヴァルデスとタバサはその姿を見送りながらそう喋った。

「ねえ」

「ん？」

すると、タバサは食器をテーブルに置いてヴァルデスに向けて手を差し向けた。

「踊って……いただけますか？ ミスタ」

頬を赤く染めてタバサはダンスのお誘いを口にした。剣呑な雰囲気を持つヴァルデスはゆっくりとその手をとった。

「喜んで。ミス」

二人は手を取り合ったまま、ダンスの輪の中に加わった。ヴァルデスのダンスの腕も見事だったが、タバサもエスコートされる形で綺麗に踊っていた。

「誰だ？ あの二人」

「綺麗」

ダンスの輪の中から一組、また一組とその輪から離れていく。誰もがこの場の主役が誰であるかを理解し、彼らの邪魔をしないように観客へと回っていった。そのおかげで、ダンスミュージックに身を任せて踊っているのはヴァルデスたちだけとなった。

不思議とこの時は周りに誰もいないことが気にならなかった。二

人とも互いに目の前の相手だけに集中し、ただその時間を楽しみ続けた。

「やれやれ、今日の主役は君に譲ることにするよ。ヴァルデス」

彼の友人はトレードマークでもある薔薇を弄りながら、中央で踊る友人に向けてそう言った。

「ほっほっほっ。仲が良いことは結構なことじゃ」

言葉遣いと見た目が合っていない娘の姿をした老人は笑顔でそう言った。

そして、ダンスが終わった時、会場は割れんばかりの拍手が巻き起こり、今日の主役が誰であったかを周りに強烈に印象付けた。

偽りの姿で踊った一組の男女、それが真実の姿で踊る日が訪れるのか。

真実の鏡と呼ばれるそれは何も答えず、ただ静かに佇んでいた。

スレイプニールの舞踏会（後書き）

毎度ありがとうございます。

今まで何故か午前十時などという時間に更新していましたが、明日からは午前零時くらいを目安に更新します。仕事の関係などもありますので。

たくさんのご支援、毎日本当にありがとうございます。

『微熱』と『雪風』の友情（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

『微熱』と『雪風』の友情（前編）

貴族の外交手段として舞踏会やパーティーなどがよく用いられる。ヴァルデスも皇帝の名代としてそういうものに参加しているからそれは身をもつて知っている。

トリステイン魔法学院でもこの間のスレイプニールの舞踏会のよ
うなパーティーが度々催されるのだ。それはこの学院が魔法を教え
ているだけでなく、貴族としての作法を教えるという側面を持つて
いるからなのだ。

そして、スレイプニールの舞踏会から僅か一カ月後、トリステイ
ン魔法学院史上でもっとも大きな騒ぎとなったあのフリッグの舞踏
会が開かれたのだ。

事の起こりは何気ない日常的一幕、フリッグの舞踏会数日前の友
人たちとの談笑から始まった。

「で、また男を振ったわけか？ キュルケ」

「ええ。だって、飽きたんですもの」

ヴァルデス、ギーシュ、そしてキュルケの三人でいつものように
放課後の談笑を楽しんでいた。話題は様々あったが、この時はキュ
ルケの男関係が話題に上がっていた。もっとも、ヴァルデスはさほ
ど興味はなかったが、ギーシュは自分が同じ轍を踏まないように真
剣に聞いていた。

「じゃあ聞くが、どういう男なら飽きないんだ？」

「『微熱』は情熱。情熱の炎は燃え上がるのも早ければ鎮まるのも早いのだよ」

「おいおい。それじゃあ誰一人として君と長く付き合える男がいないじゃないのかい？」

さすがのギーシュも最初は真剣に聞いていたが、身も蓋も無いキユルケの発言にもうお手上げといった感じになっていた。

「ふふふ。私と長く付き合いたければ、私を飽きさせない様に情熱の炎を燃やすようなことを見せ付けるしかないわね」

「俺は一抜けた」

「僕も」

「あら？ 残念ね」

キユルケもそうは言っているが、この二人とはそういう関係にはならない代わりに、本当の意味で長い付き合いが出来る友達にはなれるのではないかと感じていた。もっとも、それはこの男二人にとっても同じだったが。

「でも、私の前から今も消えていない男たちって貴方たちくらいよ？」

「それは光栄だ」

「君が悪女なのか、それとも君に言い寄っていた男たちが駄目だった」

たのか、僕には理解に苦しむよ」

「でも、貴方たちにその気がなければいいじゃない。時々会って一緒にお茶を楽しむ、それ以上の関係にならなくていいんじゃないかな？」

「そつだな」

魔法学院に入学してから数ヶ月、ヴァルデスは今までの人生で一番ゆつたりとした時間を過ごしていた。ゲルマニアにいた頃は仕事に忙殺され、内部に敵も多かったので誰かと談笑するなどということとは考えもしなかったことなのだ。

「だが、そのせいで君も敵が多くなつたんじゃないのか？」

ヴァルデスは少し遠くからこちらを恨めしそうに睨んでいる女子の一团に気づいていた。その視線は明らかにキュルケに向けられていることも気づいていたし、それはキュルケ本人も気づいていた。

「そんなこと気にしていたらやつてられないわよ。それに自分の魅力で引き止められない女の妬みほど醜いものはないわ」

「君の男関係についてとやかく言うつもりはないけど、男子の僕にまで噂が届いてくるほどだよ。少し自重した方がいいんじゃないかい？」

「私は一番の相手には絶対に手は出さないわ。本当の一番に手を出したらただですまないことはわかっているもの」

「一番でなくても、自分のものに手を出されたら誰だって怒ると思

うけど?」

「本当に大切なものなら恨み言を言う前に、必死になって何とかしようと思つものよ」

「ま、恋愛経験では君やギーシュには齒が立たない俺にはそういうものかと言えないな」

ヴァルデスはもう首を突っ込むことはやめた。下手に噂を聞くとこつちにまで火種が回ってきそうな予感がしたからだ。

だが、現実というのは良いことは滅多に起こらないくせに、悪いことだけはよく起こるものである。

「ちよつとよろしいかしら?」

すると、女子の団体が三人の前によつてきた。その目は怒りに満ちており、キュルケに向けられていた。

「なあ、この女の子たちつてまさか……」

「ああ……噂の女の子たちだよ」

なるべく怒りに油を注がないように小さな声でギーシュに訊ねた。ヴァルデスもこう言うときの女子が持っている威圧感にはさすがに抗えないものを感じていた。

「何かしら? あなたたち」

「ミス・ツエルプストー。人の恋人に手を出すのはやめていただけ

ないかしら？ レディとして、人の恋人に手を出すのはあまりにふしだらな行為だと思いませんか？」

「あら？ 少なくとも、私から彼らに言い寄るようなことはしていませんよ？ 彼らから私に言い寄ってきたのだから」

「ぼ、僕たちは邪魔のようだね。行こうか、ヴァルデス」

「そ、そうだな」

この雰囲気にしたたまれなくなってギーシュが逃げ出そうと一計を案じたが、それは無残にも阻止されることとなった。

「あら、いいじゃない。もうすぐ終わるからこのまま一緒にいなさいよ」

（余計なことを！！）

言葉も、表情も変えなかったが二人は同じことを思っていた。二人は恨めしそうな目つきでキュルケを見たが、キュルケは何処吹く風といった感じで涼しい顔で受け流していた。

「えっと、何処まで話したかしら？」

「人の恋人に手を出さないでって言ったの！」

「本当に大事な恋人ならば、こんなところで油を売る前に少しでも自分の魅力に磨きをかけて引き止める努力をするべきではないのかしら？ 本当に一番の相手ならばこんなところで油を売っている暇はないはずよ」

「……っ！ 行きますわよ！」

結局、女の子たちはキュルケの口には勝てず、苦々しい表情を浮かべたままその場を去っていった。ヴァルデスもギーシュも、その姿にはただただ感心するしかできなかった。

「大したものだな」

「あんなの、大したことないわよ」

「ただあんまりいい終わらせ方ではなかったな」

ギーシュは素直にキュルケに対して感心していたが、ヴァルデスは少し違った。

「どうして？」

「徹底的に叩き潰すのならともかく、中途半端な終わらせ方だと禍根を残す」

「まあまあ、幾らなんでもこんな場所でやりあうわけにはいかないからこの終わらせ方でよかったんだよ。うん」

「だったらいいんだけど……」

「まあ、あんなの子たちが何か仕掛けたところで大したことなんてないわよ」

キュルケとギーシュは楽観的な意見を持っていたが、ヴァルデス

はどうにも嫌な予感しかしなかった。手負いの獣ほど何をやらすかわからない、これまでの経験でヴァルデスが培った勘が警鐘を鳴らしていた。

「決闘だぞ！」

すると、誰かが大声でそれを告げた。周りの生徒たちは入学して以来、一番大きな刺激を与えられたので我先にとその会場に向かって走り出した。

「決闘だつて？ 生徒同士の決闘は禁止されているはずだが……」

「そんなことどうでもいいじゃない。早く行きましようよ」

「そうだよ。早くしないといい場所がなくなるよ」

「やれやれ……」

キュルケとギーシュに連れて行かれる形でヴァルデスもしぶしぶ彼らについてその決闘が行われている場所に向かった。

「ああ、もうあんなにいっぱい野次馬がいるわ」

野次馬たちは押すな押すなと騒いでいたが、キュルケがなるべく男子生徒の多いところを選んで進むと、彼らは進んでその道を空けて最前列まで苦労することなくたどり着けた。

「さすがだな」

「あら、ありがとう」

その輪の中心には二人の生徒が対峙していた。

「タバサ？」

片方の男は見たこともなかったが、彼と対峙しているのはタバサだった。

「そう言えば、君はミス・タバサと仲が良かったね」

「あら、だったら助けにはいつてあげなくちゃ。あの子の騎士として」

「その必要はないと思うぞ」

ヴァルデスは相手のことを知らなかったが、タバサの実力は既に知っているので心配する必要はないと感じていた。

「そんなに強いのか？ あの子」

「ああ。かなりのものだ」

「へえ。じゃあ、見物に徹しましょうか」

「僕としては、どんな理由かは知らないけど、女の子がピンチに陥っているのを見逃すのは主義に反するけど……」

「決闘の形式をとっているんだ。無闇に手を出したら礼儀知らずと言われるぞ。心配は要らないだろうから、とにかく見ておけ」

ヴァルデスが何の心配もせずに見ているので、ギーシュもとりあえずは観客に回ることにした。そんなやり取りをしている間も、当事者の二人のやり取りは進んでいた。

「僕の名はヴィリエ・ド・ロレーヌ！ 風の使い手ロレーヌ家の息子だ！ 家名を名乗りたまえ！」

「……タバサ」

「名乗る家名も持ち合わせていないか！ 情けないな！」

（俺が相手だったら何回殺せているかな？）

ヴァルデスは二人のやり取りを見ながらそんなことを考えていた。ヴィリエが朗々と語っているが、ヴァルデスならそんな隙だらけの時を狙わないわけがない。少なくとも、この間だけでもヴァルデスなら数回は彼を殺せている。タバサもあまり真剣に受け取っているわけではなく、うんざりといった表情で仕方なくこの決闘に参加しているのがわかった。

「では、私から始めさせてもらおう！ ウィンド・ブレイク！」

大きく杖を上げ一気に振り下ろす、何とも隙だらけな格好ではあったが魔法は確かに発動した。風はその目に見えないため、非常に対処するのに厄介な系統とされている。術が発動しているのにタバサが一向に動こうとしないことにギーシュが心配し始めた。

「お、おい、ミス・タバサはひよっとして恐怖のあまり硬直してしまったのではないかい？ あのままだと危険だぞ」

「心配するな。よく見ている」

ヴァルデスが全く心配している様子がないので、ギーシュもその言葉に従うことにした。

すると、タバサは杖を前に掲げて一言呪文を唱えた。風の流れを変えるだけで、目に見えぬ力は自分に向かって襲い掛かってくる。タバサはヴェリエが放った術を彼に向けて受け流したのだ。

まさか、自分の術をこうも簡単に受け流され、更に自分に向かってくるようにコントロールされるとは思いもしなかったので、ヴェリエは自分の放った術を食らって大きく弾き跳んだ。

「やるじゃない」

キュルケはその様子を見て微笑を浮かべていた。ただ、それは獲物を見つけた獣のような獰猛な微笑であった。

「へえ、凄いな。ミス・タバサは」

ギーシュはただただその技術に感心するだけだった。もっとも、この場にいる大半の生徒はギーシュと同じ反応をしていた。

「まあ、彼には悪いが実力が違いすぎる。少なくとも、今の彼が相手にしていい相手ではないということだ」

ヴァルデスはこの結果を至極当然のものとして受け止めていた。タバサはヴェリエが弾き飛ばされた後、杖を持ったまま彼に向かって歩み寄った。

「わ、わかった！ 僕の負けだ！ け、決闘なんてお遊びみたいな

ものじゃないか！ 命のやり取りまでする必要はない！」

実力の差、それが痛いほどわかったヴェリエはもう形振り構っていられなかった。とにかく必死になって生き延びようと、タバサに向かつて命乞いをして許しを得ようとしていた。命乞いしながら後ずさるヴェリエの前に来て、タバサは彼の傍らに落ちているものを拾い上げた。

「落し物」

「え？」

タバサはヴェリエに彼が落とした杖を彼に渡した。その瞬間、この決闘ごっこは終わりを告げていた。

「茶番は終わったな」

ヴァルデスが言った一言をきっかけに、野次馬たちはどんどんその輪から離れていった。

「確かに貴方の言うとおり、心配する必要はなかったわね」

「そうだね。でも、あれぐらいの実力者ならもつと学院内でも有名になってもいいと思うんだけどね」

「実力を悟らせないのも実力のうちだ。それだけ彼女が強いと考えればいい」

「なるほどね」

「ただ、これもいい終わり方だとは言えないな」

「どうしてだい？ さっきのキュルケの口喧嘩じゃないけど、こっちはかなり徹底してやっつけたと思うけど？」

「男同士ならあれで充分だけど、相手は女だからな」

「あら、それって女に対する差別かしら？」

キュルケが少し面白くなさそうにそう言ったが、ヴァルデスは言葉が続けた。

「男はプライドの高い生き物だからな。守護されるべき女にやられたとあってはプライドが許さない。だから、あの場はもつと徹底的に叩きのめしておいたほうがよかった。決闘なんだから腕や足の一本をへし折ったところで問題はなかったはずだ」

「随分過激なことを言うね、君は」

「けど、女が男に守護されるべき存在って言うのは男の身勝手だと思うわ」

「勿論、キュルケの言うとおりだ。そんなのは男の身勝手な妄想に過ぎない。現に、俺の後を引き継いだ牙部隊の隊長は女だ」

ヴァルデスはこれまでも性別による差別は一切行わなかった。そのかわり、性別による優遇なども一切行わず、常に平等の視点で接するようになってきた。それは極度の鈍感が成しえたことであり、女に対する配慮なんて心構えがあったらこうは出来なかったかもしれない。その代わり、平等に厳しく接するからついていけない者も多

かった。

「あの獰猛な部隊の隊長が女性なのかい？　ちょっと信じられないな」

「もしかして男みたいなのかなのかしら？」

二人はその新隊長に興味を示したが、外見にあまり興味なかったヴァルデスはどう言っていていいかわからなかった。

「……とりあえず口説きに行く男は多かったな。誰一人として相手にされていなかったが」

「魅力的な女性なのかね？」

「さあな？　女性に対する他人の価値観はいまいちよくわからないからな」

「二つ名は何て言うの？」

「確か『風雷』だったな」

「いい二つ名だね」

二つ名を聞かれたのはこれが初めてだった。ゲルマニアではそんなことを聞かれることはなかったので、少々意外だった。

「ヴァルデス」

決闘を終えたタバサがヴァルデスの姿を見つけてやってきた。

「タバサ。大変だったな」

「そうでもない」

すると、タバサはキュルケの姿を見つけて少し不機嫌な表情を見せた。

「誰？」

(あら？ この子本当に……)

キュルケはタバサの表情を見て、少し悪戯心が湧いてきた。ヴァルデスの腕を取って自慢の胸を押し付けるようにしてタバサに向かい合った。

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。よろしくね」

「……そう」

タバサはそれだけ言うときさささと寮塔へと歩いて行ってしまった。

「キュルケ……」

ギーシュがジト目でキュルケを見ると、彼女は少しだけ舌先を出した。

「ちょっと意地悪しすぎちゃったかしら？」

「何かあったのか？」

しかし、鈍感であるヴァルデスは全然気づいていなかった。ギーシュとキュルケは互いに見つめあい、盛大にため息をついた。

「ヴァルデス、今夜僕の部屋に来るといい。君には少し女心を学ぶ必要があるそうだ」

「？ よくわからんが、せっかくだからご教授願おう」

「確かに、少しは学んだほうがいいわね。無知は時に大きな罪になるわ」

一人蚊帳の外に置かれたヴァルデスは二人の言動に首を傾げていた。

学院内で起きたちよつとした事件、これが後の大騒動の幕開けになることを三人はまだ知らなかった。

『微熱』と『雪風』の友情（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

『微熱』と『雪風』の友情（後編）

フリッグの舞踏会、それはトリスティン魔法学院の年中行事の一つである。前回のスレイプニールの舞踏会でダンスを踊れなかった生徒たちも、この頃になるともう一端に踊れるようになり、ここで彼氏彼女を作ろうと一念発起するのだ。

「今回はびしつと決まっているじゃないか」

ギーシュはタキシードに身を包んだヴァルデスを見てそう言った。前回のあのサヴァンの姿よりも今回の方が舞踏会の場にはふさわしい格好をしていた。

「まあな。お前も似合ってるぞ」

「ありがとう」

前回は誰が誰だかわからないので、あまり積極的に近寄ろうとしない生徒たちだったが、今回は顔がはっきりとしているので目当ての男子女子にアプローチしようとして虎視眈々と狙っていた。

「さて、それじゃあ僕は行くよ。前回は君に主役の座を譲ったけど、今回は僕が主役だよ」

「ああ。楽しんで来い」

ギーシュはそう言って一人の女子生徒に近づいていった。

（確か、モンモランシーとか言ってたな）

金髪の縦ロールの髪形をした女の子、最近ギーシュがずっとアタククをかけているのが彼女だった。ギーシュはあれでいて美男なので、女子生徒から結構声をかけられているのだが、そういう子をあまり相手にせずに自分から口説きに行くという妙なところがあった。

すると、突然会場がざわめいた。周りの視線の先を辿るとそこにはルイズがいた。さすがに見た目は非の打ち所のない美少女なので、綺麗に着飾れば周りの男たちの目を引き寄せるだけの力があつた。現に、ルイズにアタククを始める男子生徒の姿もちらほらと見受けられた。

「さすがヴァリエール家のご令嬢といったところか……」

ヴァルデスがそう呟くと、更に大きなざわめき、主に男からのざわめきの声が聞こえてきた。

「こつちもさすがといったところか……」

ルイズが姫にたとえられるなら、こつちはさながら女王だった。胸の辺りが開いたドレスを身に纏い、褐色の肌を惜しげもなく晒して、女性としてのフェロモンで男を誘い寄せていた。

「何よ、あのはしたない姿」

「これだからツエルプストーの女は……」

男が十数人近くキュルケに誘い寄せられているその姿を見て、女子生徒たちは口々に怨差の声を上げていた。

「余計に恨みを買っているな」

ヴァルデスはため息をついた。

とは言え、それも一時的なもので会場は段々と落ち着きを取り戻し始め、舞踏会は本来の姿へと戻っていった。ヴァルデスも何人かの女子に誘われてダンスの相手をしていたが、あまりにもキュルケの周りが目立っているのですさほど目立たなかった。ギーシュも舞踏会の主役にはなれていなかったが、それでもモンモランシーとは仲良く出来ているようだったので、結果としては上々と言った感じだった。

（騒ぎは最初だけか……ん？）

ヴァルデスは一息ついてテーブルの食事に手を伸ばしていたが、視界の端のほうでこそそこそと動いている一団が見えた。

（あれは……確かヴィリエとかいった奴か……）

女子の顔はよくわからなかったが、女子の輪の中にいた男の顔には覚えがあった。数日前に決闘騒ぎを起こしたヴィリエ・ド・ロレ―ヌが女子たちと何やら不審な相談をしていた。

（杖まで持ち出して、何をやらかすつもりだ？）

舞踏会なのにダンスにも参加せず、ずっとそこそと動き続けるヴィリエたちを見て、ヴァルデスもとりあえず様子を窺うことにした。ヴァルデスは彼らに気づかれぬように距離をとりながらその様子を監視した。

「よし。ここなら気づかれなだらう」

ヴィリエの呟く声はしつかりとヴァルデスの耳に届いていた。そして、彼の視線の先にいる人物の姿も確認していた。

(キュルケ？ どうして、奴が……？)

そう考えたときだった。ヴィリエが周りの状況を確認してこっそりと呪文を唱え始めたのは。

(まずい)

ヴァルデスもすぐに呪文を唱えた。さすがに舞踏会の会場に剣を持ち込むことは出来なかつたが、こういうときの備えとしてシャツの内側に隠しておけるナイフも杖として契約していた。魔法の鍛錬をしていて気づいたことだが、杖は別に手に持っていないなくても魔法は使えるということがわかつた。ただ、手で持っているほうがイメージしやすいからという理由でそうなっているようだが、ある程度慣れた熟練者なら別に何処で持っても問題はなかつた。

ヴィリエが杖を振った瞬間、キュルケの着ていたドレスはいきなり切り刻まれ、ぼろになった布切れが床に落ちていった。男たちが「おお！」と声を上げて近づこうとしたが、それは突然飛んできたカーテンによって防がれた。カーテンはキュルケの体に巻きついて、その見事な肢体を男たちの好奇の目から遮った。

「やれやれ」

キュルケも誰がこんな配慮をしてくれたのかはわからなかつたよ。うだが、ヴァルデスも下手に騒ぎに関わるつもりはなかつた。いく

らカーテンで身は守られたと言っても、彼女のプライドは著しく傷つけられたはずであり、怒ったときのキュルケは結構怖いことを知っていたからだ。それにさっきまでは華美なドレスに身を包んでいたのが、みすぼらしいカーテンになったことでどうしても見栄えが悪くなっていた。

「誰かは知らないけど、この計らいに感謝するわ」

キュルケはそう言って堂々と舞踏会の会場を後にした。ヴァルデスはキュルケのことも気になったが、とりあえずヴィリエのことを監視することにした。一度の悪戯ならばまだ許せるが、これ以上同じことを繰り返すようならさすがに無視するわけにはいかないからだ。

しかし、ヴァルデスの心配をよそにヴィリエはすぐに会場を後にした。結局何がしたかったのかがヴァルデスにはよくわからなかったが、とりあえずの危機が去ったと思つて一安心した。

だが、それは甘い見通しだったことをこの日の夜に思い知ることになった。フリッグの舞踏会がキュルケのアクシデント以外は何も起こらず無事にその幕を下ろして多くの生徒が眠りについた深夜、彼の安眠はドアをノックする音で破られた。

「ん……」

彼は目覚めが悪いわけではなかったが、舞踏会で疲れていたことは確かなので安眠を妨害されたことに少し腹を立てていた。

「誰だ？」

ドアも開けずにノックする主に訊ねた。

「私よ、私」

「キュルケ？」

ヴァルデスはドアの鍵を開けてその姿を確認した。そこにいたのはヴァルデスの予想通りの人物だったのだが、その表情が明らかに普段のものと違い緊張感に満ち溢れていたので、彼も頭を切り替えて真剣に向かい合った。

「どうした？ こんな時間に」

「ごめんなさい。でも、貴方にしか頼める人がいなかったから」

「頼みごとでもあるのか？」

「ええ。貴方に…決闘の立会人を頼みたいの」

「……それは随分と物騒な話だな」

「ごめんなさい。でも、相手が相手だけに貴方しか頼めないの」

キュルケがそこまで言うほどの相手か、とヴァルデスは思っていないが、それでもあの合同授業の際に彼女が術を行使しているのを何度か目撃しており、魔法の腕前はトライアングルくらいだと当たりをつけていた。それに、身のこなしも決して悪くはないとも感じていたし、この学院の生徒でキュルケを相手にいい戦い出来る生徒など両方の手の指を足して少し足りないくらいだと評価を下していた。

「わかった。着替えるから少し待っていてくれ」

ヴァルデスは一度ドアを閉めてパジャマから制服に着替えた。腰には杖である剣を差して、出来る限り万全の体制を整えた。

「待たせた。では行こうか」

「ええ」

キュルケは普段よりも口数が少なく、決闘の会場に向かう時は一言も発しなかった。その背中からはこれから始まる決闘への覚悟が後ろにいるヴァルデスまでひしひしと伝わってきた。

二人はヴェストリの広場からフライを使って魔法学院を抜け出し、すぐ近くの森に着陸した。

「タバサ……」

決闘の会場となる場所で待っていたのはタバサだった。彼女もまた、これから始まる決闘に向けて緊張感を高めていた。

「相手がこの子だから、貴方に立会人をお願いしたかったのよ。貴方なら公平な立場で審判を下してくれるし、万が一の場合でも対処できるから」

「なるほど」

ヴァルデスは改めて二人を見たが、最早その決意を変えることが不可能なところまで二人は自分自身を追い込んでいるのは火を見る

より明らかであり、ヴァルデスは望みどおり決闘させることで静めるやり方を選んだ。

「二人とも覚悟が決まっているようだから俺は何も言わない。但し、終わったらしっかりと事情を説明してもらってからな」

「ありがとう」

「（こくっ）」

キュルケは言葉で、タバサは頷くことで肯定の意を表した。

「では、準備が出来たら双方向かい合って」

ヴァルデスがそう言うと、二人はヴァルデスが中心になるように左右に等間隔で距離をとって向かい合った。この場に漂う雰囲気はあのヴェリエとタバサの時のようなぬるい雰囲気ではない。肌を刺すほど空気が冷たく感じられ、自分の体温がどんどん下がっていく、それでいて五感だけはどんどん鋭くなっていく、そんな感覚を二人は共有していた。そして、それは立会人のヴァルデスにも伝わっていた。

「双方、この決闘に悔いを残さぬこと。勝者も敗者もこの決闘の勝敗に対して如何なる異議申し立てはしないこと。いいな？」

ヴァルデスの厳かな声にキュルケもタバサも頷くことで肯定の意を表した。

「ならば双方、杖を掲げ、名乗りを上げよ。その名乗りを持って双方の決闘承諾の意思とする。尚、立会人の私情だが、立会人は双方

の知人であり、双方は失いたくない友でもある。よって、立会人は勝敗が確定したと判断した時点で決闘を終了し、勝者の手を取って名乗りを上げるものとする。無論、立会人は本決闘が神聖なものであることを理解し、決してどちらかに肩入れすることがないことをこの場で始祖に誓う」

ヴァルデスはそう言って杖である剣を抜いて天に向かって掲げた。決闘に赴く二人もそのヴァルデスの姿をじっと見つめた。その姿は決して形だけではなく、決闘の本質を理解しているからこそその内面からの美しさをもっていた。

やがて、ヴァルデスは剣を鞘に収めて二人に最後の言葉を発した。

「では、決闘の意思在らば名乗りを上げよ」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー！ 二つ名は『微熱』参る！」

「『雪風』のタバサ。受けて立つ」

互いの名乗りを受けて決闘は始まった。古き伝統に則った形式で進められた決闘、これは何人たりともその妨害を許されない神聖な儀式でもあるのだ。この場で当事者二人と立会人はそれをよくわかつていたが、この場にいた部外者たちはこの話の流れに焦りを感じていた。

「ちょ、ちょっとどうするのよ？ 決闘なんて始まつちやったわよ」

「だ、大丈夫さ。この間のように命のやり取りなんてことには……」

「でも、ヴァルデス様が立会人をやっているのよ。ヴァルデス様ほ
どの方が立会人を務めるってことは、これは正式な決闘ってことじ
やないの!？」

決闘会場から少し離れた藪の中で、その決闘をこっそりと観戦し
ている者たちがいた。いや、最初はただの様子見だったのだが、そ
れが本当の決闘になってしまったので観客になってしまったのだ。

「ど、どうするのよ？ 今更、憂さ晴らしでやったなんて言えない
わよ」

「そんなこと口にしたら僕たちは斬首だよ」

「ね、ねえ、今からでも止めに行ったほうがいいんじゃない？」

「決闘はもう始まっているんだよ。もう誰にも止められないよ」

観客は一人の男と複数の女子だった。唯一の男の観客はヴィリエ・
ド・ロレーヌ。そして、女子の観客はキュルケに彼氏を取られた女
の子たちだった。キュルケに彼氏を取られた女子たちと、タバサに
大恥をかかされたヴィリエが同じ恨みを持つもの同士で結託して二
人に仕返しを図ったことがそもそもの始まりだった。

女子たちで計画を練り、ヴィリエがそれを実行するといつかたち
で仕返しは進んでいった。まずは、ヴィリエが舞踏会場でキュルケ
のドレスを風の呪文でびりびりに破いて大恥をかかせ、その犯人が
タバサであるとヴィリエが告げ口する。そうすれば、二人が喧嘩に
なってそれを教師に告げ口すれば二人とも罰を受けることになって
仕返し終了。それが彼らの描いていた計画だった。

しかし、よりもよって最後のほうでその計画は大きく狂ってし

まった。喧嘩程度で済むはずのことが、二人とも本気の決闘になってしまったのだ。おまけにヴァルデスという予想外の大物が出てきたことよって、最早決闘を止めることが出来なくなってしまった。それどころか、真相が明らかになれば今度は自分たちがただでは済まなくなると彼らは理解していた。

「と、とにかくここを離れよう。彼らに見つかる前に」

「なるほど。それが決闘の理由か」

ヴィリエたちは背後から聞こえたその声を聞き、背筋が一気に凍りついてしまったかのように動けなくなった。後ろを振り返ろうと頭では考えているのだが、危険を察知する本能がそれを許さず、ただ決闘が行われている場所を見つめていた。

「憂さ晴らしか……それを否定するつもりはないが、また厄介なやり方を取ったものだな」

背後からかけられる一言一言が、ヴィリエたちの恐怖心を煽り、全身から冷や汗を噴き出させていた。汗がシャツやブラウスと肌を張り付かせ、普段なら気持ち悪いという思いを感じていたが、そんなことさえ気にならないほど今の彼らは恐怖に震えていた。

「お前たちがやらかしたことの末路だ。最後まで見ていけ。一歩でも動いたら……」

言葉が途切れるのと同時に、彼らの眼前に鞘から抜かれた剣が地面に突き刺さった。

「殺す」

ヴイリエたちは振り返ることなく、ただ頷くばかりだった。ただの憂さ晴らしではなく、自分たちにまで死の恐怖が迫ってくるなどと誰が予想できたであろうか。すぐそこにある死に、人はただ震えて過ぐすより他にはないのだ。

一方、決闘会場では名乗りを上げた二人が戦いを始めていた。

（遍在はうまくやったようだな……後はこっちだけか）

ヴァルデスは遍在が首謀者たちを押さえたことを確認すると、後は二人のやり取りで間違いがないように見届けるだけだった。

「ファイアー・ボール！」

キュルケは最初から全力で術を放った。ドットスペルのファイアー・ボールも使い手によって威力は大きく違う。キュルケが放ったファイアー・ボールは辺りを焼き尽くすのに十分な威力を持っていた。

（序盤で勝負をつける算段か、でも……）

このやり取りでヴァルデスはタバサが勝利することを確信した。キュルケは術の威力だけなら確かに素晴らしいが、戦い方に関しては素人の域を出ないものだからだ。

それに対し、タバサは常に動き回り、相手の隙を探る、あるいは隙を作りながら攻撃する術を知っていた。現に、このファイアー・ボールもあっさりとかわしていた。

「エア・ハンマー」

「きゃっ！」

タバサは相手に的を絞らせないように動きながら、エア・ハンマーでキュルケを吹っ飛ばした。吹っ飛ばされたキュルケは木に思いっきり体を打ちつけてその場に蹲った。

「ウィンディ・アイシクル」

（勝負あった！）

ヴァルデスはキュルケの前に立ちただかり、風を起こして飛んでくる氷の刃の軌道を逸らした。体中を突き刺されることを覚悟していたキュルケは、固く閉じていた瞳をゆっくりと開いた。

「ヴァルデス……」

「キュルケ、文句はないな？」

「……ええ。私の負けね」

ヴァルデスは剣を鞘に収め、タバサのところに歩み寄りその手を掴んで天に掲げた。

「勝者、タバサ！」

「……勝ち」

「そつね。私の負けね」

キュルケが爽やかな笑みを浮かべて、タバサに向けて手を差し出した。タバサはその手を迷うことなく握った。

「さてと、決闘はこれで終わりだが……」

「そうね。私にあの舞踏会で恥をかかせてくれたのがタバサだって言っていた奴がいたけど、タバサの術を受けてわかったわ。タバサがあんな真似をしたらあの程度で済むはずがないものね。それにあんな卑怯な手を取る人間じゃないってことも」

ヴァルデスはとりあえず円満な形で決闘が終了したことに満足していた。

「それにしても、あのヴィリエって奴。絶対に許さないわ、私を嵌めようとした落とし前をつけさせてあげるわ」

「その必要はないさ」

キュルケとタバサはヴァルデスの言葉に首を傾げていた。

「何かしたの？」

「まあ、ちよつと脅かしておいただけさ。少なくとも、もうあんな真似は出来ないだろうさ」

ヴァルデスがそう言うので、キュルケもタバサも心の中でヴィリエたちにご愁傷様、と一言を捧げていた。

「じゃあ、俺は帰るよ。眠いから」

「ありがとうね」

「ありがとう」

そう言っつてヴァルデスはフライで自分の部屋に戻っていった。二人はヴァルデスの姿が見えなくなるまでそれを見送っていた。

「じゃあ、私たちも帰りましょうか」

「ええ」

二人もフライで部屋へ戻ろうとした時、キュルケがタバサに言った。

「あ、そうそう。私は彼とはただの友達だから心配しなくていいわ。頑張りなさいよ、応援するわ」

「……ありがとう」

キュルケの応援宣言に、タバサは頬を赤くしてそう応えた。

「ふふふ。本当に可愛いんだから」

タバサの恥らう様子が可愛くてしょうがないキュルケは、タバサを力強く抱きしめた。タバサは抱きしめられることに何の抵抗もしないで、キュルケのされるがままにされていた。

「これからよろしくね。タバサ」

「うん」

二人は再度固く握手を交わして、一緒に部屋へと戻っていった。

こうして、『微熱』と『雪風』、二人の友情が結ばれた。

ちなみに、憂さ晴らしを仕掛けたヴィリエたちだが

「いいか？ 今度同じ真似をしたら容赦はしない。この意味がわかるな？」

「は、はい……」

「今後は自分の行動に責任を持つことだな」

そう言ってヴァルデスの遍在は姿を消した。後に残されたヴィリエたちはようやく死の恐怖が去ったことに安堵し、ただ涙を流して生きていることを喜ぶことしか出来なかった。

この一件以降、ヴィリエや女の子たちはタバサやキュルケたちへの復讐はきっぱりと諦めて、しばらくはおとなしくしていたそう。

めでたしめでたし。

『微熱』と『雪風』の友情（後編）（後書き）

今回から午前零時更新にしました。
変な時間の更新になりますがよろしくお願いいたします。

ゲルマニアの魔女（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ゲルマニアの魔女（前編）

「お嬢様の病気の治療を？」

その日、彼らは突然魔法学院に訪れ、生徒たちの間に衝撃が走った。

魔法学院を訪れたのはトリステインで一二を争う大貴族、ヴァリエール公爵一家だった。ヴァリエール公爵に、カリーヌ夫人、次女のカトレア嬢、そして同じ魔法学院に通っているルイズがヴァルデスの前に座っていた。

「うむ。貴殿はゲルマニアでも有数の薬師でもあるという話を聞いた。貴殿ならばカトレアの病気を治す薬があるのではないかと思いついて魔法学院に足を運んだわけだ」

「なるほど。しかし、トリステインにも優秀な薬師や水のメイジがいるのではないのですか？」

「残念だが、トリステインで評判のメイジや薬師にはあらかた当たってみた。それでもカトレアの病は治らなかった」

「……お話はわかりました。ただ、それを私に話してどうすると？」

ヴァルデスはヴァリエール公爵を前にしても堂々とした態度で話に臨んでいた。同じゲルマニア貴族ならば低頭するぐらいのことはあるが、私用で来た別の国の貴族に対して低頭する必要はなく、弱みを見せるような真似を晒すわけにはいかなかった。

「貴殿がゲルマニアの貴族だということは重々承知している。だが、それを承知の上で貴殿にカトレアの治療をお願いしたいのだ」

「……話の内容は承知しました。ですが、私も貴族でなければそのお話をすぐに承諾できませんでしたしょうが、生憎と私はゲルマニア貴族。同盟関係も結んでいない国の重鎮の頼みを私に一存で聞くわけには参りません。我らが皇帝閣下に許可をいただいた後、改めてお越しく下さい」

「ちよつと！ お父様がわざわざ貴方に頼みに来たのにそんな態度はないんじゃない！」

突き放すようなヴァルデスの態度に、ルイズは激昂した。トリステインにおいてヴァリエール公爵家に逆らえる力の持ち主は王家以外にはいない、それが常識であったためにルイズたちも幼い頃から蝶よ花よと育てられていた。それが蛮人の国の人間にあしらわれているのを見たから、その怒りは相当のものだった。

「ルイズ、やめなさい」

「でも、お父様！」

「彼はゲルマニアの貴族だ。彼の言い分はもつともなことなのだよ」

「でも、いくらゲルマニアの貴族だって公爵家当主に対してあまりにも無礼ではありませんか！」

「ルイズ、少し落ち着きなさい」

ヴァリエール公爵の言葉では鎮まらなかったが、カリィヌ夫人の

言葉でルイズも鎮まった。

「ヴァルデス殿、突然訪問して不躰なお願いだということは百も承知しております。ですが、これも子を思う親心として承諾していただけませんでしょうか？」

「カリー又婦人。お気持ちはお察しいたしますが、私はアルブレヒト三世閣下よりヴァリエール公爵家とツエルプストー辺境伯家との間で争いが起こった場合の仲裁役を命じられている立場です。私情でヴァリエール公爵家に協力すると、ツエルプストー辺境伯家との間にしこりを残してしまうことになります。仲裁役としては、常に両家において対等の立場をとっていなければなりません。誠に心苦しいのですが、ここはお引取り願います」

一歩も譲歩しようとしないうアルデスとヴァリエール一家との間に沈黙が流れた。重苦しい雰囲気の流れる中、話し合いが行われている部屋の扉が開いた。

「ほっほっほっ。少々邪魔するよ」

「オールド・オスマン」

部屋に入ってきたオスマンを見て、ヴァリエール公爵は席を立ち上がって彼を迎えた。

「お久しぶりでございます。オールド・オスマン」

「相変わらず壮健のようでは何よりじゃ、ヴァリエール公爵」

オスマンは笑顔でヴァリエール公爵を見ていた。すると、オスマ

ンはヴァルデスの隣に座った。

「趣味が悪いと言われてもしょうがないが、学院を預かる者として話は聞かせてもらったぞ」

「いやはや、お恥ずかしい……」

「娘を思う親心、それは美しいものじゃ。恥ずる必要など何処にもない」

オスマンは普段では決して見せない真剣な表情で彼らに向き合っていた。その姿には確かな威厳というものを感ずることが出来た。

「さて、ミスタ・コーラッドよ。君の置かれている立場も決しておからんではないが、どうじゃろうか？ カトレア嬢の治療を行ってみては」

「しかし……」

「無論、ただというわけではない。どんな報酬を考えるかはお前さん次第じゃが、きちんと報酬を得て行うのならば問題はなからう？ 無償で行うという行為がツエルプストー辺境伯とのしこりになるのじゃから」

「ですが……」

すると、部屋のドアがいきなり激しく叩かれた。

「何じゃ？ 騒々しいぞ」

「失礼いたします！」

ドアを開けたのはコルベールだった。その表情には明らかに焦りの色が見受けられたし、よく聞くと外もかなり騒がしくなっていた。

「オールド・オスマン！ 一大事でございます！」

「大事などない。全ては小事じゃ。えっと、ミスタ……」

「コルベールです！ そんなことより、報告いたします！ 只今、門にゲルマニア皇室からのご使者が入場の許可を求めています！」

「何じゃと？」

この報告にはオスマンだけでなく、ヴァリエール公爵も驚きを隠せなかった。トリステインの魔法学院にそんな一行がやってくることなど通常ではありえないからだ。

「……用件は何と言っておるのじゃ？」

「はっ。ゲルマニア貴族コーラッド边境伯家嫡男ヴァルデス・ウエストリ・コーラッド様に面会を求めています」

「やはりお主に用があるということか」

「お騒がせいたしております」

ヴァルデスはオスマンに向けて頭を下げた。

「ミスタ・コルベール。無礼がないようにして、丁重にご一行をお

「迎えなさい」

「かしこまりました」

コルベールはすぐにオスマンの言葉に従ってゲルマニア一行を迎え入れた。一同も窓からその様子を窺っていた。

「ただの使者にしては随分と物々しい護衛じゃな」

学院内に入ってきたのは皇室の紋章入りの馬車とそれを取り囲む護衛が百人ぐらいいた。とてもではないが、ただ使者を送るだけとは思えない物々しさだった。

「ただの使者が皇室の紋章入りの馬車を使っている……？」

ヴァルデスは入ってきた馬車に注目していた。少なくとも、あの馬車を使えるのは皇帝閣下かそれに準ずるほどの大物でない限り使うことは許されない。ヴァルデスも自分以外であの馬車を使っている人物を見たことはなかった。

「ヴァルデス君や、あれは牙部隊ではないのかの？」

「ええ。間違いなく牙部隊です」

オスマンは馬車を取り囲んでいる護衛の一団を見てそう言った。ヴァルデスもかつて自分が指揮をしていた部隊を見間違えるはずはなく、はっきりとそう答えていた。

（何で牙部隊が……？）

そう考えていた時だった。馬車から降りてきたその使者の姿を見てヴァルデスは驚きを隠せなかった。

「あの方は……！」

「ヴァルデス殿、あの女性はどのような方なのですか？」

ヴァリエール公爵が後ろからヴァルデスに訊ねた。ヴァリエール公爵もまた、その女性を見て只者ではないと察していた。

「あの方は……帝政ゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世閣下のご生母であらせられるイリーズ様です」

「何だと!？」

皇帝のご生母、それはヴァルデスやヴァリエール公爵を超える大物だった。国家元首である皇帝の生母ともなれば、その地位は公爵よりもはるかに大きなものとなる。

イリーズはコルベールの案内を受けて、一同のいる部屋にやってきていた。

「これはこれはオスマン殿、突然来訪いたしましたしてご迷惑をおかけいたしますわ」

「久しぶりじゃな、クソババア。まだ生きておったか」

いきなり無礼な言葉を発するオスマンに周りは驚きを隠せなかった。

「オールド・オスマン。イリーズ様とはお知り合いなのですか？」

「腐れ縁という奴じゃ。見た目こそ若いが、こいつも数百歳は生きておるクソババアじゃ」

「相変わらずの減らず口ね。クソジジイ」

イリーズは椅子に座ってオスマンに向けてそう言った。

「まあいいわ。それよりこんな場所でのヴァリエール公爵にお会いできるとは思わなかったわ。それも一家勢揃いだなんて。これはどういった趣向なのかしら？ ヴアルデス殿」

「はっ。実は……」

ヴァルデスは膝をついてイリーズにさっきまでのやり取りを説明した。全てを聞いたイリーズは改めてヴァリエール公爵一家を椅子に座らせた。

「お話はヴァルデスより聞きました。貴方たち夫婦の子を思う親心は承知しました」

「では……」

「そのお話、私がお受けいたしました。私も水のメイジ、世間には出回っていない秘薬や秘術に関してはそれなりに詳しいと自負を持っております。どうでしょう？ 私ではご不満かしら？」

「い、いえ、滅相もございません」

さすがのヴァリエール公爵も、相手がイリーズでは強気に出るよ
うなことはなかった。ルイズたちもおとなしく事の成り行きを見守
っていた。

「但し、もちろんただというわけにはいきませんが……」

「ははっ。では、何をお望みで……?」

「そのお話の前に、まずは私がここに来た目的の方を先に済ませて
しまいましょう。ヴァルデス殿」

「ははっ」

「まずは貴方に紹介したい人がいます。お入りなさい」

「はい」

すると、ドアを開けて一人の女性が入ってきた。イリーズと同じ
灰色の瞳をしており、長い緑色の髪をしている綺麗な女性だった。
体つきも非常に凹凸がはっきりとしており、思わずルイズは自分の
体と見比べてため息をついていた。

「イリーズ様、こちらの方は?」

「この子は私の孫娘にあたる子でエルティナというの」

「初めまして、ヴァルデス様。エルティナと申します。不束者です
が、これから長い間を貴方と共に生きてまいりますのでよろしくお
願いいたします」

「はい？」

貴族の令嬢らしい非常に礼儀正しい挨拶だったが、ヴァルデスは
その挨拶を聞いて思わず変な声を上げてしまった。その隣にいるイ
リーズはにやにやと嫌な笑みを浮かべながらそれを見ていた。

「イリーズ様、これはいつたい……」

「ふふふ。ごめんなさいね」

イリーズはまるで悪戯が成功した子供みたいに笑いながらヴァル
デスに言った。

「簡単に言っちゃえば、この子は貴方のお嫁さんということなのよ」

「嫁!？」

「側室だけだね。これは決定事項だから拒むことは出来ないわよ」

ヴァルデスは何がなんだかわからなくなっていたが、一つだけは
つきりしていることがあるので訊ねてみた。

「一つよろしいでしょうか？」

「何かしら？」

「お孫さんということは……まさか、この方のお父上って」

「そうよ。アルブレヒト三世」

ヴァルデスは全身から血の気が引いていくような思いを感じた。つまり、ヴァルデスはこの婚姻で正式にアルブレヒト三世の義理の息子というかたちになってしまふのだ。それはヴァリエール公爵たちも理解しており、全員が顔を青ざめていた。

「大丈夫よ。この子はあの性悪な父親とは似ても似つかないくらい優しい子だから」

「いや、そういっただけでなくて……」

「それとも、恋愛してから結婚したいというならお膳立てしてあげるけど？」

「……もういいです」

「そう」

「ところで、側室と言っていましたか？正室ではないのですか？」

貴族の結婚には様々ある。基本的には一夫一妻の形を取るのだが、金のある貴族や力のある貴族は複数の奥さんを娶る場合がある。その中で第一婦人を正室と呼び、それ以降の婦人を側室と呼ぶのだ。

「ええ。正室には別の子が候補に挙がっているから。でも、その前にどうしても会わせておきたかったのよ」

「まさか、このためだけにこんな大名行列を？」

「これはついでよ。本題はこっち」

イリーズはそう言うと、皇室の封蠟が成された書状を取り出した。
「拝見します」

ヴァルデスはそれを丁重に受け取ると、その中身を読んだ。読み
終えた後はまた丁重に懐の中にその書状をしまった。

「イリーズ、エルティナ。今の私は帝政ゲルマニア皇帝アルブレヒ
ト三世の名代である」

「「ははっ」」

書状を読み終えてからのヴァルデスはそれまでとは全く雰囲気
違う男に変わった。それはこれまで皇帝の名代を務めてきて培われ
てきた威厳というものだった。目の前の男が皇帝閣下の名代とい
うことでヴァリエール一家も膝をついた。

「イリーズ。ヴァリエール公爵の娘、カトレアの治療はお前に一任
する。お前が責任を持ってやれ」

「かしこまりました」

「では、私はトリスタニアへ向かう」

「お待ちくださいませ、ヴァルデス様。皇帝閣下よりお召し物を預
かっております」

すると、傍に控えていた女官が衣装の入った箱を差し出した。

「わかった。着替え次第、トリスタニアに向かう。後のことは任せ

たぞ」

「かしこまりました」

そう言ってヴァルデスは女官を伴って部屋を出て行った。

「ふふふ。あの子も随分と立派になったわね」

「お前さんから見れば全員子供じやろうが」

イリーズの言葉にオスマンが茶々を入れた。

「本当に口の悪さは相変わらずね、クソジジイ」

「お前さんほどではないわい。クソババア。大体、貴様はアルブレヒト三世の他にも方々に息子や孫がいるじやろうが」

「さすがに私も自分の子供たちを幽閉させたくはないからね、皇位継承権とは無関係な子供たちには平和に過ごしてもらっているわ」

「ふん」

「さて、ヴァリエール公爵。お話の続きに参りましょうか」

現帝政ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世の生母イリーズ、その妖しい微笑を浮かべながら再び交渉を開始した。

ゲルマニアの魔女（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ゲルマニアの魔女（後編）

「さて、肝心な代金の話だけど」

「は、はい」

数百年を生きた魔女、それは穏やかなオスマンとは全く対照的な危険な魅力に満ちていた。外見は男を引き寄せて止まないほどの美女なのだが、その内面には怪しいまでの危険性を孕んでいた。

「貴方の娘さんでどうかしら？」

「は………？」

笑顔のまま、イリーズは突拍子もないことを言いかけ、ヴァリエール公爵も思わず立場の違いを忘れて変な声を上げていた。

「つまり、完治した暁にはカトレア嬢をいただきたいと言っているの」

「し、しかし、カトレアをどうするおつもりなのですか？」

「ヴァルデス殿の側室として迎えたいと思っているわ」

「なっ………!!」

思わず硬直するヴァリエール一家に対し、オスマンは大きくため息をついた。

「相変わらず意地が悪いな、お前さんは」

「褒め言葉として受け取っておくわ。そんなことよりもどうかしら？ ヴァリエール公爵殿」

「お言葉を返すようで申し訳ありませんが、娘以外の報酬というわけにはまいりませんか？ イリーズ様」

「あら？ 不服なのかしら」

イリーズは決してその表情を崩さなかった。それがかえってヴァリエール公爵に不気味な感じを与えており、既に場の雰囲気はイリーズに支配されていた。

「イリーズ様、私も人の親です。いくら娘を助けていただくとは言え、娘の人生を引き換えにすることはできません」

ヴァリエール公爵がすっかりイリーズにしてやられているのを見ると、カリリーヌが代わりにイリーズに話し始めた。

「あら？ では、カリリーヌ婦人はヴァルデス殿の許に嫁ぐことはカトレア嬢を不幸にするとお考えかしら？」

「そうは申しません。ですが、娘の意思も確認せずに一方的な話では納得いたしかねると申し上げております」

イリーズとカリリーヌ、この二人の間には見えない火花が飛び散っていた。周りはそれを理解しているからこそ、何も言わずに二人の成り行きを見守っていた。

「ならば、もつと現実的なお話をしましょう」

「現実的な話？」

「仮にカトレア嬢が完治したといたしましょう。ですが、その後はどうするおつもりかしら？」

「……」

カリー又は何も言えなかった。正直、カトレアの病気が治らなければ何も出来ないので、考えられなかったというのが置かれている現状なのだ。

「カトレア嬢が完治したとして、カトレア嬢は今年二十三歳。世間的には充分嫁き遅れと言われる年齢ね。若い男には敬遠され、何処かのおじいちゃんの後家さんに入るといのが関の山かしらね」

「ですが……」

「でも、ヴァルデス殿のところに嫁入りすれば状況は大きく変わるわよ。皇帝が自分の娘を嫁にやることの意味、ヴァリエール公爵夫妻ならおわかりいただけのわよね？」

「それは……ヴァルデス殿がゲルマニアの次期皇帝に内定していると考えてよろしいのですか？」

ヴァリエール公爵が搾り出すように言った言葉を聞いて、イリーズは静かに頷いた。

「ですが、伯爵家の嫡男であるヴァルデス殿では周りが反対するの

では？」

「まず訂正しておきますけど、ヴァルデス殿も恐らく知らされていないことだと思っけど、コーラッド家はい先日、辺境伯に格上げがされているわ」

「何故でしょうか？」

「ヴァルデス殿が牙部隊隊長として最後に行ったレコン・キスタなる反乱軍を鎮静した折、コーラッド領の周辺の貴族たちもそれに参加していたため、領主が不在となってしまうたの。皇帝閣下はそれらの領地もコーラッド家に下賜して、その際に辺境伯に任命されたのよ」

「さようでしたか。それは失礼いたしました」

貴族にとって家の格を間違われることは相当の屈辱にあたるのだ。相手が格下の家ならばさほど問題にはならないが、相手が格上の場合はかなりの大問題になる。今回はヴァリエール公爵が他国の貴族であり、尚且つ公爵の爵位を持つ貴族だから注意だけに留まっていなのだ。

「で、話は戻すけど、コーラッド家にはヴァルデス殿の他にも八歳になる弟がいるの。魔法や武術の才能はヴァルデス殿には遠く及ばないみたいだけど、なかなか同年代のこの中では優秀らしいわ。つまり、コーラッド家の跡取りは弟に任せることが出来るの」

「なるほど……」

「だから、ヴァルデス殿を次の皇帝にすることは充分可能なことな

の。それにヴァルデス殿に反対すると思われる貴族たちはレコン・キスタ肅清の折にそのほとんどが亡くなっているから問題はないってわけ」

ヴァリエール夫妻は何とか断る糸口を見つけようと必死になっていたが、それを次々とイリーズによって潰されていっていた。

「考えてごらんさい。もし、ヴァルデス殿が本当にゲルマニアの皇位を継承して皇帝になれば、側室として娘を出しているヴァリエール公爵家はトリステインでも一二を争う貴族どころか、一気に抜きん出ることが可能よ。それにゲルマニアは今産業の発展による好景氣を迎えているし、この景氣はここ数十年は続く見通しが立っているわ。トリステインに今それほどの産業があるかしら？」

「……残念ながらありませんな」

「軍備にさえ事欠くような有様ですものね。でも、皇帝の義理の父ということになれば、ゲルマニアから金を引き出すことだって容易になるし、諸外国からの信用だって増すわ。どんな風評が立とうと、国力のある国に人も金も集まるものね」

イリーズが言っているのは社会の成り立ちの根幹とも言えるものだった。国がきちんとした政策さえ取っていれば、人は集まるし、そこから新しい産業が生まれて国を豊かにする。その魅力がない国は滅んでいくしかないのだ。

「確かに仰るとおりですな。では、逆にお尋ねいたします。イリーズ様が仰るほどの方なら、なぜカトレアを欲するのですか？」

「カトレア嬢は私の望みにぴったりと一致する女性だからよ」

「望み？」

「ええ。確かにカトレア嬢は年齢の面では結婚おいてはかなり不利だと思っわ。でも、カトレア嬢はそこさえ除けば完璧とわいいほどの女性だと私は考えているわ。包容力もあるし、体のほうも非常に女性らしいから、病気さえ治れば元気な子供を期待できそうだし」

イリーズの言うとおり、カトレアはヴァリエール一家の中で一番凹凸のある体をしていた。服の上からでもわかる豊かな胸とふくよかなお尻を見れば大抵の人間が同じ感想を抱くだろう。それにその優しい表情は家庭に入ればとてもいい妻であり母になるだろうということも容易に予想できた。

「ヴァルデス殿にはそういう女性が必要なのよ。うちのエルティナではまだカトレア嬢ほどの包容力は培われていないし、彼のこれらを考えるとそういう女性は多い方がいいのよ。彼が歩くのは茨の道だもの」

現時点で次期皇帝候補最有力とは言え、これからどうなるかは誰にもわからない。今は平気でも、時間が経てば彼に対して反旗を翻す者もいるかもしれない。そういう時、心に安らぎを与えてくれる女性はとても重要になってくるのだ。心の支えがあるのとないのでは、これから先の戦いに大きな影響を与えるくらい重要な問題になる。

「あの……私から質問させていただいてもよろしいでしょうか？」

すると、今まで黙っていたカトレアがイリーズに訊ねた。

「もちろんよ。貴女は当事者なのだから是非質問してちょうだい」

「その、イリーズ様から見てヴァルデス様とはどういう方なのでしようか？」

「そうね……優しい子よ、少なくともうちの息子より。ただ敵だと判断した人間には一切の容赦をせず、徹底的に叩き潰せる冷酷さも持ち合わせているけど」

イリーズの言葉を聞くと、ヴァルデスの印象が悪いように聞こえるが皇帝となる人間の評価としてはむしろ褒め言葉である。上に立つ身として下の者に対する思いやりの心は大事だが、敵に対しても思いやりを持って優柔不断になるようでは話にならない。時には、どんな手段を用いても敵を排除する冷酷さを持たなければ上に立つ資格はないのだ。その点ではヴァルデスもアルブレヒト三世も共通していると言える。

「それに良くも悪くも鈍感ね」

「鈍感……ですか？」

「主に異性関係についてね。軍事やら政治のことに関しては嫌になるくらい敏感よ」

「そうですか」

「まあ、あの子の場合、自分が異性からどう見られているかとかは全然興味がないの。また、異性の変化に対しても全然興味を示さないわ」

「それは悪い意味で、ということですね。では、良い意味で鈍感というのはどういうことでしょうか？」

「あの子は恋愛というものに全く興味が無いの。だから、こっちら何かをしない限りは他の女に目が行くことがないってことよ。つまり、余計な有象無象を作らずに貴女を見てくれるってことよ」

「でも……」

すると、今度はルイズが会話に加わってきた。

「それって愛がないということではないのでしょうか？ 愛のない夫婦なんて寂しすぎると思います……」

自分が一番慕っている姉の将来についての話なので、ルイズもカトレアが愛のない夫婦生活を強いられるのではないかと不安になっていた。イリーズはそんなルイズを見て、また微笑を浮かべた。

「確か……ルイズ殿でしたね？」

「はい」

「貴女はまだ若いわ。若い貴女にはまだ理解できないかもしれないけど、恋愛と夫婦の愛は全く別物よ。貴女ももう少し大きくなればわかるようになるわ」

「はあ……」

「それに最初に言ったけどあの子は基本的に優しい子よ。たとえば政

略結婚で結ばれた縁だとしても、あの子はそれを受け入れるだけの度量は持っているし、愛を持って貴女に接してくれると思うわ。どう？ これ以上ない縁談だと思うけど？」

「……そうですね。先程、イリーズ様とヴァルデス様のやり取りを拝見させていただきましたが、ヴァルデス様は公私混同されるようなお方ではなく、自分に対しても非常に厳しい姿勢で臨まれているように見えました。ご自分の立場を理解し、周りの期待に応えようと必死に努力なされている姿には敬服いたしました」

カトレアはイリーズに向けて、自分が見たヴァルデスを語っている。イリーズはカトレアの評価を聞いて満足そうに頷いていた。

「ですが、やはりあの一瞬だけで全てを理解することは出来ませんでした。私も自分の夫となる人とゆっくりとお話してみたいのですが……」

「そう言っていただけでいいわ。よろしい、私があなたの治療をしっかりと責任を持って行うわ。この『全治』のイリーズ、全身全霊を賭してあなたを治してみせるわ」

イリーズはそう言ってカトレアの手を握った。正直、ルイズはその様子をあまり快く思っていないかった。国力があるとは言え、蛮人の国に一番慕っている姉を嫁入りさせるといのは納得できなかったが、カトレアの病が治るのはルイズにとっても喜ばしいことである。その両方の感情の板ばさみにあって、ルイズは何が一番カトレアにとっていいものかがわからなくなっていた。

「お前さんが治療を進んで行くなど雨でも降るんじゃないか？」

「貴方も椅子に座って水煙管吸っているだけじゃなくて、たまには真面目に仕事をしたらいかが？」

オスマンの憎まれ口も目的を達したイリーズにとっては何の効果もなかった。彼女の頭の中にはもうこれから先のことではいっぱいであり、これから自分の義理の孫になる男の嫁たちをどのようにしていこうかと考えていた。

「お前さん、わしのことを覗いておるのか？」

「これでも長い腐れ縁だからね、貴方のやりそうなことぐらい簡単に想像がつくわ。サボっているか、セクハラを働いているかのどちらかでしょう？」

「ぐぬぬ……反論できん」

オスマンは引きつったような表情でイリーズを見つめていた。かつての恩師のその姿を見てヴァリエール公爵は大きくため息をついた。

「さてと、それじゃあ治療プランについて相談を始めましょうか」

イリーズはさっきまでとは打って変わって明るい雰囲気治療について話を始めた。

ゲルマニアの魔女（後編）（後書き）

実は昨日で掲載開始から一週間が経過いたしました。

この作品も皆様のご支援のおかげで何とか続いております。

本日の午前零時の時点でお気に入り件数は約五百件、350000PV、25000ユニークという数字を叩き出しております。たくさんの皆様にご拝読いただき、まことにありがとうございます。

これからも頑張つてまいりますのでよろしく願います。

ここから先は原作開始時期に向けてオリジナルキャラや設定がどんどん出てまいりますのでよろしくお付き合いくださいませ。

『白百合』との再会、 『鳥の骨』との邂逅（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

『白百合』との再会、『鳥の骨』との邂逅

一方その頃、イリーズが引き連れてきた一団の半分を引き連れ、ヴァルデスは一路トリスタニアを目指していた。馬車の護衛にはかつて自分が指揮していた牙部隊の精鋭たちがしっかりと周りを固めていた。

「それにしても、まさかイリーズ様がゲルマニアから出てこられるとは……」

馬車の中、誰の目も触れない唯一の空間でヴァルデスはその言葉を共にため息をついた。

「おまけに結婚か……一度も考えたこともなかったな」

ヴァルデスは前の世界でも結婚を経験していない。正真正銘、今回が初めての結婚ということになるのだ。

しかし、紹介された相手が側室だと紹介され、では正室はいったい誰なのかという疑問が残っていた。それに、成り行き上でイリーズに任せたカトレアの治療も後になると物凄く不安だけが募っていた。

良くも悪くも、イリーズはヴァルデスにとってもっとも苦手な人物だったのだ。

「ヴァルデス様、何かございましたでしょうか？」

独り言が聞こえたのだろう、外にいた護衛が中のヴァルデスを心

配して声をかけてきた。ヴァルデスは馬車の窓を開けて顔だけ出してその護衛に答えた。

「大丈夫だ、何でもない。それより、トリスタニアへはどれくらいで着く？ ネージユ」

銀髪のショートカットに戦闘で鍛え上げられた引き締まった体、かと言って女性らしさをしっかりと示す丸みを残している。彼女こそがヴァルデスの後を引き継いで牙隊の隊長に就任したネージユだった。

ネージユは貴族ではない。元々、何代か前は貴族だったのだが没落して平民の中で生きていたので家名を失っているのだ。それをヴァルデスが彼女の才能を見抜いて、徹底的に鍛え上げてスクウエアメイジへと育て、白兵戦もヴァルデスの次に強く育った。彼女の場合は、平民に下っても尚、同じ平民に没落したメイジと婚姻を続けていたことにより、その血は貴族と同様に受け継がれ、魔法の力が薄れるということが無かったことが幸いしたのだ。平民である自分を差別せず登用したヴァルデスに対し、彼女は今でもその恩をしっかりと噛み締めながら日々の任務に当たっていた。

（よかった……相変わらずお元気そうで）

ネージユは久しぶりに会うヴァルデスが、最後に会った時と同じように元気な姿でいることに安堵していた。彼女は実力本意のゲルマニアでも、貴族ではない身分で魔法衛士隊に所属しているので、かなり周りからは浮いている存在だった。過去のゲルマニアでも、彼女のような例は存在を許さなかったがヴァルデスの存在がそれを可能にしており、本当の意味での実力主義を実現させていた。

そういう意味でも、彼女にとってヴァルデスは恩人であり、心の底から慕っている相手であった。気がつけば、ゲルマニアにいた頃はいつも彼を捜して視線は彼を追い続けていた。恩を少しでも返すために引き受けた牙部隊隊長だったが、ヴァルデスのいない牙部隊は、彼女にとつてとても寂しい場所でもあった。

平民と貴族、この身分の違いを乗り越えることは六千年続いた現代の社会では決して叶わぬ夢。ネージユは自分にそう言い聞かせて、彼への想いをずっと心の奥底にしまいこんでいた。そう、今でも。

「はい。トリスタニアへはあと一時間ほどで到着致します。既に早馬を走らせ、トリスタニアには伝令を向かわせています」

「そうか。帝政ゲルマニアの恥を晒さぬように気を引き締める」

「はっ！」

ヴァルデスはそう言って窓を閉めた。

今回、ヴァルデスはトリスタニアで行われるロマリアを除いた主要各国の元首が集う年に一度の定例会議に参加するために向かっていた。本来ならば、アルブレヒト三世が参加するのが筋なのだが、ヴァルデスに送られた書状にはレコン・キスタに参加した貴族たちの領土の平定のため、参加できないので代理としての出席を命じると書かれていた。

レコン・キスタの一件からは既に数ヶ月経っているが、領主がいなくなった土地も多くなったため、直轄領として没収もしていたが全てをそうするわけにはいかなかった。ただでさえ、新しく手に入れた土地には制度の変更やらやらなければならぬことがある。そ

れには大量の金と時間がかかる。レコン・キスタに参加しなかった貴族たちに土地の下賜なども行ったが、それでも追いつかないような現状である。だからこそ、ゲルマニアはまだレコン・キスタの一件が完全に決着がついたとは言えないような状況なのだ。

（それでもかなり早い段階で駆逐できたから、被害としては少ないほうなのだがな……）

ヴァルデスはレコン・キスタのことがずっと気になっていた。ゲルマニアからはその勢力をほぼ一掃出来たと考えていたが、彼らの組織のあり方が気になっていた。

現在の貴族社会そのものに反旗を翻して、貴族による共和制を目指す。それが果たしてゲルマニアだけで起こっていることなのか。ヴァルデスはそれが各国で同時に蜂起することを恐れていた。そういう状況になってしまうと、他国と協力体制を結ぶことが難しくなると同時に、各国のレコン・キスタによる協力関係を利用して一箇所に強大な軍を敷かれてしまう可能性があったからだ。ゲルマニアのレコン・キスタは一掃したが、他国から集合されたら同じことなのだ。

（もつとも、貴族による共和制なんてものが実現したら、ゲルマニアの皇帝になっても全くの旨みがないけどな）

ヴァルデスは同時に、レコン・キスタに参加した貴族たちが本気で共和制を実現させようと考えているとは思っていなかった。貴族による共和制の実現はあくまで建前、本当は彼らを利用してアルブレヒト三世を皇帝の座から引き摺り下ろすことが最大の目的であったと思っていた。

ゲルマニアは現在中央集権化が進められており、産業の発達なども伴って中央には莫大な金が流れていた。その恩恵に与れるのは中央にいる極僅かな者たちのみ。言うまでもなく、その恩恵を一番受けるのは皇帝であるアルブレヒト三世である。共和制なんてものによれば、その旨みを大きく減少させてしまうことになるため、ヴァルデスは彼らが本気で共和制を考えていると思えなかったのだ。

だからこそ、彼らは皇位継承権を持つ者と共にレコン・キスタに入り、アルブレヒト三世を皇帝の座から引きずり落とし後にその恩恵に与ろうと考えたのだ。もつとも、その目論見は見事に瓦解しただけではなく、結果的に多くの領土が直轄領として扱われることになったため、現時点では収支がマイナスでも長い目で見れば中央の権力はますます強くなるという結果のみを残して彼らは敗れ去ったのだ。

（ま、今となっては兵どもが夢の跡。閣下の人望のなさによる警戒心が勝利の鍵だったとしか言えないがな）

「ヴァルデス様」

すると、再び馬車の外からネージユに声をかけられた。

「どうした？」

「もう間もなくトリスタニアです」

「わかった」

考えに耽っている間にいつの間にかかなりの時間が経っていたようだ。返事だけ返してそのまま馬車の中で到着するのを待った。

「それにしても、この臭いは凄いな」

トリスタニアの町はかつてのウィンドボナと同じく、表通りにも拘らずゴミや汚物の匂いが漂っていた。ゲルマニア以外の国ではこれが当たり前なのだが、久しぶりにこの臭いを嗅ぐとそれがかなりきつということを思い知らされた。ヴァルデスは少しでも臭いを避けるため、トリスタニアに入ってから一度も窓を開けなかった。護衛の牙部隊の面々も文句は言わなかったが、さすがにこの臭いに少し辟易としていたようだった。

「間もなく王城に入ります」

ネージユがそう言ったので、ヴァルデスは改めて自分の身だしなみを確認した。彼は現在、アルブレヒト三世から送られた衣装に身を包んでいた。上も下も黒尽くめの服で、刺繍の糸は全て金糸が用いられており、簡素ながらも華美な演出がされている服だった。シンプルだが着る者を選ぶ服で、普段から剣呑な雰囲気纏っているヴァルデスに一番良く似合っていた。

やがて馬車の動きが止まり、ネージユによって扉が開かれた。ネージユの手をとって馬車を降りると、そこには魔法衛士隊によって固められ、左右に分かれて通路を作る護衛たちの姿と、その向こうにはアンリエッタ姫とマザリー二枢機卿の姿があった。

「行くぞ」

「はっ」

ヴァルデスが先頭を歩き、護衛たちがその後続く。アンリエッタの前に行くと、彼は頭も下げずに立つたまま彼女と会話を始めた。

「アンリエッタ姫殿下及びマザリーニ枢機卿にお出迎えいただけるとは光栄です」

「……ようこそお越しくできました。ヴァルデス殿。初めまして、アンリエッタ・ド・トリステインと申します」

「枢機卿のマザリーニです。お見知りおきを」

低頭しないヴァルデスに多少不快感を覚えたのか、アンリエッタは一瞬むっとした表情をしたが、すぐに何事もなかったかのように花が咲いたような笑顔で彼を迎えた。マザリーニ枢機卿もその後、続いて彼に名乗った。

「ご丁寧な挨拶痛み入ります。ですが、私はアンリエッタ姫殿下にお会いするのはこれが二度目なのですよ？」

「えっ？ 失礼ですが、何処かでお会いしましたでしょうか？」

アンリエッタにとって、あの園遊会の会場で起こったことは取るに足らない小事であった。ヴァルデスはそう解釈した。

「二年前の園遊会の場で、アルビオンのウェールズ殿下と共に無礼を働いた者です」

「あ……」

そう言われると、アンリエッタはあのと看の看を思ひ出したらしく、目を見開いて頬が少し赤くなつた。

「そ、その節はどうも……」

「いえ。あれは私に非はありました」

最初の丁寧な挨拶で見せた凜々しさはすっかりなりを潜め、年相応の少女らしい恥ずかしさを込めた声で小さくそう言った。その後ろで、マザリーニ枢機卿がヴァルデスたちに悟られないように小さくため息をついていた。

「では、ヴァルデス殿。まずはお部屋の方にご案内させていただきます
ましよう」

「ありがとうございます。マザリーニ枢機卿」

恥らっているアンリエッタをフォローするため、マザリーニはすぐにヴァルデスを違ふ場所へ移そうと自らが案内役を買つて出た。本来ならば、案内させる女官がいたのだが、今のアンリエッタに事前に相談した段取りなどこなせるはずもないため、急遽彼がそれを買つて出ることでこの場での会話を終わらせようとしたのだ。

「では、どうぞこちらへ」

マザリーニが先頭を歩き出したので、ヴァルデスたちもその後について王宮を歩き始めた。すれ違ふ貴族たちが頭を下げていたが、

その表情は明らかにこつちを見下しているとヴァルデスにははつきりとわかった。

「しかし、アルブレヒト三世閣下も大変ですな。謀反者の後始末に追われるとは」

「我が閣下も民のために日夜尽力なされておる身なればこそと存じています。閣下の尽力の甲斐あって、ゲルマニアは現在好景氣を迎えておりますから」

「羨ましいお話ですな。しかし、そのお召し物もまた変わっておりますな」

(やっぱり突っ込まれたか)

ヴァルデスの着ている衣装、先程も述べたように上下黒尽くめのものだ。ロマリアでは教皇がその身に穢れがないことを示すために上下共に白い服で統一することがあるのだが、これはその対極を行うものだった。さすがに衣装だけで異端だと言われる事はないだろうが、それでもあまりいい印象をもたれることはないとヴァルデスも思っていた。ある意味では喧嘩を売っているとさえ言える。

「気になりますか？」

「神に仕える身としては少々……」

「ははは。言いたいことは私もわかりますがご容赦いただけませんかでしょうか？ 私も閣下よりいただいたものにけちをつけるわけにはいきませんので」

「わかりました。では、私は何も見なかったということ……」

「お手数おかけいたします」

マザリーニとの会話は他愛もないことばかりだった。だが、互いに何か情報を引き出そうと水面下では激しい争いが繰り広げられていた。

「やあ、君も来たのか」

すると、一行の前にアルビオンのウェールズが姿を現した。マザリーニはすぐに膝をついたが、ヴァルデスは立ったままの状態で彼と向き合った。

「お久しぶりでございます。ウェールズ殿下」

「君とはまた出会う予感がしていたが、この場で会うことになるとは思わなかったよ」

「お二人はお知り合いでございましたか」

「ああ。二年前の園遊会の場で彼と話す機会があったね」

「さようで……」

「せっかくだ。どうせ会議はすぐに始まらぬのだし、少し彼と話をしたいのだが……よろしいか？ マザリーニ枢機卿」

「もちろんでございます。そうだ、せっかくだので同じ年代の者同士としてアンリエッタ姫殿下も一緒にさせていただいてよろしい

でしょうか？ ウェールズ様、ヴァルデス殿」

「もちろんだ。会話の席に華があったほうがいいからね」

「私も異論はございません」

「では、すぐにお茶の席をご用意いたします。ご用意が出来次第、お部屋の方に案内の者を向かわせますのでお待ちください」

「わかった」

「では、ヴァルデス殿。参りましょう」

「わかりました。ウェールズ様、また後で」

「ああ」

こうして、期せずして各国の次期国家元首候補たちの対談の席が設けられることとなった。

しかし、この場にいる誰もがこの時は予想だにしていなかった。

今回の会議でハルケギニア全体を揺るがすことになる大事件が起こることになるうとは……。

ティーパーティー（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ティーパーティー

「ゲルマニアは大変だったようだね」

急遽用意されたテーブルにお茶やお菓子が並び、その周りにはヴァルデス、ウエールズ、アンリエッタが三角形を描くような配置で座っていた。

「ええ。まあ、おかげで皇帝閣下に反旗を翻している貴族たちを一掃出来たので、結果的に閣下の地位をより磐石なものにするための礎になったというだけのことです」

「しかし、恐れ多くも貴族が国家元首に反旗を翻すなんて信じられませんわ」

貴族は王に絶対忠誠を誓っていると信じきっているアンリエッタには、ヴァルデスの話はとも信じられるものではなかった。前の王が亡くなって以来、トリスティンには次の王がまだ決まっていなかった。本来ならば、アンリエッタが成長するまでマリアンヌ太后が王位を継いで女王として国を治めるのが慣わしのだが、マリアンヌ太后は妻としての自分を貫き、先代の王の喪に服しているとのことで即位していなかった。

ヴァルデスは人間としては美德だと思っていたが、王族としては失格の烙印を押ししていた。

「ま、私も閣下も貴族が全部、本当に忠誠を誓っているなどとは最初から思っていますよ。むしろ、見栄と欲にまみれた貴族が裏切りを働かない方がおかしいとさえ思いますよ」

「それでは貴族の存在する意味が無いではないですか？」

「個人的には一部を除いたほとんどの貴族にはご退陣願いたいものですね。今のゲルマニアにとって貴族というのは重荷にしかありませんから」

「だが、貴族を排除した後はどうするんだい？」

「貴族には年金だけ受け取って領地を明け渡してもらいます。そうすれば、ゲルマニアの中央集権化がより強固なものになりますからね。それに、貴族たちもその大半があまり経済状況は芳しくないという輩が多いですから、責任を免除されて金まで貰い続けられるということならば納得するでしょう。もつとも、古い考えの持ち主ならば明け渡さない可能性もありますけど」

「むしろ、それこそが貴族の姿なのではないですか？」

「貴族は時代と共にその在り方を変えられないようなら生き残れないですよ。そういう意味では、レコン・キスタに参加した貴族たちは時代の流れに迎合しようとしたと言ってもいいでしょうね」

ヴァルデスはそう言って用意された紅茶を飲んだ。ウェールズとアンリエッタは過激とさえ言えるヴァルデスの言葉に呆気に取られるだけだった。

「それに、レコン・キスタについてはトリステインもアルビオンも対岸の火事というわけではないと思いますよ」

その言葉を聞いて、ウェールズとアンリエッタの表情に緊張が走

った。

「では、ヴァルデス殿はトリステインでもあのような不敬の輩がいるとお思いですか？」

「彼らの組織のあり方は国境を越えた貴族の共和制の実現ですからね。ゲルマニアだけの話ではないと思いますよ」

「なるほど。それは君の言うとおりだな。帰ったら父に進言してみよう」

「しかし、本当にそのような者たちが……」

ウェールズはヴァルデスの言葉をすぐに納得したが、アンリエツタはまだ信じきれずにいた。そのあたりが、二人の王族としての成長度合いの違いを表していた。

「ガリアは元々中央が強い国家ですからそれほど心配は無いでしょうし、ロマリアに至っては始祖の代弁者である教皇聖下がいらっしゃる。ロマリアに仕掛けようものなら貴族だけでなく平民さえも敵に回しますからね。そうになると、ゲルマニアの連中が壊滅した今、一番危険なのはアルビオン、次にトリステインでしょうね」

「空の上じゃ、簡単に逃げられないからね。それがアルビオンの強みであり弱みでもある」

「外からの攻撃には強いが、中からの攻撃には弱い。そのジレンマがアルビオンという国ですな」

「ははは。手厳しい」

ウェールズは表情こそ笑っていたが、その内心は決して表情どおりに楽観視していなかった。もし、ヴァルデスの言うとおりになれば逃げ場のないアルビオンはあつという間に制圧されてしまうのは間違いないからだ。ウェールズは国に戻った後は、すぐにこの件に取り掛かろうと心に決めていた。

一方、アンリエッタの場合は、話に恐怖を覚えてはいたが具体的な対策などに至っては何も実行するつもりは無かった。ヴァルデスの言っていることは可能性に過ぎない、それをいちいち心配していたら貴族たちの王室への信頼が薄れてしまうと考えていたからだ。

もちろん、この場合はウェールズの考えが正しい。そんなに権威がある王室でも、人間の心を完璧に掴むことは出来ない。将来、国を任される身として、不穏分子はなるべく早い段階に取り除く方がいいに決まっているのだ。

「ところで、君はガリアに顔が利くらしいね」

すると、話題を変えようとウェールズが何の脈絡も無くそう言うてきた。

「ええ。あの園遊会の場でジョゼフ王と知り合う機会がありましたので、それ以来懇意にさせていただいております」

「へえ」

ウェールズはここに来る前に不穏な噂を聞いていた。その内容は、ゲルマニアとガリアが同盟を結ぼうと画策しているとのことだった。何処から出てきたかわからない根拠の無い噂だったが、この場に来たのがアルブレヒト三世ではなく、ヴァルデスだったことからそれ

を確かめようとしていたのだ。

「この場にまだジョゼフ王が姿を見せないんだが、君は何かを聞いていないか？」

「いいえ。そもそも、今はトリスティン魔法学院に在籍し、学生身分である私にはそのような情報は入ってきません。今回も、皇帝閣下がレコン・キスタ騒動の平定に追われているため、急遽私がこの場に来ることになったのです」

「そうか……」

「ジョゼフ王がまだ来ていないのですか？」

「ええ。突然、ガリアからの使者がやって来て少し遅れるということでしたが、詳しいことは不明なのです」

（あの人だけは何を考えているかわからないからな……）

ヴァルデスにとって、もっとも苦手な人物がイリーズなら、もっとも考えが読めない人物がジョゼフだった。ジョゼフに関してだけは、いかにヴァルデスといえどもその行動を予測することが出来なかった。

「だから、君ならそのあたりの事情に詳しいかと思っていたのだがね」

「ご期待に沿えず申し訳ありません。殿下」

ヴァルデスは心にも思っていない謝罪の言葉をウエールズに述べ

た。

「いいや、気にしないでくれ。それより学生生活はどうだい？」

「非常に楽しいです。友に囲まれる生活というのも悪くは無いですね」

「そうか。それは羨ましいな」

「そうですね。私たちは学院には通えませんが」

正真正銘の王族であるウェールズとアンリエッタはほとんどが貴族で構成されているとは言え、市井にある学院に通うという事は無い。全て城内にいる家庭教師によって王族として必要なことを学ぶのだが、その代わりに友達というものは出来ない。城内にいる地位のある貴族の子息や子女と知り合いになる程度で、本当の友達になるのは本当に片手で数えられる程度しかないか、一人も出来ないという場合だ。ガリアのようにイザベラを魔法学院に通わせること自体が珍しいことなのだ。

「そう言えば、ヴァリエール公爵家のルイズ嬢とは幼い頃からのお知り合いでしたね」

「ええ。最近はお会いしなかったのですが、ルイズは元気でしたか？」

「ええ。うちのツエルプストー辺境伯のご令嬢と同級生ですので、不安が絶えません……」

「ああ……」

「ヴァリエール公爵家とツエルプストー辺境伯家は仲が悪いからね」

「おまけに、お二人とも勝気な性格ですから。ふとしたことで一触即発なんてことも充分ありえます」

「ゲルマニアとトリステインの悩みの種だね」

他人事であるウエルズは気楽に言うが、ヴァルデスとアンリエッタにとっては笑い話ではすまなかった。特に、今のトリステインがゲルマニアに勝てるはずもないので、アンリエッタにしてみれば両家の接している国境地帯に爆弾を抱えているようなものなのだ。ゲルマニアは爆発してもカバーできるだけの財力と軍事力はあるが、トリステインはその平定すら出来なくなり、領土が荒廃してしまう可能性があるのだ。

「ルイズには一度手紙を出しておきましょう」

「是非そうしてください。ツエルプストー辺境伯のご令嬢は私で抑えますので」

アンリエッタとヴァルデスはそう言って紅茶を飲んだ。

「それにしても、ガリアのジョゼフ王が来ないと会議が始められないね」

「そうですね。ま、来ないなら来ないで、私のように誰か名代を立てると思いますからそれほど心配する必要も無いと思いますけどね」

その時、お茶会の会場に一人の兵士がやってきた。

「申し上げます。ガリア王国よりジョゼフ一世陛下がお着きになりました」

「やれやれ、これでようやく会議が始められるな」

「あの、それが……」

ウェールズの言葉を聞いて兵士にはつが悪そうな顔をして何かを言い籠っていた。

「どうかしたのですか？」

「はっ。確かに到着されたのですが、ジョゼフ陛下は酷く酩酊されておりまして、とても会議が出来る状態とは思えません」

「酩酊？ 酔っ払っているのか？」

「はっ。頬が朱に染まるほどお酒を召し上がられております」

「何を考えていらっしゃるのかしら？ あの方は……」

ウェールズとアンリエッタはただ呆れるばかりだったが、ヴァルデスはむしろジョゼフらしいと考えていた。

（これもあの方らしいと言えばあの方らしいか）

ヴァルデスは口元を隠して微かに笑っていた。

「いやいや、遅れてすまないな。諸君」

すると、ジョゼフはお茶会の会場にワインの瓶を片手にやって来た。兵士が言っていたように、ジョゼフの顔はすっかり朱に染まっております、誰から見ても酔っ払っていることは明らかだった。

「ジョゼフ王、遅れたことについては特に何も言っつもりはありませんが、会議があると承知していながら会議前にお酒を召し上げるのはどういことかご説明願えますか？」

ウェールズは口元こそ笑っていたが、それとは対照的な鋭い目つきでジョゼフに問いただした。

「ははは。これはウェールズ殿、お小言は仰るとおりだ。だが、今日はめでたい日なのだ。ご容赦願いたい」

「ジョゼフ王、何がおめでたいのですか？」

「おお、アンリエッタ殿。またお綺麗になられたな。正に可憐という言葉がよく似合う」

「ありがとうございます、ジョゼフ王。それで何がそんなにおめでたいのですか？」

「おお、そうであったな」

ジョゼフはそう言うと、これまで傍観していたヴァルデスに向き直ってその手を握った。

「……あの？」

「少々跳ねつ返りなところや、少々口数が少なく陰があるところもあるが、我が娘と姪をよろしく頼んだぞ」

ジョゼフが真剣な顔をしてそう言った。三人の間に一瞬間が空いたが、すぐに我を取り戻したのはヴァルデスだった。

「あ、あの、ジョゼフ陛下。娘と姪をよろしく頼むというのはどういふ……?」

「うむ。実は余とアルブレヒト殿とでずっと話し合いを重ねていたことなのだが、ようやく我が娘と我が姪とヴァルデス殿との婚約が正式に決定したのだ」

「「「婚約!?」」」

ジョゼフの言葉に三人は驚きを隠せなかった。しかし、ウェールズとアンリエッタは当事者であるにも拘らず、その話を全く聞かされていなかったヴァルデスにも驚いていた。

「この二年近くの間、アルブレヒト殿との間で何度も協議を行っていたのだが、この度ようやく縁談がまとまりましたな。いや、親として、伯父として一安心いたしました」

「あの、一つ聞いてもよろしいでしょうか?」

「おお、何だ? 婿殿」

「私はその話を知らなかったのはまあいいとして、イザベラ様やシヤロット様はそのお話はご存知なのでしょう?」

「今頃、余が遣わした使者たちが二人に告げていることだろう」

「……よろしかったのですか？ お嬢様や姪御さんに何のお話もせずに勝手に決めてしまつて」

「王族として生まれた者が恋愛結婚などするはずもない。あの二人とてそれは理解している。問題はあるまい」

「はあ……」

ヴァルデスもそれは理解していた。アルブレヒト三世のように一度も結婚せずに、自由気ままに生きている王族の方が珍しいのだ。但し、非公式の愛人ならばアルブレヒト三世にもかなりの数があり、エルティナはその愛人との間に生まれた子供の一人なのだ。

「まあ、女としてはまだ未熟ではあるが、そのあたりは婿殿の好きにして構わない。あの二人を自分好みに変えてしまえ」

「……本当に出来ると思いですか？」

「まあ頑張れ」

ジョゼフのその一言に、ヴァルデスは思わず目を覆った。

「さあ、婿殿にウェールズ殿、そしてアンリエッタ殿。この良縁を祝福してください。誰かグラスを持ってまいれ！」

「こちらにご用意しております」

ジョゼフの言葉に従い、黒い髪の女性がワイングラスの入ったケ

ースを持ってやって来た。

「ジョゼフ王、そちらの方は？」

「これは余の執政官を行っているシエフィールドという者だ」

「はじめまして。シエフィールドと申します。ヴァルデス様、ウエールズ様、アンリエッタ様、以後お見知りおきを」

シエフィールドは恭しく一礼をしたが、ヴァルデスにはどうにもこのシエフィールドという女性あまり好きにはなれなかった。彼女が纏っている独特の雰囲気ヴァルデスに素直に好感を抱かせなかった。

「いちらんそ」

「よろしく」

「よろしくお願いいたします」

三者三様の無難な返事が終わると、シャフィールドはヴァルデスに向き直って膝をついた。

「ヴァルデス様、この度はイザベラ姫殿下及びシャルロット姫殿下とのご婚約、まことにおめでとつございます」

「ありがとうございます」

「つきましては、ジョゼフ陛下よりヴァルデス様へ贈り物がございます」

すると、今度は別の女官が丁重にそれを運んできた。やけに古めかしい木箱にそれは収められていた。

「蓋を開けてみてくれ」

ジョゼフに促され、その木箱の蓋を開けた。そこには一本のナイフが入っていた。

「ナイフか……」

ヴァルデスはそれを手に取ろうとしたが、指先が触れる前にその手を止めた。

「どうした？ 嬭殿」

「ただのナイフではないですね。嫌な予感しかしません」

「ははは！ さすがは嬭殿、勘がいいな！」

ジョゼフはそう言って笑った。ジョゼフが笑い終わると、シエフ・イールドが代わりに説明を始めた。

「ヴァルデス様がお考えの通り、これはただのナイフではございません。これはインテリジェンスナイフなのです」

「インテリジェンスナイフ？ あの知恵を持つ武器のことか？」

「はい。これは握った相手の意識を奪い、そのナイフが人間を支配することが出来ます。それにこのナイフを握った者は、たとえ平民

であってもナイフの魔力で魔法を使うことができます」

「ほう……それはまた」

（俺が握っていたら何をさせるつもりだったんだ？）

口ではナイフの能力に感嘆の声を漏らしていたが、内心ではジョゼフはやっぱり決して侮ってはいけない人物だという認識を再度改めていた。

「さあ、この良縁を祝って乾杯といこうではないか！」

シェフィールドはグラスにワインを注いで、四人の前に並べた。

「では、乾杯！」

ジョゼフの高笑いと共にそれは声高らかに宣言された。

満面の笑みを浮かべるジョゼフとは対照的に、この場にいる三人は複雑な思いでそれぞれのワインを口にした。

ティーパーティー（後書き）

ハーレムフラグ発動中です。

これからまだまだ続きます。

どうぞよろしくお付き合いくださいませ。

会議は踊る（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

会議は踊る

ジョゼフにより宣言されたヴァルデスとイザベラとシャルロットの婚約はトリステインの重臣たちの間に大きな衝撃を与えていた。会議は翌日に回され、その日の夜に重臣たちが集められ、緊急の会議が開かれた。

「イザベラ姫とシャルロット姫がヴァルデス殿に嫁ぐということは、ハルケギニア一の大国とハルケギニア一の国力を持った国が、血縁という形で同盟を結んだということに他なりませんぞ！」

「それより、あのゲルマニアにイザベラ姫やシャルロット姫が嫁ぐということになれば、あの蛮人の国にも直系の始祖の血が入ることになる！ そうなれば、あの蛮人の国がこの伝統あるトリステインと同格ということになる！」

「いや！ いくら始祖の血が入ったとしてもそれを認めるわけにはいかない！」

「だが！ ハルケギニア一の大国の娘を嫁として迎え入れており、国力でもこのトリステインを大きく上回る国を認めないわけにはいかないですぞ！」

会議の場は開始早々荒れていた。今まで、始祖の血があるという理由で国力が低いトリステインが、国際的な立場として上に立っていたのだが、その優位性を失ってしまうと、一気にゲルマニアの下に甘んじてしまうことになるのだ。

「何故、これほどのことが今まで露見しなかったのだ!？」

「ジョゼフ王の口ぶりですと、ヴァルデス殿本人にすら口外せず、ジョゼフ王とアルブレヒト皇帝との間だけで進められた話のようです。あのヴァルデス殿が目を見開いて驚いていたくらいですもの」

「ですが姫様、それはヴァルデス殿の芝居という可能性があるのではないですか？」

「今となつては芝居であろうとなかろうと関係ありません。既に婚約は結ばれているのですから」

そう、重大なのは既に婚約が成立してしまつていふ事実だった。決定していることに対し、これからどんな対策をとっていくかがこの会議での最大の焦点なのだ。

「そつだ！ 問題はこのトリステインがゲルマニアの後塵を拝しないようにするにはどうするかが重要なことだ！」

「だが、どのようにするといふのだ！」

「恐れながら、イザベラ姫とシャルロット姫が嫁ぐのはまだ皇位を継ぐとは決まつていない皇位継承候補者の一人にしか過ぎないヴァルデス殿です。ならば、こちらは現皇帝であるアルブレヒト三世とアンリエッタ様の婚姻のお話を進めてはいかがでしょう。アルブレヒト三世はアンリエッタ様に関心を持たれているとの話です」

「何を馬鹿な！ 貴殿はアンリエッタ様をゲルマニアなどという蛮人の国に人身御供として差し出すつもりか！？」

「しかし！ この伝統あるトリステインがゲルマニアの後塵を拝さ

ないためにはこの方法以外に何かありますか！ あるのなら是非お教え願いたい！」

（結局、私は政治の道具でしかないのね……）

アンリエッタは会議を見ながら、何処か達観した気持ちを持っていた。どんな結論が出ようとも、彼らにとってアンリエッタという姫は政治の道具としての価値しか見出していないのだ。人間としてのアンリエッタを誰一人として見ていない、彼女は改めて自分には自由が無いことを悟っていた。

（そう言えば、あの方は随分あっさりと婚約を承諾していたわね。初めて聞かされたことなのに）

アンリエッタは、あの場で一番堂々としていたヴァルデスのことを思い出していた。普通、自分の将来が誰かによって勝手に決められてしまったのなら、恨み言の一つが出てきても何の不思議ではない。だが、ヴァルデスはまるで大したことではないかのようにそれを受け入れ、尚且つ堂々と振舞っていた。生まれながらの王族である自分より、ヴァルデスのほうがよっぽど王族らしいと思っていた。

（どうせ叶わぬ想いなら、いっそのことあの方のところに嫁いだ方がいいのかもしれないわね。アルブレヒト殿のところよりはましかもしれない）

いっそのこと叶わぬ想いは捨てて、より現実的で一番条件のいいところへ。アンリエッタはウェールズへの想いを諦めなければならぬときに来たのかもしれないと考えていた。だが、そんな彼女への救いの言葉がこの男からかけられた。

「発言させていただいてもよろしいかな？」

「何でしょう？ ヴァリエール公爵」

「実は我が娘のカトレアがゲルマニア皇帝アルブレヒト三世のご生母であらせられるイリーズ様に病の治療を受けております」

「それがどうされたのですか？」

「イリーズ様は治療の代償にカトレアをヴァルデス殿の側室の一人として差し出すようにとのことを仰っております」

その言葉を聞いて会議の参加者たちはどよめいた。

「成功報酬という形にはなっておりますが、ここに来る少し前まで治療を拜見しておりましたが、これまでかかってきたどのメイジよりも治療に効果が出ているように思いました。恐らく、治療は成功するものと思われます」

「では、カトレア嬢をゲルマニアに嫁がせるということですか」

「ええ。恐らくはそうなるでしょう」

「トリスティンで一二を争う大貴族であるヴァリエール公爵が、よりによってゲルマニアに娘を嫁がせるなど……!!」

会議に参加していたアンリエッタを除く全員が苦い顔をしていた。

「まあ皆さんの言いたいこともわかるが、ここは最後まで話を聞いてください。仮にカトレアがゲルマニアに嫁いだとすれば、トリス

テインもゲルマニアに繋がりを持つことが出来ます。一方でアンリエッタ様にはアルビオンのウェールズ殿下に嫁いでいただければ、これまで以上にアルビオンと我がトリステインの関係はより強固なものになります。そうなれば、将来のハルケギニアはガリア・ゲルマニア勢力とトリステイン・アルビオン勢力の二分化になるものでしょう。今のよう各国ばらばらということはなくなるでしょう」

ヴァリエール公爵の言葉を聞いて、参加していた貴族も押し黙りヴァリエール公爵の言葉にも一理あると考え始めていた。むしろ、彼らからしてみればそのほうが断然いいに決まっているのだ。

「どうでしょう？　今更ゲルマニアにアンリエッタ様を無理やり押し込むような愚策をとるより、将来のハルケギニア全体を考えて行動されたほうがよろしいのではないのでしょうか」

「……確かに、同じ始祖の血同士でならばトリステインの伝統を汚すこともない」

「元々アルビオンと我がトリステインは友好的な関係を築いている。それがより強固な関係になるのならいい話ではある」

会議の席はだんだんヴァリエール公爵が出した提案に賛成する動きが増えてきた。現金なものだと思っだろうが、伝統を重んじる国だからこそそれを汚されない道を選びたがるものである。

（本当に身勝手なものね。私を無視して話を進めるなんて……）

アンリエッタはころころと意見を変える貴族たちを見てため息をついた。結局、ヴァリエール公爵が何も言わなければ彼らは自分をゲルマニアに差し出していたに違いない。それがたまたま、ヴァリ

エール公爵の娘であるカトレアがその役目を負うことになったので、今まで無視していたアルビオンとの同盟強化を提唱し始めたに過ぎない。彼女の都合は結局無視されるしかないのだ。

この会議の様子だけで、アンリエッタがいかにお飾りだけの存在でしかないことははっきりと見て取れた。

（ウエールズ様、貴方への想いを諦める必要は無いのかもしれないが、私はそれを喜んでいいのかどうかわかりません）

心の中で想い人に問いかけてみたが、そこに返事が返ってくることは無かった。

「まさか、本当にゲルマニアとガリアが手を組むとは思わなかったよ。バリー」

トリスティンが重臣たちを集めて会議を開いているのと同時刻、トリスティン王城内のある一室でウエールズとその忠実な僕であるバリーが話しをしていた。ウエールズは根も葉もない噂が現実になっってしまったことにほとほと迷惑しているようで、時折小さくため息をついていた。

「はい。正に青天の霹靂でした」

「トリスティンの重臣たちが会議をしているようだが、どんな結果

が出ると思っ?」

「そうですね……恐らくはガリアの後に続いてアンリエッタ様をアルブレヒト三世閣下に嫁がせようと画策しているのではないのでしょうか?」

「やはりそう思っか」

「ガリア・ゲルマニアの同盟は、このハルケギニアの勢力図を一気に書き換えてしまう恐れを十分に孕んでいます。我がアルビオンにはその手は使えませんが、トリステインにはアンリエッタ姫殿下がいます。勢力が変わるうともトリステインという国を残すために、その方針を選ぶでしょう。何か別の材料が無い限りは」

(私のアンは……嫁に行ってしまうのか。我が最愛の……従妹は)

奇しくもウェールズもアンリエッタと同じようなことを考えていた。だが、ウェールズはアンリエッタほど自分のことを優先してはいなかった。王族としての認識がアンリエッタよりも高いウェールズはすぐに頭を振って、アンリエッタではなくアルビオンについて考え始めた。

「我がアルビオンはどのような道を選ぶべきだと思っ?」

「本国に戻らなければ何とも言えませんが、とるべき道は二つ。ゲルマニアかガリアの属国となってその庇護を受けるか、別の方法を探し、その両国間に負けないように国家としての立場を上げるしかありませんでしょうな」

「庇護を受けるなどという選択肢はないだろうな。とは言え、アル

ピオンがガリア・ゲルマニア同盟に並ぶ国家にすることなど不可能に近い。厄介なジレンマを抱えてしまったものだ。予定調和のつもりで来た会議で、まさかこんなことを聞かされるとは夢にも思わなかったよ」

ウェールズはそう言って大きくため息をついた。

「父上の青ざめた顔が目には浮かぶね」

「ジェームズ陛下だけではありますまい。重臣たち全員が同様の表情をしていると思いますよ」

「そうだね。とにかく、早馬を出して本国に知らせよう」

「かしこまりました。では、連れてきた兵を一人、大至急本国に戻します」

バリーはそう言って部屋を出て行った。ウェールズは立ち上がって窓の外からトリスタニアの町を見下ろした。

「六千年続いてきた平穩、いや停滞から抜け出す時が訪れたと言わべきか。始祖の三人の子供とその弟子が作り上げたシステムは限界を迎えたか……」

ウェールズは呟きながら、拳を力強く握っていた。

「ここから先は始祖のご意思ではなく、我々の決定が世界を変えていく。その流れに乗り遅れるようなことがあってはならないのだ……たとえば、愛する者を諦めたとしても」

ウェールズは目を閉じて深呼吸をした。そして、目を開いてはつきりとこう言った。

「僕はアルビオン王国王子、ウェールズ・テューダーなのだから」

静かなる決意、その瞳には決意の炎が燃え上がっていた。

秘めた恋と動き出した陰謀（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

秘めた恋と動き出した陰謀

「ふふふ。今頃、トリステインの姫もアルビオンの王子も慌てふためいているだろうな」

「その通りでしょうね。私でさえ、突然のことに驚きを隠せなかったのですから、国家間での結びつきが強くなったということは、彼らにとって脅威以外の何者でもないのですから」

こちらもトリステイン王城内の一室、そこにはヴァルデスとジョゼフ、そしてシェフィールドとネージュがいた。ヴァルデスとジョゼフは互いに向かい合うようにすわり、シェフィールドがジョゼフの傍に、ネージュがヴァルデスの傍に控えていた。

「しかし、いつから私と姫殿下お二人の婚約のお話を進めていたのですか？」

「進め始めたのは二年近く前、お前が初めてガリアを訪れた後だ。あれ以降、俺はアルブレヒト三世にお前と姫二人の婚約の話を持ちかけていた」

ジョゼフはワインを煽りながら楽しそうに話していた。ヴァルデスはワインには手をつけず、ジョゼフの話に耳を傾けていた。

「イザベラの性格の悪さとシャルロットとの不仲はガリアや国外の有力貴族や王族では有名な話だ。アルブレヒト殿も自分の嫁に、と言われたら決して承諾しなかっただろうが、お前の嫁にと言ったら快く承諾したぞ」

(そんなにアンリエッタ姫がいいのだろうか？　うちの閣下)

ヴァルデスがそんなことを考えていると、ジョゼフは笑みを崩さずに言葉を続けてきた。

「どうして、アルブレヒト殿がイザベラやシャルロットを娶らなかつたのかと考えているな？」

「ええ」

「元々、アルブレヒト殿が始祖の血を欲していたのは、国力がハルケギニアの国家であるにも拘らず、始祖の血を引く者がいないことでガリアのみならず、トリステインやアルビオンといった小国にさえ頭が上がらないという現実があつたからだ」

「承知しています。だからこそ、皇帝閣下が両方は無理でもどちらか一人を娶る方がよかつたのではなかつたのかと思います」

「だが、アルブレヒト殿はあくまで始祖の血によって国家の地位を上げたいのであって、嫁がほしいわけではない。むしろ、自分のことに口出ししてくるであろう妻など邪魔なだけだ。ならば、権勢を維持したまま自由を持ち続けられたい。そうなることは一つだ」

「自分の身内に始祖の血を引く者と婚姻させ、次の皇帝にすえればいいということですか」

その合理的に自分の利益を得ようとするところは実にアルブレヒト三世らしいとヴァルデスは思った。国家の地位を上げて尚、自分の自由をしっかりと確保してやりたい放題、彼にとってはこれ以

上ないおいしい話に飛びついたというところだろう。

「それに、トリステインのアンリエッタ姫は個人としては良妻賢母になるいい女かもしれないが、それにくっ付いてくるトリステイン王国はアルブレヒト殿にとって厄介以外の何物でもないからな。それよりは、うちと手を組んだほうが対外的にも始祖の血を引き入れた以上の効果がある」

歴史と伝統と重んじるトリステインと、実力さえあれば貴族でなくても出世できるゲルマニア、水と油の関係と言ってもいい両者が婚姻で同盟関係が出来たとしても、仲が良くなるとは思えない。それはヴァルデスもかねてから考えていたことだった。

「しかし、イリーズ様からも閣下の娘を紹介されましたが、どうして私に白羽の矢が？」

「お前ほど自分の価値を理解していない者も珍しいであろうな。貴族ならば、自分の価値というものにはとことん敏感になり、少しでもいいところへいけるようにしようとするのだが、お前は全く意識せず、それでいて確実に上に上がっている。そういうところが評価されたのだ」

「そういうところ？」

「お前は下手な神官なんぞより欲が無い。ただあるがままを受け入れるだけの度量がある。欲が無いから無理に皇位を奪う恐れが無いし、そういう輩への牽制にも使える。そういうことだ」

「要するに安全牌ということですか」

ヴァルデスはため息をつきながらそう言った。

「ま、これでお前はアルブレヒト殿だけでなく、俺とも義理の親子になるわけだ。よろしく頼んだぞ、息子よ」

「わかりました。謹んで貰い受けさせていただきます」

「それでよい。一応、イザベラが正室でシャルロットが側室だ。イザベラの産んだ子供がガリアを継ぎ、シャルロットの子供がゲルマニアを継ぐということで話については」

「それで双方の国家には始祖の血を受け継いだ子供も残るといっわけですか」

「そのとおりだ。子供は早ければ早いほどいい。できるだけ毎晩励むことだな」

貴族や王族にとって、子供を残すことは重要な仕事の一つである。家を残すことが貴族や王族にとって最も重要なことであり、その血を受け継ぐ子供を一日でも早く儲けることが夫婦に課せられる義務なのだ。だから、子供が作れない女が家に戻されるといっことも珍しくない話だった。

「私は学生ですし、まだ婚約の身分ですよ」

「関係あるまい。むしろ、子供さえできれば堂々と世間にお前たちを夫婦として認めさせることができる」

「しかし……」

「トリステイン魔法学院だったな。学院内はさすがに無理だろうが、その近くに屋敷を作らせよう。そこでイザベラとシャルロットたちと暮らせばよい。イザベラもシャルロットも同じ男の妻になるのだから仲違いも少しは良くなるであろう」

すると、ジョゼフはヴァルデスからネージユに視線を動かした。

「そう言えば、お前はヴァルデスに拾われたと聞いているぞ。名は何と言っただ？」

「ネージユと申します。ジョゼフ陛下」

「そうか。平民でありながらスクウェアらしいな」

「はっ。ヴァルデス様のご指導により強くなれました」

ネージユは敬礼の姿勢のまま、ジョゼフの一つ一つの質問に答え ていった。

ネージユはヴァルデスがもつとも信頼を置いている部下だった。自分が見出したということもそうだったが、ネージユは他の連中と違い、上官からの命令であっても理不尽なものに対してはきっぱりと拒絶の意思を示すことができるところを高く評価していた。

ヴァルデスは命令に反抗する部下を決して嫌いにはならなかった。むしろ、ただ漫然と命令に従うだけの部下よりも彼らのほうに高い評価を下していた。もちろん、ただの反発には徹底して罰を与えたりしたが、筋の通っている反論ならば彼はそれを受け入れて上に報告したりもしていた。欲は無いが、仕事に手を抜かないヴァルデスはこうやって部下の信頼も集めていったのだ。

「魔法衛士隊の女性隊長は世界初だ。鼻が高いだろう」

「いえ。たまたまヴァルデス様がやむをえない事情で隊を外れるようになったからというだけです。私の実力はまだまだヴァルデス様には遠く及びません」

「その地位にいても謙遜するか……いい教育をしているようだな。ヴァルデス」

「恐れ入ります」

「ネージユよ。色々ヴァルデスの周りを調べてみたのだが、お前はヴァルデスに懸想しているという話があったがそれは本当か？」

ジョゼフのその言葉に、ネージユは目を見開いて驚き、その反応を見たジョゼフは答えは出たといわんばかりに口角を大きく上げて笑った。ヴァルデスは自分のことなのだが、興味が無いといわんばかりに無反応だった。

「私は所詮平民です。自分の立場というものはわきまえています」

「殊勝な心がけだな。だが、諦める必要が無いと言えるはお前はどうか？」

「……恐れながら、質問の意図が私にはよくわかりませんが？」

「簡単な話だ。平民であるお前は側室にすら入ることは許されない。だが、私的な愛人ということならば話は別だ」

「愛人……ですか？」

ネージユはジョゼフの言葉が信じられずにいた。いくら愛人とは言え、平民である自分が入ることを周りの重臣たちが許すはずが無い。平民の愛人がいるということになれば、皇室の権威が落ちてしまつと彼らは考えるからだ。

「実は、俺にお前をヴァルデスの私的な愛人と薦めてきた者がいる。お前ならば護衛としての腕前も確かだし、アルブレヒト三世はともかく、ヴァルデスを絶対に裏切ることはないという理由からだ」

「つまり、私も正室様や側室様たちと共に過ごせということでしょうか？」

ネージユにはジョゼフの言葉が悪魔の囁きのように魅力的に聞こえていた。だが、それと同時に平民の自分を困うことでヴァルデスに迷惑をかけてしまうのではないかという思いの間で揺れていた。

実際、イザベラやシャルロットよりもネージユの方がヴァルデスとの付き合いは長いのだ。共に過ごした時間の濃密さも他の者よりもずつと濃いものだった。

「どうだ？ 実際、これから優秀な護衛が必要になる。お前のように愛人でもあり、護衛でもあれば他の妻たちの信頼を得るのも簡単だろう。それでいて、俺やアルブレヒト殿が非公式ではあるが公認している。お前さえよければそのようにしてやる」

「……」一つ聞いてよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「それならば、別に愛人でなくてもいいのではないのでしょうか？
優秀な護衛というだけで充分ですし、その方がヴァルデス様にご迷
惑もかかりませんし」

「俺もそれでいいと思う。だが、俺にお前を薦めてきた人物はそれ
だとお気に召さないらしい。はつきり言ってしまうえば、ガリアとゲ
ルマニアの間にしこりを残さないための措置だと思えばいい」

「……そうですか」

「時間をかけるつもりはない。この場で返事を貰おうか」

ジョゼフの瞳はまっすぐネージユを見つめていた。ネージユは少
し俯いて瞳を閉じて考えた。牙隊にいたときからヴァルデスの扱
いは他のどの貴族と比べても一目置かれているほどのものだった。ネ
ージユもいずればヴァルデスが手が届かなくなるくらい遠くへ行っ
てしまうものと覚悟は決めていた。だからこそ、彼が去った後の牙
部隊の隊長を引き受け、隊を守っていくことを彼への忠誠の誓いに
代えていたくらいだ。

たまたま一緒にいる機会があっただけのこと、ネージユはヴァル
デスのことをそう思うことでその想いに諦めをつけていた。自分の
意識しないところで誰かを自分の周りに引き込んでいる、究極とも
言える鈍感が成しえる業であり、ヴァルデスが無意識に重ねている
悪行の一つにネージユは巻き込まれていたのだ。

「……私はヴァルデス様の邪魔にならないのならばお傍にいたい
です」

ネージユの絞るように言った告白に、ジョゼフは満足そうに微笑を浮かべ、ヴァルデスはネージユの告白よりもジョゼフの人の悪い笑みが気になって仕方がなかった。

(本当に何を考えているんだ？ この方は)

自分の義理の父親の考えがこの場に至ってもわからないので、ヴァルデスは何に対策を考えなければならぬのかもわからずにいた。わかっていたのは、気がついたら十六の身空で妻が三人と愛人を一人囲うことになってしまったという事実だけだった。

「よし。そういうことなら、これから必死にヴァルデスに尽くすのだな。話が決まったのなら俺はこれで失礼する。また明日会おう」

話が終わるなり、ジョゼフはシェフィールドを伴って部屋を出て行った。後に残されたヴァルデスとネージユはその姿を呆然と見送ることしかできなかった。

「何がしたかったんだ？ あの方は」

「さあ……？」

残されたヴァルデスとネージユはわけがわからぬままその場に残され、ジョゼフは意気揚々とシェフィールドを伴って自室へと戻るべく廊下を歩いていた。

「余の可愛いミューズよ」

「はーい」

「これでお膳立ては全て終わった」

「仰る通りでございます。ジヨゼフ様」

「ここからだ……ここからハルケギニアを巻き込んだ劇が始まるのだ。ミューズよ、最後まで余についてまいれ」

「ははっ。地獄の果てまでも陛下のお傍にいます」

「始祖ブリミルよ。六千年続いた貴様の天下も、我々の手で終わりを迎えるのだ」

見る者に畏怖を与えるその禍々しい笑いを浮かべながら、ジヨゼフたちは夜の闇の中へと消えていった。

秘めた恋と動き出した陰謀（後書き）

愛人追加。やりたい放題感たっぷりですが、いよいよ各国が動きを活発化し始めてきました。

これからもよろしくお願いいたします。

バスルーム・パニック！（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

バスルーム・パニック！（前編）

翌日から会議は行われることになったが、ほとんどが差し障りの無い内容ばかりだった。互いの国政の状況、目新しい産業についての話し合い、輸入品についての関税などがその主な内容に挙げられていたが、重要なのは会議ではなく会議の外だった。

トリステインの重臣たちは会議が終わると、毎日のようにヴァルデスとジョゼフのところを訪れて婚約のお祝いの言葉を述べていた。ジョゼフはこういうことにも慣れているため、非常に堂々としたものだったが、ヴァルデスは内心ではもううんざりとしていた。

理由は簡単である。ヴァルデスのところにやってくる重臣は表情こそ祝福しているが、その内心ではヴァルデスのことを探ろうとしているのがはつきりとわかっていたため、ヴァルデスはそんな彼ら辟易していた。

おまけに頼みもしないのに、毎晩宴会のように派手な食事が用意されており、トリステインの重臣たちもその席に同席しているのにも嫌気がさしていた。婚約自体は何の感慨も沸かなかったが、これだけは我慢という感情を覚えるくらい嫌なことだった。

この会議は最終的に一週間も続いた。その間にヴァルデスとイザベラとシャルロットの婚約話はどんな早馬よりもハルケギニア中を駆け巡っていった。

ハルケギニアの民はガリアとゲルマニアの同盟について様々な噂をばら撒いていた。両国が同盟を結んでハルケギニア統一を図っているなどの噂から、結託してロマリアに反旗を翻そうとしているな

どがあつた。さすがにロマリアへの反旗の噂については黙認できなかったが、それ以外の噂については基本的に黙認した。

これらの噂は広まれば広まるほど両国の同盟がどれほど世間に強いダメージを与えるか、ということを狙った両国のイメージ戦略の一つになっているからだ。今のところはその思惑通りに事が進んでおり、ゲルマニアとガリア両国は笑みを隠せぬほど喜んでいたが、トリステイン・アルビオンにとっては面白くないの一言だった。

そして、面白くないのはその両国だけではなかった。

「聖下、ゲルマニアとガリアの同盟をこのまま認めてよろしいのですか？」

宗教連合国ロマリア、小さな都市国家群の集まりで構成された国であり、ブリミル教の総本山としてハルケギニアで一番敬われている国である。ここは教皇を頂点に据え、神官や聖堂騎士たちが権勢を振るっていた。

そして、ロマリアの謁見の間では神官たちが教皇聖エイジス三十二世こと、ヴィットーリオに今回の婚姻について進言を行っていた。

「婚姻は正式に両国が承認したものです。反対する理由はないですよ。」

まだ歳若い青年だが、その纏う雰囲気には威厳を通り越して何か尊いものを纏っているような錯覚さえ覚えてしまう。それがこの宗教連合国ロマリアの教皇が代々持ちえてきたものだった。

「しかし、偉大なる始祖の血を引いているガリア王家の人間が始祖

の血を引いていないゲルマニアに嫁ぐなど……」

「ですが、このロマリアとて始祖の弟子であったフォルサテ様がお作りになった国です。厳密に言えば、始祖ブリミルの血を引いているわけではありません。我々がこの結婚に対して不服を申し立てることはできないでしょう」

「ですが……」

「我々は神に仕える身です。彼らの結婚を祝福することは出来ても、それを否定することは許されないのです」

神官たちは納得はしていないようだが、ヴィットーリオの言葉に何一つ間違いが無いのも事実だった。神官たちは苦い顔をして俯いてしまった。ヴィットーリオはそれをチャンスと見て謁見終了を宣言した。

「では、お話はこれで終了です。間もなく、子供たちが読み書きを教わりにやってくるので謁見はこれで終了です」

「……ははっ」

神官たちは恭しく頭を下げて謁見の間を後にした。彼らが部屋を出た後、柱の影から一人の男が出てきた。

「お疲れ様でした。 聖下」

「ジュリオですか」

両の瞳の色がそれぞれ違っているという珍しい瞳をしていたが、

間違はなくそのらの男とは比較にならないほどの美男子だった。彼はヴィットーリオの前に赴き膝をついた。

「彼らは自分が発言していることの危険性を理解しているのでしょうか？」

「彼らには彼らに信仰に従っただけのことです。それを責めることはやめてあげましょう」

「しかし、ゲルマニアとガリアの同盟は少々厄介ですね。いかがなさいますか？ 聖下」

「とりあえずは様子見といきましょう」

「よろしいのですか？」

ジュリオはヴィットーリオとの会話でも全く表情を変えていなかった。彼はヴィットーリオの忠実な腹心であり、ヴィットーリオの意思に沿うように行動してきた。そんな彼はヴィットーリオの言葉を素直に受け入れるだけで、その言葉に疑問を持つようなことは無かった。

「アルブレヒト三世はともかく、下手にこちらから手を出してジョゼフ王を刺激するようなことは得策ではありません。あの者は決して侮ってはならない人物です」

「心得ております」

「下手に藪を突いて蛇を出すよりは様子を見ましょう。アルブレヒト三世はロマリアと事を構えるつもりはないでしょうから」

「かしこまりました。聖下のお心のままに」

すると、謁見の間の扉が開かれ一人の聖堂騎士が入ってきた。

「失礼いたします。聖下、子供たちが来ました」

「わかりました。では、子供たちはいつもの部屋へ案内しておいてください。すぐに向かいます」

「かしこまりました」

聖堂騎士はそう言うと、敬礼をして謁見の間を出て行った。

「ジュリオ。とりあえず事を構えるつもりはありませんが、双方の動きをしっかりと監視しておいてください。何かあれば報告を怠らぬように」

「かしこまりました」

「それとガリアとゲルマニアに私の名前でお祝いのお書状を贈っておいてください。結婚式の際はご用命を、と一言を添えて」

「仰せのままに」

ヴィットーリオはジュリオにそれだけ言って謁見の間を出て行った。

「ハルケギニア最大勢力の誕生……ロマリアにとって、いや、ハルケギニアにとって大きな転換となるのか……」

ジュリオはそう呟くと謁見の間を後にした。

「久しぶりの学園だ」

ヴァルデスは久しぶりに戻ってきた学園を見てやっと息を抜くことができた。これまでのような顔色を伺うような連中がいないというだけでも、気苦労の面から言えばかなりの違いがあった。

しかし、久しぶりに戻ってきた学園も雰囲気はそれほどいいというわけではなかった。それもそうであろう、アルブレヒト三世の聖母イリーズが居座り、ヴァリエール公爵家次女のカトレアが治療のために滞在している。その護衛のために牙部隊が常駐しているということになれば、生徒たちの間に不安が広がるのは無理もないことだった。

「お帰りなさい。ヴァルデス殿」

「……只今戻りました。イリーズ様」

戻るなり満面の笑みを浮かべてヴァルデスを迎えたイリーズに対し、そのイリーズの笑みが帰って不気味に映り、ヴァルデスは苦笑いを浮かべながら挨拶を返した。

「あら？　元気ないわね、どうしたのかしら？」

「いえ。ちょっと疲れただけです」

「ふふふ。慣れない会議で疲れちゃったのね、よかったら私がマッサージしてあげましょうか？」

「いえ、それには及びません」

ヴァルデスはイリースの提案を即座にきっぱりと断った。下手にイリースに借りを作ることは後々に厄介なことになると、ヴァルデスの本能が告げていた。

「そう？　残念ね。でも、疲れを癒すのにもっといいものがあるわよ」

「いいもの？」

「そうよ、とってもいいもの。いらっしやい」

イリースが背後にある扉に向かってそう言つと、扉がゆっくりと開いた。

「おお……」

さすがのヴァルデスもそれを見て思わず感嘆の声を漏らしていた。イリースはそれを見て満足そうに微笑んだ。

「その……どうでしょうか？　ヴァルデス様」

扉の向こうにいた主、カトレアは恥らいながらそう言った。その姿はとて二十を超えている女性とは思えず、ヴァルデスからは自分より年下にさえ見ているほどだった。それに、カトレアの姿も最後に会ったときよりも幾分か血色もよくなっており、病は回復の兆しを見せているようにも見えた。

「いや……お綺麗です。カトレア嬢」

「ふふふ。どうやらヴァルデス殿の疲れも吹っ飛んだみたいね。いい夫婦になれそうね、二人とも」

イリーズは満面の笑みを浮かべて言ったが、ヴァルデスはカトレアの美しさがその一言で吹っ飛んでしまった。

「あの……イリーズ様、今夫婦と仰いましたか？」

「ええ」

「まさか……」

「よかったわね、ヴァルデス殿。奥さん四人に愛人一人、每晚選り取りみどり、三人四人でも楽しめるわね」

イリーズは明るい笑顔で子供を期待しているとヴァルデスに宣言し、それを聞いてヴァルデスは顔を青くしていった。その隣にいるカトレアは頬を朱に染めていた。

「あの、まさかカトレア嬢も……？」

「そう。ヴァルデス殿のお嫁さんよ。病の方ももう少しで完治するわ」

「あの、カトレア嬢はそのことを……？」

「勿論話しているわ。よかったわね、数ある貴族の中でもこれだけの美貌と素晴らしい体を持った奥さんは滅多にいないわよ」

「はあ……」

ヴァルデスはもうどうにもならないと諦めた。それより、将来の跡継ぎの心配をせずに済むことや美人の奥さんに囲まれた生活に希望を見出そうとさえ考え始めていた。

（よくよく考えれば、周りの男たちのように苦労せず嫁さんをもらせる分、恵まれているというのだろうか）

今まで恋愛や夫婦については考えてこなかったが、これを機に真剣に考えてみようと考え始めていた。ヴァルデスにとってはかなり大きな変化が心の中に生まれていた。すると、イリーズは小声で囁いた。

「体力もついたから最後までいつでも問題はないわよ？」

「神聖な学び舎で何をさせようとしているんです？」

さすがに周りの聞き耳を気にして、ヴァルデスも小声でイリーズに囁いた。イリーズは小さくため息をついてからこう言った。

「ヴァルデス殿、真面目なのは非常にいいと思うわ。でもね、学生

はもつと冒険するものだと思つのよ」

「真面目な学生を悪の道に引きずりこむでない。クソババア」

すると、その場にオールド・オスマンがやって来た。

「あら？ いたの」

「真面目な学生によからぬことを教えるでない」

「二人は夫婦になる間柄なのよ。そういうことがあってもいいと思わない？」

「場所を考えると言っているのじゃ」

「あら？ でも、学院内なら貴方の目の届かないところはないんでしょ？ 貴方も少しは楽しめるんじゃないか？」

「むづ……」

オスマンはイリーズに言われて少し考え込むような仕草を見せた。ヴァルデスはそんな様子に不安を覚えてすぐに言葉を発した。

「オールド・オスマン。何をお考えですか？」

「ミスタ・コーラッドや。古い先短い年寄りに楽しみのひとつがあつてもいいと思わないか？」

「残念ながら、私は欲深い人間です。自分の所有にしたものを他人の目に触れさせる趣味はありません」

「美しいものは皆で愛でようではないか」

「でしたら、ご自分の娘や孫娘さんで愛でてください」

「子供の頃に散々見慣れておるわ」

実に不毛な言い争いだったが、珍しくヴァルデスが必死になっているのはイリーズの目にとても面白く映った。

（ふふふ。少しずつだけど、夫婦になるという実感が出てきたってところかしら）

基本的に無欲なヴァルデスが、他人のことで必死になる。その構図はヴァルデスをよく知る者ならば俄かに信じられない光景であった。恐らく、こうしていい争いをしている本人にはその実感はないであろうが、イリーズはヴァルデスのその変化を心から喜んでいた。

一方、内容は実に子供じみているが、自分を守るために必死になってオスマンと言い争いをしている姿はカトレアにとっては非常に好感を上げるものと鳴った。そもそも、病気のせいで家から滅多に出ることもなく、知っている男と言えれば父であるヴァリエール公爵と使用人たちのみ。カトレアにとってそれらは家族であり、異性として意識する存在ではなかった。

だから、政略結婚とは言え、自分にとって最初に異性を意識させたヴァルデスが自分のために必死になってオスマンに抵抗している姿は、カトレアにとっては何処か英雄譚に出てくる勇者であり、自分には彼に救われるお姫様という構図が彼女の頭の中で描かれていた。

カトレアが異性との付き合いの経験がなかったがゆえの恋愛感であつたが、日頃手のかかる妹と意地っ張りな姉との間で大人として振舞っていた彼女だからこそ、そういうものへの憧れは強かつた。

「二人とも、不毛な争いはそこまでにしましょう」

イリーズは自分はまるで無関係だつたといわんばかりの表情で、二人の仲裁に入ってきた。そのイリーズをヴァルデスとオスマンはジト目で睨んでいた。

「イリーズ様、そもそもこれは……」

「私のせいだと言いたいのか？ 言い争いは二人が始めたことではない？」

「この性悪クソババアめが……」

ヴァルデスはこれといった被害はなかったが、オスマンは学院長としての面子を結果的にイリーズによつて潰されていた。もっとも、地位などオスマンにはさしたる価値も持つてはいなかったが。それよりもイリーズにしてやられたほうに悔しさが残っていた。

「まあまあ。積もる話は後にしましょう。それより旅の垢を落としてきたらどうかしら？」

「……では、そうさせていただきます」

旅から戻つて来たときよりずっと疲れを感じていたので、ヴァルデスとはとにかくこの場から離れたかつた。だから、イリーズの勧めを素直に承諾してその場を離れてしまった。

しかし、この中で唯一、イリーズをもっとも信用していない人物は彼女の企みに気がついていていた。

「お前さん、何を企んでおる？」

「ふふふ。ねえ、オスマン。円満な夫婦生活を送るために必要なことって何だと思っ？」

「何？ そうじゃな……やっぱり充実した夜の生活じゃな」

完全に下心丸出しの言葉だったが、イリーズはそれを聞いて更に口角を上げた。

「そのとおり。でも、そのための最初の一步は何かしら？」

「最初の一步とな？」

オスマンがそう言うと、イリーズは少し間を置いてから言った。

「円満な夫婦生活を送るための第一歩、まずは男と女は違う生き物だということを知ることよ。さあさ皆、集まって」

イリーズはそう言うとすぐに行動を開始した。オスマンは心の中でヴァルデスに対し、胸の前で十字を切って彼に降りかかる災いがせめて少なくなるようにと始祖に祈った。

バスルーム・パニック！（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

バスルーム・パニック！（後編）

「それにしても、イリーズ様にも困ったものだ」

ヴァルデスはまだ明るいため誰も入ってこない風呂を貸しきり状態で満喫していた。普段はたくさん生徒でこった返しているこの共同浴場も、こうして一人で入ってみると物凄く広い場所だということがよくわかった。

トリスタニアへは半日程度の道程なのでそれほど肉体的な疲れは感じていなかったが、向こうで味わった心労が洗い流されていく思いを感じていた。

（しかし、何でさつきはあんなに言い争ったんだ？）

ヴァルデスは先程のオスマンとのあまりにも幼稚な言い争いのことを思い出していた。普段の自分なら、承諾こそしないものもつと穏やかで、それでいて相手に一切の反論許さないようにして丸め込むことはできたはずだった。それなのに、どうしてあそこまで幼稚な言い争いなどというやり方をとったのか、ヴァルデスはそれがわからずにいた。

（少したるんできたかな……）

自分自身の再度の鍛えなおしを考えていたちょうどその時、浴室に入ってくる四つの影を見た。

「誰だ？」

生徒か男性職員の誰かだと思い、ヴァルデスはその姿も確認せずに訊ねた。

「……背中流しに来た」

「何!？」

聞きなれたその声に驚いて振り返ると、そこにはヴァルデスの婚約者四名がタオルを巻いた姿で控えていた。

「ここは男風呂だぞ」

ヴァルデスは今更言うまでもないことだと言わんばかりに冷静に努めた。しかし、四人の婚約者たちはこう返してきた。

「イリーズ様が」

「ヴァルデス殿は女性に免疫がないので」

「今のうちから」

「女を学ばせた方がいいと仰られました」

シャルロット、カトレア、エルティナ、ネージュは順番にそう言った。またしてもイリーズの策略にはまったことに、ヴァルデスは頭を抱えて大きくため息をついた。

「本気でそう思っているのか？」

ヴァルデスはとりあえず四人に引き下がってもらおう口実を探そう

と切り出したのだが、切り出し方がまずかった。この言葉に四人の婚約者たちはすぐに切り返しの言葉を掛けてきた。

「……女を知ってるの？」

「え？」

「今の仰り方ですとヴァルデス様は既に女性とそういう関係になったことがあるように聞こえますが……」

シャルロットとカトレアはそう言ってヴァルデスをじっと見つめた。別に悪いことをしているわけでもないし、そういう経験も全くないヴァルデスには落ち度はないのだが、こうして女性に見詰められることに妙な威圧感を感じて少したじろいでいた。

「あらあら？ ヴァルデス様は誰かそういう関係の方がいらっしやるんですかあ〜？」

「初耳です」

エルティナは明らかに事情を察していからかうように、ネージユは本気で信じきっているようで真顔でそう言った。この時のやり取りで、ヴァルデスは間違いなくイリーズのあの性格を受け継いでいると察した。

「うるさい！ そういうことがなくて悪いか!？」

ヴァルデスは今までの生涯で一番大きな声を出して開き直った。普段から冷静なところしか見たことがないシャルロットとネージユにはそれが現実とは信じられないくらいだった。どんな時でも冷静

沈着、それが二人が今まで見てきたヴァルデスという人間だからだ。

但し、これを見て一同が思ったことは同じだった。

((((可愛い!))))

普段冷静で感情を滅多に表に出さない男の意外な姿は、普段とのギャップが大きければ大きいほど女はそう思ってしまうものだ。こんな形でヴァルデスの今まで見たことのない一面を見ることになるとは思ってもよらなかったが、こういう一面があるというのは大きな発見だった。

「ふふふ。ヴェルデス様にも歳相応なところがあつたんですねえ」

「意外」

「ヴァルデス様、気にすることではありませんよ」

「可愛いです」

四者四様の言葉に、ヴァルデスはもう抵抗する気力もなくしていた。下手に抵抗すれば抵抗するほど泥沼にはまっていくような気がしていたし、口でこの四人に勝てるとは到底思えない。それほどヴァルデスは今のやり取りで憔悴しきっていた。

四人が四人とも目を輝かせてヴァルデスを見詰めており、できることなら今すぐにもこの場から逃げ出したいのがヴァルデスの本音だった。

「ところで、エルティナ」

「はい。なんですかあ？」

「その語尾を伸ばす話し方はなんだ？」

「はい。私って幼い頃からこうして話すのが癖になってるんです。だから、意識しないとちゃんとした言葉にならないんです。」

エルティナは最初に会った時から今に至るまでずっと笑顔を崩さなかった。だから、ヴァルデスも彼女の本音を表情から読み取ることができずにいたのですつと気になっていたのだ。ポーカーフェイスの笑顔版と言えわかりやすいだろうか、少なくとも彼女と初めて会う人の第一印象が決して悪くならないというものだった。

「なるほど……」

「そんなことより、せつかくこんないい女たちが揃ったんですよ。何か言うことはないんですか？」

エルティナはそう言って湯船の中に他の婚約者たちを伴って入り、ヴァルデスの前に一列になって整列した。

（確かに全員見事だが……）

カトレア、エルティナ、ネージュは間違いなく十人が十人とも振り返ってしまうほどの美貌と肉体の持ち主である。特に三人の中ではカトレアが胸の大きさで一番だった。シャルロットは体の凹凸こそ三人には及ばないが、元々小柄なので、未成熟な体がむしろちょうどいいバランスに思え、肌の色が四人の中では一番白く透き通っていた。

(よくよく考えれば、全員が全員、もつといい縁談だつてあるんだろっな)

ヴァルデスは四人をじつと見詰めてそんなことを考えていた。彼がそんなことを考えていることを知らない四人は、ずっと自分たちを見詰めているヴァルデスの視線にさすがに気恥ずかしくなった。

「どうしたんですかあ〜？ ヴァルデスさまあ〜？」

「さ、さすがに少し恥ずかしいですね」

「そ、そうですね」

「……(照)」

四人のその反応を見て、我を取り戻したヴァルデスは慌ててこう言った。

「あ、ああ。四人とも綺麗だ。うん」

明らかに素の状態を曝け出したヴァルデスの言葉に四人は満足の表情を見せた。すると、シャルロットとカトレアがヴァルデスの隣に、エルティナとネージュが向かい合うように座った。意識してなのかしていないのか、シャルロットとカトレアはヴァルデスと腕を組んで自分の体に押し当てるような体勢をとっていた。

「お、おい……」

「何？」

「こんなにくつつく必要があるのか？」

「ある」

「夫婦になるのですからスキンシップは大切ですわ」

ヴァルデスの問いに対し、シャルロットとカトレアは即座にそう答えた。

「しかし、いきなりでこういうのはいいのか？」

「あら〜？ ヴァルデス様って意外と初心なんですわ〜」

「とつても可愛いです」

ヴァルデスはもうこの四人全員が醸し出す雰囲気にかけてしまっていたが、この雰囲気を作り出しているのはエルティナだということに気づいていなかった。エルティナの天然が、ヴァルデスの状況をどんどん追い込んでいっていた。頭をかきむしり、頬を朱に染めているその姿に、最早普段の彼の面影はなかった。

「あら〜？ どうせだったらこれ取っちゃいましょうか〜？」

エルティナがタオルに指を引っ掛けて外すような仕草を見せた時、さすがのヴァルデスももう限界だった。

「これ以上は付き合いきれん！ 出るぞー！」

ヴァルデスが湯船から勢いよく出ようとすると、傍にいた二人が

その手をしっかりと押さえて、彼を再び湯船の中に引き摺り下ろした。

「駄目」

「まだお背中をお流ししておりませんわ」

シャルロットとカトレアは努めて平静を装った声でそう言ったが、その表情が声色にあっておらず、必死で笑いたいのをこらえていると物語っていた。また正面にいるエルティナとネージユも同様に顔を背け、全身が震えていた。

「何がそんなに可笑しい？」

ヴァルデスは無然とした表情で四人に訊ねた。それぞれが笑いたいのを必死にこらえており、代表してカトレアが答えた。

「そ、そんなことありませんわ。それよりもお背中をお流しいたしますから湯船から出てください」

「……わかった」

ヴァルデスは促されるまま、しぶしぶ湯船から立ち上がり、湯船のふちに座った。

「あ……」

「まあ……」

「あら〜」

「……ご立派です」

四人はまた四者四様の感想を述べていた。全員の視線はヴァルデスの鍛え上げられた肉体に注がれていた。

「どうした？」

「殿方の裸を見るのはこれが初めてなので少々驚いてしまいました。とても鍛え上げられているんですね」

他の女性陣の目から見れば、同性のネージユはかなり鍛え上げられているという印象を抱いていたが、男であるヴァルデスはそれとは比較にならないほどごつごつとしており、筋肉が盛り上がっていた。全く未知のものを見ているようで、四人は感動にも似た感情を抱いていた。

「魔法衛士隊にいたんだぞ？」

「でも、立派」

「はい」。何処に出しても恥ずかしくない立派な体ですよ」

「お見事です」

ヴァルデスの言葉に、シャルロット、エルティナ、ネージユがそう答えた。自分から見ればそれほどではないと感じていたが、女性の目とはまた違うものだと思っただ。

(俺から言えば四人とも見事なだけだな)

むしろ、今日の前にいる四人のほうが目を楽しませるといった意味ではもっと凄いなと思った。

「さて、ではお背中をお流しいたしますね」

四人も湯船から出て、用意してきた石鹸をタオルにこすり付けて泡立てた。ちなみに、この石鹸というのも決して安いものではない。品質にはピンからキリまであるが、貴族が使うのは品質の高いものがほとんどであり、中には一つで平民の家族が一月生活できるものもある。

まずはシャルロットから背中を流し始めた。このあたりは側室内での身分の近いというものがそのまま順番に当てはまっている。ガリア王家の姪であるシャルロットが一番、ヴァリエール公爵家令嬢のカトリアが二番、アルブレヒト三世の娘であるが、非公式の愛人の子供であるためエルティナが三番目になり、最後に愛人のネージユということになる。このあたりは女たちの間での暗黙の掟として絶対不可侵のものとされていた。そのヒエラルキーを侵した者に対しては女たちも容赦しない。女の嫉妬は時に男の権力闘争よりも怖い。だから、夫であってもこれに関してだけは絶対に口出しすることは許されず、あのアルブレヒト三世でさえ、それに関しては何ら注意を払っていた。

「傷が多い」

「え？」

背中を流していたシャルロットは、ヴァルデスの全身に細かな傷がたくさんついていることに気がついた。どれも最近ではなく、か

なり前についたものばかりだった。

「ああ、昔についた傷だ」

「敵との戦いで？」

「それもあるが、ほとんどは訓練でついたものだ。子供の頃についてやつが多い」

「子供の頃？」

ヴァルデスは幼い頃よりずっと訓練を積み重ねていた。記憶はあれど体はゼロから鍛えなおし。その現実差を埋めるべく必死になつて努力したため、子供の頃はいつも生傷が絶えなかった。それが今でも痕となつて残っているのだ。子供の頃はそれなりに大きかった傷も、体が成長していくにつれてそれほど目立たないくらいの大きさになったが、数が多かつたために近くで見るとかなり酷く見えていた。

「ま、昔からやんちゃだったというだけだ」

いちいち説明するのが面倒なのでヴァルデスはその一言だけで片付けた。

「そう」

思っていた以上に広く、ごつごつとしたヴァルデスの背中をシャルロットは丁寧に洗った。生まれて初めて洗う他人の背中はとても広く頼もしさを持っていた、そのことがシャルロットにはとても嬉しく感じられた。

「シャルロット様、そろそろ私たちにも譲ってくださいませ」

後に控えていた三人がそう言うと、シャルロットは名残惜しそうにタオルを渡した。いくら王族であつても同じ男の側室である以上、そこには最低限守らなければならないマナーがある。シャルロットもそこはよく理解していた。

カトレア、エルティナ、ネージュと三人が順番で背中を洗い、最後のネージュが泡を洗い流した。

「お疲れ様でした」

「ありがとう」

ヴァルデスはその時、ふと思いついた。

「せっかくだ。礼代わりと言ってはなんだが、俺も背中を流そう」

何気なく行つたヴァルデスの提案に四人は驚きを隠せなかった。奉仕するべきヴァルデスからそのような提案が行われるなどは考えもしなかったからだ。特に彼との付き合いが長いシャルロットやネージュにとっては天地がひっくり返るほどの驚きだった。

四人にはそれは嬉しかったが、それを素直に受け入れるわけにはいかなかった。

「ありがとう。嬉しいけど……駄目」

「どうしてだ？」

「ヴァルデス様。私たちの事をお気遣い下さって本当に嬉しく思います。でも、今はその提案を受け入れることはできません」

「ここにいるのは側室である私たちだけ。正室であるイザベラ様を差し置いてヴァルデス様の寵愛を受けるわけには参りません」

「我々には奉仕する義務がありますが、ご正室であるイザベラ様がまだ受けておられない寵愛をいただくわけには参りません」

エルティナが語尾を伸ばす言葉遣いではなく、真摯な目で見詰めてまで言うことなのでヴァルデスもそれ以上は何も言わなかった。結婚について何も知らない自分よりも、彼女たちの方が色々詳しくそうだと考えていた。

「わかった。余計な気を遣わせたな」

「気にしなくていい」

「私たちへのお心遣い。いたく感激いたしました」

「はい。きつといい旦那様になると思いますよ」

「ありがとうございます」

四人はそう言ってヴァルデスに向かって深々と頭を下げた。ただお礼のつもりで言った言葉でここまで恐縮されるとは思いもよらなかった。ヴァルデスは結婚することの難しさと、女性の立場関係というものを認識させられた。

「……先上がるぞ。ゆっくり浸かっていけ」

「わかった」

「はい」

「わかりました」

「はい」

ヴァルデスはそう言って一人浴場を出て行った。残された四人はヴァルデスの姿が見えなくなった後、お互いの顔を見合って笑った。

こうして、円満な夫婦への第一歩は踏み出されたのだが、この様子をこっそりと見ていた人物が二人いた。

「あはははは！ いやー、面白かったわね」

学院長室にある遠見の鏡、普段は浴室を覗くことはできないのだが、イリーズはオスマンですらわからぬやり方でその覗きに成功していた。そして、その様子を見て大笑いしていた。

「悪趣味としか言えんな」

「あら？ 貴方にだってちゃんと見せてあげたじゃない。なかなかいい眼福になったでしょう？」

「確かに……いや、そうでじゃなくてじゃな。ミスタ・コーラッドが余りにも不憫じゃと言っておるのじゃ」

「どうして？ あれだけの綺麗な子に囲まれるなんて男としての夢じゃない」

「ミスタ・コーラッドにとってお前さんというクソババアが祖母としていることが何よりの不幸じゃ」

「あら？ じゃあ、被害者の会でも作って彼を守ってあげる？ それとも傾向と対策を教えてあげるのかしら？」

「……性悪ババアめ」

オスマンはそう言っただけで苦々しい表情を作り、世の中でもっとも最悪な人間の孫になってしまったヴァルデスにご愁傷様の一言を贈った。

「オスマン。これから面白くなるわよ、この世界」

「どうするつもりじゃ？」

「ゲルマニア・ガリア連合から始まって、世界は大きく変わるわ」

「そして、連合はガリアを飲み込んでゲルマニアが頂点に立つというわけか」

「あら？ どうしてそう思うのかしら？」

イリーズは悪戯っ子みたいな楽しそうな笑みを浮かべてオスマンに訊ねた。

「ガリアは確かにハルケギニア最大の国土を誇る国家じゃ。じゃが、

いくら始祖の血を引いているとは言え、ガリアにいるのは女だけじゃ。どうしても、男がいるゲルマニアのほうが優位に立つことになる。ゲルマニアが彼を手放すようなことをしなければ、イザベラ姫との間に出来た子供がガリアを継ぐことになり、ミスタ・コーラツドが父親として、その子供を通じてガリアを支配することが出来る。そして、ゲルマニアはガリアを追い越してハルケギニア一の国家になるというわけじゃ」

「なかなかいい勘をしてるじゃない。でも、それはまだ正解の半分ってところね」

「正解の半分じゃと？ これ以上何を仕出かすつもりなんじゃ？」

「それは本番のお楽しみよ。見てなさい、これからが面白くなるんだからぽっくり逝っちゃうんじゃないわよ。クソジジイ」

「余計なお世話じゃ、クソババア」

イリーズの思わず見とれてしまうような妖しさを持った笑みに、不安を感じずにはいられないオスマンだった。

バスルーム・パニック！(後編) (後書き)

ちよつとしたお色気イベントでした。
これから原作に向かいます。

嵐の前（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

嵐の前

「辞めた？」

「ああ。辞めたんだ、転校じゃない」

あの会議から数カ月後、学院から少し離れた場所にゲルマニア・ガリア双方の出資で仮住まいの屋敷が作られた。周りの警備は物凄く厳重であり、何人もの兵士が見張りをしていた。

ちなみに、これらの兵士はゲルマニアとガリアから募ったものだが、彼らの総指揮はネージユが担当していた。ヴァルデスの愛人ということで、最初はただ立場の違いから不服はあっても文句が言えずにいるだけのガリア兵たちも、ネージユの実力と指揮能力の高さを見たことによって今ではちゃんと一致団結して仕事に向かうようになっていた。

屋敷が完成し、ガリアからイザベラもこのトリステインにやって来ていた。その際にリュティスの魔法学院からの転校という扱いになっているものとはかり思っていたヴァルデスだったが、退学したという言葉聞いて驚きを隠せなかった。

「そもそも、エレーヌの正体もわかった今、私があそこに行くのは面倒以外の何物でもないだろ」

「それはそうでしょうが、よろしいのですか？」

「構いやしないさ。どうせ数週間後には挙式を上げて、晴れてあんなの妻になる身だ。妻としての義務を全うする方を選んだだけさ」

イザベラは退学などなんて事はないといわんばかりの晴れやかな表情だった。ある意味、この豪胆なところは父であるジョゼフによく似ているとヴァルデスは常々思っていた。

「しかし、僅か二年のためにこんな屋敷を作ってよかったですか？」

近くに控えていたカトレアがイザベラに訊ねた。

「別荘って形にしても使えるからね。都会の喧騒を離れた隠れ家としてはもってこいじゃないか」

「なるほど」

「それにここならば、余計な邪魔者が来ることもないだろうからじつくりと腰を据えて子作りに励めるじゃないか」

「まあ……」

さも当然といわんばかりのイザベラの発言に、カトレアは頬を朱に染めた。ちなみに、この場にいるのはイザベラとカトレアとエルティナだけであり、シャルロットは学院で授業を受けており、ネージユは外で警備たちの指導を行っていた。イザベラがガリアから来た時点で彼女は牙部隊の隊長の任を解かれ、ヴァルデスの専属護衛という形で傍にいた。もちろん、彼女が愛人であることは公然の秘密である。

「イザベラ様、一応私も学院に通っておりますのでよろしければ今からでも……」

「いいよ、面倒くさい。それより、あんたは私の夫になる男だ。様なんてつけるんじゃないよ。呼び捨てにしな、呼び捨てに」

「じゃあ……イザベラ」

ヴァルデスがそう呼ぶと、イザベラは満足そうな笑みを浮かべて聞き返した。

「何だい？」

「俺が魔法学院に行っている間はどうするんだ？」

「好きにしてるさ。元々、ガリアでも親父が全部色んなことをやってるから、私には何も回ってこなかったからね。あんたが帰ってくるまでに手習いの一つでも始めてみるかね」

「例えば？」

「そうだねえ……料理なんて面白いかもしれないね」

ヴァルデスはそう言われて、イザベラの料理する姿を想像してみた。白いエプロンに身を包み、鍋やフライパンの前に立って煮たり炒めたり、味を見て「美味しい」と言葉を発する彼女、どう考えてもイザベラのイメージに合わなかった。どちらかと言うと、書類を前にして決裁の判子を押したり、部下を呼んで書類の不備などを怒鳴っている、その方がイザベラのイメージにぴったりではないかと考えた。

「あんたをあつと言わせる料理を作って見せるから楽しみにしてお

くんだね」

「あ、ああ。楽しみにしておくよ」

「それにしても、病弱だつて聞いていたのに随分元気そうじゃないか？ カトレア」

「イリーズ様の治療のおかげでございます。今ではこうして自由に動き回れるぐらいになりました」

カトレアの治療は屋敷が完成する少し前に終わっていた。現在はイリーズが残っていた体力づくりのプランに従って日々を過ごしていた。

「ゲルマニアの魔女もなかなか優秀つてことかい」

「あの方とも親戚ということになるんですけどね」

ヴァルデスは自分で口にしたその事実、心の中で大きくため息をついていた。もっとも苦手な人物と親戚関係になったことで、これまで以上にイリーズと関わり合いをもたなければならぬという事実、絶望に近いものを抱いていた。

「まあいいさ。それより、このたぐさんの動物は何だ？ 犬や猫はともかく、何で熊や梟までいるんだい？」

「あらあら。お部屋から出てきちゃったの？」

カトレアはそう言うと、動物たちのところに向かった。動物たちもカトレアの周りから離れようとはせず、寄り添いあっていた。心

なしかイザベラにあまり近寄ろうとしないように見えたが。

「カトレア、お前が飼っている動物なのかい？」

「はい。お屋敷にいたのですがどうしても離れたくないと言つので……」

「私はあんまり動物が好きじゃないからね、追い出しはしないけどしっかりと面倒は見るんだよ」

「はい、ありがとうございます。さあ、お部屋で待っていてね」

カトレアがそう言うつと動物たちは一斉に部屋へと戻っていった。その姿はさながら動物使用のように二人の目には映っていた。

「ところで、イザベラ様。ヴァルデス様とシャルロット様が学院に行っている間はどうかおつもりですかあ？」

「そうだね……屋敷に籠っているというのも退屈だね」

エルティナがそう言うつと、イザベラは少し考え込むような仕草を見せた。

「でしたらあ、転入はともかくとして、学院の見学に赴くというのはいかがですかあ？」

「見学？」

「はい。名目は浮気調査とでもしたらいかがですかあ？ 奥さんである私たちが行くということになれば問題ないと思いますし」

「それは面白いねえ……」

イザベラはそう言って微笑んだ。正直なところ、この場にいる全員がヴァルデスの浮気など全く心配もしていないのだが、退屈し過ぎに行く理由付けとしては上等だと踏んでいた。

「そんなに面白いものでもないとおもぅが……」

「ヴァルデス様あゝ、そんなデリカシーのないことを言っただけですよあゝ」

「何？」

「愛する旦那様と一緒にいたいというものが女心というものであゝ。だから、ここは堂々とそれを受け入れるのが夫としての度量というものですよあゝ」

「そういうものなのか？」

「そういうものですよ。あなた」

エルティナの言葉にカトレアも同意したので、ヴァルデスはとりあえずその提案についてはこれ以上文句を言うことはしなかった。

「では、そのお話はそこまでにして結婚式についての話し合いもしましゅか」

そう、そもそもヴァルデスが学院を休んでいるのは、近く迫った結婚式について色々決めなければならぬことがあったからその

相談のためだった。シャルロットも当事者ではあるのだが、この場合は側室のシャルロットよりは正室のイザベラの方が重要なので、この場にいる必要がないのでいつもどおりに学院に通っていた。

「式はガリアで行うって事に決まったよ」

「イザベラ様とシャルロット様の故郷ですものね。納得しております」

「ただ、ちょっと厄介なことがあるんだよね」

「厄介なことって何ですかあ〜？」

「結婚式の司祭なんだけど、どういうわけかロマリア教皇自らが出張ってくることになったんだよ」

イザベラはうんざりといわんばかりの表情でそう言った。

「でも、ガリア王家のイザベラ様とシャルロット様なら充分にありうることはないでしょうか？」

「だが、ここ数百年は教皇自らが結婚式を取り仕切るなんてことはどの国の王家の婚姻でもなかったことだ。教皇がロマリアから出てくるってことでガリアもゲルマニアも色々と迎える準備で大慌てだよ。教皇が出張ってくるってことで、招待客の数もかなり多くなりそう。挙式の費用がゲルマニアとの折半とはいえ、色々と面倒なことになりそうだ」

「でも、何で教皇様がわざわざ？」

「恐らく、ゲルマニアとガリアの様子を直接見たいと考えたんだろ
うな。両国が血縁による同盟を結ぶことによる周辺諸国への影響や、
トリスティン、アルピオンなどの動向もしつかりと押さえておきた
いというのが狙いだろ」

「ガリアとゲルマニアが手を組んだら、さすがのロマリアもその影
響を受けるのは避けられないからね」

イザベラもその理由についてはヴァルデスと同じ考えを持ってい
た。元々、魔法の才能もそうだが、頭の回転の速さもジョゼフ譲り
のものをイザベラは持っていた。

「ですが、宗教国であるロマリアが我々の結婚による影響を気にす
る必要はないように思えますが……」

「甘いね。ロマリアほど金と欲にまみれた連中がいる国はないね」

「ああ。神官たちはお布施と称して金品を要求していて、拒むもの
なら始祖の名を騙って異端だと脅しをかける。だから、新教徒がそ
の是正をしようと動き出している有様だ。ロマリアも一枚岩という
わけではないということだ」

「始祖様がお聞きになられたら、さぞお嘆きになるでしょうね」

結局、ロマリアも他の国とそれほど変わらないのだ。宗教国とは
名ばかりで、国際情勢を一番気にしているのはロマリアなのだ。始
祖の威厳で周りの国々より上に立っているだけの国であり、国力は
どの国よりも低いのが現状だ。今までは周辺にある小さな国々が同
盟を結んで大国に飲まれないようにするというのがせいぜいだった
が、ガリアとゲルマニアほどの大国同士の間盟ともなれば現状は大

大きく変わってしまう。

宗教国を名乗るロマリアは政治的活動を行うことは出来ず、ましてや他国と同盟を結ぶことなど出来ないのだ。ロマリアが他国と同盟を結べば、中立性は失われることになり、六千年もの間保ってきた宗教国としての信頼は一気に崩壊してしまうからだ。だからこそ、国家情勢に関してはどの国よりも一番気にせざるを得ないのだ。

「まあ、残念なことに死んだ人間の言葉を聞いたことのある生きた人間はいないからな。始祖がどう思っていようと誰も知ることは出来ない」

「だから、生きている人間は現実の都合を最優先させるってわけさ」

ヴァルデスとイザベラはそれが世の中の真実だ、と言わんばかりの表情で言い切った。こういうところでは非常に気が合っており、似合いの夫婦だと周りは思っていた。

「とにかく、教皇が来ることはもう決定事項なのだから仕方がない。その場合、式はどういうことになるんだ？」

「まずは私とあなたの式だね。その次にエレノアとあなたの式、ただカトレアたちの式についてはどうなるか……」

ガリア王家であるイザベラやシャルロットが教皇に祝福を授けてもらう資格はあるが、カトレアやイリーズにはその資格がない。だから、教皇を司祭として行う結婚式はイザベラとシャルロットだけしか行えないのだ。

イザベラが厄介と言ったのはそのあたりのことが理由なのだ。普通の司祭ならばちゃんと全員分の結婚式を行うことは容易のだが、

相手が相手だけにただの側室のための挙式を挙げてくれなどは口が裂けても言えないのだ。

「私たちは構いませんわ」

「そうですね。私なんて式を挙げてお父様に挙げてなくても、お父様にはどっちでもいいと言われると思いますし」

カトリアはともかく、エルティナの発言にはかなり問題があるよ
うな気がしていたが、父親があのアルブレヒト三世ならば仕方がな
いとヴァルデスは思うことにした。もちろん、二人には後でちゃん
とした式を挙げてやろうとヴァルデスは決めていた。

「すまないな」

「気にしないでください、あなた」

「そうですね。式なんて形だけのもの、愛さえあればそれでい
いんです」

「そういうわけにもいかないだろ。あんたたちだって大貴族の娘な
んだから、後でちゃんとした結婚式を用意するよ」

ヴァルデスを気遣って言う二人に、イザベラも二人のことを気遣
ってそう言った。何だかんだ言っても、この夫婦は上手くいって
いる様子がこのやり取りだけでも窺えた。

「お心遣い、ありがとうございます。イザベラ様」

「気にしないでいいよ。ま、結婚式の細かな段取りについては教皇

が来てからということになるだろうけどね」

「わかった」

ヴァルデスはそう言つと席を立ち上がった。

「何処へ行くんだい？」

「一応、学院に顔を出してくる。お前たちはどうする？」

「今日はいいや」

「私も家におります」

「いつてらつしゃいませ」

三人はそれぞれの言葉でヴァルデスを見送り、彼は馬車に乗って魔法学院に向かって走っていった。

「やれやれ、あいつも皇太子になるんだから学院に行く必要なんかないというのに……」

「生真面目な方なのですよ」

「でも、その方が旦那様らしいですよ」

女三人が残され、侍従に紅茶とお菓子を頼んで、結婚式の相談はティーパーティーへと装いを変えた。

「ところで、あなたたちはヴァルデス以外の男と付き合ったことは

あるのかい？」

女たちの会話は自分たちの過去の男関係が話題に上っていた。

「私はずっと病弱で家にいましたので、お父様やその家来の方以外とはお会いしたことがないのでお付き合いはしたことはありません」

「私は秘密です」

意味深なエルティナの発言に、二人の注目が集まった。

「何だい？ 昔、他に男がいてそれをあいつに知られたくないってことかい？」

「うふふ、実は……」

「「実は？」」

男も女も、異性についての話題だと会話が自然と弾むものだ。特に異性との付き合いが全くないまま結婚という運びになった二人には、これ以上興味をそそるものはなかった。

「何にもないんです」

「殺すよー！」

「あらら、何を期待していらっしやっただんですか？」

「……」

「まあまあ、イザベラ様」

怒りを露にするイザベラをカトレアが必死に宥め、それを見てエルティナが楽しそうに笑っていた。

「まったく……。でも、カトレアはともかく、エルティナは少しくらいはそういうのがあるかと思っただけだね、本当のところはどうなんだい？ 別にあいつに言わないから本当のことを言っただらなよ」

「本当に何もありませんよ。私生児でも一応は皇帝の娘ですから、人前に出してもらえなかつたんですよ。だから、私のことを知っている人なんてほとんどいないんですよ」

「ま、それもそうか」

「だから、一番私と付き合いが長いのって皆さんなんですよ」

イザベラとカトレアも大貴族・王族の娘としてあまり自由の利かない生活をしていたが、公になっている二人よりも、その存在そのものが秘密になっていたというエルティナが人前に堂々と出れる生活を送れたはずもない。そう考えれば、この中で一番不遇な境遇に立たされながら生きてきたのはエルティナであり、二人はエルティナに少し同情の気持ちを感じえなかつた。

「ま、そういうことにしておくよ」

「はい」

「さてと、これから何をしようかね？ あいつもいないからからかう相手がいなくて退屈だね」

「あら？ イザベラ様にはしなくてはならないことがあるではありませんか？」

「はい。とつても大事なことがありますよ」

「ん？ 何だい、そりゃ？」

イザベラはそれが何だかわかっていなかったが、カトレアとエルティナは互いに小さく笑みを浮かべていた。

「イザベラ様がすべきことは……」

「夜に備えて玉のお肌に磨きをかけることですよ」

「なっ!？」

「あ、イザベラ様、顔が赤くなってますよ」

「う、うるさい！ 黙ってな！」

顔を赤くしてそっぽを向くイザベラを見て、二人は顔を見合わせて笑った。

何事もない、平和な日常的一幕だった。

春の使い魔召喚の儀式（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

春の使い魔召喚の儀式

「何だか騒がしいな」

ヴァルデスが魔法学院に着いた時、ヴェストリの広場では何やら生徒たちが騒がしくしていた。気になってその輪の中にヴァルデスも入ってみた。

「あ、ヴァルデス様」

生徒たちのほとんどはヴァルデスを見ると敬称をつけて呼ぶようになっていた。正式に婚約が結ばれ、王族の一員となったヴァルデスに対して貴族が対等な口を利くわけにはいかず、ヴァルデスと親しくしている生徒以外は彼にあまり近づこうともしなかった。

今日は二年生に進級するための使い魔召喚の儀式が行われていた。ちなみに、ヴァルデスも以前のままならばこの儀式には参加しなければならなかったが、王族となったため、それは免除されており、先日に行われた筆記試験と実技試験での成績で進級が決まっていた。

王族が使い魔召喚の儀式を免除された理由としては、王族が使い魔を連れて歩いていると仕事にならないことが多いからだ。それゆえ、使い魔の召喚を免除されることになったのだ。シャルロットもそうなのだが、本人は別に気にしないとのことなので今日のこの儀式に参加していた。

「何かあったのか？」

「そ、それが、ルイズが平民を召喚したんです」

「平民を？」

ヴァルデスはそれを聞くと一番最前列に行った。

「本当だ……」

そこには今までに見たこともない衣服を纏った黒髪の男がいた。身長はヴァルデスとさほど変わりないように見えたが、その容貌がちよっと幼く見えたのでヴァルデスは彼が自分よりも年下だと思っていた。

「ヴァルデス」

「シャルロット。いったいどうしたんだ？　これは」

ヴァルデスの姿を見つけて、シャルロットがやって来た。婚約が正式に決まってからシャルロットは偽名であったタバサではなく、本名であるシャルロット・エレーヌ・オルレアンを名乗っていた。それに伴い、周りの生徒もヴァルデスと同様にシャルロットのことも敬称をつけて呼んでいた。

「ルイズが召喚の儀式で彼を呼んだ」

「人間を使い魔召喚の儀式で呼んだ？」

「そう」

ヴァルデスは少なくとも人間を使い魔にしたという例は未だかつて聞いたこともなかった。奴隷という制度ならば聞いたことがある

が、使い魔とした文献など何処にも残っていなかった。

「見たところ、東方の人間みたいだな……」

「東方？」

「あんな黒い髪の人間、この辺りでは滅多に見ない。東方の人間だということとは推測に過ぎないが……。それよりも……」

「何？」

「彼が着ている服だ。見たこともないデザインだし、素材もよくわからない。なかなか面白いとは思わないか？」

ヴァルデスは周りがルイズのことを囁し立てていたが、彼はルイズよりも召喚された平民に興味を持っていた。一方、ルイズは担当教官だったコルベールに対して儀式のやり直しを求めている。

「ミスタ・コルベール！ 儀式のやり直しをさせてください！」

「それはできません、ミス・ヴァリエール。この使い魔召喚の儀式は神聖なものであり、この儀式で召喚された使い魔は生涯を共にするパートナーです。やり直しなどはありません」

「そんなあ……」

ルイズは召喚された彼に対して不満を持っていたようだが、コルベールによって儀式のやり直しは出来ないと言われて頂垂れていた。その間、彼は聞いたこともない言葉で何かを訴えていたようだったが、残念ながら誰にもそれは理解できなかった。

「仕方ないわね……」

ルイズはそう呟いて、彼と向かい合った。

「いい？ 平民が貴族にこんなことされるなんて光栄なことなんだからね」

ルイズは羞恥心を抑えるべく自分自身を誤魔化すようにそう言っていたが、残念ながら彼にはその言葉も通じていなかったらしい。何を言われたかわからない、といった感じのきょとんとした表情をしていた。

「……我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン、彼の者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

短く呪文を唱え、ルイズは彼の唇に自分の唇を重ね合わせた。彼は驚きのあまり目を見開いていたが、ルイズは目を閉じており、やがてゆつくりと彼から唇を離れた。

「お、おい！ いったい何を……！」

この時、彼は初めてヴァルデスたちにもわかる言葉で喋りだしたが、次の瞬間には苦悶の表情と呻き声を上げ、左手を押さえていた。

「な、何だ……！ 痛え……！」

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ。しばらくすれば終わるか

「我慢しなさい」

他の使い魔たちはルーンを刻まれている間も平然としているので、ルーンを刻む作業は大したことないと思っていたのだが、この苦悶の表情を見てヴァルデスはその考えを改めていた。

「はあ……！ はあ……！ はあ………！」

「どうやらコントラクト・サーヴァントは上手くいったようですね」

コルベールはそう言って彼の左手に刻まれたルーンを見た。

「ほう……珍しいルーンですね。後で少し調べてみましょうか」

コルベールはそう言って彼に刻まれたルーンを手早くスケッチブックに写した。

「さあ。では、これで全員が終わりましたね。教室に戻りますよ」

コルベールがそう言うと、彼を含めた生徒全員がフライで飛んでいった。

「と、飛んでる！ 飛んでるよ、あいつら！」

「メイジなんだから飛ぶのは当たり前でしょ。あんた、メイジを見たことがないの？」

驚いている彼に対して、ルイズは呆れ気味にそう言った。

「メイジ？ メイジってなんだよ？」

「メイジを知らないの？ あんた、何処の田舎から来たのよ？」

「田舎じゃねーよ。日本の東京だ。超都会だ」

「聞いたことないわ」

ルイズと彼は互いに全然会話が噛み合っていなかった。ヴァルデスはそんな彼の会話を注意深く聞いていた。

（聞いたことない単語ばかりだな。……面白い）

ヴァルデスは見たこともない出で立ちをしていて、聞いたこともない単語を発する彼に興味を抱いていた。基本的に無関心である彼が興味を持つことは珍しいことだった。

「ルイズ、少し落ち着いたらどうだ」

互いの主張ばかりを繰り返していて、全然進展しない会話を見てヴァルデスが口を挟んだ。

「……何でしょうか？ 殿下」

ルイズもまた、自分の姉であるカトレアと結婚するヴァルデスとは義理の兄妹という関係にあるのだが、ゲルマニア皇太子という彼の立場を考慮して、いつもそう呼んでいた。また、ヴァルデスもルイズがカトレアと自分の結婚をあまり快く思っていないことを知っていたので、敢えてそれについては何も言わずにいた。

「お互いに話が全くかみ合っていない。彼は俺が面倒を見るから」

度教室に戻って授業の続きを受けて来い」

「ですが、殿下も同じではないのですか？」

「俺は元々欠席ということになっている。行く必要はない、授業が終わるまでは俺が彼の面倒を見ておくからさっさと行って来い」

「……わかりました。では、よろしくお願いいたします。殿下」

ルイズはそう言ってヴァルデスに一礼して教室に向かって歩いていった。

「なあ」

すると、彼がヴァルデスに向かって話しかけてきた。

「ああ、何だ？」

「ここはいつたい何処なんだよ？ さっきの奴はこっちの言うことを全く聞かないし……」

「ここはトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院だ」

「……トリステイン？ 魔法学院？」

彼はヴァルデスの言っていることが理解できないでいるようだ。た。というよりは、何だかヴァルデスを妙に優しい目で見ていた。

「どづした？」

「あの、ここは映画の撮影かなんかですか？」

「映画……とは何だ？」

「またしても聞いたことのない単語にヴァルデスは、彼に対してより興味を強めていた。」

「映画を知らないのか？」

「生まれて初めて聞いた単語だ」

「マジかよ……」

「マジ……とは何だ？」

彼はヴァルデスの真面目な態度を見て、嘘をついているようには見えなかったので大きいため息をついて頂垂れた。

「ところで、先程のルイズとの会話で日本とか東京とか言う言葉が出ていたが、日本とはお前の国で東京がお前の住んでいる地名か？」

「ああ。なあ、本当に知らないのか？ 日本って言えば世界でも有数の先進国なんだぜ？」

「ほう……そんなに発展している国なのか？ だが、残念ながら聞いたことはないな。それより、ガリア、ゲルマニア、ロマリア、アルビオンなどの国の名前は聞いたことはないか？」

「……聞いたことない」

「そうか……」

彼が地面に座ったので、ヴァルデスもそれに付き合っただけで座った。

「ところで、あんたはここが魔法学院って言ったよな？」

「ああ」

「だったら、魔法ってものを見せてもらっていいか？」

「構わんぞ」

ヴァルデスはそう言って遍在を数体作り出した。

「うわっ！ 増えた！！」

「……これで信じてもらえたか？」「……」

「あ、ああ。分身の術ってやつか？」

ヴァルデスは遍在を消して彼の問いに答えた。

「そのようなものだ。風は遍在する、あれは全てが意思を持っている自分の意思で行動することが出来る。勿論、マスターである俺の意向を汲み取る形ではあるがな」

「へ、へえ、便利なんだな」

「ところで、お前の名前を聞いていなかったな？」

「あ、ああ。俺は平賀才人だ」

「ヒラガサイト？ 変わった名前だな、日本という国ではそういう名前が多いのか？」

「うるせえな。それより、お前の名前は何て言うんだよ？」

「ああ。俺はヴァルデス・ウェストリ・コーラッドだ」

「……長い名前だな」

「これでもかなり短いぞ」

お互いの自己紹介が終わったところで、ようやく二人もそれなりに打ち解けて話をするようになった。

「そうなのか？」

「ああ。それより、お前は今まで魔法を見たことがなかったのか？」

「俺のいた国じゃ、魔法なんて御伽噺の世界だけの話だったぜ」

「魔法が御伽噺？」

ヴァルデスが今までで一番興味を示す発言だった。現代社会の根幹を築いている魔法の存在が御伽噺の存在である国が存在するなど、普通の人間が聞いたら正気を疑われる発言である。

「魔法がないというのなら何か証拠はあるのか？」

「ああ。これだ」

才人はそう言うと思って持っていた黒い箱を出した。

「何だ？ それは」

「ノートパソコンっていう魔法に頼らない科学の結晶だ」

才人はそう言うのとノートパソコンの電源を入れた。ヴァルデスは魔法も何も使っていないのに動いているノートパソコンと、その画面に映りだされている美しい画面に思わず感動していた。

「美しい……今まで見てきたどんな絵画よりも美しいな」

「今時、パソコンでそこまで感動する奴って初めて見たよ」

「少なくとも、俺は今までにこんなものを見たことはない。恐らく、このハルケギニア中を探してもこのようなものはないだろうな」

「嘘だろ……」

才人はその言葉を聞いてがっくりと項垂れた。その表情には絶望の色しか浮かんでいなかった。

「お前のいた所とここは随分と違うようだな」

「冗談じゃねえよ……何でこんな所に俺はいるんだよ……」

「お前はルイズの使い魔として召喚されたんだ」

ヴァルデスがそう言うと、才人は顔を上げて彼を見た。

「何だよ、その使い魔って？」

「使い魔というのはメイジの生涯の友として儀式によって召喚されるものだ。さすがに人間が出てきたのはこれが初めてだが……」

「ちょ、ちょっと待てよ！ 今、生涯って言わなかったか!？」

才人はヴァルデスの言葉を聞いて、慌てて彼に詰め寄ってきた。ヴァルデスはそんな彼に表情一つ変えずに、言葉を続けた。

「ああ」

「冗談じゃないぞ！ 俺は一生あのピンク髪についていなくちゃいけないのか!？」

「残念ながらそうなるな」

「ふざけるな！ 俺を元居た場所に帰してくれ！」

「残念ながら召喚した使い魔を戻す術はない。少なくとも、今まで誰一人として研究したことはない」

「そ、そんな……」

才人は今度こそ完全に希望を打ち砕かれ、涙目になり大きくため息をついた。さすがのヴァルデスも、そんな才人の様子が不憫になり、慰めの言葉をかけてやることにした。

「まあ、気持ちはわからないでもない。困ったことがあつたら相談に乗ってやる」

「……お前、いい奴だな」

「一応、俺の義理の妹に関係している話だからな。義理の兄として力は貸そう」

「あいつの義理の兄って……どういうことだ？」

「正式な婚姻はまだだが、数週間後にルイズの姉のカトレアと婚姻を結ぶことになっている。だから、ルイズとは義理の兄妹の関係になるというわけだ」

「結婚って……お前いくつだよ？」

「今年十七だが？」

「随分早い結婚だな」

才人はヴァルデスが自分よりもっと年上だと思っただけに、年齢が自分と同じということ、その年齢で嫁を娶るということに驚いていた。

「そうか？ 珍しくないと思うぞ。平民だって俺よりも若くして結婚していることもある」

「へ、平民？ そう言えば、さっきの奴も貴族がどの言っていたけど……貴族ってどういうことなんだ？」

「お前の国では貴族がないのか？」

「ああ。とっくの昔に貴族は滅んで、今は全員平等ってことになってる」

「ほう……。では、王はどうやって決めるんだ？」

「王はいない。国民の投票で代表者を決めるんだ」

「共和制というわけか……」

（レコン・キスタも共和制を叫んでいたが、貴族の共和制よりも全員平等の共和制の方が現実感はあるな）

ヴァルデスは胡散臭い理想を叫んでいるレコン・キスタと、才人の国で行われている共和制を比較した際、明らかに後者の方が支持されるだろうと考えていた。結局、レコン・キスタは貴族社会の延長線上での共和制実現を叫んでいるだけに対し、才人の国では特権階級がおらず、全員が平等の精神ならば共和制にも十分な意味を持たせられる。

（どっちにしる、ハルケギニアでそれを実現させるためにはあと何百年もかかるだろうがな）

ヴァルデスは才人の国の共和制に共感を抱きはしたが、現実問題として自分が生きている間にそれが実現することはないだろうと考えた。六千年続いた現代社会がそう簡単にそのシステムを崩せるとは思えなかったからだ。

「なるほど。だったら、よく覚えておいた方がいい。このハルケギ

ニアは平民と貴族という身分の差が非常に大きい。貴族にだけは下手に逆らわない方がいい」

「どうしてだよ？」

「この国を含めたハルケギニアのほとんどの国は、貴族が平民の生殺与奪の権利を握っていると言ってもいいくらい身分差別が厳しい。つまり、貴族の機嫌を損ねただけで殺されてしまうことだって珍しいことじゃない」

「何だよ！？ それ！」

「ま、ヴァリエール公爵家の使い魔ということになれば、そうそう他の貴族も手を出せないと思うがそれでも気をつける。ここはお前の国とは違う」

「……納得いかないけど、とりあえずわかった」

「よろしい。お前の主も戻ってきたようだから後はうまくやれよ」

ルイズが戻ってきたのを見て、ヴァルデスは才人の傍から離れた。ルイズと才人はまた色々と言論を始めたようだが、もうヴァルデスは振り返らず校舎の中に入っていった。

春の使い魔召喚の儀式（後書き）

ようやく才人登場しました。

ここから原作の時間軸に入ります。

逃げ出した使い魔（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

逃げ出した使い魔（前編）

「それにしても、ルイズには驚かされたわね」

その日の晩、ヴァルデスは他の生徒と共に食堂で軽い晚餐をとっていた。自宅に戻ればシェフが料理を用意しているので付き合い程度だが。

その隣にはシャルロットがおり、ヴァルデスと向かい合う場所にはギーシュ、その両隣にはキュルケとモンモランシーがいた。

「まさか平民を召喚するなんてね。本当に驚いたわよ」

「ルイズが平民を雇っての自作自演じゃないの？」

モンモランシーがそう言ったが、ヴァルデスはすぐにそれをきっぱりと否定した。

「それはないな。ただの平民にしては身なりが良過ぎる」

「見たこともない服だったのは認めるけど、そんなに身なりがいいとは思えないけど」

ヴァルデスの言葉に対し、ギーシュも持論を述べたがすぐにそれに対しても切り返しの言葉を続けた。

「あれと同じ服はゲルマニアでも作ることは出来ないだろうな。縫製は物凄く丁寧だし、素材も何を使っているのかすらわからない代物を使っていた。ハルケギニアの国々より遥かに文化水準の高い国

の人間だということは間違いないな」

「そんな国があるの?」

「まあ、恐らくは東方の国だと思うけどな」

「東方って……砂漠を越えてきたというのかい?」

「ハルケギニアの国々は大抵把握している。それに該当しないのならば、あとは未知とされている東方の国だろうな」

「東方かあ……どんな国なのかしらね?」

キュルケがそう言って少し遠い目をしていた。ギーシュとモンモランシーはあんまりこの話題に興味がなかったのか、すぐに次の話題に移って二人で盛り上がっていた。

「どうしたの?」

すると、シャルロットがヴァルデスに訊ねてきた。

「ああ、ちょっとルイズの召喚した彼が気になってね……」

「あの当方の国の出身かもしれない……?」

「ああ。持っているものや着ている服など、信じられないほど高い技術を持っている国だというのは間違いない。それに……」

「それに?」

「彼の国には魔法がないらしい。魔法とは御伽噺の世界のもので、科学というものが魔法の変わりに台頭している技術らしい」

「魔法がない……」

「非常に興味が湧かないか？」

「確かに」

ヴァルデスとシャルロットはワインを飲んで、席を立ち上がった。

「あら？ もう帰るの？」

「ああ」

「また明日」

「じゃあね、ヴァルデス、シャルロット」

二人は食堂を出て、表で待っていた送迎の馬車に乗り込んだ。この馬車の周りにも当然ながら護衛の人間たちがくっついていて、魔法学院からヴァルデスたちが住んでいる屋敷は馬車で大体三十分ぐらいの時間で着く。

「何者だ!？」

すると、馬車は突然止まり、外が急に慌しくなった。

「何事だ？」

「不審者です。馬車に乗ったままでお待ちください」

「不審者？」

窓を閉めたままで外にいる護衛と会話をしていると、その不審者の声が聞こえてきた。

「離せ！ 離せよ！」

「貴様、この馬車に乗っておられるお方を誰だと思っている！？ 不敬罪で処刑だ！」

「ふざけるな！ 何で殺されなくちゃならないんだよ！」

「平民が何と言う無礼な……最早貴様に情けをかける必要はないな。押さえておけ、この場で始末する！」

「待て」

その声に聞き覚えがあったヴァルデスは、馬車の窓を開けて護衛に声をかけた。

「何でございましょうか？ 殿下」

「その無礼者を私の前に連れて来い」

「ははっ！」

護衛の者はそう言うと、その無礼者を捕らえた状態で連れてきた。

「サイト」

「ヴァルデスか！」

「貴様！ 皇太子殿下に何と言う無礼を！？ その場で首を刎ねてくれる、そこに直れ！」

「待て。その男は私の知り合いだ」

「こ、この平民が殿下のお知り合いですか？」

「ヴァリエール公爵家の三女、ルイズの使い魔だ」

「ヴァリエール公爵家の使い魔……」

「とりあえず離してやれ」

「はっ！」

護衛はそう言って才人から手を離れた。ヴァルデスも馬車から降りた。

「どうしたんだ？ こんな所で」

「逃げてきた」

「はっ？」

ヴァルデスは才人の言葉に思わず耳を疑った。人間が使い魔として召喚されたことも前代未聞ならば、使い魔が主人から逃げ出した

というのも前代未聞の出来事だったからだ。

「逃げてきたって……ルイズから？」

「ああ」

「どうしてまた？」

「あいつの俺に対する非道の数々に納得できなかったから」

その言葉を聞いて、何となく才人がどのような理不尽な思いにあつてきたのが想像できた。

「それにしても、丸腰でここまで来たのか？」

「何か問題でもあるのか？」

「この辺りは問題ないと思うが、盗賊などが出たりするからな」

「盗賊なんて出るのか!？」

才人は信じられないといわんばかりの表情でヴァルデスを見ていた。

「ああ。お前の着ているものはなかなか珍しい素材を使っているからな、奪い取れば高値で売れるだろうから格好の獲物だな」

「マジかよ……なんでそんな物騒な連中がいるんだよ?」

「生活に困って盗賊になるという奴もいるな。まあ、さっきの続き

だがお前の服を奪ったあとは殺してしまえばおしまいだ」

「……………」

ヴァルデスがあまりにも真顔で言うので、才人は何も言えなかった。

「まあいい。とりあえず今夜は俺の屋敷に連れて行ってやる。明日、改めてお前を学院まで届けてやる」

「あ、ありがとう」

才人は礼を言っつて、ヴァルデスの馬車の中に乗り込んだ。ヴァルデスは手近にいた護衛の一人にルイズへの伝言を伝えて、再び屋敷に向かつて馬車を走らせた。

「と、ところで、こっちの子は誰なんだ？」

才人は馬車の中でヴァルデスの隣に座っていたシャルロットについて訊ねた。

「ああ。彼女の名前はシャルロット・エレヌ・オルレアン。俺の婚約者の一人だ」

「婚約者って……………ルイズの姉さんがお前の婚約者じゃねーのか？」

「俺には正室と側室三人と愛人一人の計五人の女がいる」

「何だそれ！ 貴族ってのはそんなにもてるのか？」

「王族」

「え？」

シャルロットの短い単語で構成される言葉に慣れていない才人は、少し戸惑いを感じていた。

「彼は王族。だから、複数の妻を持つことも許される」

「ま、大貴族ならば奥さんを複数を持つことはあるがそうしない貴族がほとんどだな」

「どうしてだ？」

「奥さんを複数持つことより、維持することの方が難しいからな。王族は政治がらみで複数の奥さんを持つことは少なくないんだ」

「じゃあ、ヴァルデスも王族なのか？」

「今は、な。元々は伯爵家の嫡男だったが、色々あってそうになっただけだ」

「ふーん……お前も大変なんだな」

才人は考えてもよくわからないと考えて、それ以上は何も言わなかった。

「それにしても、ルイズから非道なことをされたと言っていたが、具体的には何をされたんだ？」

「聞いてくれよ！ あいつ、自分は物凄く豪華な食事を食べてるって言うのに、俺にはよくわからないスープと固くなったパンだけしか寄越さないんだぜ！ おまけに寝床は藁の上だとかぬかしやがった！ ふざけるんじゃないやねえって話だよ！」

（ルイズ……普通の使い魔と同じ扱いをしたな。人間相手だということに……）

ヴァルデスは小さくため息をついた。

「まあ、ちょっとやりすぎている感じはあるが、それでもそんなに酷い話というわけではないな」

「どづいつことだ？」

「平民の中にはお前が受けた待遇以上に酷い生活をしている者もいるからな」

「マジかよ……」

「マジ？」

「彼の国の言葉らしい」

首を傾げるシャルロットにヴァルデスがそう言葉を掛けた。

「ま、待遇については俺からも色々と言添えしておこう。だから、明日は必ずルイズのところに戻るんだ。いいな？」

「……ああ。わかったよ」

「よろしい」

「ヴァルデス様、シャルロット様。間もなくお屋敷に着きます」

「わかった」

御者から声がかかけられ、ヴァルデスは彼に対して答えを返した。

「お前の家ってどんな所なんだ？」

「出来たばかりの新築だ。ちよつと人の数は多いがな」

「へえ、そうなんだ」

「お前の分の食事も用意させる。とりあえず、今日はそれで腹を満たせ」

「本当に何から何までありがとう」

才人はそう言って深々と頭を下げた。ヴァルデスは意外と礼儀正しい才人に好印象を抱いていたが、ここであることを思い出した。

「そうだ。屋敷に入ったら間違っても対等な言葉遣いはするなよ」

「何故だ？」

「あそこはこの護衛たちのように俺の言葉を素直に聞いてくれる奴らばかりではない。シャルロットや他の婚約者に忠誠を誓っている者もいるから、忠義に則って不敬を働いたお前を殺す可能性もある。

そうであっても、俺は彼らを処罰することは出来ない。彼らに見れば、誓った忠誠に対して忠実に行った行動だからな。そのあたり、よく注意しておけ」

「わ、わかった」

「わかりました」

才人の言葉をシャルロットが訂正した。才人はシャルロットの言葉のあとに、すぐに同じ言葉に訂正した。

「わかりました」

「殿下」

「殿下」

「よろしい」

才人がちゃんと自分の言ったとおりに喋ったので、シャルロットもとりあえずは納得した。やがて、馬車は屋敷について三人は馬車から下りてその中に入った。

「す、すげえ……」

才人は屋敷に入るなりそう感想を漏らしていた。外観は外が既に暗かったためによくわからなかったが、その内装の豪華さに唖然とするしか他にないくらい豪華な調度品などが並んでいた。物の価値などよくわからない才人ではあったが、その才人をもってしてもこの屋敷にあるものがかなり高いものばかりであるということは容易

に想像がついていた。

「で、殿下のお屋敷ってこんなにすげえのがいっぱいあるの……んですか？」

何ともあやふやな敬語ではあったが、とりあえず場所を意識するということは出来ているようなのでヴァルデスもシャルロットもそれに対して咎めるつもりはなかった。

「婚約発表以後、色々なところから贈り物をいただいているからな。それらを飾っているだけだ」

「へえ……」

「おかえりなさいませ。あなた」

すると、カトレアが動物たちを伴ってヴァルデスを出迎えた。才人はカトレアの美しさに思わず見とれてしまったが、ヴァルデスはそんな様子に気づきもせず会話をしていた。

「只今戻った」

「そちらの方はどちら様でしょうか？」

「お前の妹、ルイズが召喚した使い魔だ」

才人はお前の妹ルイズ、という言葉に反応してヴァルデスに訊ねた。

「で、殿下。まさか、婚約しているルイズのお姉さんって……」

「ああ。そのカトレアだ」

ヴァルデスは何気なくそう言うが、ルイズとカトレアでは身に纏っている雰囲気というものが全く違った。ルイズは何処か刺々しい雰囲気を持っているのに対し、カトレアは全てを優しく包み込んでくれるような雰囲気を持っていた。おまけに、歳の差はあれど、両者の身体的特徴も全然違っているので、才人は俄かには信じられなかった。

「あら？ ルイズが召喚した使い魔さんですか？」

カトレアはそう言って才人の眼前にまで顔を近づけた。美人のカトレアに眼前にまで顔を近づけられた才人は、心臓が激しく鼓動するくらい緊張していた。

「な、何か？」

「貴方……他の人とは違う」

「え？」

「なんてね。何か……そんな気がただけよ。ごめんなさいね」

「い、いえ……」

（相変わらず鋭いな。カトレアは）

ヴァルデスは、カトレアが時折見せるその勘の良さに驚くことがしばしばあった。今回の才人のこともそうだが、その勘の良さは侮

れないとヴァルデスは常日頃から思っていた。

「帰ってたのかい」

「おかえりなさいませ」

「おかえりなさいませ」

すると、二階からイザベラとエルティナとネージユが降りてきた。才人は三人の美しさにまた目を奪われた。それと同時に、政略結婚と言え、こんな美女たちを妻に出来るヴァルデスが物凄く羨ましかった。

「何だい？ その平民は」

ただぶっきらぼうな口調で物を言ってくるイザベラに対しては、それほど羨ましくないような気持ちも芽生えた。

「カトレアの妹の使い魔になった男だ」

「人間が使い魔かい？ あのお嬢ちゃんも変わってるね」

「あら、それは大変でしたね」

「ご愁傷様です」

「ど、どうも」

才人は相手が何処の誰だかよくわからなかったが、とりあえず礼の言葉を述べて頭を下げた。

「サイト、入浴は済んでいるのか？」

「いや、まだだ…です」

「わかった。誰か！」

ヴァルデスがそう言うと、すぐに数人の侍従が彼の前に現れた。

「お呼びでしょうか？」

「彼を風呂へと案内して入浴をしてもらえ。入浴が終わったら食堂へ案内するように」

「はっ」

「それとシェフに彼の分の食事を作るように言っておいてくれ」

「かしこまりました」

「では頼んだぞ。彼は私の客人だから決して失礼のないように」

『ははっ』

侍従たちはそう言うと才人を連れて風呂場へと向かっていった。侍従たちがいなくなるとイザベラがヴァルデスに訊ねてきた。

「で、どうしてカトレアの妹の使い魔と一緒に帰ってきたんだい？あんた」

「色々わけありでな、まあ、ちょっとした家出みたいなものだ」

「使い魔が主人から逃げ出してきたんですか？」

「人間を使い魔にするとするのは前代未聞のことだしな。それに、いきなり家族や友人から離されたのだから仕方ないだろう」

「不憫ですね」

「そうだな」

食堂に向かいながら、ヴァルデスは才人のことを後から来た全員に話していた。

「へえ。黒髪なんて珍しいと思ったけど、東方の国の民とはね……」

イザベラは感心したように頷きながらそう言った。

「なかなか文化水準の高い国らしい。それに聞いたことのない言葉もたくさんあった」

「あの男の着ている服を見ればわかるさ。あんな服、ガリアでも見たことがないよ」

イザベラはあの僅かな間でもその観察眼でしっかりと見るべきところはしっかりと見ていた。他の婚約者たちもその観察眼の鋭さに思わず感心していた。

「それでどうするんだい？ あの男の面倒を見るつもりかい？」

「手助けはするつもりだが、基本的に才人はルイズの使い魔だ。あ

んまり俺が干渉するのは立場上よろしくない。どうしても、自分ではどうにもならない事態に関してのみ、力を貸すことにするよ」

「その方が無難だね。あんたの立場を考えると、ただの平民が皇太子と親しくしているなんてことになるよ、変なところから狙われる可能性があるかもしれないからね」

「そうですね。そうになると、ルイズにも色々と危害が及ぶかもしれないし……」

「ではでは、私たちも必要以上に接しないということによろしいですね？」

エルティナの言葉に全員が頷くことで承諾した。

「さてと、サイトが風呂から出てきたら食事だ。食堂で彼を待つことにしよう」

ヴァルデスはそう言って五人を伴って食堂の席に座って才人を待った。

逃げ出した使い魔（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

逃げ出した使い魔（後編）

「すげえ……貴族ってこんなにでかい風呂を持っているのか？」

才人は侍従に案内されて入った風呂の浴槽の広さを見て思わずそんな感想を漏らしていた。少なくとも、才人の家の風呂なら数十個は軽く入ってしまうくらい広い浴室に驚きを隠せなかった。

「格差社会って言うてたけど……こんなに凄いのか？ 貴族ってのは」

才人はまだハルケギニアに来てから一日目なので貴族と平民の差についてあまりよくわかっていなかった。さっきの護衛とのいざこざで理不尽な思いをするというのは感じていたが、生活レベルの違いまでは全然実感がなかった。それも仕方ない、魔法学院にいる生徒は全員貴族なのだから、生活レベルの違いも貴族同士のものでしか見ることが出来ないのだから。

「失礼いたします」

「うわっ!？」

才人は風呂場の戸がいきなり開かれたので、慌てて風呂の中に身を隠した。入ってきたのは才人をここまで案内してきた侍従の一人だった。

「な、何ですか？」

「はい。お背中をお流しに参りました」

侍従は当然のようにそう言うが、才人は生まれて初めてのことにすっかり混乱していた。

「い、いえ、け、結構です」

「そうは参りません。ご主人様の大事なお客様に粗相を働くわけには参りません」

（な、何だ？ このエロ小説的な展開は！？）

才人は小説の中でしか見たことがない本物の侍従メイドでさえ驚いていたのに、その侍従が背中を流しに来るなどというまるで小説の世界での様な展開に追いついていけなかった。

「とにかく、後ろを向いておりますのでこちらにお座りください」

侍従はそう言って風呂の縁を指差してから後ろを向いた。才人は少し考えたが、どの道、展開が進展しないならと覚悟を決めて言われたとおりにそこに座った。

「失礼いたします」

侍従はそう言って、タオルに石鹸をつけて泡立て、才人の背中を流し始めた。

（うわっ！ 本物のメイドが背中を流してるよ！ ゆ、夢じゃねえよな！？）

才人はまるで夢を見ていると言われても信じられるようなこの状

況にすっかり酔いしれていた。

（それにしても、メイドを雇うなんて……本当にヴァルデスって貴族なんだな）

ただ、それと同時にヴァルデスが自分が思っている以上に偉い人物なのだということも実感していた。侍従を雇うことぐらい、貴族では当たり前のことなのだが、才人の国ではそういう人材を雇っている家庭は本当に極僅かだったし、彼の国では侍従とは呼ばずに家政婦という扱いであり、決まったユニフォームなどがあるわけでもなかったのと同じユニフォームを着て仕事をしている姿は新鮮だった。

（あ、そう言えば王族って言ってたっけ。やっぱり王族になると偉さって言うのも違うのかな？）

才人にはまだ貴族と王族の区別があまりついていなかったが、それは時間が経てば解決してくれることだった。このハルケギニアで生活する以上は、嫌でもその違いを認識しなければならぬのだから。

「失礼いたします」

いつの間にか背中を洗い終えた侍従が、泡を流すためにお湯をかけた。

「では、失礼いたしました」

侍従はそう言って才人に向けて一礼をして浴室を出て行った。女性に背中を流してもらうのは初めての経験だった才人は、やはり女

性が風呂場にいるという雰囲気に着かなくなったが、これだけでやっと一人になれたので気分的に楽になった。

「はあ……ヴァルデスもこんな生活をしてるのか？ よく落ち着いていられるな」

才人は風呂に浸かりながらそんなことを呟いた。ヴァルデスの場合は生まれた環境がそうであったために、今更それで動揺するということもなかったが今の才人がそれを知る由もなかった。

「それにしても、魔法かあ……」

才人は自分が今までいた世界と全く違う世界に来ていることを理解していた。ヴァルデスは才人が当方の国から来たものだと考えていたが、ここまで生活レベルが違う国だと世界そのものが違うとしか考えられなかった。

「何て所に来ちまったんだよ、俺……」

誰もいない風呂場だったからか、才人は今まで緩まなかった緊張の糸が一気に緩んで思いつきり泣いた。彼の生涯でこれほどまでに大声で泣いたことがないというくらい大きな声で泣いた。

「どうしたんだい？ あの男は」

その声は食堂にいたヴァルデスたちにも届いていた。

「いきなり見知らぬ土地に無理やり連れてこられたんだ。緊張の糸が切れて泣き出したというところだろう」

「考えてみれば可哀想な子ですね」

カトレアの言葉を聞いたあと、ヴァルデスはベルを鳴らして侍従を呼んだ。

「お呼びでしょうか？」

「今、屋敷中に聞こえているこの泣き声は誰も聞いていない。全員にそう伝えろ、そのことを口にする者がいたらヴァルデス・ウエストリ・コーラッドの名において厳罰に処すると念を押しておけ」

「かしこまりました」

侍従は返事をすると思いきや急ぎ足で屋敷中を駆け回ってそのことを伝えて回った。

「優しい真似するじゃないか」

「男にはどうしても守らなければならない矜持と言つものがある」

「そう」

「ふふふ。そうですね」

「はい」

「仰るとおりです」

ヴァルデスの配慮に、五人の婚約者は笑顔を浮かべながらそう言った。

「もう少し時間がかかりそうだ。ワインを持って」

「かしこまりました」

侍従はその言葉に従ってワインを持ってきた。侍従がワインを注ごうとしたとき、イザベラが立ち上がってその侍従の傍に行った。

「貸しな。私が注ぐからあんたは下がっていな」

「かしこまりました」

侍従はワインをイザベラに手渡し、その場から下がった。ワインを受け取った後、イザベラはヴァルデスのグラスにワインを注いでも傍から離れなかった。

「どういった風の吹き回しだ？」

「たまにはこういうのもいいじゃないか」

「……そうだな」

ヴァルデスはそう言ってグラスに入ったワインを飲み干した。その後、イザベラがまたグラスにワインを注いだ。

「しかし、見事な泣き声だ」

「そうだね。これぐらい見事なら天晴れと言っべきかね」

「そうだな」

泣き声はその後もしばらく続いたが、やがて泣き声は収まり屋敷に静寂が戻った。それからすぐに才人が侍従に連れられて食堂にやって来た。

「湯加減はどうだった？ サイト」

「いいお湯でした。ありがとうございます」

「そうか。では、食事にしよう」

才人は侍従に案内された席に座り、料理が次々と食卓に運び込まれてきた。

「さて、食事の前に自己紹介をしよう。まずは、俺の隣にいるのがイザベラだ。俺の正妻だ」

「よろしく」

「は、はい。よろしくお願いたします」

才人はこの勝気な態度をとっているイザベラがどうも苦手だった。

「シャルロットとカトレアはさっき紹介したな。そっちにるのがエルティナだ」

「エルティナです。よろしくお願いたします」

「よろしくお願いたします」

イザベラとは一転して、明るい感じのエルティナとは仲良く出来そうな気がしていた。ただ、その語尾を伸ばす独特の話し方は少々戸惑っていたが。

「それで、最後にネージユだ」

「ネージユです。よろしくお願いいたします」

「は、はい。よろしくお願いいたします」

才人はイザベラとは違う意味で、この非常に真面目なネージユの態度が少し苦手だったが、決して悪い印象は抱かなかった。ただ、物凄く真面目な人なんだろうなという印象だった。

「さて、それぞれの紹介が終わったところで食事に行きましょう」

その一言で食事が始まった。本当ならば始祖への感謝の言葉を捧げなければならぬのだが、才人がまだこのあたりの文化に詳しくないことを察して今回はそれを省いた。婚約者たちもヴァルデスのその気遣いを察して、何も言わずに食事を始めた。

「美味しい！」

才人はようやくやく食べることが出来た豪華な食事に舌鼓を打っていた。

「それはよかった。シェフにとっての最大限の褒め言葉だ」

「こ、こんな美味しい料理を毎日食べているんですか？」

「ああ。だが、魔法学院のシェフの料理もなかなかのものだぞ」

「でも、あの調子じゃ俺は食べられそうもないし」

「俺が厨房に口添えしておいてやる。さすがにあれほどの豪勢な料理は出ないだろうが、彼らも料理人の誇りをかけて変なものは出さないだろう」

「ありがとうございます」

重ね重ね才人はヴァルデスに礼を述べた。

「そう言えば、お前の名前をまだ聞いていなかったね」

イザベラが思い出したように言った。才人という名前はヴァルデスの口から何度も出ていたのであまり気にもしなかったが、自分たちがちゃんと自己紹介をしたのに相手が自己紹介をしていないことが少し気になったので、その言葉を口にしたのだ。

「し、失礼しました。平賀才人と申します」

才人は慌てて立ち上がって名乗りながら一礼をした。

「ヒラガサイト？ 変な名前だね」

「あ、こっち風に言うサイト・ヒラガになります」

「へえ、お前の国じゃ平民にも姓があるのかい？ 珍しいね」

イザベラはその文化の違いに興味を惹かれたようだ。

「ではサイトさん。改めて、妹のルイズのことをよろしくお願います。あの子、ちょっと色々あるから」

カトレアはそう言って才人に一礼した。

「サイトさん。よろしくお願いますう〜」

「よろしくお願います」

エルティナとネージュもそう言ってサイトに礼をした。

「よろしく」

シャルロットはそれだけ言ってまた食事始めていた。全員の挨拶が終わったところで、イザベラがサイトに話しかけた。

「ところでサイト、あんたの国では誰もがテーブルマナーを知っているのかい？」

イザベラは平民である才人がナイフやフォークを綺麗に使っており、厳格ではないがそれなりのテーブルマナーを知っているのを見て訊ねてみた。確かに、才人のナイフやフォークの使い方は学院の男子生徒よりは綺麗なものだった。

「まあ、そんなに厳しいものじゃなければ大抵の奴は……」

「教育が行き届いている国なのですね」

カトレアは感心したように言うが、イザベラはその言葉に次の疑

問を抱いた。

「サイト、お前の国では学校に行っている奴は多いのかい？」

「義務教育って奴がありますので、子供は必ず九年は学校に通わなければいけないって法律があるんです」

「まあ、法律で学校へ行くことが義務付けられているんですか？」

「それは凄い」

エルティナとシャルロットは感心していたが、正確には親が子供を学校に通わせる義務を課したものであり、子供が行かなくてはならないというものではない。子供には就学の権利があるというだけのことなのだ。ちなみに、このハルケギニアでは法律で子供を学校に行かせなくてはならないというものはないし、それほど学校の数もないのだ。おまけに平民の所得が低いため、学校に通わせるだけの余裕がない家庭がほとんどなのだ。

「教育が行き届いている国ってのは凄いね」

イザベラもそこに関しては素直に感心していた。ハルケギニアの大国であるガリアも、ハルケギニアの国力を持つゲルマニアでも未だに実現できていないことを実現している才人の国を実現している。それがどれほど大変なものであるかを彼女たちは知っていたし、逆にサイトがかなり恵まれた国で育っていたということも悟った。

「サイトの国は豊かなんだな。教育はしっかりしているし、そんないい素材の服も着ているし」

ヴァルデスは才人に訊ねたが、才人はそのあたりのことがよくわかっていなかったため、何とも言えない微妙な表情をしていた。

「食事が済んだら今夜お前が泊まる部屋に案内させよう。明日は俺と一緒に学院に戻るんだ」

「はい。わかりました、殿下」

さつきシャルロットから教わったとおりの言葉で返答し、シャルロットはそれを聞いて満足そうに笑みを浮かべていた。

「まあ、サイトのことを気に掛けるのは結構だが、私のことも気に掛けておくれよ」

「何だ？」

「今夜は私とベッドに入るんだからね。しっかりと可愛がっておくれよ」

あまりにも開けっぴろげなイザベラの発言に才人は顔を赤くしたが、ヴァルデスや他の婚約者たちは表情を全く変えていなかった。貴族にとって子作りというのが重要な仕事であることを彼女たちも理解していたし、またそれだけ彼女たちは大人になっていた。

「ああ。よろしく頼む」

「「じちら」」

「明日は私」

すると、シャルロットがそう言った。周りの婚約者たちは次は私
と言い合っていたが、才人はこの中で一番小さいシャルロットでさ
えそんなことを言い出すのを見て自分はかなり遅れているのではな
いかと心配になった。元々、出会い系サイトに登録して出会いを求
めようとしていた才人には、そういう経験は全くない。だから、自
分がかなり遅れているのではないかと心配になったが、彼女たちと
て純潔のまま彼と出会い、彼にその純潔を捧げる覚悟を決めている
だけなのである。それを知る術は才人にはなかったが。

それに屋敷が完成してようやく正妻であるイザベラも合流したの
で、彼女たちはこれからの夜にその純潔を捧げるのだ。だから、今
夜はイザベラにとってもっとも大事な日であったのだ。正妻のイザ
ベラが純潔を捧げた後、側室であるシャルロットたちの番となり、
最後に愛人のネージュということになる。これは絶対に侵すことの
出来ないヒエラルキーによって決められていた。

「イザベラ様もお屋敷にこられたことですし、これから毎晩頑張
ってくださいね。旦那様」

「よろしくお願いします」

こうして賑やかな食卓は終わり、各々は自分の部屋へと戻ってい
った。ヴァルデスとイザベラは同じ部屋に入り、才人の部屋は何と
その隣に用意されていた。

「ここで……寝ろって言うのか？」

才人は思わず隣にあるヴァルデスの部屋側の壁を見た。何やら嫌
な予感がしていたが、相手の親切で用意してもらった部屋に文句を

言うことも出来ない。才人はベッドの中に入り敷布団を被って丸くなってなるべく聞かないように努めた。

ちなみに、ヴァルデスたちは部屋にサイレントをかけて、部屋の声は一切外には聞こえないようになっていたのだが、才人にそんなことがわかるはずもなく、結局朝まで悶々としたまま目が爛々と輝いており、一睡も出来なかった。

逃げ出した使い魔（後編）（後書き）

才人は奥方たちと知り合いになりました。
まだまだ頑張りますのでよろしくお願いいたします。

決闘（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

決闘（前編）

あれから一週間の時が経った。翌日、ヴァルデスと共に戻った才人はルイズに思いつきり睨まれることとなったが、ヴァルデスが気を利かせてカトレアと一緒に学院に行ったことでその怒りはかなり軽減され、今後は勝手なことをしないようにとの注意だけで収まった。さすがにカトレアの前ではルイズも姉を慕う少女だということが立証されていた。

才人はヴァルデスの心遣いに感謝して、あれから日々を過ごしていた。とりあえずは洗濯などの家事行為をすることで使い魔としての責務を果たすように日夜努力していた。食事の方も、アルヴィーズの食堂には入れなかったが厨房に話を通しておいたため、賄い食を分けて貰うことで食いはぐれを起すようなことはなくなっていた。ただ、ベッドが相変わらず藁ということにはまだ不満を抱いていたが。

ルイズもルイズで、カトレアに諭されてからは才人のことも普通の使い魔ではなく、それなりに人間として扱うようにはなっていた。もちろん、平民と貴族という関係には違いないが、それでも才人が納得して使い魔として仕事をできるようになっていたので進展はあった。

「精が出るな。サイト」

シャルロットが召喚した風竜に乗ってヴァルデスは学院に来るようになっていた。馬車で行くよりは断然安全だし、いちいち護衛の数も少なくすることが出来るので毎日これで通学していた。

「あ、おはようございます。ヴァルデス殿下、シャルロット様、エルティナ様」

才人も助けられた恩があるので、ヴァルデスたちに関してはちゃんと敬称をつけて呼ぶようになっていた。主人であるルイズは呼び捨てなのはどうか、とも考えていたが、まあ主人と使い魔は一心同体の関係でもあるのでいいのだろうと考えた。他の貴族に関しては話をすることすらなかった。たまにキュルケと話をするぐらいだったが、彼女もまたその辺りには大雑把だったので呼び捨てでも文句を言わなかった。

「おはよう」

「おはようございます」

ちなみに、魔法学院には毎日誰かしらの同行者がいた。一昨日はイザベラ、昨日はカトレアといった感じで毎日交代でヴァルデスの様子を監視していた。

「洗濯か？」

「はい」

「頑張れよ」

「ありがとうございます」

才人は特にヴァルデスに対しては本当に敬意を持っていた。ルイズに言わせればカトレアの旦那でなければ、ゲルマニア貴族に対して敬意を示すようなことなど納得は出来なかった。特に主人である

自分よりも敬意を持っていることが一番不満だったが、とりあえずは何も言わずにいた。

基本的にヴァルデスたちは朝食と夕食は自宅で食べる。たまに付き合いで夕食の席に顔を出すことはあっても、ほとんど食事には手をつけずにワインだけを飲んで帰ることがほとんどだ。

二年生になり、ヴァルデスはシャルロットたちと同じクラスになっていた。これは学院側の配慮によって夫婦を同じクラスに纏めたということになっている。ヴァルデスたちにとってはよかったのだが、他の生徒たちは王族と同じクラスになってしまったので教室の中では落ち着くことがなかった。女の子たちも王族ならお近づきになりたいと考えるのだが、既に相手がいる王族に手を出すわけにはいけないので、ただ畏敬の念を抱かなければならない相手というだけなのだ。

そんな中、教師や生徒たちが恐れたのはルイズだった。正確に言えば、ルイズの失敗爆発だった。以前のヴァルデスならまだそれほど問題にはならなかったが、今のヴァルデスがそれで怪我などを負ったりしたら大騒ぎになってしまう。責任が教師だけでなく周りについて守らなかつた生徒たちにまで及んでしまうことも考えられるので、生徒たちも気が気でなかつたのだ。

だから、教師や生徒たちは授業中はルイズに絶対に魔法を使わせないように注意を払っていた。

だが、ここにそれを知らなかつた教師が一人いた。

「はい。皆さん、初めまして。私が皆さんに一年間、『土』系統の授業を講義するシユブルーズと申します。二つ名は『赤土』です。

毎年、この時期に召喚される使い魔たちを見るのをとても楽しみにしております。皆さんが無事に召喚に成功したことをとても嬉しく思います。おや？ ミス・ヴァリエールは変わった使い魔を連れてきますね」

シュブルーズは才人を見てそう言った。サイトも今更そう言われることには慣れていたので、とりあえずは黙っていた。しかし、それに便乗してはやしたてる生徒もいた。

「おいルイズ！ サモン・サーヴァントが出来なかったからってその辺にいた平民を連れてくるなよ！ 『ゼロ』のルイズ！」

「先生！ 『かぜつびき』のマリコルヌが私を侮辱しました！」

「誰がかぜつびきだ！ 僕は『風上』のマリコルヌだ！ 大体、お前の『ゼロ』ってのは本当のことじゃないか！」

「どつでもいいが、『ゼロ』の二つ名を侮辱するということは、この俺も侮辱していると考えていいのだな？」

その瞬間、教室の空気が凍りついた。自分から二つ名を名乗ることとはなかったが、ヴァルデスは『ゼロ』を自分の二つ名として正式に採用していたので、その二つ名を他の人間が気軽に口にしていいものではなくなっていたのだ。そして、その二つ名を侮辱することはヴァルデスを名指して侮辱しているに等しい行為なのだ。

「い、いや、そんなつもりは……」

言うまでもなく、これは極刑に値する不敬罪である。爵位を継いでいない一貴族の息子など、ヴァルデスの権力で簡単に殺すことが

出来る。少なくとも、この場にいる生徒たちでヴァルデスより上に立てる生徒はいないのだ。かろうじて、側室としてヴァルデスの妻の座にいるシャルロットが進言するくらいのことである。

「だったら、これ以上その二つ名についての話は終わりだ。これ以降、その二つ名を侮辱するような行為は俺に喧嘩を売っていると判断するぞ」

ヴァルデスがそう言った途端、マリコルヌも黙ることしか出来なかった。そもそも、ルイズに対して『ゼロ』という蔑称をつけたのは周りであって本人がそれを名乗っているわけではない。それに対して、ヴァルデスは自分から『ゼロ』を名乗っている。すなわち、周りはルイズに対して侮蔑や嘲笑の言葉をかけているつもりなのだろうが、それが正式な二つ名でない以上は、全て正式にそれを名乗っているヴァルデスに向けられていると判断するのが普通なのだ。

(凄え……周りの連中も黙っちまった……)

才人はその様子を見てただただ感心していた。ルイズをフォローしているようには見えなかったが、周りを黙らせるだけの迫力というものを持っていた。

(やっぱり、皇太子様ともなると、他の連中とも違うんだな)

才人はおぼろげながら貴族と王族の違いというものがわかり始めていた。少なくとも、貴族より王族が偉くて、貴族であっても王族に無礼を働いたらただではすまないという程度には理解していた。

「え、えー、では、授業を再開しましょう。今日は錬金の授業を行います。一年生のときに習った方も多いと思いますが、基本は大事

です。本日は一年生の頃のおさらいとして行います。では、まず私が実演します」

シユブルーズは小石を教壇の上に置き、呪文を唱えた。すると、小石は光を発してきらきら光る物質に変わった。

「黄金ですか!？」

キュルケが前のめりに乗り出して、シユブルーズに訊ねた。

「いいえ。真鍮です。黄金に出来るのはスクウェアだけです。私はただの……トライアングルですから」

「なーんだ」

黄金ではないと知ると、キュルケは興味を失ったように席に戻った。

「なあ、ルイズ。トライアングルとかスクウェアって何だよ？」

「魔法は重ね合わせる数でその強さが決まるのよ。一つだけならドット、二つならライン」

「三つならトライアングル、四つならスクウェアってわけか」

「そういうこと」

才人は小石が真鍮に変わったことも驚いていたが、ヴァルデスが見せた遍在に比べるとどうしても印象が薄かった。

「そこ、静かになさい」

すると、シュブルーズがルイズとサイトが話しているのを見つけた。

「ミス・ヴァリエール。使い魔とお話をしている余裕があるのなら、貴女に実演してもらいましょう」

「え……」

シュブルーズの一言に教室中の空気が凍りつくような音を才人は聞いたような気がした。周りの表情が明らかに変化したので、それは決して聞き間違いではなかったと直感していた。

「シュブルーズ先生、それはよした方が……」

「ル、ルイズ、やめたほうがいいわ」

生徒たちが必死になって止めようとしたので、それがかえってルイズにやる気を引き起こした。

「やります!」

「ちよ、ちよつとルイズ!」

「皆さん、何をそんなに怯えているのですか? 失敗は誰にでもつき物です、失敗を恐れては何も出来ませんよ」

「シュブルーズ先生はルイズを教えるのが初めてだから知らないんです」

「？ とにかく、ミス・ヴァリエール。やってみなさい」

「はい」

すると、才人の服の袖を引っ張る手があった。その手の先を追いかけると、そこにはシャルロットがいた。

「シャルロット様？」

「危険」

「危険？ でも、だったらヴァルデス殿下は？」

「彼は大丈夫。それよりあなたの方が危険」

シャルロットはそう言うと呪文を唱え始めた。見ると、ヴァルデスも既に同じように呪文を唱えていた。

「鍊金！」

ルイズがそう宣言した瞬間、教室内で大爆発が起こった。いきなりの爆発で教室内の椅子や机はばらばらになり、教室の中にいた使い魔たちは暴れだしていた。

「危険って……こういうことか」

「そう」

シャルロットが張った防御壁で守られた才人は無傷で済んだが、

巻き込まれたらと思うとぞっとした。ヴァルデスの居た場所も見ると、彼や彼の周りだけは全くの無傷のままだった。

「じゃあ」

「あ、ありがとうございます」

シャルロットは短くそう言ってヴァルデスの隣に戻っていった。幸い、シャルロットの席もヴァルデスの防御壁で守られたため無傷だった。

「サイトは無事か？」

「大丈夫」

「ま、とりあえず授業はこれで終わりだな」

ヴァルデスはそう言って席を立ち上がり、シャルロットを伴って教室を出て行った。その後、ルイズは教室を半壊させた罰として魔法を使わずに教室を元に戻すようにと言いついていた。

「ルイズ、ぼさつとしてないでお前も動けよ」

「……何も言わないの？」

「ん？」

「私の『ゼロ』の二つ名の意味……わかったでしょ？ 魔法成功率ゼロ、だから『ゼロ』のルイズ」

「ああ、そのことか」

才人は何て事のないようにそう言ったが、それがかえってルイズの怒りに油を注いだ。

「そのことつて何よ！ あんただって本当は私を嘲笑っているんでしょ！？ 私はヴァルデス殿下のように魔法を自由自在に使えない、落ちこぼれメイジなのよ！」

「でも、さっきのあれだつて真面目にやった結果だろ？ 不真面目にやったんなら俺だつて軽蔑するかもしれないけど、真面目にやった奴を馬鹿にする趣味はねえよ。それに、俺は魔法が使えないから魔法がどんなものかも曖昧にしかわからねえし」

才人はルイズのことを特に馬鹿にはしなかった。それよりも、あんな爆発を起こせるルイズの能力が少し恐ろしくも感じていた。それに、ヴァルデスは何か他とは違う特別なものがあるような感じを受けていたので、ルイズとヴァルデスを比べること事態が間違っているとも感じていた。

「でも、魔法は失敗ばかりだし……」

「あの爆発は充分恐ろしいと思うけど……」

「メイジはおろか平民にだって同情される始末だし……」

「そんなの知るかよ。俺に言わせればお前のその爆発は、他の連中が使う魔法よりも怖い」

ぱっと見、才人がルイズを慰めているように見えるが、実はサイ

トはさっきの爆発をただ恐れているだけなのである。目に見えずにいきなり起こる爆発、奇しくもヴァルデスがルイズの爆発に感じたその恐ろしさをサイトは本能で理解していた。

「サイト……」

「とにかく、さっさと終わらせて昼飯食いに行こうぜ」

「……うん」

ルイズは短くそう返事をして、二人は黙々と片づけをこなしていた。

一方、ヴァルデスは特にやることもなかったため、シャルロットを伴って学院長室に来ていた。何故なら、エルティナはヴァルデスが授業を受けている間はここでオスマンとずっと話し込んでいることが多かったからだ。何がそんなに面白いのかわからないが、二人はかなり気が合っているようにヴァルデスには見えていた。

「あら？ もう授業が終わったんですかあ？」

今日もいつものように、ソファに座ってオスマンと向かい合うように話をしていた。

「ちょっとしたアクシデントがあって授業が中止になった」

「ミス・ヴァリエールじゃな？」

「そう」

ヴァルデスたちもソファに座って、話の輪に加わった。

「その様子では怪我などはしなかったようじゃの」

「ルイズの爆発は過去に何度も経験していますからね。防ぐ手立てはちゃんと用意してあります」

「それはよかった。怪我をされたらわしの首が飛んでしまうからの」

オスマンはそう言って笑った。すると、ヴァルデスたちの前のテーブルに紅茶の入ったカップが並べられた。

「どうぞ」

「すまんの。ミス・ロングビル」

「いえ、では失礼いたします」

最近になってオスマンが採用した秘書であるロングビルは紅茶を置いたあと、一礼をして部屋を出て行った。

「オールド・オスマン。ミス・ロングビルはどちらで見つけられた方なのですか？」

「うむ。酒場でウエイトレスをしておったのじゃがな、なかなか優秀なのでスカウトしたのじゃ」

「酒場でスカウト？」

「何が優秀だったんですか？」

シャルロットとエルティナはオスマンに訊ねた。

「うむ。どうやらわしに気があるようだな、あの見事な尻を撫でても何も言わんのじゃ」

真顔でオスマンがそう言うので、三人は思わず呆気にとられてしまった。

「……それだけですか？」

「うむ。採用してみればなかなか甲斐甲斐しく働かし、秘書として優秀なので非常に助かっておる」

そう言って笑い出したオスマンを見て、ヴァルデスは思わず手で顔を覆った。

「本当に大丈夫なんですか？ そんな人材を採用して」

「いい女なのはわかるがの。お前さんには五人もいるんじゃ、やらんぞ」

「手を出しちゃ駄目」

「そうですねよあゝ。触りたいならいつでも触らせてあげますから、他の女に手を出しちゃ駄目ですよあゝ」

シャルロットは睨むかのような真剣な目で、エルティナも声も笑顔もいつもどおりだったが、その視線の熱っぽさがいつもと違って、いるのをヴァルデスは感じていた。また、自分から振った話題なの

に、そう言われているヴァルデスをオスマンは内心で羨ましく思っていた。

「オールド・オスマン！」

すると、コルベールが慌ててドアを開けて部屋の中に入ってきた。

「どうしたのかね？ ミスタ・コルベール」

「一大事でございます！」

「世の中に大事などない。全てが小事じゃ」

「これをご覧ください！」

コルベールは傍らに持っていた本をオスマンに見せた。すると、オスマンの表情も急に真剣みを帯びたものになった。

「ミスタ・コーラッドや。すまぬがちょっとミスタ・コルベールと話がある。申し訳ないが……」

「わかりました。我々はこれで失礼いたします」

ヴァルデスは二人を伴って部屋を出て行った。

「何だったんだろうな？」

「気になるの？」

「ああ」

ヴァルデスはオスマンが滅多に見せない真剣な表情を見せたことが何であるかに興味を持っていた。ただ、さすがに盗み聞きなどは当然出来ないようにされているだろうから、手の打ちようがなかったが。

「だったら、見てみますか？」

エルティナはそう言うと、ポケットからコンパクトを取り出した。

「それは？」

「お婆様からいただいたものです。これを開くと……」

コンパクトを開くと、そこにはオスマンとコルベールの姿が映し出されていた。おまけに二人の話す声までこっちに聞こえてきた。

「つかぬ事を聞くが」

「はい。何ですかあ？」

「これはどうい^{マジック・アイテム}う魔法道具なんだ？」

「これは、見たい場所をイメージするとそこを映し出してくれるし、その声も拾ってくれるんですよ」

「つまり……何処でも覗ける？」

「はい」

実にイリーズらしい作品だとヴァルデスは思ったが、とりあえずそれについてはこの場での言及はやめることにした。本人もいない場であり、意味のないことだったから。

『始祖ブリミルとその使い魔か……』

鏡からオスマンとコルベールの会話が流れており、三人は耳を済ませてそれを聞いていた。一応、周りにサイレントをかけて他の人には聞こえないように配慮していた。

『はい』

『ミス・ヴァリエールが召喚した少年に、ガンダールヴのルーンと同じものが刻まれておりました』

『神の左手、ガンダールヴか……』

(ガンダールヴ?)

ヴァルデスはそのあたりについての知識は皆無だった。そもそも、伝説にしかなくていないものを学ぶことに何の意味も見出せなかったからである。だから、始祖のことについても平民でも知っている程度の知識しか持ち合わせていなかった。

『あらゆる武器を使いこなし、始祖を守った神の盾です。それが現代に甦ったのですよ！ これを大事と呼ばずにいられますか、オールド・オスマン！』

『しかし……』

そこでヴァルデスは無理やりコンパクトを閉じて歩き出した。シヤルロットとエルティナはその意味がよくわからなかったが、すぐにその答えが向こうからやって来た。

「どうかしましたか？ ミス・ロングビル」

「ミスタ・コーラッド」

ヴァルデスは会話を聞きながらも、こちらに向かってやってくる気配に気づいたので盗聴を止めて何食わぬ顔で来訪者と顔を合わせた。二人もその気配を察知する能力には内心で舌を巻いていたが、それをロングビルがいる前で表情に出すことはなかった。

「ヴェストリの広場で決闘騒ぎが起こっているんです」

「決闘？ 相手は誰ですか？」

「一人はギーシュ・ド・グラモン」

「ギーシュが？ 相手は？」

「ミス・ヴァリエールが召喚した平民です」

その言葉を聞いて、ヴァルデスはほんの一瞬だけ眉を上げた。

「オールド・オスマンに眠りの鐘の使用許可をいただきに向かいますので失礼します」

ロングビルはそう言って一礼をすると、学院長室に向かって走っ

ていった。

「どうしますか？」

「ヴェストリの広場へ行く」

「わかった」

三人は決闘が行われているヴェストリの広場へと向かって駆け出
した。

決闘（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

決闘（後編）

ヴァルデスたちがヴェストリの広場に着いたときには、既にたくさん生徒たちが野次馬として決闘している当事者たちを取り囲んで観戦していた。少なくとも、かつてシャルロットとキュルケで行われたときのような神聖さなどは全く無く、ただの見世物のようしか見えなかった。

「ただの馬鹿騒ぎだな。とても決闘とは思えない」

「くだらない」

「そうですね」

三人の感想は一致していた。そんな時、決闘の輪から少し離れた場所から観戦していたキュルケを見つけたのでヴァルデスたちは彼女のところに向かった。

「キュルケ」

「あらヴァルデス。貴方たちも見に来たの？」

本来ならば不敬であるのだが、学院内では同じ一生徒だとヴァルデスが言っていることもあって、キュルケやギーシュなどの極親しい一部の生徒だけは彼のことを未だに呼び捨てにしていた。

「どうしてこんなことになっているんだ？」

「あの子が原因よ」

キュルケは物陰からこつそりと決闘の様子を恐々と見ている侍従を指差した。

「あの侍従がどうしたんだ？」

「ギーシュがモンモランシーとケティって娘と二股をかけていたのよ。ギーシュがモンモランシーから貰った香水を落として、あの子がそれを拾ってギーシュに渡そうとしたんだけど、そこで周りにいた男子が騒ぎ立てて二股が両方にはれちゃったのよ」

「それってギーシュが全部悪いんじゃないか？」

この話をどう聞いても悪いのはあの侍従ではなく、二股をかけていたギーシュであることは間違いなかった。ただ、それだけだとどうして才人が決闘を行っているのかがわからなかった。

「サイトはどうして決闘を？」

「ギーシュが八つ当たりであの子を責め立てていたんだけど、そこへサイトがかばいに入ったのよ。で、そこから色々と話がこじれて決闘するってことになったわけ」

「何と愚かな……」

ヴァルデスは思わず天を仰いだ。少なくとも、才人の行動は褒められこそすれど、罰を受けるようなことはないものだ。だが、相手が貴族ということになると、白が黒に変わってしまうことはよくある話でもあった。ギーシュはヴァルデスにとって友人ではあったが、少なくとも今回の一件に関しては彼の味方をする気にはなれなかつ

た。いや、そもそも皇太子になってしまった今となつては、どつちの味方もしてはならなかった。

「でも、サイトもなかなか頑張っているわよ。ギーシユのワルキユーレの攻撃を受けて、何度も立ち上がってくるんですもの」

「あいつ……また丸腰なのか」

決闘の様子を見ると、武器も何も持っていない才人をギーシユが作り出したゴーレムがたこ殴りにしているようにしか見えなかった。

「またつて?」

「いや、こつちのことだ。しかし、いくら頑丈な体をしていてもそろそろ持たないぞ」

才人は既に息が上がっていて、今にも倒れそうなくらいふらふらになっていた。決闘の輪の中からルイズがギーシユに向かって決闘をやめるように言っている声も聞こえてきていた。

「どつする?」

シャルロットが杖を構えながらヴァルデスに訊ねてきた。彼の返答しだいではすぐにこの決闘を力づくで止めるということを、その行動が言葉の代わりに代弁していた。

「……俺が行く。手出し無用」

「……わかった」

シャルロットは構えを解いてヴァルデスの言葉に従った。ヴァルデスはシャルロットの頭を何度か撫でてから、決闘の輪に向かって歩み始めた。ヴァルデス側に近づくと、生徒たちはすぐに左右に分かれて彼に道を譲った。

「やれやれ……」

決闘していた二人も、観客だった生徒たちの様子が変わったことに気がつき、その視線をヴァルデスへと向けていた。

「ギーシュ。決闘に至った経緯についてはとりあえず置いておくが、決闘は校則で禁止されているのを知らないわけじゃないだろうな？」

普段のギーシュならヴァルデスが出てきた時点で彼に謝罪の言葉を述べ、才人に関しては自分の名誉が傷つけられない範囲で適当に折り合いをつけようとしていただろう。しかし、才人が思った以上に立ち上がり、その度にギーシュに向かってくるということを繰り返していたせいで、ギーシュもまた頭に血が上っていた。

「確かに！　だが、平民と貴族の決闘を禁止はしていない！」

周りの生徒はギーシュの言葉に背筋が凍りつくような思いを感じざるをえなかった。皇太子であるヴァルデスに対し、そんなことを言おうものなら不敬と判断されても文句は言えないくらい、今の言葉はかなり乱暴だった。ただ、ヴァルデスは今のギーシュの様子が普段とは違うということには気がついていたので、この場でそれを咎めるようなことはしなかったし、無理やり決闘を止めることは禍根を残す結果になる。それは平民の立場である才人にとってにはよろしくない。ヴァルデスは思っていたので、止めるにしても両者に禍根を残さないやり方を選ばなければならなかったのだ。

「サイト、お前は どうする？ 丸腰で、それでいてそこまで酷くやられていても立ち上がるうとする姿は俺も敬服する思いだ。だが、これ以上はお前の体が持たない。ここで幕を引く気にはならないか？」

ギーシュに掛けられた言葉に対して、才人に掛けられた言葉は平民が皇太子から掛けられる言葉としては最上級の賛辞に相当するものだった。皇太子に敬服するなどと言われることは、貴族であつても余程のことがない限りは一生掛けられる言葉ではないからだ。ルイズも才人の主人としては、使い魔にそんな賛辞をかけられて喜ぶところなのだが、状況が状況だけに今はまだそれに気づいていなかった。

「…で、殿下……」

才人はぼろぼろになった体で搾り出すように声を発していた。

「何だ？」

「俺……殿下には凄く感謝してます。こっちに来たばかりの俺に色々教えてくれたり、色々取り計らってくれたり……本当に感謝しています」

「……」

「洗濯でも何でもするし、寝床は藁だつて構わない。でも……下げたくない頭は下げられない！」

才人ははっきりとそう宣言した。

(……勇者といふべきか、それともただの馬鹿か。どっちにしろもう俺の出る幕はないな)

「……わかった。お前がそこまで言うならお前の意思を尊重しよう」
「殿下！」

ヴァルデスの言葉にルイズが大きな声で彼の名を呼んだ。

「ルイズ、過程はどうあれ、本人たちが決闘を望んでいる。俺にそれを止める資格はない」

「でも……」

「だが、このままではいくらなんでも不公平だ。丸腰の相手を髑り殺しというのは貴族の矜持に反する。ギーシュ、彼に武器を持たすことに異存はないな？」

「もちろんだ。好きな武器を取るといい」

ヴァルデスは錬金で一本の剣を作った。

「確認しろ」

ヴァルデスはそれをギーシュに手渡して、妙な仕掛けがないことを確認させた。ギーシュは持ってみたり、ディテクトマジックをかけてみたりしてその剣がただの剣であることを確認した。

「確かに。普通の剣だね」

ギーシュはヴァルデスに剣を渡すと、ヴァルデスは才人の前にその剣を突き刺した。

「サイト、お前にまだ戦うつもりがあるのならその剣を取れ。万が一のことがあっても俺が骨を拾ってやる」

才人はその剣とヴァルデスの顔を何度か見合わせたあと、その剣を手にとって地面から引き抜いた。

「え？」

（ん？）

才人が体に違和感を感じたとき、ヴァルデスも才人の様子の変化に気がついた。才人にどんな変化が訪れたのかはわからなかったが、ヴァルデスはその左手のルーンが光を放っていることに気がついた。

「これなら……いける！」

才人は急に表情がいきいきとしたものになった。

「平民でありながらそこまで頑張るとは見事なものだ。でも、ここまです！」

ギーシュは一体のワルキューレを才人に差し向けた。ワルキューレから繰り出される拳の一撃を才人は見事にかわし、その剣で胴体を真っ二つに薙いだ。さっきまでたこ殴りにされていたとは思えない素早い動きに、ギーシュも周りの観客たちも驚きを隠せなかった。

(動きは速いが……)

ヴァルデスはその様子を見て自分なりに才人の実力を見極めようとしていた。ただ、どう見ても才人はヴァルデスの目から見た限りではただの素人にしか見えなかった。

「や、やるじゃないか。僕も本気でいかせてもらおうよ！」

ギーシュは薔薇の杖を振ってワルキューレたちを次々と才人に差し向けた。才人はそれをかわしながらワルキューレたちを一刀の元に切り伏せた。ギーシュや周りの生徒たちはそれが噂に出てくるメイジ殺しの姿さながらだったので恐怖を感じずにはいられなかった。

(……やっぱり動きの速いただの素人だな)

ヴァルデスはその姿に全く恐怖を感じなかった。元々、最初に会った時から立ち居振る舞いが隙だらけだったので特に脅威も感じていなかったが、動きが変わった今もただの素人という域は出ないの脅威は感じなかった。少なくとも、彼自身も彼の下にいたことのある部下ならば充分に対処できる程度の相手である。

「はああっ!」

才人は気合と共に最後のワルキューレを薙ぎ払い、その切っ先をギーシュに向けた。ギーシュは才人の迫力に負けて、その場に尻餅をついた。

「……どうする?」

「ま、まいった! 僕の……負けだ」

決闘の決着は誰もが予想もしなかった才人の勝利で幕を閉じた。才人は決闘が終わると同時にその場に崩れ落ちた。

「サイト！」

ルイズが慌てて才人の元に駆け寄って何度もその名前を呼んでいた。ヴァルデスはギーシュの元に行って声をかけた。

「お前の負けだな」

「あ、ああ……僕の負けだ」

「お前が二股かけた女の子とサイトに謝罪するんだな。それが勝者に対する敗者の礼儀だ」

「ああ。わかったよ」

ヴァルデスはそれだけ言うと、今度は才人のところに向かった。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわよ！ こんなボロボロになって……」

ルイズは涙を流しながらヴァルデスに言った。彼女もまた激昂していて、とらなければならない礼儀を忘れてしまっていた。

「馬鹿よこいつ。貴族を相手に決闘を申し込むなんて……」

「確かにそうだな。まあ、男としてはわからないでもないが」

「何よそれ？」

「……まあいい。エルティナ！」

ヴァルデスは離れた場所にいる彼女を大声で呼んだ。エルティナはすぐにヴァルデスのところにやってきて膝をついた。

「お呼びでしょうか？」

語尾を伸ばさない時は真剣な時、ヴァルデスはエルティナが真面目にやっているのを悟った。

「サイトを治療してやれ」

「かしこまりました、旦那様」

エルティナは才人の傍によって癒しの術をかけた。イリーズほどの力はないが、エルティナもまたその才能を受け継いでいる一人だった。水のスクウェアメイジで、並みのスクウェアメイジよりも癒しの能力に長けていた。あれだけ酷い手傷を負っていた才人の傷は見る見るうちにその数を減らしていき、あっという間に目に見える傷は全て消えた。その様子を見ていたメイジたち、特に水系統を得意とするメイジたちからは感嘆のため息が漏れていた。

「終わりました」

「」苦勞」

エルティナはヴァルデスに一礼をして彼の背後に控えた。ヴァル

デスは剣を抜いてサイトにレビテーションをかけて浮き上がらせた。

「で、殿下。殿下にそのようなことをしていただくかなくても……」

ルイズはようやくやく少しは怒りも治まったようで、ヴァルデスに対する礼儀も思い出していた。

「構わん。彼は決闘の勝者だ、これぐらいの褒美があってもいいだろう」

ヴァルデスはそう言って才人を浮かばせたまま、ルイズの部屋に運んでそのベッドに寝かせた。ルイズと今回の決闘のきっかけになったあの侍従は共に看護をし、ヴァルデスは部屋を出て行った。

「ヴァルデス」

女子寮塔の入り口のところまでシャルロットとエルティナが待つていた。二人がそこにいるので、他の女子生徒たちが塔の中に入れずにいて、その周りでうるうるとしていた。

「待たせたな」

「大丈夫？ 彼」

「大丈夫だ。エルティナの術は完璧だ」

「そうじゃない」

「じゃあ何だ？」

「危険」

ヴァルデスはシャルロットが何を言っているのかがわかった。

「大丈夫だろう」

「でも、あの動きは……」

「所詮は素人。動きが速いだけで剣の扱いは滅茶苦茶だった」

「そうですね」

エルティナも同じ感想を抱いていたようだ。ヴァルデスの意見にすぐに同意した。

「でもでも、剣の扱いは素人でも、あの動きの速さは危険ではないですか？」

「あの程度なら俺やネージユはもちろん、牙部隊の連中ならば誰でも充分に対処できる程度のレベルだ。ま、敵対してこない限りはほつといたほうがいいだろう」

「わかった」

「わかりました」

ヴァルデスたちはそう結論付けてその場を後にした。

一方、学院長室で決闘の一部始終を除いていた二人の教師は……。

「あの力、やはり伝説のガンダールヴ……」

「じゃが、ミスタ・コルベールよ。ガンダールヴを召喚したミス・ヴァリエールは優秀なメイジかの？」

「いえ、それは……」

「この件は他言無用じゃ。少なくともこの次第がわかるまではわしが預かる。戦争好きの軍人なんぞにこの話を聞かれたら厄介なことになるかねないからの」

「かしこまりました。オールド・オスマン」

二人の教師は遠見の鏡の前でそう結論付けた。

ちなみに、ギーシュは決闘したという件では罰を受けなかったが、学院に無用な混乱をもたらした罰として一週間の反省室入りを命じられた。才人については生徒ではなく使い魔ということで、その主であるルイズも含めて一切の罰は与えられずに今回の件の全てが終了した。

決闘（後編）（後書き）

いつも拝読いただきましてまことにありがとうございます。

すいません、私事ですが明日と明後日はどうしても更新ができません。次の更新は土曜日の午前零時ということになります。

あと現在980000PVですので、恐らくその間に1000000PVになつていていると思います。本当にたくさんの方々に読んでいただけたのだな、と感激しています。
これからもよろしく願います。

休日の過ごし方（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

休日の過ごし方（前編）

「買い物に？」

虚無の曜日、それはこのハルケギニアで唯一公式に認められている休日である。もっとも、それは貴族だけの話であって平民には一日たりとも休みなどというものは存在しない。

「そうよ。あんたに剣を買ってあげるの」

ルイズは才人にそう言った。あの決闘で才人のことは学院中に知れ渡ることとなり、意外にも才人の剣の腕が優れていることに気がついたルイズは彼に護衛の役割もできるようにと考え、トリスタニアまで剣を買いにいくと才人に言ったのだ。

「そのトリスタニアって言うのは遠いのか？」

「ええ。だから、早くから出ないと今日中に戻ってこれないの。早く行くわよ」

「わかったよ」

ルイズと才人は既舎に寄って馬を借りてトリスタニアへ向かって走っていった。その様子を窓から見ていた人物がいた。

「あら？ サイトとルイズじゃない」

自慢の赤い髪を弄りながら、キュルケは二人が出かけていくのをしっかりと見届けていた。あの決闘以来、キュルケの情熱の炎は才

人に向けられることとなり、彼女に言い寄っていた男たちは一斉に振られていた。

「あーん、せつかくサイトを誘惑しようと思ったのに！」

キュルケは慌てて身支度を済ませて、厩舎から馬を借りて出かけた。

「このままじゃ二人に追いつけない」

キュルケはそう言うと、二人の後を追うのは諦めてヴァルデスの屋敷に向かって馬を走らせた。

「何者だ！」

屋敷の護衛に止められると、キュルケはすぐに馬から下りて名を告げた。

「私はゲルマニア貴族、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ。シャルロット様に会いに来たの」

「ツエルプストー辺境伯の……失礼いたしました。では、馬はこちらでお預かりいたします」

「ありがとうございます」

キュルケは護衛の人間に馬を預けて屋敷の中に入った。

「いらっしゃいませ。ツエルプストー様」

「シャルロット様はいらっしやるかしら？」

「ええ。ご案内いたします」

屋敷の侍従に案内され、キュルケはシャルロットの部屋の前に通された。

「失礼いたします。ツエルプストー様がお越しになられました」

「……通して」

「かしこまりました。では、何かございましたらお呼びください」

「ありがとうございます」

侍従は一礼をしてキュルケの前から去っていった。キュルケはドアを開けて部屋の中に入った。

「いらっしやい」

「……お楽しみ中だったのかしら？」

キュルケの目の前には着替え中のシャルロットだった。何も着けていない全裸の姿で下着を履こうとしている姿であり、ベッドには眠っているヴァルデスがいた。

「明け方に終わった。ちよっと寝てた」

「そ、そう……」

キュルケもそういう経験が全くないというわけではなかったが、いざ他人のそういう姿を目の当たりにすると何とも気恥ずかしいものを感じざるを得なかった。

「で、何か用？」

「え？ あ、そうそう。シルフィードを貸してほしいのよ」

「シルフィードを？ 何故？」

「サイトとルイズが馬に乗ってどっかに行ったのよ。追いかけたいんだけど馬じゃもう追いつけないから、貴女のシルフィードを貸してほしいの」

「……わかった」

「ありがとう！ シャルロット！」

キュルケはシャルロットを抱きしめた。こういうコミュニケーションはキュルケがよくやるので、シャルロットももうこれには慣れていた。

「ちょっと待ってて」

シャルロットはそう言って、ベッドで寝ているヴァルデスのところに向かって、体を揺すって彼を起こした。

「……何だ？」

「ちょっと出かけてくる」

「一緒に行った方がいいか？」

「大丈夫」

「気をつけるよ」

「うん」

ヴァルデスとシャルロットは口付けを交わして、彼はそのまま眠りにつき、彼女は早急に着替えを済ませてキュルケと共に部屋を出た。

「シャルロット様、どちらへ？」

「ちょっと出かけてくる」

「では、すぐに護衛を」

「大丈夫。貴方たちは彼を守って」

シャルロットはそう言って表に出て、彼女の使い魔専用の厩舎に向かった。

「シルフィード」

そこにはシャルロットが召喚した風竜がいた。シルフィードという名前をつけられ、屋敷中の人間たちから好かれている存在になっていた。

「相変わらず立派ですね。シャルロット様のシルフィードは」

キュルケも人目がない場所ならば普段どおりの言葉遣いだが、人目につく場所では言葉遣いに注意していた。なにせ、相手はこれから自分たちの上に立つ人物の妻になる人物なのだから。

二人はシルフィードの背中に乗って空へと舞い上がった。

「どっちへ行つた？」

「あ、ごめん。よくわからないの」

「馬二頭。食べちゃ駄目」

シルフィードは「きゅい」と一鳴きして、空を飛んでいった。

「へえ、ここがトリスタニアか」

才人とルイズは一足先にトリスタニアの町に着いて、その大通りを歩いていた。

「ちょっと。感心するのはいいけど、預けた財布をすられないようにしなさいよ」

「大丈夫だって。服の中に入れてあるから」

「馬鹿ね。メイジが魔法でやれば簡単にすられちゃうよ」

「貴族がすりをやるのか？」

才人は貴族と呼ばれる連中がすりまがいのことをするとは想像できなかつた。そもそも、この短い間でも貴族という生き物はプライドを大事にしているということだけはこの間の一件で痛い程よくわかっていた。

「違うわよ。貴族はメイジだけど、メイジが全て貴族というわけじゃないのよ」

「……どういうことだ？」

「何らかの理由で勘当されたり、家名を剥奪された貴族が平民として生きることもあるのよ。そして、そういった連中のほとんどが良からぬことに手を染めていたりするのよ。だから、メイジが全て貴族というわけではないのよ。わかったら、すられないように注意しなさいよ」

「あ、ああ。わかった」

ルイズが先導してトリスタニアの町を歩いていった。やがて、大通りから裏通りへと入ったが、才人はその臭いの凄さに思わず鼻を摘んだ。

「な、何だ！？ この臭いは！」

「この辺りって汚いからあんまり来たくないのよね」

「そ、そんな程度の問題か？」

汚物が平気で道端で捨てられている状況を見て、才人は思わず呟いた。

「ビエモンの秘薬屋の傍だから……あ、あつたわ！」

ルイズが指差す方向には剣の絵が描かれた看板がかかっている店があつた。

（剣の絵だから武器屋か……まるでゲームみてー）

才人はそんなことを思っていたが、ルイズはそのまま店の中に入つていったので彼も慌ててその後について店の中に入った。

「いらつしゃいませ、貴族様。うちは貴族様に目をつけられるような阿漕な商売はやっておりませんぜ」

「客よ」

「へえ、驚いた！ 貴族様が剣をお使いになるので!？」

「使うのは彼よ」

ルイズが才人を指差すと店主は納得したように頷いて言葉を続けた。

「なるほど。最近は何騒ですから、使用人に剣を持たせるのが流
行っております」

「そうなの？」

「へえ、土くれのフーケって盗賊が貴族の家から貴重な魔法道具を
盗んでいくということ、お宝をお持ちの貴族様たちはフーケに怯
えているらしいので」

「ふーん」

学生であるルイズには全く無縁の話なので、店主の話は適当に聞
き流しながら店に飾ってある剣を眺めていた。店主もルイズが話に
興味を失ったと気づくと、すぐにカウンターの奥から候補の剣を持
ってきた。

「そちらの御仁がお使いになるならばこちらのほうがよろしいかと
……」

店主はカウンターの上に細身のレイピアを置いた。

「ギーシュとの戦いに使っていたのはもっと大きくて大きかったわね」

「ですが、そちらの御仁の体格ですと、これぐらいの方がおすす
め
ですぜ？」

「もっと大きくて大きいのにして」

「へ、へえ……」

店主はまたカウンターの奥に入って、今度は柄の部分や鞘に宝石などがあしらってある見た目が物凄い豪華な剣を持ってきた。太さもさっきのレイピアよりも太かったのでルイズとしても満足する一品だった。

「いいじゃない。いくら？」

「金貨二千枚です。新金貨なら三千五百でさあ」

「森つきの立派な屋敷が変えるじゃないの」

「この剣はかのゲルマニアのシュペー卿が鍛えた一品ですぞ。これほどの代物はなかなかお目にはかかれませぬ」

「でも、やっぱり高いわね……」

店主とルイズが交渉している間、才人は店に飾られている様々な武器を見ていた。これだけの数の武器を見るのは生まれて初めてのことだったので、ちよつと興奮気味にそれらを見ていた。

「やめとけ、やめとけ！ そんな鈍らを真剣になって悩むようなら剣を見る目はねえよ！ とつとと帰りな！」

「だ、誰よ！ そんな無礼なことを言うのは！？」

「こらデル公！ お客様に向かってなんて口を利くんだ！」

ルイズと才人は店内を見回したが、そこにあるのは並んでいる武器ばかりで人の姿は何処にもなかった。

「てやんでえ！ 見る目がない奴に見る目が無いといって何が悪い！ それと俺っちの名前はデルフプリンガーだ！」

「うるせえ！ こちらの貴族様に頼んで溶かしちまうぞ！」

「やれるものならやってもらおうじゃねえか！ どうせこちとら退屈ばかりでこの世に未練なんざねえ！ 一思いにやってもらおうじゃねえか！」

ルイズと才人がその声の主を探して店内を見回している間も、店主とその声の主の言い争いは続いていた。才人は樽の中に入った十把一絡げで扱われていた武器の中から、かたかたと何かがなる音が聞こえた。

「何だ？」

才人はその剣を樽の中から拾い上げた。

「おい！ 勝手に俺っちに触れるんじゃねえ！」

「何よこれ、インテリジェンスソード？」

才人は喋る剣に面白さを感じていたが、ルイズは何だか訝しげな目つきで見ている。

「へえ、何処の誰が始めたのか知りませんが、剣に知恵を持たせてどうするつもりだったんでしょうかね？」

店主もうんざりといった表情で、ルイズにそう言った。

「お前もいつまで俺っちを握っているんだ。とっとと……」

すると、その剣は急に黙ってしまった。

「おでれーた！ お前、『使い手』か！」

「使い手？」

「お前、俺を買いな！」

「何か面白いな……ルイズ、これ買ってくれよ」

「えー……もつといいのになさいよ？ 何かそれ、みすぼらしい無礼だし」

才人は乗り気だったが、ルイズはどうもその胡散臭さにあまり乗り気ではなかった。

「いいや。これが気に入った」

才人が一步も引かないところを見て、ルイズはため息混じりに店主に訊ねた。

「あれいくら？」

「あれなら金貨百で結構でさあ」

「あら？ 随分安いわね」

「こつちにしたら厄介払いみたいなもんでさあ」

「ふーん……まあいいわ。あれをもらっわ」

「毎度、ありがとうございます」

店主はそう言うと、カウンターの奥からその剣に合う鞘を持ってきてサービスとしてつけてくれた。

「どうしてもうるさいようならば鞘に入れておけばおとなしくなりますんで」

「そう」

「またのご来店、よろしくお願いいたします」

才人は鞘に収めたデルフブリンガーを背中に背負い、二人はその武器屋を後にした。だが、そんな二人の姿をこっそりと見ている二つの影があった。

「何よ、ルイズったら、サイトに剣なんかプレゼントしちゃって
く！」

キュルケはその様子が面白くなく、シャルロットは特に興味も抱いていなかった。

「行くわよ」

キュルケはシャルロットの手を引いて、ルイズたちが出て行った武器屋に入っていった。

「これは驚いた！ 一日に貴族様がまた御出でになるなんて！」

「さつきここにきた二人組がいたでしょ？ どんな剣を買っていたの？」

「へえ、年季の入ったボロ剣でさあ」

「ふーん……ルイズったら随分とケチったものね。ねえ、私も剣がほしいんだけどいい剣はないかしら？ あの二人が買っていったものよりいい剣よ」

「へ、へい。こちらなんていかがでしょうか？」

店主はさつきルイズたちに買われなかったあの豪華な剣を出した。

「あら、いい剣じゃない」

「へい。これはあのゲルマニアの名工シユペー卿の作品でさあ」

「気に入ったわ。おいくらかしら？」

「金貨二千、新金貨なら三千五百でさあ」

「ちょっと……お高いわねえ」

キュルケはそう言うとカウンターのの上に座り、その豊かな胸元を更に大きく開いて店主を誘惑した。店主もキュルケの術にひっかかり、視線はその胸元に釘付けになっていた。

「で、でしたら千八百……」

「もつと……」

キュルケはそう言いながら店主ににじり寄り、店主はたじたじになった。

「で、でしたら千五百」

「千」

「せ、千枚!? い、いくらなんでもそりゃあ……」

「お・ね・が・い?」

キュルケは更に胸元を大きく広げて、店主の耳元で甘い声で囁いた。胸元は先端が見えそうで見えないくらいまでに開かれ、あと少しだ、と店主はもうそこから視線を外せないくらい夢中になっていた。そのせいで冷静な判断力も失われていた。

「わ、わかりました。千枚でけっこうでさ……」

「ありがとうございます」

キュルケは半額にまで値引かせることに成功すると、すぐにカウンターから降りて金貨の入った袋をその上に置いて剣を抱えた。

「じゃあ、これはもらっていくわ。ありがとうございますね」

交渉成立から店を出るまではあっという間で、店主が余韻に浸っている間に全てが終わっており、やがて夢から覚めたように顔色が

どンドン真っ青になって、泣きそうな顔で閉店の看板を出して早めに店を閉めて後悔にむせび泣いたが、そのことを知る者は誰もいなかった。

休日の過ごし方（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

休日の過ごし方（後編）

「鮮やか」

「ありがとう」

店を出た後、キュルケとシャルロットの二人はカフェで一服していた。学院に戻れば才人と顔を合わせるのは簡単なことなので、せっかくトリスタニアに来たのだからゆっくりしていこうということになったので、二人はまず買い物物の成功を祝って、お酒の代わりに紅茶で祝杯を挙げていた。

「それにしても、トリスタニアってウィンドボナと違って、やっぱり臭いがきついわね。まあ、ウィンドボナも昔はそうだったんだけど」

「リュティスもそう。ゲルマニアから知識提供を受けて綺麗になった」

「それを始めたのもあの人だって言うから凄いわよね、タバサ」

「うん」

キュルケはトリスタニアではヴァルデスのことはあの人、シャルロットのことはかつて偽名で使っていたタバサと呼ぶことにした。ゲルマニアに対する感情が一番悪い国であるトリステインの首都でゲルマニアの王族の名前を連呼するわけには行かなかったし、その妃であるシャルロットがここにいるとなれば大騒ぎになってしまうのでこの来る間にその取り決めを行っていた。

「正直、これからどうなるのかしらね？　ゲルマニアとガリア」

キュルケはゲルマニアでは大貴族といわれるツエルプストー家の一員であったので、そのことが気になっていた。キュルケ自身は家を継ぐ立場にないのだから、何処かの貴族の家に嫁入りということになるのだが、それでもハルケギニアの勢力図が大きく書き換わることになったこの現状を見ると、それも絶対安全な選択肢ではないと言える。下手をすれば、その貴族や実家が没落してしまうのではないかという危惧を持っていた。

「わからない。でも……」

「でも？」

「ガリア王とゲルマニア皇帝は何かを企んでいる」

シャルロットはその言葉の裏に確固たる証拠を持っているわけはなかった。ただ、双方がこの機に何もしないという選択肢はありえないということには確信を持っていた。

「うちの皇帝閣下とガリア王が？」

その言葉はキュルケにとって聞き逃すことはできないものだった。少なくとも、どっちが何かを起こすとしても、それが自分の将来にも大きく関わってくるだろうということは容易に想像ができたから。

「何をやるつもりしているの？」

「わからない。それぞれが同じことを考えているのかもしれないし、

違うかもしれない。ただ……」

「ただ……何？」

「あの二人が何もしないはずがない」

ジョゼフの得体の知れなさやアルブレヒト三世の野心の大きさを知っているシャルロットならではの言葉だった。六千年保たれてきた秩序を壊そうとしているときに泰然として機を逃すほど、あの二人は愚鈍でないことをシャルロットはよく知っていた。

また、口には出さなかったが、それぞれが同じことを考えていようとも、違うことを考えていようとも、その考えの中にはヴァルデスが計画の核となっていることもシャルロット、いや、婚約者全員が感じていた。

「まあ……そうよね」

キュルケも会ったことは無いが、父やその知り合いの貴族から聞いているアルブレヒト三世という人物像を当てはめると、シャルロットがそう言うのにも納得がいつていた。

「戦争でもする気がしら？」

「可能性はある。でも、問題はある」

「問題？」

「何処を敵にするか」

確かに、とキュルケは心の中で同意した。ガリアとゲルマニアが同盟を結んだ時点でハルケギニア最大勢力となるのは揺らぐことのない事実であって、その最大勢力を相手に好き好んで戦争を仕掛けようとする国があるとは考えられなかった。少なくとも、兵器や武器よりも前に、兵士の数において他国を圧倒するだけの資源があるのだから、負けるとわかっている戦争を起こそうとする国はない。

そうになると、戦争はこちらから仕掛けることになるのだが、こちらから下手に仕掛けると傍観を決め込んでいる小国などの反感を買い、相手に協力してしまう可能性がある。勝てない戦争ではないが、それでも長引くことは確実であり、その間に国力はどんどん低下していつてしまうので、戦争はあまりいい選択肢とは言えないのだ。

「まあ、成り行きを見守るしかないか……って、貴女はそう暢気なことを言っていられないのよね」

「大丈夫」

「ま、あの人も一緒だし強いからね」

「うん」

二人はそう言うとカップに残っていた紅茶を全部飲み干した。

「ねえ、ちょっと行きたいところがあるんだけど付き合ってもらっていい？」

「いい」

「じゃあ、行きましょ」

キュルケはシャルロットの分の代金も全て自腹で払い、彼女を連れて目的の店まで一度も迷わずに進んでいった。

「……？」

「そう、……」

二人がやってきたのは女性専用のブティックだった。もつとも、高級な衣装を扱っている店なので、ここに来る女性客は貴族の奥さんかその娘ばかりであった。

「さつき見てて思ったんだけど、タバサももつとセクシーなものを身に着けなくちゃ駄目よ」

「セクシー？」

「そう。お勤めだって燃え上がった方が楽しいでしょ？」

「燃え上がる……」

すると、シャルロットの顔はどんどん赤くなっていき、最終的には耳まで真っ赤になった。

「嫌いじゃないんでしょう？ 彼とのお勤め」

「……（くくっ）」

「だったら、着飾らなくちゃ。彼だって着飾った貴女を見たら、きつと燃え上がるだろうし、お勤めも楽しくなるわよ」

キュルケにそう言われて店内にある様々な下着を見てみたが、どれがいいと言うよりも、自分の体型に合いそうなものが見つからなかったので、どうしていいかわからずにいた。キュルケもそんなシャルロットの様子を見て彼女にこう言葉を掛けた。

「大丈夫。私も手伝ってあげるから。きっと綺麗になれるものを選んで見せるわ」

「でも……」

「私に任せなさい。それと、貴女もこれだけは覚えておいた方がいいわよ」

「何？」

「男はね、実際はどうであれ自分のために着飾ってくれているのを見ると嬉しいものなのよ。女が男に自分のためのプレゼントをもらって喜ぶのと同じように」

キュルケはそう言ってウインクをした。シャルロットはそれを聞いて、彼女に対して頷くことで了解の意を示した。

「ただ、これも覚えておきなさい。必要以上に着飾ることは、心の醜さを表してしまうってことも。ほら、あんな感じに」

キュルケは視線だけでシャルロットに見るべき方向を示した。その方向には恰幅のいい中年の貴族女性が煌びやかなドレスを身に纏い、その指には大きな宝石がしらわれた指輪をたくさん身に付けていた。それを見て、シャルロットはまた頷くことで同意の意を示

した。

「さてと、どんなものがいいかしらね」

キュルケは楽しそうに色々なものを手にとって眺めていた。シャルロットが見ていたときにはよくわからなかったが、キュルケは手馴れた手つきで次々とシャルロットのサイズでも合いそうな下着を次々と見つけ出していった。

「黒や赤はタバサのイメージじゃないわね、やっぱり青か水色かしら。でも、ピンクも捨てがたいわね」

楽しそうに自分の下着を選んでいるのを見て、シャルロットは何も言わずにキュルケが勧めてくれるものを買おうと思っていた。

あの決闘騒ぎ以来、キュルケとシャルロットはどんどん仲が良くなっていき、今では親友と呼んでも差し支えなかった。ヴァルデスと結婚が決まり、自分の身分を知った今でも変わらずに接してくれる数少ない友人であり、自分の知らないことをたくさん知っている友人だった。

「ねえ、タバサはこれとこっちだったらどっちがいい？」

キュルケは二組の下着をシャルロットに見せた。レース編みの下着で、パンティの方はデリケートゾーン以外をレースで編んでいるのでその向こう側が透けて見えていた。ブラジャーもカップの上半分がレースで編まれており、花のモチーフがあしらわれていた。可愛らしさと何処か妖しい魅力があり、シャルロットによく似合いそうなものだった。

どちらもデザインは同じだったが、その色が水色とピンクだった。水色は髪の色と相成っているので似合いそうだというのは想像できるが、ピンクはギャップが生まれて、それがかえって面白い味を出しそうだとキュルケは考えていた。

「じゃあ……両方」

「え？ 両方買うの？」

「そう」

シャルロットはどっちも良かったので、一つに決められなかった。お金は持ってきていたので、それならば両方買ってしまおうと考えたのだ。それに、キュルケが自分のために真剣になっただけでくれたのが嬉しかったので、その気持ちに報いようとした。

だが、そのとき、シャルロットの頭にあることが浮かんだ。

「じゃあ、買いに行きましょうか」

「待って」

シャルロットはそう言うと、さっきキュルケが選んでいたあたりに向かって目当てのものを探した。幸いにして、それはすぐに見つけることができた。

「これも買っ」

「く、黒？」

キュルケはさっき自分の考えから外した黒い色の同じ下着を持ってきた。

「冒険……するつもり？」

「……（じくっ）」

ある意味で、今までの自分という殻を破ろうとしている親友の姿が、キュルケにはとてもいとおしく見えた。そして、キュルケは何があっても自分はシャルロットの友達でいようと思った。ヴァルデスには悪いが、彼とシャルロットのどちらかと言われたら迷わずシャルロットを選ぶ。それは男には決して理解が及ばない女同士の友情というものだった。

「じゃあ、その三つを買って帰りましょうか」

「キュルケは？」

「私はいいわ。タバサのを選べたから大満足」

そう、キュルケは初めからここに自分の服を買いに来たわけではないのだ。ヴァルデスの屋敷でシャルロットの姿を見たときから、彼女が身に着けているものにあまり関心を持っていないことを見抜いたので、いい機会だったのでそれを教えようと一計を案じたのだ。

シャルロットが会計を済ませた後、二人は町の外で再びシルフィードを呼んで屋敷へと戻っていった。

「おや？」

たまたま外にいたイザベラがその姿を見つけ、シルフィードが降り立ったところにやって来た。

「何だい？ 姿が見えないと思ったたら出かけていたのか」

「イザベラ様、ご機嫌麗しゅう」

「ああ、キュルケだったね。二人で何処行ってたんだい？」

「ちよつとトリスタニアまで野暮用で」

キュルケもイザベラのこと少し苦手だった。どうしても、その高圧的な口調が彼女の印象を強く決め付けてしまうので、最初から偏見を持たずに付き合ってくれる人間はごくわずかだ。それにヴァルデスが含まれる。

「そんなでかい剣をどうするんだい？」

「これは知人へのプレゼントですわ」

「プレゼント……？」

それを聞いてイザベラの視線が鋭くなった。キュルケは何か無礼な振る舞いをしたかと自身を省みたが、持っている剣を見てイザベラが不機嫌になった理由に行き着いた。

「あ、これは少なくともヴァルデス様へのプレゼントではございません」

「……そうかい。ならいいんだ」

イザベラはそう言うときュルケに向けていた鋭い目つきを幾分か柔らかいものに変えた。

こう見えて、イザベラはヴァルデスへの想いに関してには本当に一途である。だからこそ、政略上で四人の妻と愛人を抱えることには渋々承諾したが、これ以上、彼に女が増えることは彼女にとってはとても嫌なことだった。そもそも、自分の男が複数の女と関係を持っているという時点で普通の女なら嫌になるものだろうが、イザベラの場合は彼の立場を理解することと彼への想いでそれを乗り越えていた。ただ、寄ってくる女に容赦はしないという冷酷さも持っていた。

「では、シャルロット様。本日はとても楽しかったですわ。また一緒にしましょう」

「ええ」

キュルケは一礼して、学院から借りてきた馬に乗って戻っていった。彼女は名残惜しい気もしたが、何よりも一刻も早くイザベラから離れたい気持ちのほうが勝っていた。あまり長居すると彼女に余計な勘違いをされて、厄介なことになりそうだと彼女の本能が警鐘を鳴らしていたからだ。

「ところで、お前は何を買ってきたんだい？」

イザベラはそう言ってシャルロットが持っていた包みをあつという間に取り上げて、その中に入っているものを見た。シャルロットはからかわれるものだと思っていたが、いつまで経ってもイザベラからの反応がないので、彼女の表情を見てみると目を見開いて驚い

ているのがわかった。

「お前……大胆だね」

シャルロットもイザベラのその言葉には驚きを隠せなかったが、彼女はシャルロットに包みを返すと何やらぶつぶつと呟きながら屋敷の中へと戻っていった。

イザベラも王女として育てられたため、身に着けるものは全て予め用意されたものであって、王女らしい清楚なものしか身に着けたことがなかった。だから、シャルロットが買ってきた扇情的な下着を見て驚きを隠せなかった。

「私も買いに行かないと……」

そんなことを呟きながらイザベラは自室へと戻っていった。

「あの女、何を言っているの？ きゅい」

シルフィードはその様子を見てシャルロットにしか聞こえない程度の小さな声で話しかけた。

シルフィードは対外的にはただの風竜ということになっているが、実は絶滅したと思われる韻竜であり、人間の言葉を解すほど知能の高い種族の幼生だった。

「喋っちゃ駄目」

シャルロットはそれだけ言うと、シルフィードに厩舎に戻るように指示を出して自室へと戻った。

自室に戻ったシャルロットは誰も入ってこられないように鍵をかけ、また覗かれないように窓のカーテンも全部閉めた。そして、先程買ってきた新しい下着を身に纏い、姿見の鏡の前に行った。

「凄い……」

シャルロット自身も清楚な下着しか身に付けていなかったため、このような下着を身に着けるのはこれが初めてだった。あまり凹凸の無い体にコンプレックスを感じていたが、それでもこの下着を着けるとそれを補うような怪しい雰囲気を纏うことができた。自分自身を見て赤面するという、人生で初めての経験をしていた。

「これならば……」

他の婚約者たちの凹凸がはっきりしている体、それに比べるとどうしても魅力というものに欠けてしまっていたが、これならばそれに対抗できる。そして、それと同時に絶対に誰にも教えてはならないと考えていた。そう考えると、先程イザベラに見られたことは随分と大きな痛手になってしまったと反省せざるを得なかった。

「……喜んでくれるかな」

無愛想で無感動、無関心、自分の愛している男の性格はよく知っているつもりだが、それでもこれを身に着けて彼の前に立ったときは喜んでほしい。シャルロットはそんな思いを抱き、次の自分の番をその日から一日千秋の思いで待ち続けた。

休日の過ごし方（後編）（後書き）

お気に入り登録が千件突破しておりました。まことにありがとうございます。

さて、少し前までは何とか連日更新しておりましたが、ちょっと四月になり環境が変わってしまったため、連日更新ができず、いつ更新するかは予想はつかなくなりました。

なるべく早く更新するように心がけますが、二三日や一週間ぐらい間が空いてしまうことも出てくると思いますので、すみませんがご了承ください。

これからも楽しい作品を心がけてまいりますので、よろしくお付き合いくださいませ。

夫婦の絆（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

夫婦の絆

「ダーリン」。私、貴方のために剣を買ってきたのよ。受け取ってくれるわよね」

「ちょっとキュルケ！ サイトには私が買った剣があるのよ！ あんたのはお呼びじゃないわ！」

今日も今日とて、ルイズとキュルケは才人のこと言い争いをしていた。この光景はもう他の生徒たちも見慣れている光景となっていた。周りの生徒たちは、ほっておいてもいずれば落ち着くだろうと考え、ただ巻き込まれないようにと、注意を払っていた。

どうせキュルケの熱はすぐに冷める、周りの意見はそれで統一されていた。ただ、ヴァリエール家とツエルプストー家のいざこざに巻き込まれたくないというのが生徒たちの本音だった。

「なあ、ルイズ。剣ぐらいいいじゃねえか」

「サイトは黙ってて！ ツエルプストーの女から物を貰うなんてヴァリエール家の名が泣くわ！」

「あーら、そういう小さい器量だからヴァリエールの女って嫌よね」

「何ですって!?!」

「何?」

ルイズとキュルケは互いに一步も引かないと言わんばかりの鋭い

視線で睨み合いを続けていた。全然進展のない口喧嘩になす術がなく、才人はただその成り行きを見守るだけだった。

そして、その喧嘩を遠めで見ている者たちもいた。

「しかし、仲が悪いとは聞いていたが、あれではまるで子供の喧嘩だな」

ヴァルデスとシャルロット、それと本日の同行者であるイザベラが紅茶とケーキを食べながら、その様子を見ていた。

「ヴァリエール家とツエルプストー家ってそんなに仲が悪いのかい？」

イザベラもシャルロットも話には聞いているが、どうしてそこまで仲が悪いのかという詳しい理由まではわからなかった。シャルロットも学院内の様子でキュルケとルイズの仲が悪いのはわかったが、家同士の仲が悪い理由についてはよくわかっていなかった。

「国境同士だからな、戦争が起これば真っ先に殺し合いを行う家同士ってことさ」

「まあ、わからないでもないけど……それだけかい？」

イザベラは相手の隠し事を見抜く力に関してはずば抜けたものを持っていた。ヴァルデスが何か言っていないことがある、彼女は直感的にそれを見抜いていた。

「まあ、これは余談だが、ヴァリエール家はツエルプストー家とかなり男女問題で揉めている歴史があるそうさ。ヴァリエール家の婚

約者や妻をツエルプストーリー家が奪っていったっていう歴史がある」

「どろどろした愛想劇の歴史ってことかい。皮肉だねえ」

イザベラはルイズとキュルケを見ながらそう言った。シャルロットも個人としてはキュルケの親友であるが、両家の争いの歴史には些か辟易しているところもあった。

「それもあるから、両家は一向に歩み寄る気配を見せない。うちの閣下の悩みの種の一つになっているというわけだ」

「好きにやってくれって感じだね」

「そう」

イザベラもシャルロットもとりあえず、下手に関わらずに様子を見ることにした。ヴァルデスも出来ればそうしたいのだが、変なことで家同士の争いに発展されても迷惑なだけなので、監視だけは続けていた。

（まあ、いざとなったら俺がツエルプストーリー家、カトレアにヴァリエール家を説得してもらえば大丈夫だろう）

万が一のことが起こった場合に対する対処も一応は用意してあるので、ヴァルデスはそれほど危機感を抱いていなかった。ただ、巻き込まれている才人が哀れだとは思ったが。

いつまでも続くかと思った睨み合いだが、やがて進展が訪れた。

「だったらこうしない？ 私と貴女で勝負するの。勝ったほうの剣

をダーリンが使ったことでどう？」

「勝負？」

「そう。魔法で勝負よ」

「まさか、決闘ってわけじゃないでしょうね？」

ルイズの口から出た決闘という言葉に、ヴァルデスたちもさすがに無視するわけにはいかなかった。とりあえずは様子見に徹しているが、本気で二人が決闘するようなことになったらどんな手段を用いても止めるつもりでいた。

「決闘は禁止されているでしょう。魔法の勝負と聞いて何でも決闘と考えるのは野蛮よ、ヴァリエール」

「あなたにそんなこと言われたくないわ！」

「勝負の方法は魔法で標的を先に当てたほうが勝ちってことでどうかしら？」

「いいわよ」

「お、おい、ルイズ。大丈夫かよ？」

ルイズが魔法をうまく使えないことをよく知っている才人は、心配そうにルイズに訊ねた。

「何よ？ ご主人様が戦おうって言うのに文句があるの？」

「そ、そうは言わねえけど……」

「いいから！ あんたはどんと構えていけばいいのよ！ どんと構えていけば！」

ルイズは無い胸を精一杯張ってそう言ったが、その様子がかえって才人に不安を与えていた。キュルケはその様子を見て怪しい笑みを浮かべ、ヴァルデスはため息をついていた。

「どうするんだい？ あんなこと言ってるけど」

「……仕方ない。何かあつたらそれこそ面倒だ」

ヴァルデスはがっくりと肩を落としてそう言った。

「ちょっと面白くなりそうだね。私も見物しようかね」

「趣味が悪い」

「いいじゃないか。決闘というわけじゃないんだし」

シャルロットにかけられた言葉に対して、イザベラは不敵な態度でそう言った。そのやり取りをしている間も、ルイズとキュルケのやり取りは進んでいった。

「じゃあ今夜、ヴェストリの広場で勝負よ」

「わかったわ」

「せいぜい、練習しておきなさい。恥をかかないように」

「そつちこそね！」

そう言って二人は分かれた。二人がいなくなった後は、険悪な雰
囲気もあつという間に薄れていき、普段どおりの様相を取り戻して
いた。

「やれやれ、夜まで待たないといけないのか」

「いいじゃないか。屋敷には護衛の一人でも走らせれば問題はない
だろうし、面白くなりそうじゃないか」

「心配」

二人は勝負に立ち会うつもりでいるので、ヴァルデスはそこから
離れて馬車の近くで待っていた護衛の一人にそのことを屋敷に残っ
ている他の婚約者たちに伝えるように指示した。護衛はすぐに屋敷
に向かって馬を走らせた。

その日は珍しく、付き合いだけでなく、夕食を食べて帰るとい
うことになったので、周りにいる生徒たちもおとなしく、それでいて
行儀よく振舞っていた。ただ、やはり王族として教育を受けてきた
イザベラは他とは違って綺麗なものだった。ヴァルデスもそれなり
には綺麗だったが、どうしてもイザベラと比べると多少荒々しさが
残っているように感じられた。

「さて、もうすぐイベントだね」

「やれやれ。楽しみにされても困るのだが」

「いいじゃないか。たまにはこういう面白いことがなければやってられないだろうさ」

イザベラは心の底からルイズとキュルケの勝負を楽しみにしていた。ヴァルデスはその様子にため息をつき、シャルロットは我関せずといった感じで黙々と食事を進めていた。

「ワインのお代わりはいかがですか？」

侍従がワイングラスの中が空になっていたヴァルデスのところにやってきて、ワインを傍らに持ってそう言った。

「ああ、こいつのワインは私が入れるよ」

すると、イザベラが席を立ち上がって侍従からワインを受け取って、ヴァルデスのグラスに注いだ後、ワインの瓶を侍従に返した。

あの晩以降、ヴァルデスのワイングラスにワインを注ぐのはイザベラの役割となっていた。屋敷の侍従はもちろん、他の婚約者たちにもその役割だけは譲らなかった。些細なことだが、それが正妻だけの特権となっていた。

「見てみなよ、勝負はもう始まっているみたいだよ」

イザベラが指差す方向を見ると、そこには才人を中心として左の席にキュルケ、右の席にルイズが座っていた。

「何だ？ どうして才人がここにいるんだ？」

普段なら、厨房の賄い飯を貰っているはずなので、このアルヴィ

イズの食堂にいるはずがないのだ。

「まあ、決闘のきっかけがあ坊やだからね。いたって不思議はないだろうさ」

「坊やって……あいつ、俺と同じ年だぞ？」

「そうなのかい？ それにしては随分幼く見えるね」

イザベラは才人をずっとヴァルデスよりも年下だと思っていた。彼女の目から見た彼は、顔の造りが自分たちと違って見えるからそのせいで実年齢より幼く見えていた。かつて、才人がヴァルデスを見て自分より年上だと思ったことと同じような感じだった。

「まあ、ハルケギニアで黒い髪の人間って珍しいからな。そう言えば、あそこの子も黒い髪をしているな」

ヴァルデスが指差す方向にはシエスタがいた。ギーシュとの決闘のきっかけになった娘で、あの一件の後、ギーシュからきちんと謝罪の言葉をもらっていた。それ以来、才人とも仲が良くなり、その度にルイズが何故か才人を折檻するという場面をよく見かけるようになっていた。

「何で不機嫌なんだ？ あの娘」

遠目ではあるが、それでもシエスタが不機嫌になっているのがはっきりとわかった。態度だけは崩さず、生徒や教師と接しているときはしっかりとしているが、それ以外の時は不機嫌だった。

イザベラとシャルロットは互いに顔を見合わせて大きくため息を

ついた。

「どうした？」

「あんたって本当にそういうのだけは本当に鈍感だね」

「同感」

ヴァルデスは二人が何を言っているのかが結局わからなかったが、あんまり深く関わらない方がよさそうだと下手な言葉を挟むのを控えた。

こうして、夕食の時間を過ぎした後、三人は勝負が始まるのをそのままアルヴィーズの食堂で食後の紅茶を飲みながら待った。そして、始まりそうだといいことでヴェストリの広場へ行くと、そこには奇妙な光景があった。

「何で吊るされているんだ？ サイト」

ヴァルデスが代表して訊ねたが、それはこの三人が共通の認識として持っていた疑問だった。

「わ、わかりません！ ルイズ！ キュルケ！ これはどういふことだ！？」

「あなたはそこでおとなしくしていればいいの！」

「ごめんね、ダーリン。すぐに終わるから我慢してね」

「な、何をするつもりだ！？」

才人の叫びを無視して、二人は会話を進めていた。

「いい？ ダーリンを吊るしているロープを魔法で先に切った方が勝ちよ」

「わかったわ」

「じゃあ、貴方に先攻を譲ってあげるわ」

「ふん！ 見ていなさい！」

ルイズはそう言うと一歩前に出て、才人を吊るしているロープに意識を集中して術を放った。

どがん！ と激しい音を立てて、ロープではなく才人の右後方の学院の壁にひびが入った。肝心のロープは何ともなっておらず、そのまま才人が吊るされていた。

「あーら？ 貴女の失敗ね。ま、いつものことだけど」

「お、おい！ 真面目にやれ！ 死んだらどうするんだ！？」

「うるさい！ 黙ってなさい！ 犬！」

才人は今の状態である爆発に巻き込まれたら命がないことを自覚していたので、ルイズへの反抗も普段より強めに出ていた。一方、その威力を自覚していたのは遠くで見ていた三人も同じだった。

「なるほどね。あんたの話には聞いていたけど、あの威力はただ事

じゃないね」

「あれが真似できるようになって、教えることができるようになれば最強の軍隊だって夢じゃないんだが……」

「そんなもん作ってどうするつもりだい？」

「戦力を抱えているというだけで、近隣諸国に対して抑止力になる」

「物騒」

「だが、一つの真実ではあるね。勝てないとわかっている相手に戦争を仕掛けようとしたら、国内の平民がまずそっぽを向く、それに便乗して反戦派の貴族も戦争参加拒否の口実として利用する。結果、戦争はしたくてもできなくなるという理屈だ」

イザベラが言っている理論は至極正当なものだった。そもそも、始祖の三人の子供たちとその弟子フォルサテが作った四つの国、トリステイン、アルビオン、ガリア、ロマリアはかつての始祖の威厳を笠に着てその地位を確立してきただけであって、ガリアを除いた三つの国は他国に対して抑止力といえるほどの軍事力を持っているわけではないのだ。

彼らがゲルマニア・ガリア同盟を恐れている本当の理由はここにある。ハルケギニア最大の国土を持つとか、ハルケギニア最大の国力があるとかではなく、この二つが同盟を結ぶことでハルケギニア最大の軍事力を持った組織が誕生してしまうことを彼らは何より恐れていたのだ。いくら過去に始祖の縁の者が作った国であれ、六千年経った今は過去ほどの影響力はなく、新教徒と呼ばれている新組織も生まれ、彼らとの軋轢が起こっている有様である。

おまけに、始祖への信仰心も最早過去ほどのものはなくなっていた。確かに、現在もブリミル教はハルケギニア最大の宗教であることには違いないが、その内部が腐りきっているため、信仰離れが進んでいることも事実だった。だからこそ、信仰を捨てた者たちがゲルマニアに逃げてくることが多かったのだ。

ゲルマニアは表面上ではブリミル教を信仰しているが、実際は完全な実力社会であることから信仰を持っていなくても出世できる糸口が用意されており、宗教に囚われていないから他国では禁忌とされていた研究も行うことができる。それがゲルマニアをハルケギニア最大の国力を持った国家へと発展させることになった理由である。

「まあ、そこから軍事力を競っていたちごっこが始まるわけだが、そうなったらもうお互いに戦争を仕掛けることはできない。一度戦争を始めたら、高めていった軍事力でどちらかが完全に息絶えるまで戦うことになる」

「どちらかが息絶えるまで戦うんだから、当然勝った側も得る報酬以上に高い代価を払わなければならない。戦争に勝っても、何のメリットもなくなるってことだね」

ヴァルデスの言葉にイザベラがそう続けて、その言葉を聞いてシヤロットは納得したように頷いた。

「どっちにしる、あれはどうやっても真似することはできなかったから諦めた。別の方法でそれは考えることにするさ」

ヴァルデスはそう結論付けて、再び決闘を見ることにした。すると、キュルケが呪文を唱えている場面だった。

「ファイアー・ボール！」

キュルケが放ったファイアー・ボールは見事に才人を吊るしていたロープを焼き切り、才人はそのまま地面に向かって落ちていった。

「うわあ！」

あわや地面に激突する寸前、才人は鼻先が地面に触れるぎりぎりのところで宙に浮かんでいた。

「へっ？」

そのまま才人は地面の上で横になり、縛っていたロープも切られた。

「面倒」

「ご苦労だった、シャルロット」

離れたところからシャルロットが才人に向かってレビテーションをかけ、エア・カッターの威力を弱くして才人を縛っていたロープを切ったのだ。

「やれやれ、もう少し面白くなると思ったんだけどね」

勝負が終わると、イザベラはとたんに興味を失ってさっさと帰ろうとし始めた。ヴァルデスもシャルロットもここに残っている理由がなくなっただので、それに続いて学院を出ようとしたその時だった。

「イザベラ！」

いち早くそれに気づいたヴァルデスは一気に飛び出してイザベラを突き飛ばすような形で、その場から無理やり離れさせた。そしてその少し後にそれまで彼女がいたところに巨大なゴーレムの足が下りてきた。

「ゴーレム!?!」

ルイズとキュルケ、そして才人はそれに驚いていたが、シャルロツトは冷静に杖を構えたまま、それに向き合っていた。

「大丈夫か？ イザベラ……」

「え？ あ、ああ……地面にぶつかっただけにちよつと擦っただけだよ」

「そうか……」

イザベラははっきりと感じていた。ヴァルデスが今までに見せた事のない感情が表に出てきていることに。

「少し待ってる。すぐに終わらせる」

ヴァルデスはそう言うと、自身の遍在を九体、本人を合わせると十体のヴァルデスがゴーレムに向かって駆けていった。その間、ゴーレムはルイズが壊した壁の部分にその拳を叩きつけ、ゴーレムを操っている術者が中から何かを取り出して戻ってくるころだった。

「殿下！」

才人がヴァルデスに対して何かを言ったが、彼は才人の声が何も聞こえていなかった。ただ、目の前にいる敵に全ての意識を集中しており、これまでにない何か、彼の戦いへの衝動を駆り立てていた。

『エア・ハンマー』

遍在のヴァルデスたちが同時に呪文を唱えて、ゴーレムのあちこちを破壊していった。

「くっ……!!」

ゴーレムを操っている術者は危険を察知する能力に長けているらしく、ヴァルデスと戦っても勝てないということを探知すると、ゴーレムがまだ動けるうちに全速力でその場から去っていった。逃げようとしている間もヴァルデスたちは術を打ち込んだが、残念ながらそのゴーレムを操っている術者の決断の方が早く逃げられてしまった。

「ちっ……逃げられたか……」

ヴァルデスは珍しく憎悪の籠った声で、苦々しく言葉を口にした。無感動無関心、表情や声色から感情を読み取ることが難しいといわれている彼にしては明らかとも言えるくらいにおかしかった。

ヴァルデスはゴーレムが逃げた方向をしばらく見詰めた後、イザベラたちのところに戻った。

「大丈夫か？ 二人とも」

「ああ、大丈夫さ」

「問題ない」

「そうか……」

そう聞いて、ヴァルデスはほっと胸をなでおろした。

（安心した……？ 何故だ？）

それと同時に、ヴァルデスは自分が何故そんなことを考えたのか疑問に思った。どう見たってイザベラは無傷であるし、戦闘に参加していないシャルロットに関しては論外のはずである。なのに、そんな彼女たちの身を心配してしまったのか、ヴァルデスにはそれがわからなかった。

「帰るぞ」

「ああ」

「うん」

ヴァルデスはとりあえずその考えを頭から捨てて、二人を連れて馬車に向かった。イザベラとシャルロットはそんなヴァルデスの背中を見て、肉体や政治的な関係だけでなく、心から夫婦になれたと感じた瞬間であり、その背中が非常に頼もしかった。

二人はヴァルデスに対し、揺ぎ無い愛を注いでいたし、彼を愛しているといつでも何処でも誰にでもきっぱりと言い切ることができ

るくらいに彼を溺愛していた。だが、元々感情表現がそれほど上手くなく、それでいて相手に動揺を気取られないように表情を消そうと訓練もしてきた。それゆえ、彼が自分たちに対してどのような感情を持っているのが今一自信が持てずにいた。

夫婦として、共に生活し、夜のお勤めに励み、幸せな生活を送っていた。だが、そこにあった唯一の不安が彼の気持ちだった。

以前から彼を知るイザベラやシャルロットやネージュはもちろんのこと、政略結婚という形で彼に嫁いで来たカトレアやエルティナも同様の不安を抱えていた。彼女たちは自分の夫となった彼に対して愛を注いでいた。まだ短い付き合いではあるが、彼の人となりを見て嫁ぐ相手が彼でよかったと思っている。

しかし、共に暮らしていてもわからないことはある。それが夫婦生活というものの難しさなのだが、未だ夫婦生活初心者である彼女たちがそこまで気を回すことはできなかった。

だが、少なくともイザベラやシャルロットは彼に対してもう迷いをもつことはなくなった。自覚しているのかしていないのかはよくわからなかったが、彼は理論的な思考を捨て、感情的な思考で自分たちを心配してきた。少なくとも、自分たちの間には確かな関係がある。二人はそのことがわかり、この場においてよかったとつくづく思っていた。

こうして、様々な思いとその変化を胸に抱き、大騒ぎになっている学院を一行は後にした。

夫婦の絆（後書き）

おかげさまでユニークアクセス十万人を超えていました。これから
も頑張つてまいりますのでよろしくお願いいたします。

土くれのフーケ（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

土くれのフーケ（前編）

【破壊の杖、確かに頂戴いたしました。　土くれのフーケ】

翌日、破壊された宝物庫には巷を騒がせている盗賊、土くれのフーケのメッセージが残されているのが発見された。ルイズたちがあのゴーレムの後を追いかけたようだが、既にそこに人影はなく、ゴーレムを構成していた土くれだけが残っていたそうだ。

学院は蜂の巣を突いたような大騒ぎだった。学院の宝物庫にはトリストイン王室から預かっている貴重な品々もあるので、ことが王室に知れたら教師たちは全員厳罰に処されることは確実だった。

「しかし、よりもよって学院の宝物庫を狙うとは……」

通常、メイジしかいない魔法学院に賊が襲撃をかけるなど命知らず以外の何物でもない。ここにいるのは教師をしているだけあつて全員が最低でもトリアングルクラスの實力の持ち主ばかりである。だからこそ、それが彼らを油断させるものとなっていたということを知ったのだが、全ては後の祭りだった。

「衛兵はいつたい何をやっていったんだ!？」

「衛兵など所詮は平民だ!　当てにならん!　昨晚の宿直は誰だ!？」

そう言われると、シュブルースが小さく悲鳴を上げた。それを見たギトーは彼女に詰め寄った。

「土くれのフーケに盗られた破壊の杖は、オールド・オスマンが王家に献上した貴重な魔法道具マジック・アイテムですぞ！ 当然弁償してくださいさるのでしょうか？」

「わ、私は家を建てたばかりで……」

「でしたら、それを手放しても弁償するのが筋というものでしょう」

「そ、そんな……！」

「これこれ、女性をいじめるものではないぞ」

そこへ助けを出したのは他ならぬオスマンだった。

「この中で真面目に宿直をしていたものがあるかな？ 彼女だけではない、むしろ全員が同罪じゃ」

オスマンの言葉に、騒ぎ立てていた教師たちも黙るしかなかった。彼の言葉は事実であり、真面目に宿直をしていた教師など実際になかったのだから反論できるはずもなかった。

（時間の無駄だな……）

この場にいたヴァルデスは何の進展もない話し合いにうんざりしていた。この場には教師以外に、ルイズ、才人、キュルケ、シャルロット、ヴァルデスが目撃者として参加していた。イザベラは大事をとったということもあるが、ガリアの第一王位継承権のある彼女をこの場にいさせることは、対外的にもよくないと判断したヴァルデスが事前に根回しをして、他の目撃者たちにはあの場にイザベラ

はいなかったということにした。

「しかし、こんな時にミス・ロングビルは何をしておるのじゃ？」

オスマンの唯一の秘書であるはずのロングビルは未だにこの場に姿を見せていなかった。他の教師たちは慌ててここに参じたというのに、秘書である彼女がこの場にいないというのはおかしいとしか言えなかった。

すると、部屋のドアが開いてロングビルが慌てて中に入ってきた。

「遅くなりました」

「ミス・ロングビル。今まで何処に行っていたんじゃ？」

「申し訳ありません。朝から調査に行っていたもので……」

「調査？」

「はい。朝起きたら大騒ぎになっており、宝物庫の壁にフーケのサインが描かれているのを発見いたしましたので、急いで付近に聞き込みをしてまいりました」

「ほう。仕事が早いの……。それで何かわかったかね？」

「はい。聞き込みを行った結果、農夫が森の中に入っていく怪しい男を見たそうです。黒いローブで全身を覆っていたため顔はわかりませんということですが……」

「それはフーケです！ 学院に来たときも黒いローブで全身を覆っ

ていました！」

ルイズがロングビルの言葉に出てきたフーケの姿が自分たちの見た姿と同じだったのでそう言った。それに合わせて他の目撃者たちも頷くことで賛同の意を示した。

「ミス・ロングビル！ その場所はここから近いのですか！」

「馬で四時間、徒歩で半日の場所です」

その言葉を聞いて、ヴァルデスは片眉を少しだけ上げた。

「すぐに王国衛士隊に連絡を！」

すると、オスマンがこれまでに見たこともないくらい真剣で、老人とは思えない迫力でこの場にいる全員に言った。

「たわけもの！ そんなことをしている間にフーケに逃げられてしまっわ！ 身に降りかかる火の粉を払えんで何が貴族じゃ！ この件は我々だけで解決するのじゃ！」

オスマンのその言葉を聞いてロングビルは小さく微笑んだ。

「討伐隊を結成する！ 我こそはと思う者は杖を掲げよ！」

しかし、オスマンの言葉を聞いても教師たちは誰も杖を掲げなかった。フーケは盗賊でありながら優秀なメイジであることは有名で、教師たちはフーケを倒して得る名声よりも、逃したときに失ってしまっ名誉を取ったのだ。名誉を失うということは貴族にとっては恥辱を受けることと同義であり、それが平民に堕ちたメイジ相手によ

つてつけられたものならば、その受ける恥辱の大きさは計り知れない。だから、彼らは誰一人として杖を掲げないのだ。

そんな中、杖を掲げたものが一人いた。

「お、おい、ルイズ？」

杖を掲げたのはルイズだった。生徒である彼女が杖を掲げているのを見て、さすがにオスマンも驚きを隠せなかった。

「ミス・ヴァリエール、君は生徒じゃ。こついうのは教師であるわしらが……」

「ですが、誰一人として杖を掲げないではないですか」

その言葉にはオスマンも周りの教師たちも反論できなかった。どうしようかと悩んでいるうちに、また一人杖を掲げるものが現れた。

「キュルケ？」

「ヴァリエールの女が杖を掲げているのに、ツエルプストーの女が遅れをとるわけにはいきませんわ」

そう言ってまたルイズとの睨み合いが始まったが、その間にまた名乗りを上げた者がいた。そして、それは彼らが一番名乗り出てほしくない人物であった。

「俺も行こつ」

「ミ、ミスタ・コーラッド。しかし、貴方は……」

「過程はどうあれ、フーケと関わってしまったことは事実。当事者として、後始末に行くだけのこと」

教師たちはその一言で黙ってしまった。そもそも、彼らとヴァルデスでは立場が違うのだから、彼の決定を覆すだけの発言力を持っているはずもなく、彼がそうしたいと言うのならそれに従うしかないのだ。

「私も行く」

ヴァルデスが名乗りを上げると、それに続いてシャルロットも名乗りを上げた。これは教師たちも予想していた事態だから驚かなかった。夫であるヴァルデスが行くというのに、妻になるシャルロットがそれを黙って見送るはずはないと予想することは容易だったからだ。

「ふむ……仕方がない。他に名乗りを上げるものもおらぬのなら君たちに任せることにしよう。但し、危険と感じたらすぐに引き返すのじゃ。命に勝る名誉などありませんのじゃからな」

『はいー』

こうして一行はロングビルの案内の元、馬車に乗って学院を出てフーケのアジトと思われるところへ向かった。

「ところでサイト、どうして剣を二本持っているんだ？」

ヴァルデスは馬車に揺られている間、適当な話題を探すために剣を二本持っていた才人に話しかけた。才人はキュルケにぴつたりとくつつかれていて、それを睨んでいるルイズの目が恐ろしくて、嬉しさと怖さの狭間を行ったりきたりを繰り返していた。

「一応二本持つてきました。キュルケから貰った剣と、ルイズから貰った剣」

「見せてみる」

暇つぶしにヴァルデスは才人の持つている剣を鑑定してみることにした。それほど詳しい知識があるわけではないが、戦いに向いている剣かそうでないかぐらいの目利きが出来るし、二人がプレゼントするために勝負までした剣だけにちよつと興味があつたからだ。

「どうぞ」

サイトから剣を受け取ると、まずは勝負の勝者であるキュルケの剣から見ることにした。見事な装飾が施されており、相当の値打ちがあるものには違いがなかったが、ヴァルデスの視点から見た場合は無価値のものであるとすぐにわかった。

「これを使うのはやめたほうがいいな」

「どうして？ 金貨千枚もしたのよ！」

実際は二千のところを半額にまで値引かせたキュルケなのだが、それでもかかった費用が費用なだけに、どうしても納得がいかなかった。

「確かに装飾に使われている宝石や、彫金の技術は見事だが、肝心の刀身がそれほど強度があるわけではなさそうだ。これは装飾用の剣だな」

「じゃあ、剣としての価値はないってことですか？」

サイトが訊ねたその言葉に、キュルケはがっくりと肩を落とし、ルイズは小さく肩を震わせて必死で笑うのをこらえていた。

「戦場では使い物にならないな。でも、装飾用のものとしては見事なものだと思うから、飾って愛でるにはいいと思うぞ。実際、使われている宝石などを考えたら金貨千枚なら十分に安い。いや、安すぎるくらいだ。売り払えば平民ならば一生分の財産が手に入るだろうな」

「へえ……じゃあやっぱり高い剣なんですな」

ヴァルデスのその言葉を聞いて、才人が感心するのを見てキュルケは少しだけ気持ちも晴れたようで、表情がさつきより幾分か和らいだものになっていた。

「どうする？ 必要ないならいくつか知り合いの貴族をあたって一番高く買ってくれるところを探してみるが……？」

「いえ、せっかくのお言葉ですけど結構です。人からのプレゼントを売り払うって言うのも気分が悪いですし」

「さっすがダーリン！ 嬉しいわ！」

キュルケはそう言うと思いつき才人に抱きついた。才人は押し付けられる胸の感触で天にも昇る気持ちだったのだが、それを見たルイズが機嫌を一気に急降下させた。

「ちょっとキュルケ！ あんた、こんな所でも人の使い魔に色目を使ってるんじゃないわよ！」

また二人のいい争いが始まった、とヴァルデスとシャルロットは小さくため息をついた。言い争う二人を無視して、ヴァルデスはルイズがサイトにプレゼントしたデルフブリンガーを鞘から抜いた。

「何でい？ おめーは」

「インテリジエンスソード？」

「デルフブリンガー様よ！ おめー、誰だ？」

「ヴァルデス・ウエストリ・コーラッドだ。よろしく頼む」

「おうよー！」

「あなたは皇太子殿下に対する礼儀を知りなさい！」

すると、ルイズがあまりに無作法なデルフの言葉に対して注意を入れてきた。

「へえー、おめーが皇太子殿下ってわけか。なかなか腕も立ちそう

だし、優秀そうだな」

剣に褒められるのが果たしていいことなのか馬鹿にされているのか、そのあたりの判断がつかなかったが、ヴァルデスは様々な角度からデルフをじっくりと観察した。

「ほう……かなり年季が入っているが、戦いの剣としては充分だ」

「おめー、なかなか見る目があるな。気に入ったぜ」

鑑定を終えると、ヴァルデスはデルフを鞘に入れて才人に返した。

「殿下、どうでした？」

「頑丈な作りをしている。かなり年季は入って錆付いたりしているが、刃こぼれが全くない。コレクターなどには見向きもされない十把一絡げの剣という扱いになるだろうが、戦う者にとってはかなりの代物だ。間違いなく戦うために作られた剣だ」

「売れてなかったんだから刃こぼれしていないのは当然なのでは？」

ルイズの疑問を聞いて、ヴァルデスは首を横に振った。

「いや、かなり昔だろうがこの剣が使われていた形跡がある。人を斬ったのか魔物を斬ったのか、そのあたりはわからないが、それでも刃こぼれ一つないのだから、名剣と呼んでも差し支えないほどのものだろうな。もっとも、戦いに特化して飾り気が全くないから、売りに出しても全く値はつかないと思うがな」

ちよっと物騒なイメージが付きまとうが、武器なのでその方がか

えって箔が付くとルイズは考え、キュルケに勝つたと上機嫌になっていた。キュルケもちよつとルイズにしてやられた感はあるものの、無価値のものをつかまされたわけではなかったのでそれほど不機嫌にはならなかった。何より、ルイズが贈った剣よりも煌びやかで彼女の好みに合っていたので、それはそれでルイズの剣より見栄えがすると思っていた。

(そう言えば、ジョゼフ陛下から貰ったインテリジェンスナイフがあったな)

ヴァルデスは少し前にジョゼフから贈り物としてもらったインテリジェンスナイフのことを思い出した。握った者を操ってしまうという怪しさに満ちたものだったので、貰った直後に物置の中にしまいいこんでそれきりにしているのを今まで忘れていた。

(一度、あれも誰かで試してみるか)

ヴァルデスがそう考えている時、既に話題は別のものに変わっていて、ロングビルの過去の話になっていた。

「へえ、じゃあミス・ロングビルは元貴族だったんですか？ どうして、平民に？」

「キュルケ！ 失礼よ！」

「いいじゃない。教えてくださらない、ミス」

「色々あったんですよ……それよりミスタ・コーラッド」

「何ですか？」

「ここまで来てから言うのもなんですけど、本当によろしかったのですか？ 盗賊退治など、皇太子殿下がわざわざ御出でになることもなかったと思いますか……」

「構わない。それに……」

「それに？」

「過程がどうあれ、結果として奴は俺と俺の女に手を出した。その落とし前はきっちりつけさせてもらう」

俺の女、その一言にシャルロットは少し頬を朱に染めた。普段ならば、キュルケはそれを見て微笑ましいという感想を抱くのだが、ヴァルデスが放っている物騒な雰囲気になんか余裕はなかった。

「ど、どうするつもりなの？」

キュルケは訊ねた。ヴァルデスはその言葉を聞いて、口角を少し上げてこう言った。

「どの道、これだけの盗みを働いた盗賊に生きる道はあるまい。ならば、俺が殺してその首を持ち帰るだけでも問題はあまるまい」

ヴァルデスはそう言って自らの剣を抜いて、その刀身を確認していた。穏やかな日差しが木々の間から差し込むのんびりとしている空間に、明確な殺意を持った人間がいる。この場にいる全員が緊張で顔をこわばらせた。穏やかな日差しも、彼の刀身に煌々ととても恐ろしいものに見えた。

「フーケが今も残っていれば、の話だがな」

ヴァルデスはそう言って剣を鞘に収めた。そうしただけでも、場を支配していた剣呑な雰囲気が一気に霧散した。才人たちはやっとほっと一息つくことができ、自分たちの心臓が早鐘のように鼓動を打っていることに気がついた。

「ま、とりあえず行ってみないことには始まらないしな」

ヴァルデスはそう言って前方を眺め、それから会話に口を出すことはなかった。他のものたちもヴァルデスの態度を見て初めてはつきりと自覚した。自分たちはこれから盗賊退治に行く。それは命のやり取りであり、下手をすれば相手を殺し、自分が殺されてしまうかもしれないという事実だ。

全身から冷や汗が噴出し、今まで感じたこともない不安などを感じていたが、最早引き返すことはできない。

その状況に進んで手を挙げたのは自分たちだ、今更それから逃げ出すことは貴族の矜持を大きく汚すことになる。

僅かな後悔と、大きな不安を抱きながら馬車はゆっくりと揺れながら目的地を目指していった。

土くれのフーケ（中編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

土くれのフーケ（中編）

「あれがフーケのアジトか……」

一行は森の中にある小さな廃屋前にやって来ていた。廃屋になってからかなり経っているようで、そこかしこがぼろぼろになっていた。

「とりあえず様子を見に行くか」

「様子見は素早い人物が適切」

シャルロットのその言葉に、全員の視線が才人に向けられた。この条件ならばヴァルデスも合致するのだが、皇太子殿下にそんな真似をさせるなどという選択肢があるはずもなかった。

「俺が行くのね……わかったよ」

才人はため息を一つついて斥候役を引き受けた。彼は物音を立てないようにゆっくりと廃屋に近づき、扉に耳を当てて中の様子を窺った。中から全く物音が聞こえず、人の気配も感じないので手招きをして残りの連中を招き寄せた。

「誰もいないようです」

「そうか」

「では、私は念のためにフーケがいないか周りを確認してまいります」

「そうだな。では、俺はあっちを。ミス・ロングビルは向こうをお願ひします」

ヴァルデスとロングビルはそう言って森の中へと入っていった。才人たちはゆっくりと扉を開けて中へと入った。

「凄いな……埃だらけだ」

小屋の中は人の手が入った様子はなく、床や窓の棧に埃が積もっていた。床には一人分の足跡が残されており、それがフーケのものらしいということしかわからなかった。

「おかしい」

「どうしたの？ シャルロット」

「アジトにしては汚いし、足跡が少なすぎる」

「そう言われれば……」

シャルロットの言葉にキュルケも賛同したが、とりあえずは手がかりになるものを探すしか一行にできることはなかった。ルイズを外の見張りにして、三人で小屋の中を探し回った。

「あーん、もう！ こんな埃っぽい所にいたらせつかくのメイクも台無しよ。何もなさそうだからもう出ましよう。ダーリン」

「ああ。確かに何もなさそうだな……」

すると、シャルロットは隠してあった大きな箱を見つけ出した。

「破壊の杖」

『ええ！？』

まさか、本当にこんな所に隠してあるとは思っていなかったのだから、才人もキュルケも驚きを隠せなかった。シャルロットはその箱を開けて二人に中身を見せた。

「本当だ。こんな所に置いていくなんて……」

キュルケは呆れていたが、才人はその箱に収められていたものを見て驚きを隠せなかった。

「どうして、これがここに……」

「どうしたの？ ダーリン」

「きゃああっ！！」

キュルケが才人に訊ねようとしたその時、外からルイズの絹を裂くような悲鳴が聞こえてきた。

「ルイズ！」

才人は慌てて小屋から飛び出し、ルイズの元へ駆け寄った。

「こいつ、あの時の……！」

「ゴーレム！」

才人たちはその姿を見ると、すぐに戦闘態勢の構えを取った。

「駄目」

「シャルロット様？」

「私たちじゃあのゴーレムに勝てない。ここは退くべき」

そう言ってシャルロットは口笛を吹いてシルフィードを呼び寄せた。

「乗って」

「ええ！」

「おう！」

才人とキュルケはすぐにシルフィードの背に乗ろうとしたが、そこで一人がまだこっちに来ていないことに気がついた。

「ルイズ何してる！ 早く来い！」

ルイズは逃げようとせず、ゴーレムの真正面に立ってその杖の先を向けていた。

「あの馬鹿！」

「ダーリン！？」

才人はシルフィードの背中から降りて、ルイズに向かって一直線に駆け出した。

「来なさい、フーケ！ 私が相手よ！」

ルイズはそう宣戦布告して、ゴーレムに向かって術を放った。ルイズが放った爆発は、ゴーレムの表面を抉るなどして一応の効果があるように思われたが、壊した先からすぐに周りの地面などを材料に組みなおしてしまうので全く無意味となっていた。

「このっ！ このっ！」

ルイズは効いていないとわかっていながらも、術を放つことを止めなかった。壊れては直り壊れてはまた直る、その繰り返しでしかなかったが、ゴーレムはルイズに向けてその巨大な足を叩き落すために高く上げた。

「ルイズ！」

才人は走りながらルイズを抱えてその場を離れた。そのすぐ後にゴーレムの足が地面に落ちたため、後少しでも遅ければルイズの命はなかった。

「何するのよ！」

「それはこっちの台詞だ！ 何を考えているんだ！」

「ほっといてよ！ 私があいつを倒すの！ 邪魔をしないで！」

「この馬鹿野郎！」

才人はルイズの頬を思いつき張り飛ばした。ルイズは最初は何が起こったかも理解できなかったが、徐々に痛み出してくる頬に手を当てた瞬間、その目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちていった。

「痛いじゃない！ 馬鹿！」

「うるせえ！ 何であいつを倒すことにこだわるんだよ！ 一人で無理ならみんながいるだろうが！」

「駄目なのよ！ それじゃあー！」

「駄目って……何でだよ？」

「私一人で倒さないと……誰も私を認めてくれない。私はいつまでたっても『ゼロ』のルイズのままなのよ……」

「ルイズ……」

ルイズはヴァルデスのように堂々と『ゼロ』の二つ名がついているわけではなく、それは彼女に対しての侮蔑と嘲笑の象徴としてのものだった。幼い頃から魔法が使えず、使用人にも同情されるといふ屈辱の中で彼女はこれまでを生きてきた。今回のフーケ退治の一件も自らにつけられた汚名を返上するチャンスだと考えていた。だからこそ、彼女は一人で倒すことにこだわった。

そして、才人もまた知っていた。ルイズが魔法を使えない代わりにどれほど他人より努力していたかということ。

魔法の練習もさることながら、知識においてもルイズは他人の何倍も必死になつて勉強しており、毎晩遅くまで勉強していることを才人は知っていた。普段の態度が態度だけに素直に感心することはできなかったが、その努力する姿に感動のようなものを感じていた。だから、ルイズは実技試験はともかく、筆記試験においてはヴァルデスたちよりも成績が優秀だった。

他人の何倍も努力を続けてきたルイズだからこそ、その努力が成果を出す日が訪れることを切実に願っていた。これはその努力の成果が発揮される場であり、始祖が自分に与えてくださったチャンスなのだと思じて一人で倒そうとした。

しかし、結果はゴーレムに傷一つつけることができず、結局『ゼロ』の汚名を返上することができなかった。その悔しさがついに我慢という堤防を決壊して、涙という形で感情を溢れさせていた。

「ルイズ」

「な、何よ？」

ルイズは涙を拭いながら相変わらずの憎まれ口を叩いていた。

「俺は魔法が最初から使えないから使える奴の気持ちも、使える連中の中にある優劣って言うのも正直よくわからねえ。でも、お前が人よりずっと努力してきたってことだけはわかってる」

「サイト……」

「魔法云々じゃ力になれねえけどよ、俺だって手助けできることぐらいあるはずだ。一人で抱え込むなよ、こっちはお前の使い魔なん

だぞ。お前言ったよな、主人と使い魔は一心同体だつて」

「……うん」

「だったら、お前の敵は俺の敵だ！」

才人はそう言って背中に背負っていたデルフを抜いた。その瞬間、左手に刻まれたルーンがまた光を放ち始めた。

「おお！ やっぱ使い手はいいねえ！ この感じは随分と久しぶりだ！」

デルフがわけわからないことを言っていたが、才人はギーシュとの戦いで感じた身の軽さを再び感じていたので、それが耳に入っていなかった。

(これなら……いける！)

才人はもう一度デルフをしっかりと握り直して、ゴーレムに向き直った。

「このでかぶつ！ 俺が相手だ！」

ゴーレムはその言葉に反応したかのように、標的をルイズから才人へと変えて彼に襲い掛かってきた。

彼はゴーレムから繰り出された一撃を鮮やかにかわして、ゴーレムの足に思いつきり一撃を叩き込んだ。ゴーレムの足はたった一撃で見事に砕かれて体勢を崩した。

「やった！」

しかし、喜んだのも束の間、ゴーレムの足はさっきのルイズの時と同様、すぐに足は何事も無かったかのように修復された。

「ちっ！ デルフ、行くぜ！」

「おうよ！ 相棒！」

才人はゴーレムから繰り出される攻撃を全て鮮やかにかわし、ゴーレムの足や腕を何度も砕いた。

「凄い……」

ルイズは才人の戦いに感心するしかなかった。キュルケもシャルロットもシルフィードの背中から降りて、才人の戦いを見ていた。

「ダーリンってあんなに強かったのね」

「でも、あのままじゃ駄目」

キュルケはただ感心するだけだったが、シャルロットは才人のほうが不利だということを理解していた。いくらゴーレムの隙をついて攻撃しても、再生されてしまうのでは全く意味が無い。今は大丈夫でも、いずれは才人が疲れて負けてしまう。

「才人が疲れて負ける」

「何とかならないの！？ シャルロット！」

「私の術ではあのゴーレムにはあまり効果が無い」

「私の炎も同じよ。ヴァルデスは何処に行っちゃったのよ!？」

こつちがこれだけの騒ぎになっているのに、未だに戻ってこないヴァルデスとロングビルが恨めしかった。

「そっだ!」

すると、ルイズは何かに気づいたように二人のところに戻ってきた。

「どうしたのよ? ルイズ」

「貸して!」

ルイズはシャルロットが持っていた破壊の杖の入った箱を奪い取り、その中身を取り出した。

「ちよっどどうするのよ?」

「今使わないでいつ使うのよ!」

ルイズはそう言って破壊の杖を持って才人の傍に行った。

「ルイズ!」

「この! この! どうして何の反応も無いのよ!」

ルイズが必死になって呪文を唱えて破壊の杖を振るったが、いつ

もの失敗爆発すら起こらなかった。

「ここで使えなきゃ何の意味もないじゃない！」

「ルイズ！ 貸せ！」

才人はルイズから破壊の杖を取り上げ、それを組み立てていった。

「耳を塞げ！」

才人の言葉に、三人は咄嗟に耳を塞いだ。それと同時に、才人はその破壊の杖を使った。

しゅぽつという音が鳴り、羽がついたそれがゴーレムに向かって飛んでいった。それはゴーレムに当たると、激しい爆音と爆風を巻き上げてゴーレムを木っ端微塵に粉碎した。

「凄い……」

「あれが破壊の杖……」

キュルケとシャルロットもその威力には呆然とするしかなかった。自分たちの魔法では敵わないゴーレムをたった一回で木っ端微塵に吹き飛ばしてしまったその威力には戦慄を覚えた。

「や、やった……」

「相棒、やるじゃねえか」

才人はようやく全てが終わったとその場に腰を下ろした。いや、

全てが終わって、今更になって自分がどんなことをしていたかを振り返る余裕ができて腰が抜けてしまった。

「やったわ！ サイト！」

ルイズは思いっきり才人に飛びついてきた。結果を振り返れば、自分の魔法は何の役にも立たなかったのだが、自分の使い魔である才人がゴーレムを倒したのが嬉しかった。主人と使い魔は一心同体、同じ喜びを分かち合い、同じ悲しみも分かち合う。それを表すようなシーンだったが、それを快く思っていない者がいた。

「ちょっとルイズ！ ダーリンに抱きつかないでくれる！」

「うるさいわね！ あんたは黙っていなさい！」

また言い合いが始まったが、シャルロットはきよろきよろと周りを見ていた。

「どうしたの？ シャルロット」

「フーケ……まだ捕まえていない」

「あ、そうだった！」

才人たちが慌ててフーケを探し始めた頃、森の中から彼らの様子を窺う不審な人影があった。

「なるほどね……ああやって使うものなのか。それにしても、破壊の杖の名前に偽りなしのとんでもない威力だね。まあいい、使い方もわかったことだし、あれをまたいただいで終わりだ」

「確かに素晴らしい威力だ。あれならばとんでもないくらいの高値で売れるだろうな」

「なっ……！」

「振り向くな」

振り向こうとしたフーケは、その聞き覚えのある、底冷えするよ
うな声でそれを制止させられた。

「早速だが言い残すことはあるか？ 土くれのフーケ、いや……ミ
ス・ロングビル」

「……いつからそこにいたんだい？」

ロングビルことフーケが忌々しげに言葉を口にした。

「ほとんど最初からだな」

「最初からってことは……ずっと私が怪しいと踏んでいたのかい？」

「ああ」

「どうしてだい？ 少なくとも、学院ではそんな素振りを見せない
ようにしていたつもりだけどね」

フーケは背中に殺気を感じながら、最後の抵抗として決して弱み
を見せないように振舞っていた。普段の言葉遣いが何処かイザベラ
に似ているとヴァルデスは思った。

「確かに。学院でのミス・ロングビルは優秀な秘書だった。だが、最後の最後で詰めを誤った」

「最後の最後？」

「お前は破壊の杖の使い方を知りたい気持ちがあつて、あんな辻褃の合わないことを口にした」

「……学院の連中は騙せても、あんたはだませなかつたつてわけか。まあ、当然だね。あんたはそんな間抜けじゃない」

「馬で四時間、徒歩で半日。そんなに時間がかかる距離を調べて回ることなど不可能だ。仮に襲撃直後に学院を出たとしても夜も更けていたはずだ、そんな時間に起きている農夫などいるはずもないし、ましてや夜の森に近づこうとする農夫などいるはずもない」

ヴァルデスはそのことを口にしながらも、改めてそれがどれだけ滑稽な言い分であるかを再認識した。

「知りたいことはそれだけか？」

「……そうだね、知りたいことはそれだけさ」

「では……」

「待った！」

ヴァルデスがフーケの心臓に切っ先を向けた時、フーケが慌ててそれに待ったをかけた。

「どうした？ まさか命乞いではあるまいな」

「随分と性急じゃないか。あんまり事を急ぐと損をするよ」

「音に聞こえた盗賊フーケ、最後までいいは潔くしたらどうだ？ どの道、お前に助かる道は残されていない」

（よりもよって、とんでもない奴に引っかけちゃったね。私とすることが本当にドジを踏んだよ）

フーケは心の中で、今更ながらヴァルデスやその婚約者たちに手を上げてしまったことを心の底から後悔した。

「お前は貴族だったそうだな。ならば、己の最期ぐらいは潔くしろ！」

すると、フーケは背中に感じていた殺気すら忘れてしまうほど怒りが体を支配し、咄嗟的にヴァルデスに向き直った。突然の行動にヴァルデスも多少は動揺したが、それでもいつでも彼女を殺せるように隙だけは作らなかった。

「あんたに何がわかるんだい！ いきなり家族を全て奪われたあの悲しみがあんたにわかるか！？」

「お前の事情など俺には関係ない。そもそも、お前の家族が何を犯したのかさえ俺は知らないのだからな」

「大切な者を守る！ それが罪になるって言うのかい！」

「ならば生まれた時代が悪かったと呪え。不幸は何もお前だけの話ではない」

「……あんたはいい王様になれるだろうね」

「褒め言葉として受け取っておこう」

フーケの言葉にヴァルデスは全く動じなかった。忌々しい敵のはずなのに、その動じない姿を見るとフーケは悔しいがこの男には王としての素質があると認めざるを得なかった。

「では、そろそろ逝こうか」

(どうやら年貢の納め時のようだね。盗賊なんてこんなもんかね……)

フーケはもう逃げ場はないと悟り、己の最期を覚悟した。

(でも、出来るならば最後にもう一度……あの子たちに会いたかったね)

フーケは脳裏に懐かしい顔たちを思い浮かべ、直接会うことが叶わぬのならば、妄想の中で彼らと別れを告げることにした。死が訪れる直前までその顔を思い浮かべ続け、己の最期に一筋の涙を流した。

「さらばだ、土くれのフーケ」

ヴァルデスがそう言葉を掛け、フーケも己の死を覚悟したその時だった。

「待つてください！」

すると、才人たちがこちらに向かって駆け出してきていた。

「才人か。頑張ったな、見ていたぞ」

「殿下……ロングビルさんがフーケ……」

「そうだ。お前たちにゴーレムをけしかけ、巷を騒がせている盗賊だ」

ヴァルデスはそう言って剣を振り上げた。

「ちょ、ちょっとお待ちください！ 何をするつもりですか？」

「見ればわかるだろう。始末するんだ」

「し、始末って……」

「才人、お前には前に言ったはずだ。ここは命が軽い世界だと。盗みは元々重罪、それも常習犯ならば死刑は免れない。ここで死のうと後で死のうと同じことだ」

ヴァルデスはそう言って再び視線をフーケに戻した。

「お待ちください！ その……殿下の剣を盗賊の血で汚すのはどうかと思うのですが……」

「……こいつを助けると言うのか？」

「そうは言いませんけど……でも、死刑にするにしても法の裁きを受けさせたほうがいいのではないかと……」

才人はヴァルデスがやるうとしてしていることがどうしても理解ができなかった。元々、法治国家である日本から来た才人にはたった一人の意思で、他人の命をあつさりと奪おうとするヴァルデスの行動がどうしても納得できなかったのだ。どんな悪人であれ法の裁きを受けさせるのが基本、それが才人の国で大前提とされている法律というものだった。

「……いいだろう」

ヴァルデスはあつさりと才人の言葉を聞き入れた。一平民でしかない才人の言葉を皇太子があつさりと受け入れたので、才人たちは元より、フーケですらも驚きを隠せなかった。

「よろしいのですか？ 殿下」

「よろしいも何も、ゴーレムを倒したのはお前だ。お前が一番の功労者なのだから、お前がそうしたいのならばそれに従おう」

「あ、ありがとうございます……」

「というわけだ。死期が少しだけ遅くなったただけだが、延びた命を才人に感謝して最期のときを迎えろ」

ヴァルデスはそう言ってフーケの首筋を思いつきり叩いて気絶させた。それから杖を取り上げて、フーケを縄で縛り上げた。

「さてと、帰るか」

ヴァルデスはフーケを馬車に積むと、一行は魔法学院に向けて馬車を走らせた。

土くれのフーケ（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

土くれのフーケ（後編）

「いやいや、よくやったの。君たち。無事で何よりじゃ」

学院に戻るとオスマンが笑顔でヴァルデスたちを迎えた。フーケを捕らえたこともそうだが、オスマンにとっては生徒たちが怪我一つしないので戻ってきたことが何よりだった。

「ミス・ヴァリエールとミス・ツエルプストーには王室に精霊勲章の申請をしておいたから、追って授与されることとなるじゃろっ」

「やったあ！」

キュルケは素直に喜んだが、ルイズは素直に喜べなかった。

「あの、サイトには……？」

「彼はその……平民じゃからな。勲章は授与できんのじゃ」

「でも、フーケのゴーレムを倒したのはサイトです」

「いいよ。勲章なんて興味ないから」

ルイズが気まずそうに言っていたので、才人は自分からそれを辞退する旨を伝えた。本当に勲章に興味がなかったことだし、貰ったところで何かが変わるとも思えなかったからだ。

「それより、殿下やシャルロット様には何もありませんか？ 俺よりそっちの方がまずいと思いますけど」

「俺やシャルロットが何か貰うことの方が拙いんだ。サイト」

「どうしてですか？」

「盗賊退治に自分から志願したとは言え、他国の王族を向かわせたなんて事実が知れたら学院の教師全員のクビが飛ぶ」

「そういうこと」

トリスティン王国にとって、ヴァルデスやシャルロットはあくまで国賓という立場なのだ。国を挙げてもてなすはずの人間に盗賊退治をやらせたなどということ認めてしまうことは、他国に対して自国の恥を晒して回るようなものなのだ。彼らにとってもその状況はあまりよろしくなかった、特に結婚式が迫っているこの時期に他国と問題を起こしたくはなかった。

「ふむ。ミスタ・コーラッドやミス・オルレアンには心苦しいが、今回はそういうことでよろしく頼む」

「気にしない。むしろ、しっかりと口止めをするよう進言する」

「ふむ。既に学院の教師全員には通達してある。君たちも、この件に二人が関わっていることは内緒じゃぞ？」

オスマンの言葉に才人、ルイズ、キュルケの三人は頷くことで返事を返した。

「よろしい。フーケのことはこちらで片をつけておくから、君たちは部屋に戻りなさい。今日はフリッグの舞踏会じゃ、今日の主役は

君たちなのじゃからな」

「いつけない。すっかり忘れてたわ」

フリッグの舞踏会、これもまたトリステイン魔法学院の年中行事の一つに組み込まれている舞踏会だった。一年前にはキュルケとシャルロットの決闘という騒ぎがあったが、あの教訓を活かして今回からはあんなことが起こらないようにと杖の携帯を禁止していた。

「部屋に戻ってドレスを選ばなくちゃ」

「失礼いたします」

キュルケたちが部屋を出ようとしたが、部屋に残ろうとした者がいた。一人はフーケのゴーレムを倒した才人、もう一人はフーケを捕らえたヴァルデスだった。

「どうしたのよ？ 才人」

「ヴァルデス？」

「ルイズ、ちょっとオスマン学院長と話があるから先行っててくれ」

「俺も話がある。シャルロット、先に行っててくれ」

「わ、わかったわ」

「わかった。キュルケのところにいる」

ルイズは少し不安そうに、シャルロットは簡潔にそう返事をして

部屋を出て行った。

「さて……二人の話とは何じゃ？」

オスマンはまずヴァルデスを見た。オスマンの視線に気づくと、ヴァルデスは自分の視線を才人に向けた。

「俺が話をしたいのはサイトだ。サイトの話が終わった後でいい」

「では、サイト君。君の話とやらを伺おうかの？」

「は、はい。俺が聞きたいのは破壊の杖のことです」

「ふむ？ 破壊の杖の何を知りたいのかの。一応、国の重要財じゃから詳しいことは話せんし、わしにもあれは理解できんかった」

「あれは俺の世界の武器です。どうして、それがこの学院の宝物庫にあったのかを知りたいんです」

「君の世界とな？」

オスマンと才人からは見えなかったがヴァルデスの目が煌いた。双方とも真剣な表情でそれからの才人の言葉を聞き入っていた。身振り手振りのあるあまり説明としては上手くなかったが、それでも要点はしっかりと押さえてあったので、二人は何とか内容は理解できた。

「ふむ……サモン・サーヴァントで異世界からこのハルケギニアに召喚されたということか。どう思うかの？ ミスタ・コーラッド」

「俺の意見としては信じていいと思う」

才人はその言葉を聞いてヴァルデスに向けて振り返った。召喚された日にルイズに色々と説明しても理解してもらえなかったのに、一度聞いただけで信じると言ってくれる人間に出会えたのはこれが初めてだった。自分でさえ、異世界から来たなどと言われても信じられないのに、それをあっさり信じてくれるヴァルデスのような人間は有難かった。自分だけ違う世界の人間だという孤独を抱えてこれまでを過ごしていただけに、才人にとってそれを信じてくれる人間の存在は何よりも有難かった。

「一応、根拠を聞かせてもらえんかの？ ミスタ・コーラッド」

「俺はサイトが東方の国の出身だと思っていた。だが、破壊の杖ほどの武器を持っているのなら、どうしてその国はこのハルケギニアに進出してこない？ ハルケギニアにはあれを防げるだけの軍備などないし、魔法と違って使い方さえ覚えれば誰でも使えるような強力な武器を有している国なら戦力差であつという間にこのハルケギニアは征服されてしまう。エルフとて、真正面から戦った場合はともかく、不意打ちされれば抵抗する間もなく全滅してしまうだろう」

「なるほどのう。確かに説得力ある答えじゃ。わしも君の言葉を信じることにしよう」

「あ、ありがとうございます」

才人はヴァルデスとオスマンに向けて深々と頭を下げた。オスマンはその様子を見て笑顔を浮かべた後、真剣な表情に切り替えて話を始めた。

「さて、破壊の杖をどのように手に入れたかという話じゃったな。あれはもう三十年前ほどの話じゃ。わしは森を散策しておった。しかし、ワイバーンに襲われ、あわやと言うところで破壊の杖の持ち主に救われた。彼は一本の破壊の杖でワイバーンをたった一撃で吹き飛ばすと、ぱったりと倒れてしまった。わしは彼を学院に連れ戻ったが看護の甲斐なく……」

「そんな……」

才人はその話を聞くとがっくりと肩を落とした。

「わしは彼を手厚く葬り、その亡骸にはわしを救ってくれた破壊の杖も一緒に埋めた。そして、彼が持っておったもう一本を形見として学院の宝物庫に収めたのじゃ。破壊の杖という名前もその時にわしがつけたのじゃ。その威力の凄さに敬意を表してな」

「そうですか……」

「今にして思えば、彼もベッドの上でうなされながら『元の世界に帰りたい』と何度も繰り返しておった」

「その人、どうやってこつちの世界に来たんですか？」

「わからん。誰かがこつちの世界に彼を呼んだのか、それとも彼が迷い込んだのか……今となっては手がかりすら掴めんじやろうな」

「くそ！　せつかく手がかりが見つかったと思ったのに！」

あんなものを持っていたのだから、恐らくはどこかの国の兵隊が何かだったのだろう。しかし、彼が亡くなった今となっては、彼が

どのようにこの世界にやってきたかを知る術は何一つ残されていないかった。彼がこの世界にやってきたという事実以外には。

オスマンは次に才人の左手を掴んだ。

「お前さんのこのルーン……」

「あ、それも聞きたかったんです。これが光ると、何故か武器を自由自在に使うことができるんですよ。あれだつて俺は今日初めて実物を見たのに、何の違和感も無く使い方がわかって使えた」

「……知っておるよ。これはガンダールヴの印じゃ。伝説の使い魔の印じゃ」

「伝説の使い魔の印？」

「うむ。ガンダールヴはありとあらゆる『武器』を使いこなしたと伝承にはある。じゃから、初めて見た武器でも使うことができたのじゃろっ」

「……何でそんなものが俺に？」

「わからん。少なくとも、ガンダールヴがいたという記録は六千年前が最後じゃ」

「六千年前……」

「残念ながらわしもそれほど長くは生きておらんからの。さすがに前のガンダールヴがどんな者だったかもわからんのじゃ」

「じゃあ、他の世界から誰かが召喚されたってことも……」

「残念ながら無い」

「マジかよ……」

才人はまた大きいため息をついた。

「まあ、わしも色々と協力はさせてもらうが、元の世界に戻れるという保証もできん。何、仮に元の世界に戻れなかつたとしても、この世界も住めば都じゃ。嫁さんだって紹介してやろう」

「は、はあ……」

本当に大丈夫かよ、と才人は思ったが、とりあえずこの世界でようやく本当の意味で自分の味方ができたことに安堵していた。

オスマンとの話が終わったところで、ヴァルデスは才人に話を切り出した。

「さて、次は俺の話だが……」

「は、はい。何でしょうか？」

「お前の世界の話色々教えてくれないか」

「え？ 俺の世界の話ですか。でも、何を話せばいいか……」

「何でもいい。暇なときに話してくれるだけでいい。面白いと思ったらルイズに内緒で小遣いをやる」

「ほ、本当ですか!？」

才人は目を輝かせたが、その後ろでオスマンが訝しげな表情を浮かべていた。

「お前も何かと物入りになるだろう。いくらルイズの使い魔と言えど、自分の自由になる金がないと色々と厳しいだろう。男には女には理解されないが、色々と必要になるものもあるだろうし……な」

才人は正直ヴァルデスが何を言いたいのかがよくわからなかったのだが、無一文である現状を打開できるのなら決して悪い話ではないと思っていた。ルイズは最低限の衣食住は保障してくれているのだが、嗜好品などに関してはその限りではなかった。そういうものが欲しかったらお金が必要になるのだが、魔法学院では金が要らない代わりに金を稼ぐ手段も無いのだ。

(少しでも金があるに越したことはないし、何か買いたいときに使えるし)

才人は頭の中でもう色々な妄想が浮かんでいた。稼げる額など色々な物なのだろうが、それでも自分の自由になるお金ができるというのは嬉しかった。向こうの世界にいた時にはあって当たり前のもので、苦勞することが無かっただけに、こうして苦勞することになって初めて金の大切さを理解していた。

「よ、よろしくお願いします。殿下」

「ああ。まあ、今日のところは舞踏会もあることだし、話はまた今度聞こう」

「はい。では、失礼します」

才人は二人に一礼して部屋を出て行った。才人が出て行った後、ヴァルデスも部屋を出ようとしたが、後ろからオスマンに声をかけられてその歩みを止めた。

「ミスタ・コーラッド。何を考えておるんじゃ？」

「何……と申しますと？」

「サイト君から話を聞いてどうするつもりなんじゃ？」

「ただサイトの世界に興味があるだけです」

ヴァルデスは表情を変えずにそう言い切ったが、オスマンも人を見る目は確かであり、それが彼の本意でないことをしっかりと見抜いていた。

「本当にそれだけかのか？」

「本当ですよ。それに……」

「それに……何じゃ？」

「仮に本当に何かを考えているにしても、俺はゲルマニア人。トリステイン人の貴方に教える必要はありません」

ヴァルデスはそう言ってオスマンに一礼をして部屋を出て行った。彼が部屋を出て行った後、オスマンは引き出しの中から水煙草を取

り出して煙を吹かした。

いつも彼が水煙草を吸うと注意してくれていた秘書がないことに、少し寂しさを覚えながら……。

夜中、学院はフリックの舞踏会が催されて多くの生徒や教師がそこに参加していた。フーケを倒したルイズとキュルケにはたくさん男子生徒が押し寄せ、シャルロットはそれには関与せず並べられていた料理に手を伸ばしていた。才人は才人で、ルイズに男子生徒が群がっているので手持ち無沙汰気味に料理を摘んだりしていた。

そんな楽しい時間の最中、一人の男が学院のある一室に来ていた。

「で、わざわざ門番にスリープ・クラウドまでかけて眠らせてまでここに来た理由を教えてくださいな。皇太子殿下殿」

一人はヴァルデス、対話の相手は未だに杖を取り上げられて全身を縛られたままのフーケだった。部屋の前で見張りをしていた兵士にスリープ・クラウドをかけて眠らせた上で、フーケとの対談が行われていた。

「そうだな。時間が無いから話を進めよう。お前、前に何処かの貴族だったとのことだが、何処の貴族だったんだ？」

「そんなことを聞いてどうするんだい？」

「それを判断するのは俺だ。何処だ？」

「……アルビオンだよ」

フーケは最初こそからかうような素振りをとっていたが、下手な返答は本当に自分の死期を早めると悟り、ヴァルデスの質問には素直に答えることにした。もともと、それはフーケがそう感じているだけだが、昏間にヴァルデスの殺気を直接感じた彼女は、ヴァルデスは切り捨てるときは容赦ない人間だということをあのときだけで理解していた。盗賊として危機察知能力に長けた彼女ならではの答えだった。

「アルビオンか……没落した理由は何だ？ 大切な者を守るためとか言っていたな」

「……私の父はモード大公にしていた。これでわかるかい？」

モード大公は、アルビオンの国王ジェームズ一世の弟である。少し前にジェームズ一世に粛清され、彼に従っていた貴族たちも処刑され、家族も領地と家名を没収されるという厳しい処分が下されていた。ヴァルデスもそこまでは知っていたが、肝心の粛清された理由についてはいまいち掴めていなかった。どういうわけか、密偵たちの調べでも、それだけは掴めなかったのだ。

「モード大公にしていたから処分されたのか」

「そうだよ」

「モード大公が粛清された理由は何だ？」

フーケはそのことになるかと急に口を閉ざした。今まで従順だった彼女が急に態度を変えたので、ヴァルデスも少しだけ驚いていた。それと同時に、密偵たちがどうしても理由を掴めなかったと言うことにも納得がいった。盗賊に身をやつした彼女でさえ、モード大公の粛清の理由を語るうとしないのだから他の連中も絶対に口を割らなかつたのだらうし、他人に話すことさえしなかつたのだらう。

(逆に言えば、国に見離された連中までもがそうまでして隠し通したいものとは何だ……?)

ヴァルデスはそのことがどうしても知りたくなつたが、ここで下手に彼女に拷問をしても騒ぎが大きくなってしまう。それは彼にとつてあまりよろしくない状況だつた。トリステインで捕らえられた盗賊に、他国の人間が何かしたということになれば、賠償問題などに発展しかねないからだ。

(モード大公への忠誠か……それとも別の何かか……)

この場でそれを聞きだすのは無理か、と諦めようとしたその時だつた。

「なあ、取引をしないかい？」

フーケが突然、ヴァルデスに対して取引を持ちかけてきた。

「何だ？」

「あんたの知りたいことを教えるから、私を釈放してくれよ」

フーケもまた、盗賊として裏社会で培ってきた観察眼でヴァルデ

スがこの話題にかなりの興味を持ったことを見抜いていた。表情こそ変えなかったが、瞳に僅かな曇りが見えたので提案してみても悪くないと思ったのだ。

「皇太子になる俺に逃亡の手引きをしるというわけか」

「どうだい？ あんたの知りたい情報を教えるのと交換条件だ」

「……足りんな」

「何？」

「それだけでは足りぬと言った」

ヴァルデスもフーケにそれを見抜かれていると悟ると、彼女の思惑通りに進むことを嫌った。

「何が足りないって言うんだい？ 言うておくけど、今までのお宝はもう処分したから残っちゃいないよ」

「誰がそんなものに興味があると言った？ 釈放に協力する代わりにもう一つ条件がある」

「条件？」

「俺の密偵として働け。その条件を呑めば協力してやる」

「……皇太子殿下の密偵かい。悪くないね」

「条件を呑むということでもいいんだな？」

「ああ」

ヴァルデスはフーケの目を見たが、少なくとも適当なことを言っ
て逃げようと考えているようには見えなかった。

「では、契約成立だ」

「じゃあ、この縄を解いてくれよ」

「馬鹿。ここで縄を解いて逃げたらバレるだろうが。逃げるのは魔
法学院を出てから王城に着くまでの間だ。これが道具だ」

ヴァルデスはそう言ってナイフを出した。

「これだけかい？」

「それだけで充分だろ。わざわざ屋敷まで取りに戻ったんだ。あり
がたく受け取れ」

「はいはい」

ヴァルデスはナイフを無理やりフーケに握らせた。すると、フー
ケの目から光が失って虚ろになった。

「どうだ？」

「ええ。大丈夫ですよ、ヴァルデス様」

そう言うとフーケはにやりと笑った。そう、ヴァルデスが渡した

のはかつてジョゼフから貰ったインテリジェンスナイフだった。フーケの懐柔は初めから考慮していたので、わざわざ屋敷に戻って用意していたのだ。しっかりと握ってしまうと操られてしまうため、持ち方に充分気を払っていたのだがフーケはそれに気づくことができなかつた。

「では、手はずどおりにことを進める。後のことはわかっているな？」

「へい。この地下水、必ず」命令どおりに」

「では……」

ヴァルデスはそう言うつと小さく呪文を唱えてフーケに向けて術を放った。

「後のことは任せた」

「かしこまりました」

ヴァルデスはその返事を聞くと、部屋から出て眠っていた兵士を起こし、フリッグの舞踏会に参加して屋敷へと戻った。

その翌日、学院から王城に向かう途中で土くれのフーケが逃げたと大騒ぎになったが、これは王城の不手際ということ片付けられ、彼が暗躍したことは闇の中へと葬られた。

土くれのフーケ（後編）（後書き）

更新が少しずつ遅くなって申しわけございません。

これからも面白い話作りを心がけてまいりますのでよろしくお願いいたします。

アンリエッタの憂鬱（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

アンリエッタの憂鬱

「はあ……」

シャルロットは小さくため息をついていた。今日はずっとこんな調子でため息をついていた。

「シャルロット。彼がいなくて寂しいのはわかるけど、少しの辛抱じゃない」

今日は学院にヴァルデスの姿が無かった。昨日、ゲルマニアから使者が屋敷にやって来て、その使者と一緒にゲルマニアに向けて出立してしまったのだ。だから、今日は見張り役の他の婚約者の姿も無く、シャルロット一人で学院に来ていた。

シャルロットはそれが寂しくて、授業など全く頭に入っていなかった。

「うん……」

「これは重症ね」

隣に座っていたキュルケはお手上げといわんばかりに、両肩を軽く上げるジェスチャーを見せた。彼女もまた、親友の落ち込んでいる姿を見て授業など頭に入っていなかった。

「結婚式が近いからその話し合いに行っただけよ。きっとすぐに戻ってくるわ」

教師の目をかいくぐりながらそんなことを話していると、教室のドアを開けて一人の教師が入ってきた。金髪の鬘を被って、何とも奇抜な衣装を身に纏ったコルベールだった。

「……コルベール先生。授業中なのですが」

授業を行っていたギトーも、その奇抜な格好で少し呆気に取られていた。我を取り戻すと、慌ててその言葉を口にして彼に授業中に乱入してきたその真意を訊ねた。

「ギトー先生。今日の授業は全て中止です。喜ばしいことに、我がトリストインの可憐な花であるアンリエッタ姫殿下が当学院にお越しになることが決まりました。生徒たちはすぐに正装した上で門の前に集合です。日頃の学習の成果を姫殿下に見ていただくチャンスです。皆さん、すぐに準備をして集合するように」

そう言ったところで、コルベールがつけていた鬘が彼の頭から滑り落ちた。

「滑りやすい」

シャルロットが何気なく言ったその一言で教室中が大爆笑に包まれた。普段は笑わないギトーでさえも、肩を震わせながら笑いをこらえようと必死だった。

「ええい！ だまらっしゃい、この小童ども！ 貴族が大口を開けて笑うなどはしたくない！ おかしいときは口元に手を当てて顔を背けて笑うのです！ とにかくすぐに集合すること！」

コルベールはそう言って教室を出て行った。彼が教室を出て行っ

その後、生徒たちも教室を出て行き、各々の部屋に戻っていった。

「シャルロットはどうするの？」

キュルケはアンリエッタ来訪にはあまり興味を示していなかった。そもそも、ゲルマニアの貴族である彼女がトリステインの王女を迎えるための準備に参加する義務など無いのだ。これがヴァルデスだつたら彼女は式典の先頭に立つぐらいのことはしているだろう。

また、シャルロットもガリアの王族であり、ゲルマニア皇太子となるヴァルデスの妻になるのだからわざわざ出迎える必要は無かった。

「一度、屋敷に戻る」

「どうして？」

「一応、イザベラたちに知らせてくる」

「イザベラ様たちに？」

シャルロットたちは国賓という立場であるので、トリステインの次期女王と噂されているアンリエッタが来訪するということならば、この機会に挨拶ぐらいしておいても悪くはないと考えていた。だが、イザベラたちがそれをしないと云うのならそれに賛同するつもりでもあった。

「ちよつと行ってくる」

シャルロットは口笛を吹いてシルフィードを呼び寄せると、その

まま屋敷に向かって飛んでいった。

「お姉様。お兄様はいつ戻ってくるのね？」

空を飛びながらシルフィードはシャルロットに訊ねた。

「わからない。そんなにかからないと思う」

「送るだけならシルフィードでひとつ飛びだったのね。あんな遅い馬なんかで行くこともなかったのね」

「付き合いがある。彼は忙しい」

「面倒なのね」

シルフィードはどうしてそんな面倒なことをしなければならぬのか、理解に苦しんでいた。

「もう着くのね」

そう言っただけでシルフィードは徐々に高度を落としていった。下にいた護衛の兵士たちもシルフィードが降りてきたのを見て、慌てて出て迎えに集まってきた。

「シャルロット様。どうかしましたか？」

ネージュが代表してシャルロットに質問した。

「ちょうどいい。貴女も来て」

「はっ」

シャルロットはネージユを伴って屋敷の中へと戻っていった。

「おや？ 学院はどうしたんだい？」

屋敷の中ではイザベラとカトレアとエルティナがティータイムを楽しんでいた。同じ婚約者でありながらこの差は何だろう、とシャルロットは思わず思ってしまった。働いているネージユに対し、優雅な午後を過ごしているイザベラたちを見ていると何とも複雑な気分になっていた。

「アンリエッタ姫が学院に来る」

「アンリエッタ姫が？ どうしてだい？」

「知らない。ただ来るといふことしか知らない」

「そうかい」

イザベラは特に興味を示していないようだったが、他の二人は違った。

「アンリエッタ姫殿下がいらっしやるということなら、ご挨拶に向かったほうがよろしいのではないでしょうか？」

「そうですねえ。カトレアさんとはもかく、私たちは他国の人間ですから挨拶したほうがいいですね」

「そうかい？ うーん……」

カトレアとエルティナの意見を聞いて、イザベラもちよつと考え込むような仕草を見せた。本音を言えば、好き好んでアンリエッタに会いに行く理由など存在しなかった。だが、会いに行ったほうがいいという意見も出てきたのでそれを無視することはできなかった。婚約者たちのヒエラルキーの頂点にいるイザベラでも、その意思をすべて無視するなどということはできなかった。それができるのは彼女たちの夫であるヴァルデスのみなのだ。

「まあ、会うだけならいいか」

「では、準備しましょうか」

「はい」

「エレネ、ネージユ。あんたたちも着替えるんだよ」

「わかった」

「かしこまりました」

婚約者たちはそれぞれの部屋に侍従たちと共に入り、ヴァルデスに恥を欠かせないように目いっぱい着飾った。まるで舞踏会に行くかのような綺麗なドレスに身を包み、宝石類も身に纏った。だが、それでいて決して派手過ぎることは無く、彼女たちの魅力を引き出していた。

「何かこういうのを着るのは初めてなので、ちょっと恥ずかしいですね」

ネージユも普段の格好ではなく、エルティナが持っていたドレスを身に纏っていた。愛人という立場である彼女なのだが、どうせなら、と彼女たちの好意で着飾らせたのだ。正式な婚約者というわけではないのだが、既に公然の秘密となっているので今更のことでもあった。

「似合っていますよ。ネージユさん」

「そうですね。旦那様に見せて差し上げたかったですね。きっと喜びますよ」

カトレアとエルティナは着飾ったネージユを褒めていたが、イザベラとシャルロットは予想以上にドレスが似合っており、また厳しい訓練で引き締まったウエストに意外にポリウムのある豊満な胸を見て少し気落ちしていた。わかっていたことではあったが、こう改めてカトレアたち三人と自分たちを比べるとどうしても体つきにおいて負けていると認めざるを得なかった。

だが、この三人と比較して勝てると断言できるほどの女が果たしているだろうか、どう考えてもそれを断言できる女はいないだろうと考えていた。

「じゃあ、準備ができたところで行くよ」

イザベラたちは馬車と護衛たちを引き連れて魔法学院へと向かった。

その数時間後、アンリエッタ姫一行は魔法学院を目指して馬車を走らせていた。

「はあ………」

「姫様、はしたないですぞ」

「王女はため息一つ吐かせてもらえないのかしら？」

「臣下の前ではお止めくださいませ」

「馬車の中じゃない。外からここを見ている人間なんているはずがないわ」

「それでもです」

マザリーニのその言葉を聞いて、アンリエッタはまたため息をついた。マザリーニは言った傍から、と思ったが今回は見逃すことにした。

「しかし、アルビオンで蜂起したレコン・キスタなる者たちはあつという間に国を崩壊せしめんとしたようですな」

「そうね……あの方が言っていたとおりになつたわ」

「あの方？」

「ヴァルデス殿よ。あの方は去年の定例会議の場で危険なのはアル

ピオンとトリステインだと言っていたわ」

「さすがゲルマニアの若き獅子、先見の明があったということだな」

アンリエッタの言葉を聞いて、マザリーニもため息をつきたくなつた。一年前に警告を受けていたにも拘らず、現在のアルビオンは国家転覆という未曾有の危機に晒されている。ヴァルデスの言葉が本当ならば、このトリステインだって安泰というわけではないのだ。

「その言葉を聞いてもあの方は何にも感じないでしょうね。予想していたことが起こっただけ、それだけのことでしかないと言っはすだわ」

アンリエッタはそう言ってまたため息を吐いた。

「しかし、風前の灯のアルピオンに対して、ゲルマニアとガリアは高笑いが止まらんでしょうな」

「ええ。その通りでしょうね」

「アルピオンがあのようなことにならなければ、あちらのウェールズ殿下との婚姻という選択肢もありましたが、今となってはもう…」

…」

「マザリーニ枢機卿。それは言わないで頂戴」

「かしこまりました」

マザリーニは口が過ぎたと素直に従った。一年前に開かれたあの

重役会議で導き出された結論は、今となつてはもう実現不可能なものになつてしまつていた。アルビオンが崩壊寸前の今、同盟を結ぶことなど不可能だし、他にゲルマニアとガリアに対抗する方法も無いのが現状だつた。

「それにしても、王を守るべき貴族が反旗を翻すなんて貴族の風上にも置けませんわ。可哀想な王様を捕まえて縛り首にしようとするなんて、この世のほかの人々が赦しても、私と始祖は決してそのような蛮行を赦しませんわ」

「姫様。少々口が過ぎますぞ。それに王権が維持できないのはアルビオン王室にその能力が無かつたからですぞ。内憂を払えぬ王家に存在する価値などありませんまい」

「マザリーニ枢機卿。いくら貴方でも今の発言は口が過ぎますよ。アルビオン王家の人々は、ゲルマニアの成り上がりと違って私たちの親戚なのですよ。そのような言い草は許しません」

「失礼いたしました。では、今晚寝る前に、始祖ブリミルの御前にて懺悔することに致しましょう」

マザリーニは涼しい顔でアンリエッタに向かってそう言った。そのあたりのやり取りは老獪なマザリーニ枢機卿の方に分があつた。

「先を読み、手を打つのが政治というものです。もっとも今となつてはゲルマニア・ガリアに遅れをとらないためにはどうするかを考えなければならぬのですからな」

マザリーニがきつぱりとそう言い放つと、アンリエッタはまたため息を吐いた。彼はカーテンを少し開けて腹心の部下を馬車の近く

まで呼び寄せた。

「お呼びでございますか？ 猊下」

「姫殿下の気分が優れないようだ。何か気晴らしになるようなものを持ってきてくれないか」

「かしこまりました」

男はそう言う道端に咲いていた花の中から綺麗なものを選んで、再び馬車の近くに寄ってきてマザリーニに渡そうとしたところ、彼は髭を手で撫でながら言った。

「姫殿下おん手ずから受け取ってくださいさるそうだ」

マザリーニの言葉を聞くと、男は乗っているグリフォンを操って馬車の反対側につけた。すると、カーテンがするすると上がり、アソリエッタが男から花を受け取ると、今度は左手を男に差し出した。

男は感動した面持ちで、その手をとってそこに口づけた。

「お名前は？」

「殿下をお守りする魔法衛士隊、グリフォン隊隊長のワルド子爵と申します」

「そう……貴方は貴族の鑑のように立派でございますわね」

「殿下のいやしきしもべに過ぎませぬ」

「貴方の忠誠に、期待してもよろしいのでしょうか？」

「殿下がお困りの際は、戦の最中であろうと、空の上からであろうと、何を置いても駆けつける所存でございます」

アンリエッタが頷くと、ワルドは馬車から離れていった。

「あの者は、使えるのですか？」

「はい。『閃光』のワルドという二つ名を持つほどの使い手でございます。アルビオンにも、彼ほどの使い手はおりません」

「聞いたことある名前ね……」

「ラ・ヴァリエール領の隣に彼の領がありますので、その関係ではないかと……」

「ラ・ヴァリエール……」

アンリエッタの脳裏にあの小さな幼馴染の姿が浮かんだその時だった、急に馬車が進むのを止めたのは。

「何事だ？」

マザリーニが馬車の中から訊ねると、傍にいた魔法衛士隊の誰かが答えを返してきた。

「魔法学院から使いの者が来ました」

「魔法学院から？ 何用だ？」

「今確認しております」

使いとして来た者の話を聞くと、それを聞いた者が馬車の傍までやって来た。

「ご報告いたします。只今、魔法学院にてガリア王家のイザベラ姫殿下及びシャルロット姫殿下、ヴァリエール公爵家次女のカトレア様、ゲルマニアのエルティナ様が学院にて姫様の到着をお待ちしているとのことでございます」

「あの方々が私を待っている？」

「恐らく、姫様が学院に行かれることを知ったのでしよう。カトレア嬢を除けば全員他国の人間であるゆえ、姫様にお目通りをしておこうと考えたのでしよう」

「私に？ この国の実質的な支配者は貴方なのに」

アンリエッタは明らかに皮肉の意思を込めてマザリーニに向けてそう言ったが、彼もそんな戯言にいちいち付き合ってやるような人間でもなかった。

「姫様、ご冗談が過ぎますぞ。それはさておき姫様、気を引き締めてまいりましょう。恐らく、彼女たちは姫様という人間の器を知ろうというつもりなのでしょう」

「私の器？」

「自分やあるいはヴァルデス殿にとって崩しやすい人物かどうか。」

ひいては、ガリアとゲルマニアの属国にしやすいかどうかというところでしょうか」

「……使い魔のお披露目を見に行くつもりで来たのに、随分と面倒なことになりましたわね」

アンリエッタはいきなり訪れた試練に、内心ではかなり焦っていた。ここで下手に出たり、こっちが見くびられたりするようになることになると、部下たちに不信感を与えてしまうし、かと言ってこの試練に対して上手く立ち回れるほど彼女はまだ王族としての振る舞いを身に着けていなかった。

「決まってしまったことを嘆いても仕方ありませんまい。これも始祖が姫様に下された試練です。堂々とした態度で臨む、それだけはしっかりとしましょう」

下手の考え休むに似たり、そのことわざが示すように、今更アンリエッタに俄仕込みの振る舞いを教えたところでどうにかなるはずもない。それならば、せめて堂々とした態度を崩さないようにすることだけに専念させた。

「そうですわね」

(やれやれ、本当に世話が焼ける)

マザリーニはアンリエッタに気づかれぬように小さくため息をついた。馬車は色々な不安も詰め込んで魔法学院へと走っていった。

アンリエッタの願い（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

アンリエッタのお願い

魔法学院はアンリエッタが来る前からざわめきが治まらなかった。その理由は、突然やってきたイザベラたちだった。

ガリア王室やトリステインで一二を争う有力貴族であるカトレアの登場は、生徒たちを興奮させるには十分な材料だった。カトレアが登場したので、ルイズもカトレアの元に行きたかったのだが、イザベラたちやオスマンが傍にいるため近寄れなかった。

「しかし、わかっていたこととは言え、お前の姉ちゃんたち綺麗だよな」

才人もルイズの傍でイザベラたちを見ていたので素直な感想を口にしていた。ルイズも自分の自慢の姉を褒められて悪くない気がしていたが、それだけにゲルマニアに嫁ぐということが今でも納得できずにいた。

だが、今のルイズにはそんな感情ではなく、別の感情で心が満たされていた。

(どうすればあんなに育つのかしら?)

それはルイズだけでなく、この場にいる女生徒のほとんどが憧れの眼差しを持ってカトレア、エルティナ、ネージュを見詰めていた。彼女たちは女性らしい体つきの代表と言ってもいいくらいの素晴らしい体をしていた。それに、イザベラやシャルロットは彼女たちと比べると体つきではかなり劣ってしまいが、その代わりに王族としての威厳や風格というものがあつた。こっちはこっちで畏敬の眼差

しを集めていた。

「ほっほっほっ。過去にこの魔法学院にこれだけの王族が集まったことはない。間違いなく、魔法学院の歴史に残る一日になるじやろうな」

「ま、この学院が潰れない限りは語り継いでおくれよ」

オスマンの言葉にイザベラがそう付け加えた。彼女たちはアンリエッタが来るのを待ち続け、待つている間が手持ち無沙汰だったので教師たちと適当に話をしていた。もちろん、彼らも普段はお目付け役で来ている彼女たちを何度か目撃しているが、今回は正式なお客様として来ているので緊張していた。

「しかし、こつも美人ばかり揃うとさすがに壮観じゃの。ミスタ・コーラッドが羨ましいわい」

「あら〜？ オスマン学院長お上手ですね〜」

「ありがとうございます、オスマン様」

エルティナとネージュはそう言って一礼した。

「申し上げます。アンリエッタ姫殿下ご一行様、到着されました」

衛兵の一人が報告に来ると、全員表情が引き締まった。イザベラたちもしっかりと並びを正してアンリエッタたちが登場するのを待った。王家の紋章入りの馬車がやって来ると、学院の生徒たちは杖を掲げて「トリステイン万歳！」と何度も声を上げていた。

そして、馬車からアンリエッタが降りてくると更に大きな歓声が上がった。

「ようこそお越しくございました。アンリエッタ姫殿下」

「オスマン学院長。この度はお世話になります」

「いえ、姫殿下にお越しいただけて光栄でございます」

オスマンとの挨拶を終えると、アンリエッタはイザベラたちに向き直った。

「イザベラ姫、シャルロット姫、エルティナさん。ようこそトリステイン王国へ」

「アンリエッタ姫、ご健勝のようで何よりですわ」

この場ではイザベラが代表で返事をした。

「カトレアさん、幼い頃に遊んでいたで以来ですわね。お元気になられたそうで何よりですわ」

「アンリエッタ姫殿下におかれましてもご健勝のようで安心いたしましたわ」

カトレアとの挨拶も終わると、今度はネージユに視線を移した。

「確か……去年、ヴァルデス殿と一緒にお城にいらしていましたわね？」

「彼女は私たちの護衛なのですが、見栄えがいいので私が着飾らせたのですわ」

「ネージユと申します。アンリエッタ姫殿下にお会いできて光栄でございます」

イザベラがその言葉に答え、ネージユは簡潔に挨拶を済ませた。

「ヴァルデス殿がお見えになりませんが……？」

「生憎とヴァルデスは只今ゲルマニアに戻っております。トリステインにおりましたら、この場で一緒にご挨拶をさせていただいたのですが……」

「あの方も忙しい身。結婚式が間近に迫ったこの時期ならば、仕方無いことでしょう」

アンリエッタはそう言ってその話を打ち切った。マザリーニはアンリエッタの後ろからそのやり取りを見物していたが、とりあえずは心の中でアンリエッタの振る舞いに対しては及第点を与えていた。口数が少ないように感じるが、下手に口数を増やしてボ口を出すよりはよっぽどましであると彼は考えていた。

彼もまたこの場で悟っていた、イザベラは決して悔ってはならない人間だということ。

彼女はヴァルデスに匹敵するほどの洞察力を持っている。今のアンリエッタの振る舞いでさえ、彼女にはその本当の意味を見透かされているかもしれないと彼は考えていた。

「ではイザベラ様、それに皆様。ごきげんよう」

アンリエッタは軽くスカートを掴んで礼をして学院の中に入っていった。マザリーニを含めた付き人たちもそれに続いて中に入っていったが、その中の一人をネージユがじっと見据えていた。

「あの髭男がどうかしたのかい？」

「……いえ、何でもありません」

「今にも戦いそうな目をしていて何も無いわけないだろう。どうしたんだい？」

「……あの男、強いです。少なくとも、あの中では」

「そうかい。お前がそう言うのなら強いのだろうね」

イザベラはネージユの実力を目の当たりにする機会は無かったが、あのヴァルデスが認めるだけの実力者なのでその実力を疑うことはしなかった。ネージユの言葉を聞いて、全員の視線がその男に向けられた。

「ワルド子爵ですね」

「知り合いかい？」

「領地が隣同士なのです。それにルイズの婚約者ですから」

「あら。ルイズさんの婚約者さんなんですか」

かなり年齢差が大きいようにも見たが、それは別に貴族の結婚では珍しいことではなかった。恋愛結婚など滅多に無い貴族は、家同士の繋がりでの政略結婚がほとんどなのだ。かつて、キュルケも公爵家のおじいちゃんの後家に入れられそうになったことからわかるように、それは何もトリスティンだけのことでなくハルケギニア全体で当たり前のように行われていることなのだ。

「あいつ、強いのかい？」

「確か、今はグリフォン隊の隊長を務めていらっしやるはずです」

「ふーん……お前とあの男だったらどっちが強いんだい？ ネージユ」

「……たとえ相手が誰であっても負けません。それにあの程度ならば倒せる人間は他にもいます」

ネージユは自分を拾い上げ、育ててくれたヴァルデスに絶対的な恩を感じているので何があっても自分が負けることを許さなかった。負けるくらいならば相打ちを狙うぐらいの覚悟で戦いに臨んでいた。

「ま、そういうことにおこうかね」

アンリエッタとの挨拶が終わったので、イザベラは馬車に向かって歩き出した。それに引き続いて他の婚約者たちも後に続いて馬車に向かって歩き、生徒たちは彼女たちの道を塞がないように、すぐに道をあけた。

用件が終わった今、彼女たちが学院に留まる必要は無かったので屋敷へと戻っていった。

その夜、学院のある一室では夜遅くになっても明かりが落ちなかった。

「なあ、ルイズ。何をそわそわしているんだよ」

才人は普段と違って明らかに落ち着きのないルイズに訊ねた。さつきから部屋の中を意味もなく歩き回ったり、座っていても何だか落ち着かないといった態度があまりにも普段どおりではなかったのだ。

「うるさいわね。別にそわそわなんてしてないわよ」

そう答えるが、ルイズの態度は全く変わらなかった。才人は訊ねるだけ無駄と判断すると、ルイズが飽きるまでそれを見ていることにしていた。

すると、部屋のドアが叩かれた。普通の叩き方ではなく、強く叩いたり弱く叩いたりを組み合わせたものだった。

「はい。どなたですか？」

「どなた…」

才人がドアを開けようとしたが、ルイズがそれを遮って自分でドアの鍵を開けた。開いたドアから最初に入ってきたのは人ではなく杖だった。杖からは光が放たれ、部屋中を駆け回った。

「ディテクト・マジック？」

「何処に耳があるかわかりませんからね」

すると、フードを被った人物が部屋の中に入ってきた。

「久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

そう言うのと、その人物は被っていたフードを取った。フードの下に隠れていた顔は、昼間に大歓迎を受けたアンリエッタだった。

「姫様！ お久しぶりでございます！」

「やめてちょうだい、ルイズ・フランソワーズ。私たちお友達じゃない」

ルイズがアンリエッタの姿を見て、慌てて臣下の礼をとるとアンリエッタは寂しそうな表情を浮かべた。

「いいえ、姫様に無礼な振る舞いはできません」

「幼い頃からのお友達じゃない。貴女にまでそんな風にされてしまったら私は本当に孤独になってしまいますわ」

「姫様……今でも私の事をそのように仰ってくださいるのですか？」

「もちろんよ。私たちはお友達じゃない、ルイズ・フランソワーズ」

二人はそう言っ互いに抱き合った。その様子を見ていた才人は、何だか出来の悪い芝居を見ているような気分がしていた。何でも仰々しくしないとイケないというルールでもあるのだろうかとさえ感じていた。

「ところで、そちらの方は？」

「これは私の使い魔です」

「使い魔？ ……人にしか見えませんか？」

「人です」

「まあ……貴女は昔から変わっていたけど、使い魔も変わっているのですね」

アンリエッタはそう言ってくすくすと笑っていたが、才人はルイズに小声で話しかけていた。

「なあ、姫様と知り合いなのか？」

「ええ。幼少のみぎり、遊び相手を務めさせていただいたのよ」

「ふーん」

才人はあまり興味がなさそうにそう言ったが、ルイズは才人がアンリエッタの前でも堂々と立っているのに気がつき、慌てて服を掴

んで平伏させた。突然体を引つ張られたので体を打った才人はすぐルイズに抗議した。

「痛つてえな！ 何するんだよ!？」

「あんた姫様の御前で堂々と立つてるんじゃないわよ！ 申し訳ございません、使い魔の躰がなっておりますで……」

ルイズは慌ててアンリエッタに対して謝罪の言葉を述べたが、才人はあまり納得がいつていなかった。そもそも、アンリエッタは確かに綺麗な女性と言うイメージはよく似合うが、王族というイメージがどうしても似合わないのだ。王族と言えば、常に堂々としていて必要ならば平気で人を切り捨てるほどの冷酷さを兼ね備えている。ヴァルデスやイザベラのような人物が、才人の中では王族というものの象徴的な存在だった。それに比べると、アンリエッタは何とも弱々しい感じがしていた。守りたい女性と言われれば納得はできるが、王族と言われてもあまり納得するには至らなかった。

「気にしてないわ。えつと使い魔さん」

「才人です」

「サイトさん。私のお友達をよろしくお願いしますね」

アンリエッタはそう言って左手を差し出した。才人はその意味がわからずに頭の中にクエスションマークが浮かんでいたが、ルイズはそれを見て表情を変えた。

「いけません、姫様！ 使い魔如きにお手を許すなど!」

「かまいませんよ。お友達を守ってくれる騎士なのですから。忠誠には報いるところが無いといけません」

アンリエッタは笑顔で手を差し出していたが、才人は小さくため息をついた。

「お手つてことか……？ やっぱ犬かよ」

「違うわよ。簡単に言っちゃえばキスしていいってことよ」

「キ、キス！？ 何て剛毅な……」

才人は改めてアンリエッタを見た。彼女は変わらずにこにここと笑っていた。

「で、では、失礼をいたしまして……」

才人は恐る恐るアンリエッタの手をとった。彼女はその瞬間に更に笑みを強くしたが、次の瞬間には才人にその手を引っ張られて抱き寄せられたので驚愕の表情に変わった。

「え？」

アンリエッタがそう呟いた次の瞬間、才人はアンリエッタの唇に自分の唇を重ねた。アンリエッタは目を大きく見開き、ルイズはその様子を見て驚愕に全身を震わせていた。唇を離れた瞬間、アンリエッタはその場に崩れ落ちた。

「あれ？」

「こ、この馬鹿犬ー!!」

ルイズはいつの間にか取り出していた乗馬用の鞭で才人をしばき倒した。

「な、何だよ!? キスしろって言うからキスしただけだぜ?」

「忠誠の誓いは手の甲に決まっているでしょ! 唇にする馬鹿がどこにいるのよ!？」

「ここにいる」

「馬鹿ー!!」

ルイズはまた才人に向けて鞭を振るった。

「ほ、本当に申し訳ありません! この馬鹿と共に窓から飛び降りると仰るのなら、すぐにこの窓から飛び降ります!」

「おい!」

才人の抗議の声はルイズには全く届いていなかった。

「ちゅ、忠誠には報いるところが必要ですね。あ、あははは……」

アンリエッタは特に才人を責めることも無く、動揺は隠し切れないうつだったが、とりあえずは笑って許すという構図が出来上がっていた。

「本当に申し訳ありませんでした」

ルイズは才人と共に深々と土下座をした。才人はあまり納得できなかったが、ルイズに思いつきり頭を押さえつけられているので抵抗できなかった。

「いいのよ。貴女は楽しそうね、ルイズ・フランソワーズ」

「姫様？」

アンリエッタがそう言ってため息をついたので、ルイズはその様子が気になった。

「姫様、ため息などついて何か心配事でもあるのですか？」

「ルイズ。いえ、これは私事ですから気にしないで」

「私如きではたいしたお役に立てないかもしれませんが、ですが、姫様のそのようなお顔を見ては黙っていられません」

「ルイズ……ありがとう。お友達っていいわね」

アンリエッタはそう言って表情を真剣なものに変えた。

「ルイズ。レコン・キスタという名前を聞いたことはあるかしら？」

「確か、以前にゲルマニアで肅清された貴族の共和制を唱えていた連中だったと……」

「はい。ですが、ゲルマニアでは肅清された彼らが、今度はアルビオンで蜂起したのです。アルビオンのほとんどの貴族がレコン・キ

スタに参加し、アルビオン王家は明日にも倒れてしまうとのことなのです」

「何て愚かな！ 始祖の直系の血筋を引いている王家を倒そうなどと、何て恥知らずな！」

ルイズはその話を聞いて憤慨した。どうせならあのゲルマニアが滅んでいればよかったのに、と内心では少し思っていた。

「ですが、アルビオン王家が今にも倒れてしまいそうなのは最早どうしようもない事実なのです」

「嘆かわしいことです。それが姫様の悩みの種となっているのですね」

「ええ。申し上げにくいのですが、アルビオンのウェールズ様が…」

「プリンス・オブ・ウェールズ様ですね」

「何でその方が気になるんですか？」

アンリエッタがウェールズに懸想していることを知らない才人は当然の疑問として訊ねた。ルイズもその事情は知っていたが、それを馬鹿正直に才人に話していいものかと悩んだ。アンリエッタの名誉にも関わることなので、臣下であるルイズが彼女の名誉に傷をつけることはできなかった。

「アルビオン王家とトリステイン王家は親戚同士なんですわ。仮にアルビオン王家が倒れるとしても、ウェールズ様さえ生きていれば

レコン・キスタ掃討後に再興させることができます。だから、ウェールズ様には生きていてほしいのです」

本心は隠して嘘はつかず、アンリエッタの答えは実に上手いものだった。内情を知っているルイズは思わずアンリエッタのその機転の良さに感心してしまうほどだった。

「でも、こう言うては何ですけど、アルビオン王家が仮に倒れたとしても、トリステインが無事ならばそれでいいのではないんですか？」

「それは違いますわ。国が減るということは、それまで保たれていた均衡が崩れてしまうということです」

「均衡が崩れる？」

「今、このハルケギニアは変化という大きな波を迎えています。ゲルマニアとガリアの同盟は既にこのハルケギニアの国々に大きな衝撃を与えています。元々、ゲルマニアという国は小さい国を併合して大国へとの上がった国です。そこへガリアと同盟を結んだことよって小国が自らゲルマニアに取り入ろうとする動きが増えています。そこへアルビオンが倒れたということになれば、動揺は更に広がります」

「なるほど」

「ですが、仮にアルビオンが倒れたとしても、始祖の血が絶えていないということになれば人々の動揺も抑えられるでしょう。アルビオン再興がもし実現できなかつたとしても、ウェールズ様をトリステイン王家に迎え入れれば血の結びつきがより濃くなります」

「つまり……ウェールズ様をお婿さんに、ということですか？」

「ま、まあ、そういうこともあるということですよ」

アンリエッタは誤魔化すようにそっぽを向いたが、才人は何となくアンリエッタの狙いはアルビオン王家などではなく、ウェールズ本人だということは理解できた。

「わかりました姫様！ アルビオンへ赴き、ウェールズ殿下を救出してご覧に入れましょう！」

「はあっ！？」

突然そんなことを言い出したルイズに、才人は思わずそんな声を上げていた。

「お前、自分が何を言っているのかわかっているのか？」

「当然よ。貴族たる者、姫様の危機を見過ごすわけにはいかないわ
！」

「戦争しているところに行くんだぞ。そんな所で何ができるんだよ
？」

「アルビオンなら前に姉さまたちと旅行したことがあるわ。地理ならわかるわ」

「旅行するのとはわけがちがうんだぞ！」

「そうですね、ルイズ。貴女の気持ちは嬉しいけど、そんな危険なところへ行かせるわけにはいかないわ」

才人とアンリエッタが必死に止めようとしたが、それはかえってルイズのやる気に火を点けたようだ。ルイズは一步も引かずに言葉を続けてきた。

「いいえ姫様。姫様が心を痛めているのを知りながら、それを見過ごすことなど私にはできません。是非、この私にお任せください」

「お前なあ……」

才人はルイズの決意の固さに頭を抱えた。それとは対照的に、アンリエッタはそんなルイズの態度に熱い視線を送っていた。

「ルイズ……貴女……」

「姫様！ このルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールにお任せください！」

アンリエッタはルイズの言葉を聞いた後、背を向けた。瞳を閉じ、天を仰いで考えた。それから目を開いて再びルイズに向き直った。

「わかりました。では、ルイズ。貴女にウェールズ様救出をお願いします」

「ありがたき幸せにございます！」

ルイズはアンリエッタに信頼されたことで、嬉しさのあまり体を震わせていたが、才人は大きいため息をついた。ルイズが何を考え

ているかはわからなかったが、わざわざ危険な戦場に足を運ばなければならなくなったのだからそれは仕方の無いことである。

すると、突然ドアが開かれ、一人の人物が部屋の中に飛び込んできた。

「姫殿下、そのお役目、このギーシュ・ド・グラモンにもお任せください！」

「ギーシュ!?」

いつから聞いていたのか、ギーシュは部屋に飛び込んでくるなりそんなことを言い出した。仲間が増えるのは心強いことなのだが、問題はギーシュが何処から話を聞いていたのかということだった。あくまで一つの例としての話ではあったが、ウェールズとの結婚の話まで持ち出しているのでそこをしっかりと確認しておかなければならなかった。そうしなければ、アンリエッタの恋の噂などすぐにハルケギニア中を駆け巡ってしまうからだ。

「あなた、何処から聞いていたのよ！」

「モンモランシーに愛の言葉を囁いて戻るときに、君とサイトが何やら言い争いをしているのが聞こえてね。聞けばアルビオンのウェールズ殿下を救出するという名誉ある任務を賜っているではじゃないか。だが、君たち二人だけでは手が足りないだろう。だから、僕も協力させてもらうのさ」

「……具体的にどの辺りから聞いていたんだ？」

「うむ。君がルイズに『お前、自分が何を言っているのかわかって

いるのか?』と言っていたところだな」

それを聞いてアンリエッタはほっと胸を撫で下ろした。懸念していたことが消えると、徐々に冷静になっていきギーシュの名前を聞いて、彼が何処の家の出身かにようやく気づいた。

「グラモン……と言うと、グラモン元帥の……」

「はい。四男でございます」

「まあ、お父上も勇敢な方ですが、貴方もお父上に負けないくらい勇敢であらせられるのね」

アンリエッタにそう言われて、ギーシュは心の中で両手を挙げて喜んでいた。正式な場ではないが、こうしてアンリエッタの顔を直接拝見することもできたので他の生徒たちと比べても大きなアドバンテージを取ったとも言えるのだ。

「ありがとうございます！ このギーシュ、必ずや姫様のご要望にお応えしてご覧に入れます！」

「期待しておりますわ。ギーシュ殿」

こうしてギーシュもウェールズ救出隊に加わることとなり、翌朝早くに出発することが決まった。

アンリエッタの願い（後書き）

気がつけば200万PVです。

本当にありがとうございました。これからも頑張ります。

ルイズの婚約者（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ルイズの婚約者

「さあ、出発するわよ」

翌朝、まだ他の生徒が起きだす前からルイズたち三人は正門前に集合していた。

「ちょっと待ってくれたまえ。僕の使い魔も一緒に連れて行かせてほしいんだ」

「あんたの使い魔ってジャイアントモールでしょう？」

「そうだ。ヴェルダンデと言う名前なんだ」

「アルビオンは空に浮かんでいるのよ。どうやって連れて行くのよ」

「あ……」

ルイズの冷静な突っ込みにギーシュは思わず言葉を失った。

(何をやってるんだか……)

才人はそんな風に思っていたが、とりあえず口を挟まなかった。すると、ルイズの足元の地面が少し盛り上がったのに気がついた。

「おい、ルイズ」

「何よ?…きゃあ!」

才人がルイズに教える前に、足元の地面が大きく盛り上がり、その場に尻餅をついた。盛り上がった地面の中から出てきた何かはルイズにのしかかっていった。

「な、何だ？」

「ああ、ヴェルダンデ。そこにいたのかい？」

すると、ギーシュは何事も無いかのようにそう言った。

「で、でっかいモグラ？」

「ヴェルダンデと言いたまえ。そういう名前なんだから」

「そんなこと言ってないで助けなさいよ！」

ルイズは必死でヴェルダンデを押しつけようと努力していたが、非力なルイズではヴェルダンデの大きな体格を押しつけることなどできなかつた。

「なあサイト、モグラと戯れる少女と言うのは何とも官能的だと思わないか？」

「そうだな……」

男二人はそんな姿に、妙に劣情をかきたてられる何かを感じていた。

「ちょ、ちょっと！ このモグラ、主人に似て女好きなの！？」

「随分気になる言い方だが……まあいい。普段は人に飛び掛るようなことは無いはずなのだが……」

「あ、こら！ 姫様からお預かりしている指輪に！」

「なるほど。指輪か」

ヴェルダンデがルイズの指に嵌めているアンリエッタから預かった水のルビーに鼻先を向けているのを見て、ギーシュは納得したようにそう言った。

その後、アンリエッタが旅の資金の足しにと王家の秘宝である水のルビーをルイズに託していた。もつとも、ルイズの頭にこれ売るなどという選択肢など全くなかったが。

「どうということなんだ？」

「ヴェルダンデは珍しい鉱物には目が無いんだ。姫様から贈られた指輪の石が珍しいんだろう」

「そんなもんなのか？」

「土のメイジにとっては珍しい鉱物を集めてきてくれるから心強いパートナーだよ」

才人の疑問にギーシュはさも当然といわんばかりにそう答えた。

「そんなことはどうでもいいから、早く助けなさいよ！」

ルイズが妙に落ち着き払っている二人を見て声を荒げた。才人は

仕方ない、といわんばかりの表情で助けようとした時、ヴァルダンは急に何かに突き飛ばされたかのようにルイズの上から少し離れた場所まで飛ばされていた。

「ヴェルダンデ！」

ギーシュは慌ててヴェルダンデのところへ駆け寄ったが、突然のことに全く対処できていなかった。そこでヴェルダンデは気絶していた。

「誰だ！」

才人はデルフに手をかけ、突然現れた人影に対してそう言った。ギーシュもその声で誰かがそこにいることに気づき、慌てて杖を抜いた。

「失礼。婚約者が襲われていると思ったので攻撃させてもらった」

そう言って現れたのは、昨日アンリエッタと共に魔法学院にやって来たワルド子爵だった。レイピア型の杖を腰に下げて、じっとこちを見据えていた。

「「ワ、ワルド子爵!？」」

ルイズとギーシュはその姿を見て驚きを隠せなかった。

「知り合いか？」

「え、ええ」

「あの若さでこの国の魔法衛士隊の一つ、グリフォン隊の隊長にな

った御方さ」

ルイズは頬を朱に染め、ギーシュは憧れのまなざしで彼を見据えていた。ギーシュはともかく、ルイズまでそんな反応を見せていることが才人にとっては面白くなかったが、とりあえず初対面の貴族の前なので自重することにした。

ワルドは三人の前によつてくると、ルイズを抱え上げて笑みを浮かべた。

「相変わらず羽のように軽いね。僕のルイズ」

「ワ、ワルド様ったら、他の人が見ていますわ」

「僕のルイズ!?!」

ワルドは周りの目など気にせず、ルイズを抱き上げて笑顔を浮かべていた。才人とギーシュはワルドの口から出た僕のルイズという言葉に驚きを隠せなかった。

「そ、そういえば、さっきもワルド子爵は婚約者と言っていたね。まさかルイズ、ワルド子爵は君の……」

「ああ。ルイズは僕の婚約者だ」

あっさりとその事実を臆面も無く告げるワルドとは対照的に、ルイズは頬を朱に染めて押し黙っていた。

「で、でも、どうしてワルド様がここに?」

「アンリエッタ様から君たちの護衛を仰せつかったんだ。君たちだけに旅をさせるのは危険だからね」

「そうだったのですか」

才人はその様子が何となく面白くなかった。傍目はどうであれ、才人の目にはルイズとワルドが仲良さそうに話しているように見えていた。それがどういいうわけか才人には面白くなかった。ワルドはしばらくルイズを抱き上げていたが、やがて彼女を下ろすと言葉を続けた。

「では出発しようか。時間が経てば経つほどアルビオンは危険になるからね」

「あの、我々は馬で行くことにしているのですが、ワルド子爵はどのように?」

「ああ。僕には相棒がいるから」

すると、空の上からグリフォンが降りてきた。鷲の頭と上半身に、獅子の下半身がついており、更に羽もついている幻獣である。

「さすが魔法衛士隊のグリフォンは強そうですね」

ギーシュはそのグリフォンの姿を見てそう言った。

「ありがとう。そう言えば、まだこちらの二人を紹介してもらってなかったね。ルイズ」

「は、はい。ギーシュ・ド・グラモンと使い魔のサイトです」

「ギーシュ・ド・グラモンと申します。お見知りおきを」

「……どうも」

ギーシュは貴族らしく優雅に一礼をし、才人は無愛想に一言だけそう言った。才人の仕草がルイズは気に入らなかったが、ワルドの前でそれを咎めることはしなかった。普段ならば、アンリエッタの前でさえ才人の態度を咎めた彼女なのだが、どういうわけかこの時は才人の態度を不躰だとは思ったが、それが普段ほど彼女の気に触るようなことはなかった。

「使い魔？ 彼は人間のように見えるが？」

「人間です。ワルド様」

「ほう……少々変わった使い魔だね。ルイズ」

「はい」

ワルドはアンリエッタほどの興味を示さず、ただそれだけで才人の話題は終わった。

「では、使者のルイズと護衛の僕はグリフォンで行こう。君たちは馬で追いかけてきたまえ」

「「え？」」

疑問符を浮かべている二人をよそに、ワルドはルイズをグリフォンに乗せて空高く上がっていった。二人は慌ててギーシュが騎手を

務め、その後ろに才人がくつつく形で馬に乗って追いかけていった。

当然のことながら、障害物の無い空と障害物だらけの地上だと進む速度は随分違う。グリフォンも速度を落として飛んでくれているため、その姿を見失うということは無かったが、それでも疲労度においても空の上を進んでいる二人と、地上を進んでいる二人とはかなり違いが生じていた。

「グ、グリフォン隊の連中は化け物揃いか……」

ずっと馬を操っているギーシュは信じられないといわんばかりの表情で空を見ていた。既に馬を操ることで手一杯の彼に、空と地上での疲労度の違いなど気づくこともできず、ただずっと自分たちより早く飛んでいるグリフォンやワルドを凄いと感心していた。

「し、しかし、君も大変だな。ワルド子爵なんて大物と主人が婚約者同士とは……」

「……関係ねえよ」

サイトも後ろでずっとしがみついているかなり疲れを感じていたが、その言葉にはぶっきらぼうにそう答えた。ギーシュはその様子に少し驚きを感じていたが、それを口にするほど野暮ではなかったし、何よりそんな余裕もなくなってきた。

その頃、空の上ではワルドとルイズが会話をしていた。

「でも、ワルド様がお越しになるなんて夢にも思いませんでしたわ」

「僕もだよ。アンリエッタ姫からウェールズ殿下救出の命令を下さ

れたと聞いたときは驚いたし、僕にルイズの護衛を命じられるなんて夢にも思わなかったよ。でも、愛する婚約者のためならばと喜んでお受けしたんだよ」

「そんな、愛するだなんて……」

ルイズはまた頬を朱に染めた。

ワルドはルイズとはかなり歳が離れてはいるが、魔法衛士隊の隊長としては充分若かったし、見た目もかなりいい男である。それだけの男に好かれれば女性としては嬉しいものであり、ルイズもそこは普通の女性と変わらなかつた。

ただ、幼い頃から彼を知っているが、幼い頃と今では彼女もものに対する考え方が違っていた。幼い頃は憧れの対象として彼を見ていたのだが、それは恋愛感情とは程遠いものであった。今は物事に対する考え方も確立されてきており、現実を見ることもできるようになった。それでも彼は現実的に理想的な相手だとは思っただが、どういうわけかあまりそういう気にはなれなかつた。何か心の中でもやを発しており、褒められたりすれば嬉しくは思うがそれ以上のことを感じることはなかつた。

「ところでルイズ、僕たちのことだけど……」

「えっ？」

「この任務が終わったら正式に一緒にならないか？」

「え……」

ワールドからの突然の求婚にルイズは驚きを隠せなかった。本当ならば嬉しいはずなのに、どうしてかそれを素直に承諾できなかった。

「ワールド様、そこまで言うていただけるのは嬉しいのですが、今は任務に集中したいのです。その話はまた改めて……」

「そうだね。でも、考えておいてくれ」

「……はい」

そう答えて俯いた時、下で才人たちが何者かに襲われているのが見えた。

「ワールド様！ サイトたちが襲われています！」

「何！？」

地上ではサイトたちが突然現れた謎の団に襲われていた。二人とも馬から下りてそれぞれが応戦していた。

「何なんだ、こいつらは！」

サイトはデルフで次々と敵をなぎ倒していった。

「相棒！ やるじゃねえか！」

久しぶりの実戦でデルフも昂ぶっているのか、かなり楽しそうな声でそう言った。

「行け！ ワルキューレ！」

ギーシュも自身が作り出したゴーレムを使って襲いくる連中を倒していった。その様子を空で見ていたワルドは感心したように呟いた。

「なかなかやるなあ。彼ら」

「ワルド様、私たちも加勢しないと！」

ルイズがワルドにそう言ったが、彼は首を横に振った。

「いいかい、ルイズ。僕たちは今極秘任務の最中だ。そんな時に使者である君に何かあってはいけない。可哀想かもしれないが、あいつらは彼らに何とかしてもらい、僕たちは先を急ぐべきだ」

「そんな！」

「僕たちの任務はこのハルケギニアを左右する大事な問題だ。優先すべきはウェールズ殿下だよ。彼らには可哀想だが、この程度のことを自分で何とかできないようならばこの先ついてきても足手まといだ」

「でも……！」

ワルドの言葉は確かに正論である。だが、ルイズにはまだそこまでの冷酷さを持ち合わせてはいなかった。助けられるのなら助けたい、その気持ちのほうが強くなってしまふのは良心からのことゆえ、それを責められる者もまたいなかった。

「ファイアー・ボール！」

すると、ルイズたちの後方からファイアー・ボールが放たれ、才人たちに襲い掛かっていた一団の一人に命中した。

「はぁ〜い、ダーリン」

聞きなれた猫なで声、戦闘中にも拘らず緊張感の無い声が救いの声に聞こえた。

「キュルケ！」

そこにはシルフィードの背中に乗って、杖を掲げているキュルケがいた。

「面白そうなことしてるじゃない、ダーリン。私も参加させてもらうわよ」

キュルケはそう宣言すると、空から何発もファイアー・ボールを降らせた。突然の乱入者に襲い掛かってきていた連中も驚きを隠せず、また不幸にもメイジがいなかったため、彼らにはキュルケの魔法に対抗する手段が無く、ただ当たらないようにかわすしかなかった。そうして統率が乱れたところを才人とギーシュは狙い打って確実に敵は倒れていった。

「これで……ラスト！」

才人は最後の一人を倒して戦闘を終わらせた。戦闘が終わったのを確認すると、キュルケのシルフィードとワルドのグリフォンは地上に降りてきた。

「あんだ、どうしてここにいるのよ？」

ルイズは地上に降りるなり、キュルケの所に行ってそれを聞いた
だした。

「あーら、サイトが朝早く何処かに行くのが見えたから追いかけて
きただけよ」

「どうしてシルフィードに乗っているのよ？ シルフィードはシャ
ルロット様の使い魔でしょ」

「ちゃんとシャルロット様に許可をいただいて借りてきたのよ。本
当はシャルロット様も誘ったんだけど、ヴァルデス様を待たなけれ
ばならないからって私一人で来たの」

「こっちは忙しいのよ！ さっさと帰りなさいよ！」

「あら、そんなに忙しいってどういう用事なのかしら？」

「そ、それは……」

「それは？」

すっかりキュルケにしてやられている姿を見て、ワールドが助け舟
を出した。

「失礼、お嬢さん。僕たちは今ちよつとした任務の最中で内容は明
かせないのだよ」

「あら？ 素敵な殿方ね。私と一緒に遊んでみない？」

「申し訳ないが婚約者の目の前なのでね。遠慮させてもらおうよ」

「あら、残念ね」

少しワルドに興味があつたキュルケだが、あっさりと断られてしまったため、少しだけ燃え上がっていた微熱はすぐに沈静化してしまつた。すっかりワルドに興味をなくして、再び才人にくつついていた。

「せっかくだから私も一緒に行くわ」

「ちよつと、遊びじゃないのよ!」

「でも、才人たちの乗ってきた馬はさっきの騒ぎで逃げちゃつたわよ。シルフィードだって私が正式にシャルロット様からお借りしてきたのよ。私がいなければシルフィードに乗ることもできないのよ。何処まで行くかは知らないけど、急ぐんだつたらその方がいいんじゃないかしら?」

「……ルイズ、彼女の言うとおりだ。ここは何よりも急いだ方がいい」

「ワルド子爵」

すると、今までここを離れていたギーシュが戻ってきた。

「あいつらはただの野盗のようです」

「そうか。では、先を急ごう」

ワルドがそう締めくくり、一行はキュルケとシルフィードを加えて、港町ラ・ロシエールに向かって飛んでいった。

決闘が結んだ友情（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

決闘が結んだ友情

「へえ、ここがラ・ロシエールか」

才人は初めて訪れた町に少し感動していた。魔法学院やトリスタニアのようなレンガ造りの家ではなく、全て同じ岩を切り出して作られたという家々に少し感動のようなものを感じていた。

「この町は土のスクウェアメイジたちが全て同じ岩から作り出したものなんだよ。この町は正に、土系統メイジが作り上げた芸術品と言っても過言ではないだろうね」

ギーシュは我がごとのように誇らしげにそう言った。同じ土系統のメイジということを感じ入るものでもあったのだらう、町を見る目がサイトとはまた違っていたが、感動しているという点では非常に似通っていた。

「なるほどな」

「日も暮れてきた。とりあえず今日はここで休むことにしよう」

ワルドはグリフォンを、キュルケはシルフィードを町の入り口に預けて戻ってきた。

「さすがに今日は疲れたな」

「そうだね。よりもよって野盗に襲われるなんてついてなかったね」

才人とギーシュはそう言ってため息をついた。一行はラ・ロシエールでそれなり的高级ホテルに泊まった。着くなりすぐに食事をすることになったが、ワルドは船着場にアルビオンへの定期便を確認しに行っていた。

「それにしても、こんな岩だらけのところには海なんてあるのか？」

才人はここに着いたときから抱いていた疑問を何となく口にした。

「何を言っているんだい？　ここに海なんてあるはずないじゃないか」

「じゃあ、どうやって船を持って来るんだよ」

「風石を使うんだよ」

「風石？」

「風石は風の力を集めた結晶よ。その結晶に込められた風の力で物を浮かべることができるのよ。大きい風石なら船だつて浮かべるところまでできるわ」

ギーシュの言葉にルイズが足りない分を補った。才人は改めて、この世界にあるものは自分の世界にあるものと似ているようで違うんだということを感じていた。

「へえ。そんなものがあるんだ」

「君の国には無かったのかい？」

「ああ。俺の国にはそんなものは無かった」

「じゃあ、どうやって空を飛ぶんだい？」

「飛行機つてもものがある。それは風石なんて物を使わなくても飛ぶことができる。もっとも、かなり多くの人手がいるけどな」

「風石なしで空を飛ぶか……東方には凄い技術があるんだね」

ギーシュは感心していたようだが、女性陣はあまりその話には興味が無かったようだ。ルイズもすぐに会話から離れていった。

そもそも、仲が悪いルイズとキュルケが同席しているだけに雰囲気は険悪なものだった。ある意味、才人とギーシュはそれに関わらないようにしたくて会話を続けていた。

「まあな。じゃあ、ここの船は飛ぶのか？」

「ああ。風石の力を利用して船を飛ばしてアルビオンへ向かうのさ」

「ふーん」

すると、ワルドが戻ってきた。

「ワルド様」

「出発は明後日になりそうだ」

「そんな！ 急いでアルビオンに向かわなければならぬのに！」

「仕方ないさ。アルビオンがこのラ・ロシエールに一番近づくの
明後日だからね」

ルイズはやり場の無い焦りを感じていたが、こればかりはどうし
ようもないとワルドに宥められて落ち着きを取り戻していた。

「風石っていうのがあるのに、近づくのを待たないといけないので
すか？」

才人は当然の疑問をワルドに投げかけた。

「君は風石のことをよく知らないようだね。風石が持っている魔力
には限りがある。効率よく飛ぶためには一番近くまで接近した方が
いいんだ」

「へえ」

「風のメイジなら魔力を込めて持続時間をあげることできるけど、
船ほどの物になると人間の魔力じゃたいした足しにはならないしね」

「なるほど」

才人は一応反応を見せているが、どうしてもヴァルデスのような
敬意を持つことはできなかった。どういうわけか、このワルドとい
う男が才人は気に入らず、態度もそっけないことが多かった。

「とりあえず焦ってもしょうがない。今日と明日はゆっくりと体を
休めて明後日に備えよう」

「わかりました」

「はい」

一同はとりあえずワルドの意見に賛同することにした。それ以外に選択肢もなかったとも言えるが。

「部屋はサイト君とギーシュ君、キュルケ嬢、そして僕とルイズでいいね」

『え？』

「ワルド様とルイズが、ですか？」

才人は全員が疑問に思ったことを代表して訊ねた。

「そつだ」

「年頃の男と女が一緒というのはまずいのでは？」

「僕とルイズは婚約を交わしている。何か問題があるのかな？」

「でも、まだ正式な結婚がまだだと言うのにそれは……」

「君たちの身近な例えで言うと、ゲルマニアのヴァルデス殿下は既に婚約者と共に寝所を共にしている。それと同じではないのかな？」

あまりにも上手いワルドの例えに誰一人として言い返すことができなくなっていた。ワルドはそんな回りの様子を見て、小さくため息をつきながらこう言葉を続けた。

「君たちが心配しているようなことはしないから安心したまえ。僕だって任務の最中にそんなことをするほど愚かではない」

その言葉を聞いて一番ほっとしたのは同じ部屋に泊まることになったルイズだった。一人部屋になったキュルケは面白くないと一言呟いていたが、周りは安堵の気持ちが強かったので誰も聞いていなかった。

「しかし、いよいよアルビオンもおしまいだな」

すると、傭兵と思われる連中の話が聞こえてきた。

「そうだな。偉大なる始祖の血統も、そろそろおしまいってことじゃないのか？」

「アルビオンはモード大公を無理やり粛清した。その辺りから本格的に崩れだしたな」

「モード大公についていた貴族まで粛清したから、他の関係ない貴族までアルビオン王家から離れて反乱。全く愚かとしか言いようがないな」

傭兵たちの会話を聞いていて、ルイズは怒り心頭に発していたが、その間も傭兵たちの会話は続いていた。

「始祖の威光も通じない時代が来たってわけか」

「おいおい。ロマリアに聞かれたら異端扱いされるぞ」

「そのロマリアだってもう危ないって話だぜ。ゲルマニアとガリア

の同盟が結ばれたら、さすがのロマリアもただじゃすまないだろう。ガリアとゲルマニアが手を結んだら、ロマリアとトリステインは西と東に分断されてしまうから孤立してしまうんだぜ」

「これからはガリアとゲルマニアの時代か」

「いや、どっちかって言うとゲルマニアの時代じゃないか。あそこは優秀だったら平民でも登用してくれるって話だし、ガリアの姫君二人が嫁入りって形になるんだからな」

これがゲルマニアのヴァルデスがガリアに婿入りするという話ならば、ガリアのほうが上に立つのだろうが、ガリアからゲルマニアに嫁入りするという話になっているので、将来的にはゲルマニアがガリアの上に立つだろうというのがほとんどの見解だった。

「面白くないわ。先に部屋に戻る」

ルイズはそう言って先に部屋へと上がっていった。キュルケはくすくすと笑いを浮かべており、才人はルイズが不機嫌になった理由に思い当たっていたので大きくため息をついた。

「あの子もいい加減に現実を見ればいいのに。せつかく、お姉さんがヴァルデス殿下の側室に入れたっていうのに」

「トリステイン貴族としては頭が痛いところだね」

キュルケの言葉にワルドはそう返した。既にトリステインは大国ではなく、ガリアやゲルマニアの前では小国扱いとなってしまうている。トリステイン国内でもゲルマニアやガリアに移り住む平民が増えつつあるような状況だった。

「アルビオンが倒れそうな今、きつと親愛なる皇帝閣下とガリアのジョゼフ陛下が玉座で高笑いをしていると思いますわ」

「それはどうか？ レコン・キスタなる組織がどれほどの力を持っているかわからないからね」

「あら、随分と彼らに肩入れするんですね？ ワルド子爵」

キュルケはまるでレコン・キスタを擁護するかのようなワルドの態度に少し驚き、その真意を確かめようと訊ねてみた。

「モード大公を強引に肅清するというアルビオン王家側のミスはあったが、それでも本来ならば王家が崩れるほどのことでもなかったはずだ。それを機を逃さずに王国崩壊にまで導いた彼らの手腕を侮ることはできない。恐らく、彼らの次の標的はトリスティンになるだろうから、敵となる相手を見くびるような真似はしない」

ワルドはきつぱりとそう言った。あまりにも潔いその言葉にその場にいる全員が逆に寒気を覚えたほどだった。少なくとも、心強いなどというような感情ではなくどこか怖いものを感じるというのが正しい表現だった。

「では、僕も部屋に戻るよ。ルイズを一人にしておくわけにもいかないからね」

ワルドは最後に笑顔でそう言うと部屋へと戻っていった。

「やれやれ。どうにも妙なことになりそうだね」

ワールドがいなくなった後、ギーシュはため息混じりにそう言った。

「ねえ、本当にダーリンたちがやっていることって何なの？」

「ごめん。助けてもらっておいて何だけど、それを言うわけにはいかないんだ」

「そう……まあいいわ。その代わりに、今度私に付き合ってよね、ダーリン」

「あ、ああ」

(やれやれ、いつもの悪い癖も今回はやけに長いな)

ギーシュはそのやり取りを見て密かにそう思っていた。一年生のときからヴァルデスと共に付き合いの長い友人になるのだが、この癖だけはギーシュも未だに慣れることができなかった。トリステインの貴族としての教育のせいか、女性は純潔を良しとする考えがここでの当たり前とされているため、とつかえひつかえする女性に関しては飲み屋などで少し遊ぶだけならともかく、恋愛対象としては対象外とされている。

「ところで、シャルロット様からよくシルフィードを借りられたね」

ギーシュは自分が参加する話題が出てこなかったため、自分から話題を切り出すことにした。話題など別に何でもよかったのだが、とりあえずは一番タイムリーな話題を選択した。このあたりの機転の良さは、日頃の女子との会話で培われてきたものであることを彼はわかっていなかった。良くも悪くも、ギーシュの手の早さは彼にとってちゃんと血となり肉となる何かを与えていた。

「ええ。本当はシャルロット様も誘ったんだけど、ヴァルデス様がお戻りになるのを待つということだから私一人で来たの」

「ああ、それはさつき聞いたけど、でも使い魔って主人と一心同体なんだろう？ いいのか、フレイムを置いてきて」

フレイムとはキュルケが召喚した火蜥蜴サラマンダーのことである。火竜山脈系の種類らしいが、それ以外のことはよくわかっていない。あとは他の火蜥蜴よりも炎が強いというのが特徴だった。

「大丈夫。あの子のお世話はちゃんとお願ひしてきたから。それに使い魔だって常に主人にぴったりとくつついているわけではないわ。必要な時だけ呼んで、後は使い魔の自由にさせるって言うのも、使い魔にストレスを与えないためには有効な手段なんだから。逆に、ダーリンがよくあのルイズとずっと一緒にいられると思うわ」

「僕もそれは思うね」

普段、ルイズからあまりいい扱いを受けていない、時には犬とまで呼ばれるような生活によく耐えていられるとキュルケとギーシユは常々思っていた。あのヴェストリの広場での決闘以降、ギーシユが才人とこれだけ長く一緒にいるのは初めてのことだったが、それでも普段才人がどのような扱いを受けてきたかは遠目ながら見ていた。自分でさえ、平民のことを一度たりとも犬などと呼んだことはないのに、才人に対して平然と犬と言つてのけるルイズに少し恐怖を感じるようになっていた。

少なくとも、才人の立場を考えれば領内にいる平民たちの方が人間らしいという意味ではまともなのではないかと思えていた。生活

レベルが落ちるのは避けられないだろうが、それでもあそこまで酷い扱いを受けるよりはましだと二人は考えていた。

「少し、ルイズに待遇の改善を要求したらどうだい？ この間の決闘のお詫びと言っては何だが、僕も口添えしてあげようか？」

「あら？ だったら、私もそうするわ」

「君の場合は逆効果ではないかい？」

ヴァリエール公爵家と不倶戴天の敵同士であるツエルプストー家の要求を、ルイズが素直に聞き入れるとは思えなかった。それよりは、同じトリスティン貴族で、公爵家ほどではないがそれなりに身分のあるグラモン家の人間の口添えという形の方が話を進めやすいとギーシュは考えていた。

「ありがとう。でも大丈夫だ」

「どうして？ せつかくギーシュが口添えしてくれるっていうのに」「ルイズがそれを素直に受け入れるとも思えないし、それをやったらルイズの立場って物がなくなるだろ？ それであいつに嫌な思いをさせたくないんだ」

才人の言葉を聞いてギーシュは少し考えてこう言った。

「わかった。サイトがそうしたいと言っのならそうしよう。ただ、困ったことがあったら力になるつもりだ。遠慮なく言ってくれたまえ」

「あら？ ギーシュ、随分サイトに気を入れるじゃない」

「理由は何であれ、決闘した仲だからね。下手に付き合いの長い友人よりも深いものだと思っっているよ」

ギーシュのその言葉を聞いて、キュルケも以前は馬鹿な男の理屈と思うのだが、自分とシャルロットもあの決闘の後で仲良くなった経緯があったので何となくそれがわかるような気がしていた。

「まあ、その時は頼むことにするよ」

「うむ。遠慮なく相談したまえ」

「ダーリン、私にも相談してね」

「ああ。じゃあ、俺も慣れない馬に乗って疲れたからもう休むわ」

才人はそう言って部屋へと上がっていった。

「さすがの君も今回は苦勞しそうだね」

才人がいなくなった後、ギーシュはキュルケにそう言った。

「あら、簡単に手に入るものなんてつまらないわ。むしろ、これぐらいのほうが手に入れるまでと手に入れた時に燃え上がるのよ」

キュルケは不敵な笑みを浮かべながらそう言った。ギーシュはこんな自信に満ち溢れているキュルケの姿は決して嫌いではなかった。ただ、やはり恋愛対象の女性ではなく、友情という絆で結ばれている男と女という形になり、友情だからこそ長い付き合いができると

思っていた。

この先、ギーシュがキュルケを愛することなどないだろうが、それでも彼女とは長い付き合いをしていたと思った。少なくとも、自分では決して見ることでできないさまざまなものを見せてくれる、そんな予感がしていた。

「さあ、どうせ明後日までは出発できないんだから今夜はとことん付き合ってもらおうよ」

「ふっ。レディのお誘いとあっては断るわけにはいかないな。喜んで付き合おうよ」

こうして、二人だけの酒宴は明け方まで続き、次に目を覚ました時に酷い二日酔いに悩まされることになった。

決闘が結んだ友情（後書き）

活動報告にも書きましたが、明日も更新します。

これからもよろしくお願いいたします。

主人と使い魔（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

主人と使い魔

「決闘？」

翌朝、キュルケとギーシュが深い眠りについている頃、朝食の席でその話題が出た。話題はワルドから切り出され、才人へと提案されたものだった。

「そうだ。昨日の君の野盗との戦いはなかなか見事だった。是非、一手交えてみたくなつた」

「ワルド様、こんな時に決闘なんて……」

「こんな時だからこそだよ。これから何が起こるかわからない。だから、彼の力を知っておきたいんだよ。どうだい？ 受けるかい？」

「……わかりました」

「ちよつとサイト！」

「いいじゃねえか。この人の言うとおりだし」

才人もワルドの提案に乗ったので、ルイズは頭を抱えた。

「では、朝食後でいいかな？」

「ええ」

「では決まりだ」

二人の間でさっさと決闘が決まってしまったので、最早ルイズでも止めることは出来なかった。正式な決闘ではないとは言え、爵位を持つワルドからの提案なので爵位のない公爵令嬢のルイズでは持っている権力が違った。それゆえ、決まってしまったことをどうこうすることは出来なかった。

朝食を済ませると、二人はワルドの案内で決闘場に足を運んでいった。

「かつてはここで貴族がよく決闘したものだよ。もっとも理由は女の取り合いなど他愛もないことが多かったが、それでも決闘は貴族にとって名誉を賭けた大事なものだっただけ」

ワルドは朗々と講釈していたが、才人は興味がなかったため、全然聞いていなかった。ただ二人の間に流れる雰囲気は非常に険悪なものになっているのだけは確かであり、ルイズはそれを感じて不安になっていた。

「準備が出来たら教えてくれ」

ワルドは余裕の態度で才人にそう言った。

「相棒、気合入れろよ」

「ああ」

デルフの言葉に才人は短い言葉で返事を返した。ただ、普段のよくな明るい雰囲気ではなく、酷く張り詰めたような感じであるのをデルフもわかっていた。

「いいですよ」

「ああ。では、始めようか」

二人はそれぞれの武器を抜いて対峙した。ルイズは固唾を呑んでそれを見守っていた。

緊張感だけがどんどん高まっていき、どっちが先に手を出すか、互いに攻撃を仕掛けるタイミングを狙っていた。言うまでもなく、この勝負に有利なのはワルドである。ワルドの武器はレイピア型の杖なのだから、武器の射程範囲外でも魔法による攻撃が出来る。それだけでも勝負は大きくワルドに傾くのだが、更にスクウエアメイジであるワルドは術のレパートリーも多い。才人がどう思っているかはわからなかったが、誰の目から見ても才人に勝ち目はなかった。

「相棒、かなり強いぜ」

「わかってる！」

才人はそう言って一気に前へ踏み出した。先手を取る、とりあえずそれを考えていた。だが、逆を言えば才人にはそれしか出来なかった。

魔法が使えない才人は如何に相手より早く動いて隙を突く、これしか取れる戦術はなかった。

ガンダールヴの力で並みの剣士より早く動いている。並みの相手ならそれだけでも十分圧倒できるのだが、相手が経験をつんだ戦士が相手ではそれだけでは勝てない。最初こそ、才人の動きの早さにワ

ルドも驚いていたが、徐々に慣れてきて余裕を見せ始めていた。

「くそっ！」

才人もワルドが余裕を見せていることはわかっていた。どんな攻撃を繰り出しても受けられるどころか、余裕を持ってかわされる。才人の心の中を徐々に焦りという感情が侵食していった。

(どうして当たらねえんだ!?)

才人はガンダールヴの力で強くなった気でいたが、結局は剣の扱いをろくに知らない素人のままだった。実戦を積んで少しは剣の使い方を体で覚えていたが、受けてきた訓練の質やこれまでの経験の数でもワルドのほうが大きく勝っているのだ。才人に勝てる道理はない、あるとしたら千に一つ、いや万に一つあるかないかの偶然だけだった。

「ふむ。少しは出来るようだが、これが限度のようだな。では、そろそろ終わりにしよう」

ワルドはそう言うと、才人の一撃をかわしつつ杖を才人に向けた。

「エア・ハンマー」

ワルドが唱えたその術で、才人は思いっきり吹き飛ばされ積んであった木箱に激突し、デルフも手放してしまった。それと同時に才人は自らの意識も手放してしまい、慌ててルイズが駆け寄り、その頭を膝の上に乗せた。

「ワルド様！　いくらなんでもやりすぎです！」

「ははは。確かにちよつと大人気なかつたな」

ルイズが憤慨しているのに対し、ワルドは笑みを浮かべながらそれを受け流していた。

「うっ……」

「サイト！」

才人が短く呻き声を上げて目を覚ました。

「気分はどうだい？ 使い魔君」

ワルドの言葉を聞いて、才人は頭を軽く振って意識をよりはつきりさせようとした。

「……負けたのか」

「ええ」

才人の問いかけのような言葉にルイズは優しい言葉でそう言った。才人は起き上がり、吹き飛ばされて転がっていたデルフを拾い上げその鞆にしまった。

「これでわかつただろ」

その背中にワルドが言葉を投げかけた。

「君ではルイズを守れない」

「……っ！」

「悪いことは言わない。ここで引き返すか、ここで僕らの帰りを待ちたまえ」

「ワルド様！」

ワルドはそれだけ言ってその場を後にした。才人はワルドに言葉を掛けられた状態のままその場から動かない、いや動けなかった。体が自然と震え、これまでの生涯で一番の悔しさを感じていた。

「サイト……仕方ないわよ」

「仕方ない？」

「ワルド様は魔法衛士隊で今までにいくつもの戦いを経験してきたわ。それに貴方は平民、ワルド様はメイジよ。負けるのは恥じゃないわ」

「……そうか」

才人はそれだけ言ってその場を後にした。ルイズは何だか寂しそうな才人の背中をただ見送ることしか出来なかった。

「で、サイトは落ち込んでいるわけか」

その日の夜、晚餐に才人の姿はなかった。ワルドも早々に食事を切り上げており、この場にはいなかった。

「かわいそうなダーリン。慰めてあげなきゃ」

キュルケの言葉にもルイズは反応しなかった。明らかにルイズも落ち込んでいる、とこの場にいる誰でもそれがわかった。

「しかし、こう言うては何だがサイトの腕は決して悪くないと思うよ。この僕を倒したんだからね」

「ギーシュを倒したぐらいじゃ自慢にもならないでしょ」

ギーシュの言葉にキュルケが冷ややかな言葉を浴びせた。

「キュ、キュルケ。ちょっと酷いんじゃないかい？」

「あら？　ギーシュはそう言えるほど強いのかしら？」

「うっ……！　ま、まあ、それはともかく、あの野盗たちだってサイトの前ではほとんど手が出せなかったんだ。決してサイトが弱いというわけではないと思うな、僕は」

「そうね……フーケのゴーレムにだって真正面から対抗できていたんだから弱いつて事はないわね。ワルド様が言うほどダーリンが足

手まといになるってことはないと思うわ」

「でも……」

すると、ルイズは小さな声で言葉を続けた。

「アルビオンは危険な所よ。ワルド様の言つとおり、ここで待つと言つのも……」

「君は自分が何を言っているのかわかっているのかい？」

ルイズの言葉に、ギーシュはこれまでに見せたことのない鋭い視線で彼女を見た。それは一年生の頃から彼と付き合いのあるキュルケでさえ、一度も見ただことのないものだった。

「今回の任務を受けた時、君はサイトが止めるのを制して引き受けた。だが、止めようとした彼は君についてここまで来た。そんな彼に君はここで帰れ、などと残酷なことを言つつもりかい？」

「それは……」

「僕は決闘を通じて彼を一人の人間として認めている。仮に、君が彼を人間ではなく使い魔として認めているにしても、あれだけ主人についてきてくれる使い魔を見捨てるつもりかい？」

ギーシュの言葉には何一つ間違いはなかった。いつもの軽い口調ではなく、真剣な言葉と真剣な眼差しが彼の言葉を重いものにした。いた。

(普段もこういう風にしていれば、私だって少しはなびくのに)

キュルケはその表情を見ながらそんなことを思っていた。少なくとも、彼の表情や言葉を見たら自分の言うことは何もなくなったと傍観に徹していた。

「決めるのは君だし、部外者の僕にはこれ以上言う資格はない。後は君が決めるんだ」

ギーシュはそう言って席を立った。

「私も疲れたわ。失礼」

キュルケもそう言って席を離れていった。後にはルイズが一人寂しく残された。

「私だつて……」

ルイズの小さな呟きは誰にも聞かれず、ただ喧騒の中へ消えていった。

そんな話が行われている頃、才人は一人バルコニーで佇んでいた。

「相棒。何を考えているんだ？」

デルフはただ景色をずっと眺めている才人を見ていられず、とりあえず声をかけてみた。

「なあ、デルフ？」

「何だ？」

「俺って弱いのかな？」

「さあな？ 少なくとも、あのワルドって奴よりは弱いな」

「あいつより……弱いか」

「決着は魔法でついたって形になったが、剣でやりあったとしても今の相棒の上を行くと思うぜ」

「そっか……」

「ま、今は人間が至る所にうじゃうじゃいる。その数は数え切れねえほどだ。それだけいる中で最強になるって言うのは無理な話ってもんだ」

デルフは才人を慰めるつもりで言ったのだが、逆に才人の気分は更に落ち込んでいった。

「でも、ワルドより弱い。俺じゃルイズは守れねえ……」

「そいつはわからねえぜ。確かに、あの野郎は今の相棒より強いが、もっと訓練を積んだら相棒にだって充分勝ち目はある」

「だけど、これからアルビオンへ行くっていうのに、ルイズを守れないんじゃない……」

才人がそう言って更に落ち込むのを見て、デルフは一つの疑問をぶつけてみた。

「なあ、相棒はどうしてあの嬢ちゃんを守りたいんだ？」

突然ぶつけられた疑問に、才人はしどろもどろになりながら答えようとした。

「え？　だって、ルイズは俺の……」

「俺の……何なんだ？　主人か？」

「いや、その……」

才人は何と云うべきなのかわからなくなった。デルフはそんな才人の様子を見て更に言葉を続けた。

「今、相棒と嬢ちゃんには主人と使い魔って言う主従関係が結ばれている。相棒に刻まれたガンダールヴのルーンにも、使い魔としての強制力が働いている」

「強制力？」

「嬢ちゃんに尽くすようにさせる力ってことだな」

「俺はそんなの関係ないぞ」

「じゃあ、何で嬢ちゃんを守るんだ？」

「何で、って……」

才人は自分が何をしたいのかよくわからなくなっていた。ルイズを守りたいという思いは確かにある。でも、それがガンダールヴのルーンのせいであるか、才人はそれさえもよくわからなくなり、思考の袋小路に迷い込んでしまっていた。

「使い魔として主人に従うのなら迷う必要はない。主人の命令で行くも帰るも決まる。だが、相棒はあの嬢ちゃんを止めようとした。それは間違いない相棒の意思だ。俺の質問に迷うってことは、相棒には使い魔としての強制力が不完全だということになる。本当に効いているのならいちいち悩むことなんてしないからな」

「デルフ……」

「つまり、悩むってことは相棒の意思であの嬢ちゃんを守りたいって思っているってことだ。だから、聞くんだ。どうして、相棒はあの嬢ちゃんを守りたいんだ？」

才人は目を閉じて自分の中にある答えを探していた。デルフも才人が答えを出すまでは何も語らず、ただ答えを探して必死になってもがき苦しんでいる才人の姿を見守った。

やがて、閉じていた目をゆっくり開いて言葉を紡いだ。

「俺は……ルイズのことが好きなんだと思う」

何度も頭の中を引っ掻き回して探し出した答えがそれだった。もっと学があれば他にも言い回し方はあったのかもしれないが、これ

は才人が必死になって見つけ出した答えを言葉にしたものだった。

「惚れちまったのかい？」

「わからねえ。女として好きなのかもしれないし、友達として好きなのかもしれない。ただ……」

「ただ？」

「主人と使い魔、っていう関係だからってことじゃねえことは断言できる……と思う」

答えを言葉にした才人と、疑問をぶつけたデルフとの間に沈黙が流れた。だが、それはデルフによってあっさりと破られた。

「なるほどねえ。ま、相棒がそれで納得できるならそれでいいやね。剣には人間の気持ちなんてものはわからねえしな」

「ああ。ありがとな、デルフ」

「いってことよ」

「サイト……」

すると、バルコニーにルイズが姿を現した。

「ルイズ」

「ワールド様にやられた怪我は大丈夫？」

「あ、ああ。別に怪我という怪我をしたわけじゃねえし」

「そう……」

ルイズはそう言うとサイトの隣に立った。

「綺麗ね」

「そうだな」

二人はラ・ロシエールに広がる光景を見てそう言った。家々から漏れてくる光がとても暖かなものを感じられた。

「ねえ、サイト」

「何だよ？」

「今でも怒ってる？」

「怒る？」

「私がサイトの制止を振り切ってアルビオンへ向かうこと」

「ああ……まあ、行くのは今でも反対だけど怒ってないよ」

「そう……ありがとう」

「はあ？」

今までになく、ルイズが謙虚な態度で才人に謝ってきたので驚き

を隠せなかった。

「何かあったのか？」

「……ワルド様に求婚されたわ」

「はっ！？ 求婚！？」

「ええ」

「こんな時にか！？」

「任務が終わったら、って言ってたわ」

「お前は……それでいいのか？」

才人の問いかけに対し、ルイズはとてでもないが明るい表情にはならなかった。

「……わからないわ」

「だったら、そんな求婚はこと」

「でも」

才人の言葉をルイズが遮った。

「私とワルド様は家同士で決められた婚約者同士。それが少し早くなるだけよ」

「家同士って……」

「貴族の結婚というものはこういうものよ。家が大きければ大きいほど、家同士のつながりで結婚相手が決まることは珍しくないわ」

「けど……」

「ヴァルデス様だって私のちいねさまとは政略結婚という形で結ばれたのよ。私のご先祖様だって政略結婚で結ばれた方は多いわ。私だけそれを拒むことをして、これまで守り続けてきた家名に傷をつけることは出来ないわ」

「お前は……それでいいのか？」

先程と同じ言葉で才人はルイズに問いかけた。すると、今度はルイズも才人に問いかけてきた。

「サイトは……どうしたらいいと思う？」

「……今の俺に、お前の将来について語ることはできねえよ」

「……そう」

ルイズはそう言ってまたラ・ロシエールの光景に目を向けた。時折吹き抜ける風が、ルイズの髪をなびかせた。

「……風が……出てきたわね」

「……そうだな」

才人はそう答えることしかできなかつた。その時、闇の中で何か動くのを見た。

「ルイズ！」

才人は慌ててルイズの手を引いてその場を離れた。その次の瞬間、二人が立っていた場所に巨大な何かが振り下ろされ、バルコニーの一部が壊された。

「なっ！？」

ルイズは突然のことに驚いていたが、才人は既にデルフを抜いて構えていた。

「久しぶりだね！ 坊やたち！」

そこには巨大なゴーレムがいた。そして、その肩には見たことのある人物がいた。

「フーケ！」

そこには自分たちがかつて捕らえ、王城へ向かう途中に逃げたあのフーケがいた。

「どうしてフーケがここに！？」

「悪いけど、ここで足止めさせてもらっつよー！」

フーケはそう言ってゴーレムの腕を再び振り下ろした。才人はルイズの手を引いて、それらの攻撃をかわしていった。

「どうしてお前が!？」

才人がそう言うとフーケは苦々しい表情を見せた。

(こっちだって好きでやっているわけじゃないんだよ！)

そう思ったが、フーケはそれを口に出さずにただ才人たちを見詰めていた。

フーケの回想（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

フーケの回想

話はフーケが脱走した数日後まで遡る。

「で、どうしてこうなったのかを教えてほしいね。皇太子殿下」

トリスタニアの裏通り、チクトンネ街にある小さな宿屋に来ていた。お世辞でも綺麗とは言えず、ただの寝床としかいえない程度の部屋だったが、わけあり者でも泊まることができる宿などこんなものだった。

「どういうことだ？」

「どうして、私がここにいるのかってことだよ。気がついたらこの宿に泊まっていて、目の前にあんたがいた」

「さあな？ とにかく、お前は俺の密偵になって、命令どおりに脱走してきた。それでじゅうぶんだ」

「……わかったよ」

フーケはとりあえずそれ以上の追及をすることはやめた。あんまり下手に追求をすると藪を突くことになりかねない、と考えた。ただでさえ、ヴァルデスに何をされたのかわからないので、これ以上下手なことをして厄介なことをされないと限らないのでおとなしくすることにした。

「さてと、とりあえずは脱走おめでとうと言っておくか」

「心の籠っていない祝いの言葉なんて気持ち悪いだけだね」

「気が強いな。まあ、それぐらいの方が密偵としては使える」

ヴァルデスはそう言って小さく笑った。フーケはそれを見て背中に寒気を感じざるを得なかった。

「さて、まずは名前を覚えてもらおうか」

「土くれのフーケ。今更聞くまでもないだろう」

「俺が聞きたいのは、かつて貴族だったときに名乗っていた名前だ」

「……マチルダ。マチルダ・オブ・サウスゴータだよ」

「サウスゴータか……アルビオン貴族ではそれなりに有力じゃないか」

「昔の話ね」

「なら、今一度昔の名前を使ってもらおうか」

「何？」

ヴァルデスの言葉にマチルダは訝しげに眉をひそめた。

「しばらくアルビオンに行ってきたかい」

「今更、あんな国に行つてどうするんだい？ ほっといたつてアルビオンは崩れる。ゲルマニアには喜ばしいことじゃないか」

「レコン・キスタの動向を探って来い」

「レコン・キスタの？ どうしてだい？」

「連中がああ空飛ぶ土地を手に入れたら、次は恐らくトリステインを狙ってくるだろう。だが、万が一ということもある」

ヴァルデスはそう言って席を立ち上がった。だが、マチルダには疑問が残っていた。

「どうしてそんなに気にするんだい？ レコン・キスタなんてゲルマニアがその気になれば簡単に潰せる。その程度の組織じゃないか」

「確かに。あの程度なら今のゲルマニアにはたいした脅威にはならない」

「じゃあ……」

「最初の任務としては簡単な方がいいだろ？」

ヴァルデスは悪びれもせず、あっさりとそう言った。

「それだけなのかい？ レコン・キスタに何か脅威があるとかそういうのじゃなく……」

「それだけだ。アルビオンなら地理にも明るだろう。最初の任務としては適当だ」

「……わかったよ」

「話はそれだけだ」

ヴァルデスはそう言って部屋のドアノブに手をかけた。

「私が裏切らないとは考えないのかい？」

マチルダはヴァルデスの背中にそう問いかけた。

「裏切りか……その代償はでかいぞ？」

「命で代償を支払えってことかい？」

「そうだ。お前が守ろうとしている者の命で、な」

それを聞いた瞬間、マチルダの表情が強張った。今にも殺気を放ちそうなほど怖い表情をしており、その手はいつでも杖を握れるようにしていた。

「私が守ろうとしている者が誰なのかわかっているのかい？」

「ウエストウッド」

ヴァルデスが呟いたその一言で、マチルダは全てを察した。

（こいつは、もう何もかもを知っている！ モード大公や彼を支持した貴族たちが粛清されたその理由も！）

マチルダは改めてヴァルデスという男の怖さを知った。どうやって調べたかは知らないが、あれから僅か数日の間にそれらを調べ上

げるだけの力を持っていることは疑いようが無かった。それに、あの夜に出会ってから今日に至るまで自分が何をしていたのかさえわからなくなるような何かをされていたのだ。ヴァルデスが持っている手札が全く読めず、言い知れぬ恐怖がマチルダにのしかかっていた。

「では、やり方はお前に任せる。精々頑張るんだな。そのナイフは記念にくれてやる」

ヴァルデスはそう言って部屋を出て行った。部屋には脱走の際に渡されたナイフと、当面の活動資金として彼が置いていった金貨の詰まった袋だけが残された。

マチルダはヴァルデスがいなくなると大きくため息をついて、ようやく心が安堵した。それなりに修羅場をくぐってきたマチルダを持ってしても、ヴァルデスが持っている言い知れぬ威圧感にすっかり吞まれてしまっていたことを、この時になってようやくマチルダ本人が理解できた。

「はあ……厄介な奴についちまったよ、本当に」

マチルダはそう呟いてベッドの上に体を横たえた。あんまりいい素材を使っているわけでないため、やけに固いベッドだったが、寝心地を求めなければ寝られないというものでもなかった。

ベッドからキャビネットに置かれている金貨の詰まっている袋を見た。このまま眠ってしまおうとも考えていたが、さっきまでのやり取りで妙に頭がさえてしまっていたため、とても眠れそうになかった。

マチルダはベッドから起き上がって、その袋を懐にしまって部屋を出て、一階にある食堂兼酒場に向かった。

(酒でも飲まなきゃやってられないよ)

マチルダはカウンターに座って、マスターに強めの酒を注文した。普段はそんなに強い酒を飲まないのだが、こんな日は強い酒でも飲まなければ眠れなさそうだった。

「隣、よろしいかな？」

「生憎と、今は機嫌が悪いんだ。他にも空いている席はあるだろ」

「そう言わず、私の話を聞いてもらえないか？ マチルダ・オブ・サウスゴータ殿」

「何……？」

「ちょうどあそこの席が空いたようだ。ここでは話をしづらいから、あちらでお話をさせていただきたい」

「……わかったよ」

マチルダはグラスを持って、その声をかけてきた男と席を変えた。

話しかけてきた男はメイジらしいということはわかったが、その仮面を顔で隠していたため、相手がどんな顔だかはわからなかった。ただ、身のこなしからそれなりに身分の高い貴族だということはマチルダにも察しがついた。

「それで？ 人の昔の名前を持ち出してまで誘ったんだ。どんな話だい？」

「君はアルビオン王家に家を潰されたサウスゴータ家の生き残りだそうだな」

「だから？」

「アルビオン王家に復讐したくないか？」

アルビオン王家に復讐、その言葉でこの男が何処の組織に属しているかを察するには充分だった。

(同じ日に昔の名前を名乗らされたり、昔の名前で呼ばれたり、本当に嫌な一日だね)

マチルダは心の中でそう思ったが、それと同時にヴァルデスに命じられた仕事を円滑に進めるためのチャンスだとも考えていた。マチルダの考えの中には、ヴァルデスを裏切るといふものはなかった。既に自分が守らなければならぬ者を人質に取られた時点で、彼女に彼を裏切るといふ道は絶たれているのだ。それならば、その恐ろしい力の加護を受けた方が守りたい者たちも安全だと考え、利用されつつもこちらも相手を利用するとスタンスで彼に従うと心に決めていた。

「魅力的な言葉を囁くじゃないか」

「どうだ？ 我々の組織に協力してアルビオン王家に復讐しないか？」

マチルダはその言葉に少しだけ惹かれた。裏切りの選択肢はないものの、自分たちをあっさり切り捨てたアルビオン王家に復讐するというのは、彼女にとっては親の仇討ちにも等しいことなのだ。

「……悪くないね」

「近々、アルビオン王家は間違いなく我々の手で崩れる。君はその歴史的な瞬間に立ち会うことができるのだよ」

仮面の男は口元に笑みを浮かべながらそう言った。しかし、マチルダも表情には浮かべなかつたが心の中では笑みを浮かべていた。

(わざわざ向こうから誘いをかけてくれるとはね……おかげで仕事がやりやすくなったよ)

相手に気取られないように迷っているような仕草を見せ、それから訊ねた。

「ところで、私が仲間に入らないと言ったらどうするつもりなんですか？」

「その時は土くれのフーケとして突き出すだけだ」

「あんただってアルビオン王家を崩壊させようとしている一味だと知れば、親戚であるトリステイン王家が黙っているはずがないじゃないか」

そう言つと仮面の男は小さく笑った。

「何が可笑しいんだい？」

「盗賊の君の言うことを信じてくれると思うのか。そもそも、我々の同士はこのトリステインにもいる。君が何を言ったところで受け入れられることはない」

（なるほどね。このトリステインにもこいつらの仲間がいるってことかい。それも王城の中にまで）

「なるほどね。で、何処の国なんだい？」

「我々は国家ではない。国家を超えた同士によって結成された組織だ」

男の言葉に少し鋭さが混じってきた。それだけ、その組織に対して強い思いを持っているということがはっきりとうかがい知ることが出来た。

「……わかったよ」

「では、我々に協力するということでもいいのだな？」

「それ以外にないじゃないか。それに、アルビオン王家に復讐するってことも面白い」

「決まりだな」

仮面の男はそう言うと、金の詰まった袋をテーブルに置いた。

「とりあえず当面の資金だ。こちらから連絡があるまではこの宿にいる」

「ちょっと待っておくれよ」

「何だ？」

「これから行動を共にするんだ。組織の名前ぐらい教えてくれよ」

「我々は……レコン・キスタだ」

仮面の男はそう言って酒場を出て行った。マチルダはグラスに残っていた酒を一気に煽った。

「面白くなってきたじゃないか」

マチルダは空になったグラスを再び同じ酒で満たした。

「破滅へ向かう王国と躍進する王国、それに新興組織の台頭か。六千年の歴史が大きく変わる瞬間、今宵は面白い夢が見れそうだね」

上機嫌になったマチルダはそう呟くと、再び酒を一気に煽った。

レコン・キスタから指示があったのはそれからさらに数日後のことだった。あの仮面の男がやって来て、彼女の前にこれまでよりも更に多くの金が詰まった袋を置いた。

「何だい？ この金は」

「この金で雇えるだけ傭兵を雇い入れろ」

「いいけど、雇い入れた奴はこのトリスタニアに集めるのかい？
お尋ね者の私は少々動きにくいんだけどね」

「集めるのはここではない。ラ・ロシエールだ」

「ラ・ロシエールね……わかったよ」

「そろそろアルビオン王家崩壊も間近だ。できる限り集める」

「あいよ」

「では、任せたぞ」

仮面の男はそれだけ言うと、彼女の部屋を早々に出て行った。

「さてと……」

マチルダはその金を取ると、すぐに宿を出た。役人の目をかいくぐりながら傭兵を次々と雇い入れ、ラ・ロシエールへと集結させた。彼らは報酬のよさと滞在にかかる費用も出してくれるという好条件に満足していた。

「あっさり負けたかい」

そして今日、仮面の男から初めて具体的な指令を下されて傭兵た

ちがその仕事に向かった。だが、彼女に届けられた見張り役からの報告は残念なものとしか言いようがなかった。

「へい。最初は互角だったんですが、途中から助っ人の女メイジが現れて、空から炎を浴びせられ、崩れたところを剣やゴーレムの攻撃でやられました」

「どんな奴らが相手だったんだい？」

「へい。金髪で気障なメイジと黒髪の剣士、それと赤い髪で褐色の肌をした女メイジでさあ」

見張り役からの報告を聞いて、マチルダの瞼が少しひくついた。

「その一行の中に、蒼い髪の少女や鋭い目つきのいかつい男はいなかったかい？」

「いえ。一緒にいた男たちは鋭いって言うよりは何だか間抜けな感じでしたし、蒼い髪の少女なんていませんでした」

「そうかい……」

「何か心当たりでも？」

「いいや。次の命令があるまで待機と他の連中に伝えておきな」

「へい」

見張り役はそう言ってマチルダの部屋を出て行った。

「黒い髪の剣士……あの坊やたちだろうね。何でこんな所に……」

マチルダは自分たちを捕らえたあの連中とまた出くわすなどは夢にも思わなかった。それと同時に、学生である彼らをどうして狙わなければならないのか、その理由がどうしてもわからなかった。

「入るぞ」

すると、仮面の男がマチルダの部屋に入ってきた。

「何だい？」

「見事に失敗してくれたな」

「質ではなく量を重視しているからね。それに突然の助っ人の乱入もあつたそうじゃないか」

「言い訳はいい。次の命令だ」

「その前に教えてくれないかい」

「何だい？」

「どうして、学生なんて襲わなくちゃならないんだい？」

マチルダは疑問を下手な言い回しを使わずに直接的な言葉で仮面の男に訊ねた。しかし、仮面の男はそれをきつぱりと切り捨てた。

「お前が知る必要はない。とにかく、次はお前にも出てもらうぞ」

「……わかったよ」

「それでいい。では、次の命令は……」

仮面の男はマチルダに命令の内容を告げるとさっさと部屋を出て行った。

「やれやれ、しょうがないね」

マチルダは少し嫌な予感がしていたが、今更ここから逃げ出すこともできなかつた。逃げ出せないのなら、と逆に覚悟を決めることにした。

「死んだとしても恨まないでくれよ。坊やたち」

彼女はそう呟くと、扉の向こうで待っている傭兵たちと共に作戦行動を開始した。

フーケの回想（後書き）

また少し間が空きます。

ヴァルデスももつしばらく登場しませんがよろしくお願いいたします。

逃走劇（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

逃走劇

才人たちとマチルダは互いににらみ合っていた。ゴーレムに乗っているフーケのほうが立場的には有利なのだが、それでも引かないところを見ると、才人にも心の成長が見られた。

「フーケ！ 何であんたがこんな所に！」

ルイズがそう言つと、マチルダ……いや、フーケは不敵な笑みを浮かべながらこう言つた。

「久しぶりだね、お嬢ちゃん。悪いけどあんたたちの邪魔させてもらうよ！」

フーケはそう言つと、再びゴーレムの腕を振り下ろした。才人が手を引く形でその一撃をかわしたが、足場が狭いバルコニーでは才人たちが圧倒的に不利だった。

「ルイズ！ 逃げるぞ！」

「でも、フーケが……！」

「俺たちのやらなきゃならないことはフーケを捕まえることじゃないだろ。とりあえず、ここじゃまずい！」

才人は無理やりルイズの手を引いて宿の中へと逃げていった。フーケはその様子を見て笑みを浮かべ、そのままその場を去っていった。

「な、何だ!？」

宿屋の中も大きな騒ぎになっていた。入り口付近では傭兵と思われる集団が陣取っており、ここから逃がさないといわんばかりにこつちを睨んでいた。

「あ」

「どうしたのよ？」

「あの時、襲い掛かってきた奴らだ」

「うそ!？」

「間違いない。何人か見覚えのある顔がいる」

傭兵たちの中に野盗と名乗って、才人たちに襲い掛かってきた連中の顔もあった。

「じゃあ、あいつらもフーケの仲間ってこと？」

「恐らくな」

「いったい何の騒ぎだい？」

ギーシュたちが騒ぎを聞きつけて才人たちのところにやって来た。

「何？ あのむさい男たちは？」

キュルケは入り口付近に陣取っている傭兵たちを見てそう言った。

「フーケの手先よ」

「フーケだって！」

「あら？ あのおばさん来てるの？」

驚くギーシュに対し、キュルケは何とも緊張感の欠片もなかった。

「ああ。どういつわけか知らないが、俺たちの邪魔をしようとして
いるらしい」

「フーケとは土くれのフーケのことかい？」

すると、ようやくワルドがその場に姿を現した。

「はい。ワルド様」

「うむ……出発は明日の予定だったが、こつなつた以上は仕方ない」

「どうするのですか？」

「二手に分かれよう。僕とルイズは棧橋へ、使い魔君とギーシュ君
とキュルケ嬢はあいつらの足止めを」

「え……？」

ワルドの提案を聞いて、全員の視線がルイズに集まった。

彼の提案は間違っていない。優先すべきことが決まっている以上、

任務成功を考えた場合はワルドの言うような割り振りのほうがいいのは確かなので何一つ間違ってはいい。

だが、ルイズはその提案を素直に受けることはできなかった。心の中の何かがそれを承諾することを拒んでいた。

「どうしたんだ、ルイズ。早く行くぞ」

「ワルド様……」

「早くしないと我々の任務に差し支えてしまう」

「早く行け！」

すると、才人が既にデルフを構えて傭兵たちと向かい合っていた。

「サイト……」

「姫様の役に立ちたいんだろ！ だったら早くしろ！」

「彼の言うとおりだ。ルイズ、行こう」

ワルドはルイズの手を引いたが、ルイズはその場から動こうとしなかった。

「ルイズ、どうしたんだ？」

「ワルド様……ごめんなさい！」

すると、ルイズはサイトの隣に立った。

「馬鹿！ 何をやってるんだよ！」

「うるさいわね！ あんたは黙っていなさい！」

「お前！」

「使い魔を見捨てるメイジはメイジじゃないわ！」

ルイズはそう言つて杖を傭兵たちに向けた。その姿には一切の迷いがなく、凜々しさをも感じさせる何かがあつた。ワルドはそんなルイズを見て少し苦虫を噛み潰したような表情をしたが、すぐに頭を振つて気を持ち直した。

「仕方ない。ではルイズ、使い魔君と共に来たまえ！ ギーシュ君とキュルケ嬢はここで敵の足止めを！」

「了解しました！」

「いいわ！」

ルイズの言葉を聞いた二人もその表情が何処かさっぱりしていた。キュルケにしてみれば、才人を狙っているのであまり好ましくない状況には違いないのだが、それでも何故か少しだけ嬉しさを感じていた。

「サイト！ ここは僕たちに任せて先を急ぎたまえ！」

「ダーリン！ あとでこの埋め合わせはしてもらつたよ！」

「お前ら……すまねえ！ ルイズ、行くぞ！」

「ええ！」

才人たちはそう言ってワルドと共に窓から飛び出して宿屋を出て行った。二人は才人たちが無事に宿屋から出て行けたのを確認すると、満足そうに笑みを浮かべていた。

「どうしたのよ？ この状況で笑うなんて」

「君こそ笑っているではないか」

そう言つと、また互いに笑いあい、改めて目の前にいる敵を見た。

「さて、彼らをどうしようか？」

「ギーシュ、厨房から油鍋を持ってきて頂戴」

「揚げ物に使っている鍋かい？」

「ええ」

「わかった」

ギーシュはそう言つと、杖を振るってワルキューレを出して厨房に向かわせた。キュルケはポケットからコンパクトとルージユを取り出して、形のよい唇に塗っていた。

「こんな時に化粧かい？」

「舞台女優がすっぴんじゃ格好がつかないでしょう」

そんなやり取りをしている間にワルキューレが油の入った鍋を持ってきた。さっきまで火にかけられていただけあって、鍋の中の油はとても熱くなっていた。

「さてと、これをどうするんだい？」

「じゃあ、それを彼らに向けて思いっきりぶちまけちゃって」

「了解」

ギーシュは杖を振ってワルキューレが持ってきた油鍋を、レビテーションで浮かせて傭兵たちに向けて油を放った。

「うわっ!?!」

「危ねえ!」

さすがに火にかけられていた油を被ってしまったえば火傷程度では済まない。彼らは慌ててそこから下がって、油の直撃を回避した。キルケはそんな様子を見た後、杖を向けた。

「ファイアー・ボール!」

キルケは油に向かってファイアー・ボールを放った。油は術で発火して、一気に火の手が上がった。

「俺の店が!」

そんな店主の嘆きが聞こえたが、二人は構うことなく傭兵と向かい合っていた。傭兵たちはいきなり燃え上がった炎ですっかり統率を失っており、逃げようとする者やまだ立ち向かおうとする者と姿勢が統一されていないので、互いが互いを邪魔しあっていた。

「さて、それじゃあ僕もそろそろ行こうか」

ギーシュは作れるだけワルキューレを作り上げて、傭兵に向けて突撃させた。元々、戦いについてはまだ素人の域を出ないギーシュであり、ワルキューレの扱いもまだまだ甘い。だが、それでも統率を失った傭兵たちには充分効力を発揮していた。逃げることに必死になっている傭兵たちは後ろから、立ち向かおうとしている傭兵も周りが邪魔をしているので思うように動けずにワルキューレの一撃の前に次々と倒されていった。

「やるじゃない、ギーシュ」

キュルケも次々と傭兵がワルキューレによって倒されていくのを見て感心の声を上げていた。

「私もそろそろ始めましょうか」

キュルケはワルキューレを援護する形で術を放っていった。これだけの数の敵を相手にするのは初めてであったが、それでも恐怖が来るということはなかった。いや、恐怖はあったのかもしれない。だが、それよりも妙な高揚感が二人を支配していた。

「彼らは上手く行っただろうか？」

「さあ？　そこまで責任は持てないけど、あの様子なら大丈夫じゃ

ない？」

「なら、いいんだけどね」

「それより、そろそろ敵も落ち着いてきたみたいよ」

キュルケの言うとおり、傭兵たちの動揺が落ち着きを見せ始めていた。逃げようとしていた者と戦おうとしている者との間で動揺が起こっていたのだが、ギーシュやキュルケたちが狙いやすかつたのは逃げようとしている傭兵だったので、その数が減ってしまったために戦おうとする意思で統一を見せ始めていたのだ。

「あれだけの数に玉砕覚悟で挑まれたら厄介だね」

「ここらが潮時ってことね」

ギーシュとキュルケの意見が一致すると、二人はすぐに魔法で弾幕を張りつつ、宿屋から脱出していった。あの大混乱の最中、二人が脱出したことに気づいた傭兵はおらず、二人が脱出した後もしばらく二人の姿を探して騒いでいた。

「どうやら、上手く逃げられたようだね」

「あの程度の傭兵にやられるはずはないじゃない」

宿屋から離れ、二人は町の入り口に向かって走っていた。入り口に預けてあるシルフィードに乗って、ルイズたちの後を追いかけるために急いでいた。

「待ちな！」

すると、二人の前に人影があった。二人は足を止めて杖を向けて、その相手を迎え撃った。

「あら、久しぶりじゃない。ミス・ロングビル……いいえ、土くれのフーケ」

「久しぶりだね、お嬢ちゃん」

キュルケの言葉にフーケも冷静な言葉で対処していた。ギーシュも話には聞いていたが、改めてこうしてフーケとして向かい合うとこれまでのイメージというものを一気に拭い去られた。少なくとも学院では物腰も穏やかで笑顔を見せていたロングビルの姿はそこにはなく、明らかに敵意を向けており、身に纏う雰囲気も獲物を狙う獣のような物々しさを纏っていた。

「なるほど。話には聞いていたけど、確かにフーケだね」

「おや？ あんたも一緒だったのかい、坊ちゃん」

フーケは敬意の欠片も見せずにそう言った。普段のギーシュならば、盗賊が貴族に対して口の利き方がなっていないと怒り出すところだが、この非常時にそんなことを口にするほど彼は愚かではなかった。

「ええ」

「で、どうして貴女がここにいいのかしら？ フーケ」

キュルケが鋭い視線をフーケに向けたが、彼女はそれを涼しい顔

で受け流していた。

「こっちにも色々あるのさ。もう少しここにいってもらおうよ」

フーケはそう言うとゴーレムを作りだした。ギーシュもすぐにワルキューレを作り出したが、ドットの彼とトライアングルのフーケでは、同じ土系統のメイジでも実力に大きな開きがあった。キュルケの炎も、あのゴーレムの前ではあまり効果がなかった。ゴーレムを倒すのに一番効果があるのは、直接的な攻撃なのだ。才人のように剣で破壊するという芸当もそうだが、硬度の高いジャベリンなどのような術をぶつけて破壊することである。だが、残念ながら二人のレパトリーにはそんな術はなかった。

「まずいね。僕の術にはあれを破壊するだけの術はないよ」

「私も」

とりあえずワルキューレで攻撃を仕掛けているが、表面に傷をつけるだけでたいした効果はなかった。それに、このラ・ロシエールはそこらじゅうに岩があるため、その傷も周りの岩ですぐに補修されてしまっていた。

「どっしよっか?」

あまりにも効果が得られない攻撃を見て、ギーシュは隣で同じように攻撃を繰り返していたキュルケに訊ねた。

「そうね……とりあえず」

「とりあえず?」

「逃げましょうか」

「それしかないね」

意見が一致すると、ギーシュとキュルケは互いに全速力でその場から逃げ出した。フーケはそのあまりにも潔く、未練を残さぬ逃走ぶりに思わず呆気にとられてしまった。

「あ、待て！」

フーケは立ち直ると、すぐに二人を追いかけた。ただ、ゴーレムだとしてもその図体の大きさからあまり細かい動きができなくなるという特徴があったため、ゴーレムを崩して自分の足で走り出した。

「ちっ！　しくじったね！」

フーケは自分自身を憎憎しげに思いながら、町中をひたすら走り回った。ギーシュとキュルケはフーケの姿を確認しながら、町の入り口に向かって確実に進んでいった。

「やれやれ、さすがにそう簡単に撒けないね」

「でも、私たちの姿は見失ったようね。へましなければ大丈夫よ」

物陰からフーケの姿を見つつ、二人は見られないように注意を払いながら先へ進んだ。フーケはいつまで経っても二人を見つけれないなので、いい加減に痺れを切らしていた。

「しょうがない。ちょっと危険だけどやるしかないね」

フーケはそう呟くと、呪文を唱えてフライで空へと浮かび上がった。

「まずい！」

ギーシュはフーケがフライで空に上がるのを見ていた。いくら路地を駆使して隠れているとは言え、空から見られたら発見されてしまうのは時間の問題だった。

「相手が空を飛んでいるのなら撃ち落としちゃいましょうよ」

「いや。術を放つたらこっちの居場所を教えてしまうようなものだよ。フーケもそれを狙っているんだ」

「でも、どの道このままじゃ見つかってしまうのよ。だったら先手を打つべきよ」

「うむ……」

ギーシュはキュルケの言葉を聞いて悩んだ。確かにこのままではフーケに見つけられてしまうのは時間の問題なのは間違いない。だが、先手を打ったとしてもそれが成功するとは限らない。それにその瞬間、フーケに自分たちの居場所がわかってしまうのだ。

しかし、二人に悩んでいる時間はなかった。ただでさえ、追い詰められているのはこっちなだから相手を倒すか、相手を上手く欺くことしか選択肢はないのだ。ギーシュもそれをわかっているため、腹を括った。

「わかった。でも、外さないでくれよ」

「私を誰だと思っているの？ まかせなさい」

キュルケは杖をフーケに向けてその狙いを定めた。フーケは相変わらず二人の姿を探すために、空に上がっておりあちこちを飛び回っていた。キュルケはフーケにのみ意識を集中させ、術を放つタイミングをうかがっていた。

そして、フーケが二人から見て背を向けた。

「今よ！」

キュルケはフーケに向けてファイアー・ボールを放った。タイミングは完璧、フーケは背を向けたままで迫りくるファイアー・ボールに気づいている様子を見せなかった。

「よし！」

「当たれ！」

二人は術が的中するとほぼ確信していた。

しかし、フーケは盗賊として培ってきた経験があった。その経験はフーケに危険を察知する能力を向上させ、それがフーケを周りから恐れさせた一流の盗賊として身に着けた能力の一つだった。

正に術が当たると思われた刹那、フーケの本能が激しく警鐘を鳴らし、考えるより先に行動していた。それは僅かな動きだった。今

いる場所から少し動く。それだけの動きだったが、それが彼女の命運を大きく分けた。彼女の顔の横をファイアー・ボールが通り過ぎていく。僅かに焦げた髪の毛の臭いが、彼女に自分が助かったということとを認識させていた。

それに驚いたのはギーシュとキュルケだった。どう考えても当たるとしか思えなかった。それなのに、現実には時に想像でさえも及びつかないような結果を出すことがある。これ正にその一例だった。

双方、驚きで時が止まったかのような感覚に陥っていた。それからいち早く立ち直ったのはフーケだった。立ち直ると同時に、二人に対する怒りが一気にこみ上げてきた。

「あのがき共ー！！」

フーケがギーシュたちの姿を見つけたと同時に、ギーシュも我に返った。

「まずい！ 逃げるぞ、キュルケ！」

「え、ええ……」

キュルケはまだ我に返っていないかった。ギーシュの言葉にも、何処か虚ろな感じを残したまま返事をしていた。ギーシュもキュルケの様子に気づいており、無理やりに手を引いて走り出した。

「まずい…まずいぞ！」

ギーシュも既に自分が何を喋っているかをわかっているいなかった。ただそこから逃げる、それだけしか考えられず、それに従って必死

になって逃げていた。

「逃がしはしないよ!」

フーケもギーシュたちの姿をもう確認していたので、二人に向かって一直線に飛んで行こうとしたその時だった。

「待て」

すると、あの仮面の男がフーケの前に現れた。

「何だい? こっちは取り込み中なんだけどね」

「作戦は終了だ。お前も後でアルビオンへ合流しろ」

「あの坊やたちはどうするんだい?」

フーケはそう言って杖で逃げ惑っているギーシュたちを指した。
仮面の男はギーシュに一瞥をくれると、すぐにフーケに向き直った。

「構うな。我々の目的を忘れるな」

「……わかったよ」

仮面の男はそう言う姿を消した。フーケは少し驚いたが、すぐにそれが遍在だと気づいたので驚きはすぐにおさまった。

「運がよかったね。坊やたち」

フーケはそう呟くと、二人から離れていった。ギーシュたちはフ

「フーケが自分たちから離れていくのを見て、心の中に安堵の気持ちだけが広がっていった。それと同時に、二人はその場に腰を抜かして座り込んだ。」

「ど、どうやら、僕たちは見逃してもらえたようだね」

「追い払った、などということは言えなかった。誰の目から見ても、フーケが自分から追うのをやめて二人を見逃したと判断するのは間違いない。当事者である彼らがそれを一番よく理解していた。」

「そうね……」

「君たち、よくあのフーケに前は勝ったね」

「倒したのはダーリンよ。それに私たちが相手をしたのはゴーレムだけで、フーケ本人は……」

「そこまで言いかけてキュルケは口をつぐんだ。ヴァルデスとシャルロットは公式にあの一件には関わっていないということになっている。さっきまでの極限状況から解放されて少し気が緩んでいたのは事実だったが、それでもそれを口にするわけにはいかないと思い直し口をつぐんだのだ。」

「フーケ本人は、何だい？」

「いいえ、何でもないわ。フーケもダーリンが倒したのよ」

「そうか……だとしたら、サイトが弱いはずはないな。あのフーケに勝つだけの腕があるならば、アルビオンでも大丈夫だろう」

ギーシュたちは棧橋の方を見た。宿屋から上がった火の手が夜の闇に光を灯しており、棧橋にもその明かりが届いていた。既に棧橋に才人たちの姿はなかったが、それでも二人は棧橋を見つめていた。

「さて、僕らも行かないとね」

「でも、少し休みましょう。さすがに疲れたわ」

キュルケはまだ腰が抜けて立ち上がれずにいたため、そう言った。ギーシュも既に魔法を連発していたので魔力の方もかなり消費していたため、体にかなりの倦怠感を感じていた。

「そうだね。でも、少し休んでいきたいところだけど宿屋は燃えてしまった」

「そこにあるじゃない」

キュルケが指差す方向には一件の宿屋があった。さっきまで泊まっていた宿屋とは比較にならないほど粗末なもので、どちらかと言うと宿泊目的ではなく休憩目的で作られたのが明らかなものだった。

「いいのかい？ 君があんな粗末な宿で」

「ええ。とにかく行きましょう」

キュルケは気だるい体を奮い立たせて、二人で宿屋に向かって歩き出した。

宿の中は外観に勝るとも劣らないほど粗末であり、お世辞にも綺麗とは言えなかった。フロントにいらつというのに、廊下の向こうか

ら男女の営みの声が聞こえてきていた。

「失礼。泊まりたいんだが」

「……あいよ」

フロントにいたのは愛想の悪い老婆だった。貴族がここに訪れたことに驚いていたようだが、ここがそういう場所なのだから目的はそういうことなのだろうと自己完結していた。

老婆は二人の前に鍵を置いた。

「どうぞお楽しみください」

「き、君、僕たちはそういうつもりではない」

「いいわよ、ギーシュ。今はとにかく眠りたいわ」

「待ちたまえ、キュルケ。今もう一つの部屋を取る」

「生憎と他の部屋は全てご使用中です」

老婆はにやにやと厭らしい笑みを浮かべてギーシュにそう言った。ギーシュはこの老婆を思いつきり殴りたくなかったが、枯れても相手は女性であるため、彼の美学がそれをどうしても許さなかった。

結局、二人は同じ部屋で泊まることになり、その部屋の扉を開けた。

「これが宿か……」

ギーシュは部屋を見て更に落胆した。部屋にあるのはキャビネットとベッドのみ。ベッドはダブルサイズで大きかった。ただ、壁の所々の塗料が剥けており、また床板も一部破れているなどという有様だった。

「どうでもいいわ。とにかく寝るわ」

キュルケはそのままベッドの中に入った。

「あんたも早く寝なさいよ。疲れているでしょ」

「ああ。だが、レディとベッドを共にするわけにはいかないな」

「馬鹿。この状況でそんなことを気にしたってしょうがないでしょ。追いかけてきやいけないんなら、尚更体をしっかりと休めなさい」

「だが……」

すると、キュルケはベッドの上で寝息を立てていた。既に彼女は限界を超えていたため、ベッドで横になったことによりそれが一気に噴出して深い眠りについていた。

「すーすー、と寝息を立てるキュルケの顔は、普段の勝気な女の子ではなく無防備な少女そのものだった。

「やれやれ……今までベッドを共にしてきた男たちでさえ見たこともない素顔なのだろうね。度胸があると言っか、無防備と言っか……」

ギーシュはため息をついたが、普段は絶対に見られないキュルケの姿を見たことは男として嬉しくもあった。少女のようにあどけない表情で寝息を立てる彼女に何かをするなどとは考えも及ばず、ギーシュはそのまま同じベッドに入りすぐに深い眠りについた。

こうして、二人の長い夜はようやく幕を下ろした。

逃走劇（後書き）

フーケの強さを押し出した話になりました。

しかし、密偵なのになりに目立つ。まあ、これもフーケ（マチルダ）クオリティ。

これからも頑張りますのでよろしくお願いいたします。

ウェールズ・テューダー（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ウェールズ・テューダー

「あいつら、大丈夫かな？」

棧橋の階段を駆け上がりながら才人はルイズに訊ねた。

「大丈夫よ……多分」

ルイズもあの二人を信用していないわけではなかったが、相手の数が数なだけに絶対の自信を持って断言はできなかった。だが、今となつてはもう信じることしかできないのもまた事実だった。

「二人とも、急ぎたまえ」

先頭を走るワルドが二人を急かせた。その声を聞いて才人とルイズは速度を上げた。

さすがに魔法衛士隊で日頃鍛えているだけあって、ワルドは全然速度を落とさなかった。才人もそれなりには体力があるほうなのだが、走る速度にむらが生じていたし、ルイズに至っては既に息が上がり始めていた。

才人の場合は速度が上がったり下がったりと、時にはワルドよりも速く走っていたのだが、ワルドは速度をずっと一定に保ったまま走り続けていた。この辺りがしつかり鍛えられている者とそうでない者の差である。体力の無駄な浪費を極力避けつつ、それでいて基礎体力は常人よりもはるかに高い。ギーシュから見ればただエリートの実証というイメージの強い魔法衛士隊であるが、実際はこういう地味な体力づくりもかなり厳しく行っているのだ。魔法はもちろ

んだが、基礎体力なども高く、戦い方も徹底して教え込まれているから魔法衛士隊は強いのだ。

「ん？」

先頭を走るワルドが最初に棧橋を駆け上がった時、その目には船の他にも複数の人間が映っていた。

「お願いだ！ アルビオンに急いで荷を届けなくてはならないんだ！」

「でもなあ……」

「金はある！ 急いで貴族派に荷を届けなくてはいけなくなっただ！」

「そうは言ってもなあ……」

船の前では船長と思わしき男と、恰幅のいい商人が出航を巡って交渉していた。ワルドがその会話に加わろうとした時に、ようやく才人とルイズが階段を全て駆け上がり終え、肩で息をしていた。

「船長。出航するの？」

「え？ ああ、これは貴族様。いえ、出航はできないって今この方にも説明してるんですよ」

「頼む！ 料金は倍額出すから出航してくれ！」

商人はどうしても諦めきれずにまだ船長に食い下がっていた。

「だから、いくら金を積まれても風石はどつにもならないんだよ」

「だったら、僕が何とかしよう」

「え？」

ワルドの突然の提案に船長は目を丸くして驚いた。

「貴族様は風石をお持ちなので？」

もちろん、船を浮かせるほどの風石など大きさもかなりのものになる。それをワルドが持っているとは、船長もどうしても思えなかったのだ。

「いや。だが、僕は風のスクウェアメイジだ。風石の足りない分の魔力は僕が補おう。金も普段より多く出すから出航してくれ」

「そ、そういうことでしたら……わかりました」

「お、お願いします！ 私も乗せてください！」

商人はワルドの正面に行き、その場に膝をついて頼み込んだ。本来ならばこの男を連れて行きたくはないのだが、どうやらこの船は元々この男が契約していたものらしいので無碍に断るわけには行かなかった。貴族派に協力しようとしている商人だと聞いてルイズが少し不機嫌になったのだが、背に腹は変えられないというワルドの説得で渋々了承してその船に乗り込んだ。

急に大金が舞い込んできたので、船長は船員たちをすぐにたたき

起こして出航の準備を整えた。まだ炎の手が上がっているラ・ロシエールの町を、船は一路アルビオンに向かって出航した。

「すげえ。本当に船が浮いてる」

話には聞いていたが、これだけ大きい帆船が実際に空を飛んでいく姿は壮観なものであり、飛行機に乗るよりも空を飛ぶことに感動を覚えさせられるほど衝撃的なものだった。生まれて初めてそれを見た才人も感動が胸中を支配していた。

「これでアルビオンへはもうすぐだ」

船室でワルドは二人に向けてそう言った。この船室には先程の商人も同室しており、あまり目を合わさないようにしているが、ちらちらとこちらの様子を見ていたし、こちらの会話にしっかりと聞き耳を立てていた。

「ところで、貴族様たちもアルビオンの貴族派に参加されるのですか？」

間が持たないので何となく切り出した商人の言葉に、ルイズが鋭い目線でそれを威嚇した。商人はそのあまりの剣幕に思わず身を引いてしまった。

「何であんな恥知らず共に加担しなくちゃならないの！ 馬鹿にしないで！」

「ひいつ！ し、失礼いたしました！」

「お、おい、ルイズ。落ち着けよ」

今にも商人に飛び掛ろうとしているルイズを、才人は必死になつて宥めた。少なくとも、始祖の血筋に対して反旗を翻す貴族派の行動をルイズは絶対に許すことはない。才人は思い知らされることになった。

「ところで、君は貴族派に物を売りに行くと言っていたな？」

ワルドは才人が上手くルイズを落ち着かせるのに成功したところを見計らって話しかけた。商人も貴族であるワルドから話しかけられたのですぐに姿勢を正して話し始めた。

「は、はい。貴族派の方からご注文がありましたので」

「積荷は？」

「硫黄でございます」

「硫黄か……なるほど。この状況下なら硫黄の値も上がって高値で売れるというわけか」

「はい」

死の商人、才人は言葉でしか知らなかったそれを初めて目の当たりにした。どんな人物がこういう仕事をするのかと思つたが、目の前にいる人物はいたって普通の人間だった。むしろ、元々の表情が柔和なことから普段はかなり優しい人物のようにも見えていた。

そんな人物が戦争で商売をするとは想像もつかなかつたが、才人も剣という名の武器を持っている。才人として、ヴァルデスやイザベ

ラが見たときはかなり幼く見られているのでその辺りに差はなかった。

「しかし、貴族派に参加されるわけではないのに何故アルビオンへ？」

「貴方にそれを言う必要はないわ」

「は、はあ……」

商人はもうこれ以上ルイズの機嫌を損ねると、どんな罰を受けるかわからないので口を閉ざすことにした。ルイズと商人の間に生まれた険悪な雰囲気は瞬く間に船室全てを支配した。そのせいなのかどうかはさだかではなかったが、その後は誰一人として喋らなかった。

しかし、そんな時間は長く続かなかった。

どおん！ という激しい音と共に船室が大きく揺れた。

「きゃあー！」

「何だ！？」

「僕が確認してくる！ 君たちはここにいなさい！」

ワールドはそう言って船室を出て行った。突然のことに三人は動揺を隠しきれず、何が起ったのかさっぱり理解できなかった。商人はその場でただ怯えて震えており、ルイズも強がってはいるようだが少し体が震えていた。

「いったい、何が起こったのかしら……?」

「さ、さあな……。とにかく、待つしかないだろ」

ルイズの言葉に才人はそう答えた。才人も突然のことで頭の中は混乱していたが、それでもルイズを守ろうと必死になって自分を取り繕っていた。

すると、ワルドが戻ってきた。三人に比べて彼はかなり落ち着いた態度をとっていたので、その姿を見て三人も落ち着きを取り戻し始めた。

「ワルド様、何があったのですか?」

「ルイズ、落ち着いて聞いてくれ。どうやらこの船は今、空族に襲われているらしい」

「空賊ですって!?!」

「空賊って何ですか?」

唯一、この場の会話についていけない才人が訊ねた。

「空賊と言うのは、空に行く商船などを襲って不当な手段で積荷などを奪う連中のことだ」

「つまり、海賊の空版ということですか?」

「簡単に言えばそうだ」

(空にまでそんな連中がいるんだ……)

才人はそんなことを思っていたが、状況はそれほどのんびりしているわけにはいかなかった。こうしている間にも、空からは砲撃の音が聞こえてきており、その度に船体が大きく揺れていた。

「空賊ならば退治しなければ！」

「残念だがルイズ、それはできない」

「どうしてですか!？」

「僕は風石に足りない分の魔力を補うために魔力をほとんど使い果たしてしまった。最低限、僕やルイズを守るための魔力しか残していない」

ワルドの言葉には、この場で出会っただけの商人はもとより、ルイズの使い魔である才人は頭数に入っていなかった。才人もそれはわかっていることなのだが、どうにもワルドの態度がいちいち気に入らなかった。

「では、どうすれば……!？」

「とりあえず、一時的に彼らに従おう。彼らも僕らが貴族だということがわかれば、無茶なことはしてこないだろう。恐らく、身代金をせしめようと画策するから危害は加えないはずだ」

ルイズはその言葉に納得していたが、才人はその言葉を聞いて自分やこの商人はどうなるのだろうかと考えたが、それを質問したと

ここで答えは既に出ているようなもので口にはしなかった。

船が空賊に対して白旗を揚げたのはそれから間もなくだった。元々、商船であるため戦うための武器をほとんど積んでいないことや、船員たちに戦意がないことから船長は早い決断を下した。空賊に積荷を渡してしまうことは、あとで商人から損害賠償を請求されてしまう可能性も孕んでいたのだが、船長は金よりも命を優先した。損害こそ被るかもしれないが、彼の決断は間違っではない。それはこの場にいる誰もがそう信じていた。

空賊たちは船から荷を自分たちの船に移して、乗り込んでいたルイズたちにも船を乗り換えさせるために船室から連れ出した。もちろん、二人の杖はしっかりと空賊に押収されているため、これで二人は魔法も使えなくなった。

貴族であるルイズたちは利用価値があるのだが、才人と商人に関しては利用価値がない。ただ、才人はこういう場合にどういう風に振舞えばいいかわからず、とりあえずルイズにくつつく形で傍を離れなかったし、ルイズも才人は自分の使い魔だと言って船から連れ出した。商人に関しては必死の命乞いを行い、それが功を奏してとりあえずは殺されずに一緒に空賊の船に乗り込んでいた。

「やれやれ、とりあえずアルビオンのほうに向かって飛んでいるみたいだが……」

ワルドは乗り込む前の船首の方向からおおよその方角を察していた。乗り込んでから一度も方向転換を行う際の揺れが起こっていないので、恐らくはそのままの方向を進んでいるはずだと当たりをつけてそう言った。

「でも、このまま空賊に捕まっただけでは何もできませんわ！」

「落ち着きたまえ、ルイズ。とりあえず、アルビオンに向かって飛んでいるのは間違いないだろうから、恐らくこの空賊はアルビオンを拠点に活動しているのだろう。だったら、アルビオンまで運んでもらえばいい。行動を起こすのはその後だ」

ワルドの言葉を聞いてルイズもとりあえずはそれに従うことにした。実際、武器を全て取り上げられた彼らにできることはないのだ。少なくとも、船が空の上にある限りは逃げ場すらないのだ。

全員の意見が一致した時、空賊の一人が船室に入ってきた。

「出る。お頭がお前たちに会いたいとのことだ」

空賊如きにこのような口を利かれたことにルイズのプライドは傷つけられたが、それでも必死で怒りをこらえた。この船の中ではどう転んでも自分たちの有利になるようなことはない、彼女もそれだけは理解していたからだ。

先導役の空賊に連れてこられたのは船長室だった。そこには口髭をつけた空賊がおり、その周りには彼の配下と思われる空賊が彼を守るようにその周りに立っていた。

「お前たちか、船に乗っていた貴族と商人とやらは」

身分の違いなど関係ない、そういわんばかりの言葉遣いだった。ただ、蓮っ葉な言葉遣いはその風貌には似合っていたのだが、どうにも彼が纏っている雰囲気とは合わない。才人はおぼろげながらそんなことを感じていた。

(何だろ……こいつ、ヴァルデス殿下に似てるような気がする)

見た目も何もかもがヴァルデスとは似ても似つかないどころか、全く別の世界の人間であるはずなのだが、才人はそう思っていた。何が彼にそう思わせているのか、それは彼自身ですらわからなかったが、それでもそう感じてしまったのだ。

「で、お前達はアルビオンに何をしに行くつもりなんだ？」

「貴方にそんなことを教えるつもりはないわ！」

ルイズは貴族として、毅然とした態度で空賊の頭に向かっていった。頭はルイズの高圧的な言葉に対して、特に気にする様子はなかった。むしろ、こういうことになることは初めから承知しているかのようだった。

「まあいい。硫黄を積んでいたところを見ると、大方貴族派に参戦しようとしていたというところだろう」

「見損なわないで！ あんな恥知らず共と私たちを一緒にしないで
」！

才人は気づいた。一見すると、ルイズが言葉の上では相手より上に立っているように振舞っているが、その実はあの頭を名乗る男にいいようにあしらわれていることに。

「貴族派が恥知らずか……だがな、その恥知らずが今やアルビオンを支配しようとしている。勝ち馬に乗ったところで、お前たちを非難する奴は誰もいないと思うぜ。非難する王党派はもうその頃には

いないだろうからな」

「私は貴族よ！ 王に忠誠を誓うべき貴族が王を討つなんて恥知らずな真似は絶対にしないわ！」

「だが、アルビオンではその貴族が王を裏切ったんだ。いや、見限ったって言い方が正しいかも知れねえな」

「それでも私はそんな真似だけは絶対にしないわ！ 偉大なる始祖を裏切るようなことは貴族として絶対に認めないわ！」

ルイズがそう言うと、頭は小さくため息を吐いた。何気なく視線をルイズから外して周りを見たときに、才人が彼をじっと見ていることに気づいた。

「何だ、坊や。俺の顔に何かついてるか？」

「い、いや。何も」

突然自分に話題を振られたので、才人はしどろもどろになりながらも答えた。

「じゃあ、何で俺をじっと見ていたんだ？ 俺を討ち取る機会でも狙っていたのか？」

頭のその言葉を聞いて、彼の周りにいた空賊たちは各々の持っている武器に手をかけて才人を睨んだ。

「ち、違う！ そんなんじゃない！」

「だったら何だ？ 正直に答えな」

頭のその言葉と、周りからの無言の圧力が才人に重くのしかかった。才人はその雰囲気にも耐えることができず、素直に思っていたことを喋ることにした。

「あ、あんたが知り合いに似てると思ったんだよ」

「ほう？ お前の知り合いには悪党がいるのか？」

「あんたと一緒にするじゃねえよ。とても立派な方だ」

才人はその言葉を聞いてさっきまでの怯えを忘れ、頭を思いっきり睨みつけた。それと同時に頭の配下の空賊たちも才人に向けて武器を抜こうとしたのだが、それに気づいた頭が手で制したため、空賊たちはとりあえず睨むだけに留めた。

「ほう。せっかくだから名を聞いておこうか。もしかしたら、何処かで会うかもしれないしな」

「あんたじゃ一生会うこともないだろうさ」

「わからねえぜ。人生というのは何があるかわからないからな」

頭はそう言って笑った。才人はまるでヴァルデスが笑われているようで無性に腹が立った。

才人にとって、ヴァルデスはこの世界に来たときに最初に色々と教えてくれた恩人である。才人がこれまでの生涯で出会ってきた人物の中でも、全く別格と言っていいほどの人物だった。年が近いの

に非常に大人であり、何処か畏敬の念に近いものを抱いている存在だった。だから、それを笑われるのは非常に不愉快だった。

「それで、そいつの名前は？」

「……ヴァルデス様だ」

その名前が出たとき、空賊たちは明らかに動揺を見せた。頭はその名前を聞いた瞬間、表情をかすかに曇らせた。

「ゲルマニアの若きエースか……大した大物じゃねえか」

頭はそう言っただけで少し考え込むような仕草を見せた。隙を見せたかと思っただけで、彼の配下たちがしつかり才人たちを見張っていたので行動を起こすことはできなかった。

「ちょっと、あんた何を言ってるのよ。あんな空族とヴァルデス様を似てるだなんて」

「しょうがねえだろ？ 最初にそう思っただから」

ルイズの言葉に才人は開き直って答えた。そもそも、もうヴァルデスの名前を口にさせられてしまったのだから、今更取り繕ったところで空しいだけなので開き直るのは容易だった。

「さて、世間話はこちらまでにして本題に入ろうか」

頭はそう言っただけで、鋭い目つきで才人たちを見ていた。睨んでいるとかそういう類のものではなく、まるで何かを見極めようとしているかのような目つきであり、才人はこの時に気づいた。どうして、

この男をヴァルデスに似ていると思ったその理由を。

「本題とは何だ？」

「お前たち、一応改めて聞くが貴族派につくつもりはないか？」

「……ルイズの話聞いていなかったのか？」

ワルドはそう言ったが、頭は特に気にしていなかった。

「聞いたぜ。だが、お前さんたちはまだ何も言ってないだろ？　その商人のおっさんはともかくとして、あんたとその坊やはまだ貴族派につくことについては何一つ語っちゃいない」

「なるほど。なら、はっきり言おう。お断りだ」

「俺も」

「なら……お前たちは王党派と考えていいんだな？」

その言葉に配下たちは武器を抜いた。だが、三人は誰一人として意見を変えようとはしなかった。ただ無関係の商人だけが武器を見て怯えていた。

「……どうやら本気みたいだな。お前たち！」

三人は襲い掛かれると覚悟した。しかし、配下たちは襲いかかるどころか、武器をしまった。

「どうやら君たちは本当に王党派の人間のようなだね。失礼した」

頭はそれまでの態度とは打って変わって紳士的な態度で接してきた。彼は才人たちに謝罪すると、口髭を引っ張って外した。

「付け髭？」

それに髪の毛を引っ張ってそれを外した。鬘と付け髭を外すと、その下からは眉目秀麗の男が出てきた。

「自己紹介がまだだったね。僕の名前はウェールズ・テューダー、アルビオン王国の王子だ」

「ウエ、ウェールズ様!？」

ルイズと才人は驚きを隠せなかったが、ワルドはそれでもまだ信用しきれずにいた。

「失礼ですが、貴方がウェールズ殿下であるという証明になるようなものはお持ちでしょうか？」

「そちらのお嬢さんが指に嵌めているのはトリスティン王国に伝わる水のルビーだね」

ウェールズはルイズの指に嵌まっている水のルビーに気づいていた。それから自分が嵌めている風のルビーを見せた。

「これはアルビオン王国に伝わっている風のルビーだ。風のルビーと水のルビーを向かい合わせると……」

ウェールズはルイズの水のルビーと、自身の風のルビーを向かい

合わせた。すると、二つのルビーは共鳴し合い、虹色の光を振りまいた。

「水と風は、虹を作る。王家の間にかかる虹さ」

「大変、失礼いたしました」

ルイズは慌ててウエールズに対してこれまでの非礼を詫びた。

「いや、君に非は無い。我々もこのような格好をして君たちを散々脅かしたのだから非はこちらにある。まことに申し訳なかった」

ウエールズに倣って空賊に扮していた配下たちもルイズたちに謝罪した。

「しかし、どうして君たちがアルビオンに？」

「は、はい。実はアンリエッタ姫殿下よりウエールズ殿下へ書状を預かっております」

ルイズは旅立つ前にアンリエッタより預かっていた書状を渡した。書状にはトリステイン王室の花押が捺してあったので、それが間違いないとトリステイン王家から発行されたものだということはずぐにわかった。

ウエールズはその書状を一通り流し読んだ後、顔を上げてこう言った。

「すまないが、特使殿を除いて全員部屋から出てくれ」

ウェールズの言葉に逆らえる者などこの場にいるはずもなく、二人を除いた全員がおとなく部屋を出て行った。全員が部屋を出て行ったのを確認すると、ウェールズは杖を取り出して部屋にサイントをかけた。

「さて、特使殿は書状の中身を読んだのかな？」

「いいえ。書状の中身は読んでおりません」

「だが、中身についてアンリエッタから聞いているのではないのかい？」

「……はい」

ウェールズは小さくため息を吐いた。

「特使殿。ここまでお越しいただいてまことに申し訳ないが、私はアルビオンから逃げるつもりはない」

「ですが……姫殿下は」

「私はアルビオン王国の王子だ。アルビオンを見捨てて逃げることなど出来るはずはない」

ウェールズの意志は固かった。アンリエッタの申し出など受けるつもりなど毛頭もないことはルイズにもわかった。

「特使殿。残念だが私はトリステインに行くつもりはない。それに私がトリステインに行けば、レコン・キスタはそれを理由にトリステインに進軍してくるだろう。私が理由でトリステインへと進軍さ

れるなどということはあつてはならないことなんだ」

「……わかりました」

「話はこれで終わりだ。君たちはとりあえず一度アルビオンまで来てもらう。それから改めて君たちをトリスティンに送らせてもらう」

「ありがとうございます、殿下」

「さあ、今夜は王国最後のお客様をお招きしての宴会だ。君の仲間たちにも楽しんでくれと伝えてくれ」

ウェールズはそう言って笑った。普通なら、女性を魅了して止まないほどの輝きを放っているのだが、この時の笑みをルイズはどうしても好きになれなかった。

やがて、船はアルビオンに入り、王国最後の宴会が催された。

ウェールズ・テューダー（後書き）

ゴールデンウィーク中にもう一回は更新したいと思っております。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

亡国最後の宴（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

亡国最後の宴

「戻ったぞ！ バリー！」

船はアルビオンに戻り、隠れた場所に船を下ろした。その港ではウェールズを迎えようと、彼に幼い頃から仕えているバリーが待っていた。

「お帰りなさいませ、殿下。首尾の方はいかがですか？」

「喜べバリー！ 硫黄だ！」

「おお、それは素晴らしい！ これであの恥知らず共に一泡吹かせてやれますな。始祖のご加護があったのでしよう」

「それとこちらはトリスティンからの特使殿一行と、我々に硫黄を提供してくれた商人殿だ」

「ほほう！ この王国にお客様でございますか。これは嬉しいことですな」

「お客様をお迎えする宴の準備をするように伝えてくれ。王国最後の宴会だ」

「かしこまりました」

バリーはそう言うと、すぐに言われたことを実行するためにその場を去っていった。一行はウェールズの案内でニューカッスル城に招かれて、それぞれの部屋で休んでいた。

「任務、失敗しちゃったな」

才人はルイズにそう言った。ルイズは窓の外の景色を見たまま、こつちを振り返ることはなかった。

「そうね……」

「これからどうするんだ？」

「……どうもこうもないわ。肝心のウエールズ殿下にその意志がないのだから、私たちはありのままを姫様に報告するしかないわ」

「……そうだな」

才人はそう言ってルイズの傍に行って窓の外を眺めた。ニューカッスルから見る景色は穏やかで綺麗だった。とても、ここが戦場だとは二人には思えなかった。

「綺麗だな」

「そうね」

二人はそれから何も喋らなかった。任務は失敗し、自分たちはこの滅び行く王国の最後の客人として歓待されている。この状況をどう言葉にしていいいか二人にはわからなかった。

それも仕方のないことである。二人には自分の祖国が明日には無くなってしまうということが理解できなかったからだ。戦争というものがあることは知っていたが、才人は言葉でしかそれを知らな

った。ルイズも小国ならばともかく、始祖の血統を受け継ぐ国家が滅んでいくことなど想像もしなかった。そして、今にもアルビオンを滅ぼそうとしている連中が、トリスティンをも視野に入れていると考えるだけで寒気がする思いだった。

「ねえ」

「ん？」

「どうして、ウェールズ殿下は笑っていられるのかしら？」

「さあな？」

才人にもそれはわからなかった。自分がその立場に立っているわけではないし、自分の想像の範疇を大きく超えてしまっているため、何を考えても結論にまで至ることはなかった。

「本当に滅んじやうのかしら？ この国は」

「殿下がそう言うのだからそうなんじゃないのか？」

「アルビオン……その名前が無くなる日が来るなんて……」

「俺のいたところは、昔はよく国の名前が変わっていたらしい。侵略する者される者、昔は幾度も繰り返し返されていたらしい」

才人はそれほど勉強をしていたわけではない。それでも、授業で多少聞いた程度のことにはうる覚えではあったが、確かに覚えていた。世界史を見れば、戦争で国の名前が変わることや、国の国境が変わることはさほど珍しいことではなかった。

「こつちだつて珍しいことではないわ。でも、始祖の血統を受け継ぐ国が滅んだことは過去に一度だつてないわ。本当にここが滅びるのなら、歴史上で最初に始祖の血統が滅びた国になるわ」

「そうか……」

それ以後、二人は何も言葉を交わさなかった。

そして、それからしばらくして使いの者が宴会の準備ができたと二人を呼びに来て、一行は煌びやかに彩られたパーティー会場に通され、そこには会場に負けないぐらいに着飾った王党派の貴族たちがいた。

「さあ、みんな！ 今宵は王国最後のお客様を迎えての大宴会だ！ 皆最後まで楽しんでくれ！」

ウェールズがそう言うと、参加者たちは歓声を上げてそれに応えた。王党派の貴族たちは、王国最後のお客様であるルイズたちを精一杯歓迎した。

「さあさ、こちらの料理は頬が落ちるほど美味しいですよ」

「いやいや、こちらの料理のほうが美味しいですよ」

そうやって料理を勧めてくる貴族たちは全員が笑顔を浮かべていた。その笑顔はとってつけたようなものではなく、とても晴れやかなものだった。

（どうして、この人たちは笑っていられるの？）

ルイズはその晴れやかな笑顔がかえって不気味に見えた。自らの命が明日をも知れないというのに、どうしてこうも晴れやかに笑っていられるのだろうか、ルイズはそれがわからなかった。なので彼らを不気味だと思っていた。

才人もこの会場の異常な雰囲気馴染むことができず、彼らとは少し離れた場所で目立たないように努めていた。

「やあ。楽しんでいるかい？」

すると、ウェールズがワインの入ったグラスを二つ持ってやって来た。

「どうも」

才人はそれを受け取って、ウェールズと共に会場をただ眺めていた。

「一つ聞いていいかな？」

「はい」

「君は、あの船の中でどうして僕のことをヴァルデス殿に似ていると思ったのかい？ よかったらその理由を教えてほしいのだが」

「ああ……目です」

「目？」

「殿下は最初に俺たちが入ってきた時も、貴族派に入らないかと誘いをかけた時も殿下は俺たちを見極めようと鋭い目つきをしました。それが、ヴァルデス殿下に似ていると思っただんです」

「なるほど……」

ウェールズはそれを聞いて微かに笑みを浮かべた。

「ところで、そう言えば僕からは自己紹介したけど君たちの紹介はまだだったね。結局、特使殿とも題目の話をしただけで紹介はしなかったからね」

「あ、はい。平賀才人と申します。こつち風に言つとサイト・ヒラガです」

「姓があるということは君は貴族なのかい？ あのお嬢さんの使い魔という話だったか……」

「いえ。使い魔というのは本当ですし、俺は貴族ではありません」

才人の言葉を聞いて、ウェールズは少し唸ったがそれ以上は何も聞いてこなかった。

「それにしても、ゲルマニアのエースに似ていると言われるのは光栄だね」

「でも、アルビオンはゲルマニアより立場が上の国なのでは……？」

ルイズに以前そう聞かされていたので、立場が上のウェールズがヴァルデスを羨ましがるといのがよくわからなかった。

「国は関係ないよ。少なくとも、僕よりヴァルデス殿の方が優れていることは私がよく知っている。僕がヴァルデス殿ほど優れていればこのようなことにはならなかったのかもしれないな」

「殿下……」

「彼は一年前にこの事態を既に予見していた。ヴァルデス殿に忠告され、僕もそれを起こさないように動いていたつもりだったのだが、残念ながら僕は彼のように事を上手くおさめる力はなかった」

「……そうですか」

才人とウェールズの間には沈黙が流れた。その間も宴は進んでいった。ダンスミュージックが流れ、貴族たちがダンスに参加していった。ルイズやワルドも客人としてそれに参加しているのを二人はただ眺めていた。

「さてと、そろそろ僕も行かないと」

ウェールズはそう言って才人に手を差し伸べた。

「えっと……？」

才人は跪いてその手をとろうとしたが、ウェールズはすぐにそれを制した。

「違うよ。握手だ」

「握手……ですか？」

「ああ。君たちはこの国の最後のお客様だ。お客様に礼を求めるとき、無粋な真似はしないさ。最後のお客様には精一杯のおもてなしをさせてもらおうつもりだ」

才人はウェールズの顔とその手を何度か見て、それからおずおずと差し伸べられた手を握った。

「どうか王国最後の宴を楽しんでいってくれたまえ」

「ありがとうございます。殿下」

ウェールズは才人にそう言うと、また別の人だかりの中に姿を消していった。それと入れ違いになるようにルイズがダンスの輪から抜け出して、才人の元にやってきた。

「ここにいたの」

「ああ」

「何してるのよ？　こんなところで」

「さっきまでウェールズ殿下と話してた」

「そう……あなたは踊らないの？」

「俺がろくに踊れないのをお前が一番知ってるだろ？」

「そうだったわね」

ルイズはそう言つてまたダンスの輪を眺めていた。

「せつかくここまで来たけど、何にも出来なかつたわね」

「そうだな」

すると、参加者たちから歓声が上がった。才人たちが視線を向けると、そこにはアルビオン国王のジェームズ一世がいた。

「宴にご参加の諸君、本日はこのアルビオンの最後の宴だ。心行くまで楽しんでくれ」

その言葉を聞くと、更に参加者たちは歓声を上げた。才人やルイズはこの明らかに普通とは違う異常な盛り上がりは何処か狂気のようなものを感じずにはいられなかった。

「さて、ここに集つてくれた諸君には本当に感謝している。だが、我々は早晚倒れることになるだろう。今、この場にいる諸君らも本当は逃げたいのならば好きにすればよい。むしろに最後まで付き合う必要はない」

「陛下！ どうやら我らは耳がおかしくなつてしまつたようです！

そのようなお言葉は聞こえません！」

「さようでございます！ 我らの耳が聞くことが出来る言葉は敵を討ち取れ、その一言だけでございます！」

ジェームズ一世の言葉に、彼に最後まで付き従うことを選んだ貴族たちはその言葉を真つ向から否定した。平時であれば不敬にも値する発言なのだが、この場においては何においても優先されるべき

言葉であり、この言葉こそ王に対する忠誠の証であった。

「貴殿ら……その言葉、確かに聞いたぞ。では、アルビオン王国の王として最後の命令を下す！ 我が倒れたとしても、諸君らの最後の一人が倒れるまであの恥知らず共を倒し続け前進を続けよ！」

『おおー！！』

ジエームズ一世の言葉に、アルビオン貴族たちは涙を流して共に喜びを分かち合っていた。この場でその感情を共有できないのは、外国人であるルイズたちだけであり、彼らの目からすればこれは明らかに異質だった。

「私、この国の人たち嫌い。どうして、あんな風に笑えるの？」

「ルイズ……」

「私は部屋に戻るわ、ここに私の居場所はないみたいだし。あんたはどうするの？」

「俺は……もう少しこの人たちの姿を見ておくよ」

「情を移すと辛くなるわよ」

「それでも見ておくよ。俺には戦争なんてよくわかんねえけど……」

「わからないけど？」

「見ておかなくちゃいけない気がするんだ……どうしてかはわからないけど」

「……そう。じゃあ、私は先に戻るわ」

ルイズはそう言って会場を後にした。才人は誰かと話すわけでもなく、ただその宴をすっかりと目に焼き付けていた。

（この人たち……何を考えているんだろ……）

所詮部外者である才人にはわからなかった。本当は死にたくないのが彼ら全員の本音なのだ。だが、それを貴族としての誇りや名誉という鎧を纏うことで押し掛かってくる恐怖から負けないように努めているだけなのだ。

貴族とは、いざというときに国を守るために先頭に立って戦う義務があるからこそ様々な特権が与えられる。王を守るということは、国を守ることと同意義なのであり、貴族である以上はその義務から逃げることは絶対に許されないのだ。

果たすべき義務があるからこそ様々な特権を有している、昨今の貴族はそれさえも忘れている者も多いのだが、ここに残っている貴族だけは違った。彼らは古くから存在する貴族の義務を果たそうとしている。それこそが、彼らが最後まで守ろうとしている貴族の矜持なのだ。

「ん？」

すると、ワールドがウェールズと何かを話しているのが見えた。

（あいつ……ウェールズ殿下と何を話しているんだ？）

才人はそれが妙に気になっていた。それからも二人が何かを話し合っている間はずっとそれを見ていたが、やがてワルドからウエー
ルズの傍を離れていった。ワルドは才人の姿を見つけると、才人の
傍まで近づいてきた。

「やあ、ここにいたのか」

「ええ」

「ルイズはどうしたんだ？」

「気分が悪いからって先に部屋に戻りました」

「そうか……」

ルイズがいないことを知ると、ワルドは少し気落ちしたような表
情を見せた。

「そうだ。君には今伝えておこう」

「何ですか？ 明日の予定ですか？」

「ああ。そうだ」

「アルビオンを出るんですよね。いつ頃ですか？」

「アルビオンを出る前に、やらなければならないことがある」

「やらなければならないこと？」

「ああ。さつきウエルズ殿下に提案して承諾をいただいたところだ。僕とルイズは、明日ウエルズ殿下立会いの下で結婚式を挙げる」

「はあっ!？」

才人は思わず少し大きな声になってしまった。明日にも滅びるかもしれない王国で暢気に結婚式を挙げようとする、ワルドの気が知れなかったのだ。

「どうしてこんな時に!？」

「是非とも、僕たちの婚姻の媒酌を、あの勇敢なウエルズ殿下にお願いしたくてね。殿下も僕の提案を承諾してくださったのだ」

ワルドがルイズとの結婚式を挙げたがっているのはルイズから聞いていたが、それでもこんな時に行く必要性が何処にも見出せなかった。少なくとも、才人の考えではこんな所でわざわざ結婚式を挙げようとするのは正気の沙汰ではないと感じていた。

だが、それよりもルイズとワルドが結婚するというのが才人には大きなショックを与えていた。わかりきっていたこととは言え、それが現実になろうとすると何とも寂しい気持ちになった。

「君も参加するかね？」

「……ええ。見届けさせていただきます」

何故、才人が見たくもないはずのものを見ようと言ったのか。後で己自身を振り返ってみても、才人にはその答えが出なかった。

まるで、才人ではない何者かの意志が働いたようにすら感じられるシーンだった。

だが、この時の決断が後の結果を大きく変えたであろうことは、才人も疑いを持たなかった。

「では、明日は結婚式だから僕は先に休ませてもらうよ」

ワルドはそう言って会場を後にした。才人は胸に嫌な予感と、ルイズへのもやもやした想いが混在していたがそれが何であるかは今の彼にはまだわからなかった。

その日の晩、宴も終わりほとんどの者が寝静まった丑三つ時。人目を憚るように三人の男たちが会談を行っていた。

「何と……本当にそのようなことを」

一人はこのアルビオンの国王ジェームズ一世、もう一人はその息子であるウエールズ。そして、三人目は招かれざる客。

「我が主はするように、と私に仰せつかいました」

「うむ……」

ジェームズ一世は男の言葉を聞いて真剣に悩んだ。ウエールズは

その隣で悩んでいる父の姿をじつと見詰めていた。

やがて、答えを出したジェームズ一世は意を決してこう言った。

「お伝えください。その申し出をお受けいたしますと」

「父上。何を……」

「ウェールズ。それがアルビオンのために、ひいてはハルケギニアのためになるということならば、我々が選ぶ道は一つだけだ」

「ですが……」

「では、我が主にはそのようにお伝えいたします。それではまた早朝にお伺いいたします」

男はそう言って二人の前から姿を消した。あとに残された二人の男は、ただ未だ姿さえはつきりとしなない始祖に祈りを捧げていた。

裏切り者とガンダールヴ（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

裏切り者とガンダールヴ

翌朝、結婚式はウェールズを臨時の司祭として執り行われた。この式に参列している出席者は才人と、たまたま居合わせたあの商人だけだった。いくら名譽ある結婚式と言っても、新郎と新婦と司祭だけでは寂しすぎるだろうというウェールズの意見もあり、レコン・キスタの対応に追われている部下は無理だとしても、全く無関係な商人ならば問題ないだろうとその参列を許可していた。それに、商人なら独自の商談網を持つているので、二人の結婚の報を広く、そして早く伝えることが出来るだろうというワルドの思惑にも一致していたのでワルドもそれを許可した。

才人はルイズの姿に見とれていた。十七という年齢にしては普段は幼いような印象を見せる彼女だが、ウェディングドレスに身を包み、薄化粧をしている彼女はそんな普段とは全く違い、紛れもなく女だという印象を強く才人に与えていた。

(ちくしょう……綺麗じゃねえかよ)

才人は口には出さないものの、素直にルイズの美しさに兜を脱いでいた。それと同時に、その隣にいるワルドに対して羨ましいと思う気持ちと、憎らしいと思う気持ちが混在したようなものが心の中に渦巻いていた。

一方、ルイズは複雑な思いで式を迎えていた。そもそも、自分に相談なく昨晚いきなり決まってしまった式に対していい感情など抱く方がおかしいのかもしれない。

(どうしてこうなるのよ……)

表情こそすましているが、その内心は怒りと困惑でいっぱいだった。自分に何の相談もなくこの結婚式が計画されていたこともそうだったが、もう一つの理由は結婚式に参列している使い魔のせいだった。

(あいつ……どういうつもりよ?)

少なくとも、ルイズは才人に対していい感情を抱いている。多少主人に対して礼節を欠いてはいるが、それでも自分のために色々としてくれているし、自分で出来ないなら俺が助けてやるなどという言動もあるので才人には使い魔というよりはもっと違う絆があるものと思っっている。自分がそう思っっているのに、当の本人は何食わぬ顔をしてこの結婚式に参列している。それが腹立たしかった。

おりしも二人して似たようなことを考えていたのだが、互いの考えがすれ違いを起こしていた。

「汝、新郎ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝この者を妻とし、健やかなる時も病める時も共に助け合い、その愛を生涯違えぬことを誓うか」

司祭を務めるウェールズは朗々と誓いの言葉を述べており、ワルドは胸を張って堂々と誓いを立てた。

「汝、新婦ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。汝この者を夫とし、健やかなる時も病める時も共に助け合い、その愛を生涯違えぬことを誓うか」

「……………」

ルイズはその言葉に応えようとはしなかった。幼い頃にワルドに抱いていたものが憧れであり、恋心と違うことは既にわかっている。だが、政略結婚というものが大事だということもわかっている。

(でも……)

ルイズは誓いを立てることがどうしても出来なかった。そもそも、政略結婚が決まっているとは言え、学生の間結婚することは滅多にない。それは魔法学院が寮生活を原則としていることが理由に挙げられる。ヴァルデスの場合には正に特例中の特例、ルイズもトリステインでは公爵家令嬢という身分の高い家の生まれだが、それでもこれを曲げることは出来ない。そもそも、この魔法学院も国家が運営しているものなので、自分の国が決めたことを曲げることなど出来るはずもなかった。

寮生活を夫婦で過ごすことなど出来るはずもない。少なくとも、半年間は離れ離れで暮らさなければならぬ。新婚がそれほど長い間離れているのは本人たちにとってもよろしいとは言えないし、周りの風評もよろしくなくなる。何故そこまでして慌てて結婚しなければならぬのか、その結婚自体に疑問の声が上がってくるのが想像に難くない。

さすがに結婚そのものに疑問の声を持たれることは、恋愛結婚であれ政略結婚であれ気分のいいものではない。家同士の結びつきで互いの家の格式を上げることが主な目的とされる政略結婚は、結婚そのものに疑問を持たれてしまうと名誉が著しく傷つくことになるのだから恋愛結婚よりも傷口が大きくなるのは間違いないのだ。

その危険性を孕んでいることなど、自分より経験を積んでいて、

王宮で仕事をしているワルドがそれを知らないはずはない。それなのにどうして今、この危険な情勢下のアルビオンで半ば無理やりに結婚式を執り行わなければならないのか。ルイズはそれが理解できず、それがワルドへの不信感へと繋がっていた。

「ルイズ、どうしたんだい？」

誓いを立てないルイズにワルドが声をかけた。優しい笑顔に優しい声、だがそれらでさえ、今のルイズの不信感を拭い去ることは出来なかった。そんなルイズの様子を見てウェールズも訝しげな表情を浮かべていた。

「ミス・ヴァリエール。どうかしたのかね？」

「……ごめんなさい。ワルド様。今の私には誓いを立てることが出来ません」

ルイズのその言葉を聞いて、喜色を浮かべた才人と、困惑の色を浮かべたワルドとそれぞれが対照的な表情を見せていた。だが、ワルドはその言葉を聞いただけで諦めがつくはずもなく、ルイズに問いただした。

「ルイズ、どうしたんだい？」

「ごめんなさい、ワルド様。昔の私なら今の申し出を喜んで受けたでしょうけど、今の私はまだこの申し出をお受けすることは出来ません」

「どうして…?」

「今の私はまだ学ぶべきことがたくさんあると思っています。ワルド様ほどの方に想われるのは大変嬉しいのですが、今はこの申し出を謹んでお断りいたします」

「ルイズ！」

「ワルド子爵、残念だが新婦がこの結婚を望んでいない。君の気持ちにはわかるが……」

「うるさい！」

すると、ワルドが急にその口調を荒げた。突然のワルドの豹変にこの場にいる誰もが驚いていたが、才人だけは驚きもあつたが、それよりも先に彼の手はデルフに手が伸びており、いつでも鞘から抜けるように臨戦態勢をとつた。

「ワルド子爵、落ち着きたまえ」

ウェールズはとりあえずさっきの暴言には触れないことにした。結婚式を申し込んで新婦に断られたのだから、ワルドの心が著しく傷つけられたが故の暴言だと寛容な心で許していた。

「ルイズ！ 僕と共に来るんだ、君には凄い力がある。僕と一緒に来ればその力を引き出せる」

「あなた、何を言ってるんだ！？」

明らかに正気の沙汰とは思えないその様子を見て、才人はデルフを抜いてワルドに向き合った。

「うるさい！ 黙れ、平民！」

すると、ワルドは杖を抜いて目の前にいたウエールズの胸を貫いた。ワルドの意識が才人に向いていたため、ウエールズは油断していた。いや、そもそもトリスティンからアンリエッタの使者としてやってきたワルドが自分に対して刃を向けるなど考えもしなかった。

ワルドがウエールズの胸を貫いた瞬間、まるでその場の時が止まったかのように誰もが感じた。やがて、ゆっくりとウエールズがその場に膝をついて倒れた。その瞬間、全員が現実へと引き戻された。

「ウエールズ様！」

ルイズが慌ててウエールズを抱き起こし、才人はワルドとルイズたちの間に割って入った。

「ひいっ！？」

商人はその様子を見て慌てて教会から逃げていった。ワルドも関係のない商人に関わっている余裕もなかったので、そのまま見逃してやった。

「ワルド子爵……貴様、レコン・キスタか……」

口から吐血しながら、ウエールズは弱々しい声でそう言った。

「そのとおりだ。僕はこのアルビオン来訪に対して、二つの目的があった」

「二つの目的？」

才人が未だに苦痛で呻いているウェールズに代わって訊ねた。

「一つは言うまでもなくルイズだった。だが、これは失敗した。そして、もう一つはお前の命だ。ウェールズ！」

「レコン・キスタの貴方がどうして私を……？」

「君にはとても凄い力が眠っているんだよ。我々なら君のその力を引き出すことも出来る」

「何をわけのわからんことを……」

才人はその言葉を聞いて呆れと怒りを感じずにはいられなかった。これまでルイズの傍にいなかった人間がいきなり何を言い出すのかと思えば、あまりにも荒唐無稽な話であり、ワルドがどう思っているのかを言葉で発したのかは才人の知り及ぶところではなかったが、少なくともワルドの言葉はルイズに対する侮辱の一つだと才人は感じていた。

ルイズはこれまで魔法が使えないことで周りから侮蔑と憐憫の目で見られていた。才人もルイズが感じてきたほどの期間ではないが、それでもルイズと共に過ごしてきたので少なからずそれを知っていた。それを知っているからこそ、何の根拠もなくルイズには凄い力が眠っているなどというワルドの言葉を許せなかった。

「ワルド様、私は国を裏切ることには出来ません」

「ルイズ、君が我々と共に来れば君の中に眠っている力を目覚めさせることが出来る。その力さえ目覚めれば、今まで君を侮辱してきた

た連中は態度を変えて君の前に跪くことになる」

「適当なことを言ってるんじゃないねえ！」

才人はワルドに対してまるで獣の咆哮のように叫んだ。

「今までルイズがどれだけ苦労してきたか知ってるのかよ！ 『ゼ口』って言われても必死になって頑張ってきたんだよ！ それを自分たちと来れば苦労は全て報われるだ！ 笑わせるな！」

「平民は黙っている」

「いいや、黙らねえ！ 今までルイズがしてきた努力を全て無意味だと言われて黙ってられるか！ 努力なしで力を得られるなんてふざけたことを聞かされて黙っていらねえよ！」

「サイト……」

ルイズは才人のその言葉を聞いて涙を一粒、その瞳から落とした。

「そもそもお前がいなければもつと事は簡単に進んでいたはずだ！ 貴様さえいなければ！」

「相棒、来るぜ！」

「もう腹は括ってる！」

才人とワルド、二人の間に緊迫感がどんどん高まっていた。ルイズもウエールズもその場から動くことが出来ず、ただそれを見守ることしか出来なかった。

「いくぜ！」

才人が先手を取って動き出した。魔法を使われてしまった場合は勝ち目がない、先の決闘において体で学ぶこととなったそれをしっかりと教訓として活かしての行動だった。

しかし、元々の実力において才人とワルドではかなりの差があった。ガンダールヴの力を借りて早い攻撃を繰り返し続けるものの、ワルドはそれを紙一重でしっかりとかわしていた。

「いくら伝説の使い魔だとしても所詮は平民！ その程度の腕ではこの僕は倒せないぞ！」

「うるせえ！」

ワルドはかわしながらもしっかりと呪文を唱え続けていた。そして、呪文が唱え終わると同時にワルドの姿が五つに増えた。

「な、何だ！？」

「遍在だ、相棒！」

「その通り。風はいかなる所でも遍在する」

ワルドが教科書のような講釈を述べたが、魔法が使えない才人にはどうでもいいことだった。

「何だかわからねえけど、要するに分身の術だろ？ 本物さえ見分ければあとは実態のない偽者だ！」

「違うぜ、相棒。分身の術って言うのは間違いないが、あれはそれぞれが意思を持った実体でもある。だから、ある意味じゃ全員が本物みたいなもんだ」

「何ていんちき！」

才人はその無茶苦茶な術に腹を立てたが、今はそんなことを考えてもどうしようもない。やらなければならないのは、とりあえず目の前にいる全員を倒さなければならないこと。むしろ、狙いが定まっただけで腹を括りやすかった。

「さて、最強を誇る風の系統の力をその身でとくと味わうがいい」

五人のワルドは一気に才人に向かって襲い掛かった。直接剣戟を交えるワルドもいれば、遠距離から魔法で才人に攻撃を仕掛けるワルドと遠近両方から才人を襲っていた。

「ちっ！ 何とかならないのか、デルフ！」

「何とかって何だよ？」

「一応、魔法道具マジック・アイテムの一種なんだから！ 喋る以外に何かないのか！ 魔法を使えるとかそういうのは！」

「ねえ」

「くそっ！」

才人がどうにもならないのを見て、ルイズも危機感を抱いていた。

才人に完全に意識が向いているので、ルイズも自らの魔法で才人を援護しようと呪文を唱えた。

彼女が唱えていたのはファイアー・ボールだった。しかし、術は正常に発動せず、いつものように爆発のみを引き起こす結果となった。

但し、術こそ正常に発動はしなかったが遍在のワールドを二体倒すという快拳を成し遂げていた。これには当のルイズが信じられないほど、衝撃的なものがあった。

「嘘！ 私の術で……！？」

しかし、ルイズが自分の爆発が引き起こした結果をワールドも楽観視していなかった。自らの遍在をいともあっさり打ち消してしまうほど威力の強い術を放ったルイズを脅威に感じないはずもなく、すぐに一人がルイズに杖を向けて、魔法でルイズを杖ごと壁まで吹っ飛ばした。

「ルイズ！」

「心配ない。ちょっと気絶させただけだ」

「てめえ！」

実際に大したことはないのかもしれないが、それでもルイズに向けて術を放ったワールドを許せなかった。才人の心は怒りでどんどん満たされていった。サイトの心に怒りが満ちていくのと同時に、デルフも強い輝きを放ち始めた。

「おっ？ おお！ いいぞ相棒！ 思い出したぜ！ 俺の知っている『ガンダールヴ』もそうやって力を溜めていた！ いいか相棒！」

才人の左手に刻まれたガンダールヴのルーンは更に強い輝きを放ち、サイトの動きもそれと同時にどんどん速くなり、遍在のワールドを切り裂いた。

「ば、馬鹿な！」

突然動きのよくなった才人に驚愕の色を隠せず、ワールドはそう言った。

「いいか！ 『ガンダールヴ』の強さは心の震えで決まる！ 喜び、怒り、悲しみ、愛、何だっていい！ その心の震えがお前を強くして、その心の震えが俺を振るう！」

次の瞬間、才人は閃光の如く駆け出し、残りのワールドを切り裂き、吹っ飛ばした！ 遍在のワールドは斬られてその姿を消し、ワールド本人は才人に左腕を斬りおとされたのだが、本人がそれを理解したのは腕を斬りおとされてから数瞬の後のことだった。

痛みを自覚しても尚、悲鳴を上げないのは平民である才人に対するの貴族としての矜持だったのだらうか。それを理解する者は、この場においては本人を含めても誰一人としてわからず、この後のワールドでさえもわからなかった。

「くそ……この『閃光』が平民に遅れをとるとは……」

苦悶の表情を浮かべながらもワールドは何とか立ち上がった。明らかに戦えない状態であることは明白だったが、それでもその目から

強い意志の光だけはまだ消えていなかった。

「はあ…はあ……」

一方、才人もワールドを倒したものの、それと同時に急激な疲労感が襲い掛かっていた。駆け寄ろうとしたが、体が言うことをきかなかった。

「相棒、無茶をすればそれだけ『ガンダールヴ』として動ける時間は減るぜ。なにせ、お前さんは主人の呪文詠唱を守るためだけに生み出された使い魔だからな」

デルフはそう説明した。

ワールドは残った右腕で杖を振るい、宙に浮かんだ。

「色々と不本意なことはあったが、とりあえず目的の一つを達したからよしとしよう。どのみちここには我がレコン・キスタの軍勢が押し寄せる。君たちに逃げ場はない。愚かな王家と灰になるがいい！ ガンダールヴ！」

ワールドはそう言ってステンドグラスを割って逃げていった。才人は疲れきった体に鞭を打って、デルフを杖代わりにしてルイズの元に近寄った。

「ルイズ」

才人は気絶しているルイズの体を揺すった。目覚めないルイズに不安を覚えたが、とりあえず静かな寝息を立てていたので安堵した。

しかし、情勢は緊迫していた。教会の外からはレコン・キスタ軍と思われる馬蹄の音や軍靴が聞こえてきていた。恐らくはもうアルビオン軍は破れ、最後の止めを刺そうとウエールズとルイズたちを狙ってやってきた軍勢だろうと才人は思っていた。

「やれやれ……どうする？ 相棒」

「どうするって？」

「アルビオン群は恐らくもうやられちゃっただろう。それに外から聞こえてくる音は敵の数が百や二百じゃねえ。一万か二万、それ以上だ。空の上じゃ逃げ場はねえ。どうする？」

「そんなの決まってる」

「どうするんだ？」

「ルイズを守る」

才人の決意の籠った言葉を聞いてデルフも声に喜色を現していた。

「そこなくちゃな！ 敵勢はたった数万程度だ。散歩に行くようなもんだね」

「ああ……そうだな」

才人はそう言ってルイズの表情を見た。

「よし……行くぞ！」

そう言った時、才人の足元の地面が盛り上がった。

「ん？」

才人は慌ててその場を飛びのいた。すると、その場所はどんどん盛り上がっていき、そこから一匹のジャイアントモールが出てきた。

「モ、モグラ？」

「相棒、このモグラ何処かで見したことないか？」

すると、モグラが地面に出て、その後が続いて見知った顔が出てきた。

「ギーシュ！」

「やあ、無事かい？ 君たち」

才人はラ・ロシエールに置いてきた仲間の顔を見て驚きを隠せなかった。

「ど、どうしてここに？」

「ヴェルダンデがルイズがしている水のルビーの匂いを探つてここまで来たんだ」

「はあい。ダーリン」

すると、キュルケもその後が続いて穴から出てきた。

「……何だか随分込み入ったことになっていたようね」

教会の惨状を見てキュルケは一言そう言った。

「とりあえず、話は後だ。レコン・キスタ軍がここに向かっていている！」

「何だつて!?!」

「とにかくすぐに逃げるぞ!」

才人がそう言うのとルイズをギーシュに預けて先に行かせた。

「ダーリンも早く!」

「先に行つててくれ。すぐに行く」

「……わかつたわ」

キュルケはそう言って穴の中に入っていった。才人は最後の力を振り絞つてウエールズのところに向かった。

「ウエールズ殿下。行きましょう」

「……いや、だめだ。私はここから動けない」

「もうそんなことを言っている場合じゃ」

「私はもう持たないだろう。僕を連れて行つては足手まといになるし、トリステインに厄介ごとを持ち込むことになる。このまま逝か

せてくれ」

ウェールズはそう言つと、指に嵌めてあつた指輪を外して才人に渡した。

「アンリエッタに……渡してくれ」

「殿下……」

「これが……僕が君を愛した証だ。ここから先は僕のことを忘れて、愛する者を見つけてくれと伝えてくれ」

「……わかりました。絶対に伝えます」

「ありがとう……そして、すまない」

「いえ」

すると、砲撃が始まったのか教会が大きく揺れた。

「行きたまえ。ここももう危ない」

「……ご冥福をお祈りしております」

「ああ……ありがとう」

才人は見よう見まねの敬礼をウェールズに捧げ、穴の中へと入つた。才人が穴の中に入ったのを確認すると、ウェールズは小さくため息を吐いた。

「アルビオン王国最期か……後は任せたぞ」

やがて、教会がレコン・キスタ軍の砲撃によって倒壊。それと同時にアルビオン王家も崩壊した。

始祖の血統を持つ王家が滅んだ最初の事件として、長く後世の人々に語り継がれることになった。後の歴史家たちはこの出来事こそ、歴史の大きな転換点だったと証言した。

アルビオン王家が崩壊した日の夜、アルビオン各地で祝杯が挙げられていた。

そんな中、アルビオン王国をこっそりと出港する船があった。歴史の大きな転換の場にいるという喜びに浸っているレコン・キスタ軍は、全員が持ち場を放棄して祝杯を挙げていたため、誰一人としてそれに気づかなかつた。

「首尾はいかがでしたか？」

「ああ。上々だ」

男はそう言って懐から小さな箱を取り出した。

「それが目的のものですか」

「ああ」

男は満足そうに笑みを浮かべた。

「では、本国に向かって急ぎましようか」

「ああ」

男はそう言つて椅子に座った。部下はその様子を見て思わず笑みを浮かべていた。

「どうした？」

「いえ。いつまでそのお姿をされているのかな、と思ひまして」

「え？ ああ、忘れていたよ」

男はそう言つと首にかけていたネックレスを外した。すると、男の姿は恰幅のいい中年の顔から、見目麗しい若人の男に姿に変わった。そして、着ていた服を脱ぎ、中に入っていた詰め物を落として本来のスマートな体型に戻った。

「どうでした？ アルビオンは」

「なかなか面白かったよ。さすがに始祖の血統を持つ王家だけあつて、最期は炎のように燃え上がり、そして潔く散つていったよ」

「そうですか」

「さあ。さつさと我々が祖国へ帰ろう」

両の瞳の色が違う優男はそう言ってただ微笑を浮かべていた。

それぞれの想い（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

それぞれの想い

アルビオンから脱出した後、一行はシルフィードに乗ってトリスタニアを目指していた。アルビオンから脱出した後、才人は力尽きて深い眠りについていた。

「しかし、こうして目の当たりにしているけどアルビオンが滅びたなんて今でも信じられないね」

ギーシュは離れ行くアルビオンを見てそう呟いた。

「時代は大きな変革期を迎えているのよ。その流れに乗り遅れた国は滅びるしかないって教訓よ」

キュルケはさも当然であるかのようにそう言った。戦争で多くの小国を飲み込んで成長したゲルマニアの人間にとっては、こういうことは決して珍しいことではないという認識であった。

「しかし、どうするかね？」

「とりあえず、アンリエッタ姫に報告するしかないんじゃない？」

すると、ギーシュはキュルケのその発言に驚きを隠せなかった。

「ど、どうしてそれを？」

「宿屋でダーリングがルイズに言ってたじゃない。姫様の役に立ちたいんだろって」

「あ……」

ギーシュはあの時、確かに才人がルイズに向けてそう言ったのを覚えていた。だが、それよりもそれをしっかりと聞き逃さないでいたキュルケの観察力に恐れ入っていた。

「相変わらず鋭いね」

「褒め言葉として受け取っておくわ。それでどうするの？ さすがにそろそろシルフィードをシャルロットに返さなきゃいけないから」
そう言つと、それに合わせてシルフィードもきゅいと小さく鳴いた。

「う……ん」

すると、今まで眠っていたルイズが目を覚ました。

「……は？」

「やっと起きた？ ルイズ」

まだ意識がはっきりしていないルイズに、キュルケは一声をかけてみた。ルイズはその言葉に反応してまだ視線が覚束ない感じだったが、それでもキュルケの顔を見て少しずつ意識を取り戻してきた。

「キュルケ！ どうしてここに!？」

「落ち着きなさい。ここはもう空の上なのよ。魔法の使えない貴女が落ちたら助からないわよ」

「え？」

ルイズはキュルケにそう言われて、やっと自分がシルフィードの背の上にいることを自覚した。

「どうして……?」

「貴女は気絶していたからわからないでしょうけど、私とギーシュが貴女たちの居場所を探し出して連れ出したのよ」

「間一髪のところ、レコン・キスタ軍と鉢合わせせずに済んだのは幸運だったね」

キュルケとギーシュの言葉を聞いて、徐々にルイズはそれまでのことを思い出してきた。

「ウエ、ウエールズ殿下は!？」

ルイズはその背中にウエールズがいないことにようやく気がついた。

「残念だけど、ウエールズ殿下はここにいない。あの教会を枕に逝かれてしまったよ」

「そんな……」

ルイズはそれを聞いて心底愕然とした。まさか、ワールドがレコン・キスタの一員であるなど思いもよらなかったこととは言え、目の前で一国の王子を殺されてしまったのだから不覚以外の何物でもない。

王族に反旗を翻す貴族は恥知らずだが、獅子身中の虫が傍にいても気づかず、あまつさえ王子を討たれてしまうのは無能の烙印を押されても仕方ない。

だが、むしろルイズは今更自分にこれ以上の無能の烙印が押されることよりも、ウエールズをあんな場所で亡くしてしまったことのショックが大きかった。ウエールズの覚悟を聞いていたとは言え、戦場ではなくあんな教会で討ち死にはあまりにも無念である。

貴族ならば戦場で華々しく散っていく、それを誰もが夢に見ることであり、王族ならば尚更のことである。死ぬならば、せめて敵に自らの誇りを示すために炎のように燃え上がって鮮やかに散っていく。それこそが貴族の散り方であるとルイズも教わっている。それなのに、あんな教会で死んでしまったということになれば、先に亡くなっているかつてのアルビオンの王たちや偉大なる始祖にも顔向けが出来るはずがない。あまりにも無念であったらうと貴族であるルイズにはその心中が痛いほどよくわかった。

ルイズの父と母はかつて魔法衛士隊にいた。それゆえ、娘たちの教育にもその精神が盛り込まれている。だからこそ、ルイズは貴族の誇りというものを非常に重いものとして受け止める傾向にあり、それを穢す者を許そうとはしないのだ。

「ウエールズ殿下……」

「アルビオンで何があったかは知らないけど、残念ながら僕たちの任務は失敗だ」

「……わかっているわ」

「とりあえず今はトリスタニアに向かっているよ。とにもかくにも、アンリエッタ姫殿下への報告をしないわけにはいかないからね」

「……そういえばサイトは？」

「貴女のすぐ傍で寝ているわよ」

キュルケの言葉どおり、ルイズのすぐ傍で才人は寝息を立てていた。但し、全身に細かな傷をたくさん作っており、満身創痍という状態が正にふさわしかった。

「本当に何があったの？ ダーリンは全身に傷を作っているし、ワルド子爵はいなくなっているし」

「……ワルド子爵はレコン・キスタからの間者だったのよ」

「何だって!?!？」

ギーシュが驚くのも無理はない。魔法衛士隊の隊長とも言えはエリート中のエリートである。そんな彼が祖国を裏切って、レコン・キスタなどという恥知らず共に与するとは誰も予想できなくて当然なのである。

「ウエールズ殿下は、ワルド子爵に討たれて……」

「それが事実ならトリステイン王家が大揺れになる事態ね。もっとも、抗議するべきアルビオン王家がないから表に出ることはないでしょうけど」

キュルケは軽い口調でそう言った。彼女の言っていることは事実

であり、普段ならば他国をも巻き込んだ一大事になることなのだ。だが、抗議するべきアルビオン王家がなくなったことはトリステインにとっては正に不幸中の幸いだったのだ。

「まあ、とりあえず貴女も少し休みなさい。トリスタニアに着く頃になったら起こしてあげるわ」

「そうだよ。ここは僕たちに任せたまえ」

「……じゃあ任せるわ」

ルイズはそう言ってまた横になった。それから彼女が寝息を立てるまでは五分とかからなかった。彼女もまた、あの一件でかなり肉体的にも精神的にも疲労していたのだ。

「しかし、本当に厄介なことになったね」

ギーシュはため息交じりでそう言った。

「時代が変わる。そういうことよ」

キュルケは正に今の情勢を的確にその一言で表した。

「何だ!?!」

明け方、いきなり空から一頭の竜がトリスタニアの王城に降り立った。兵士や騎士たちは慌ててその竜を取り囲んだ。

「何者だ!　ここがトリステインの王城だと承知の上での所業か!?!」

「お待ちください!」

ルイズはシルフィードの背中から降りて、騎士団長と思われる男の前で膝をついた。

「私はヴァリエール公爵家が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。アンリエッタ姫殿下の命を受け、その任務からの帰還報告に参りました!」

「何!?!　ヴァリエール公爵家の……。確認を取りますので、任務内容をお教えいただきたい」

「申し上げることは出来ません」

「何!?!」

「姫様より直々に下された密命でありますので申し上げますことは出来ません」

「ですが……!」

「お待ちなさい！」

すると、その場にアンリエッタが姿を現した。彼女の姿を確認すると、兵士や騎士たちも慌てて膝をついて彼女を迎えた。

「彼女たちは私の命を受けて動いていた者たちです。私が直接話を聞きます、貴方たちは持ち場に戻ってください」

『ははっ！』

その言葉を聞いて兵士や騎士たちはそれぞれの持ち場に戻っていた。アンリエッタはルイズたちを王城の自室へと連れて行った。その際に、ルイズを除いた才人たちは別室にて待機することとなった。

「ルイズ」

その際に才人はウェールズから預かった風のルビーを手渡した。

「これって！」

「ウェールズ殿下からアンリエッタ姫への伝言がある。『これは僕が君を愛した証だ。ここから先は僕のことを忘れて、愛する者を見つけてほしい』」これがウェールズ殿下の最期の言葉だ」

「……わかったわ。必ず伝える」

ルイズは才人から渡された風のルビーを固く握り締めてそう力強く言った。彼女はそのままアンリエッタの部屋に入り、才人は応接室にて彼女の帰りを待つことになった。

ルイズはアルビオンで怒った全てをアンリエッタに包み隠さず話した。アンリエッタは真剣な表情でルイズの言葉に聞き入っていた。

それは決して観劇の中の悲劇のように飾られた言葉ではなく、あの時、あの場で起こっていたことを一つ残さず細部に至るまでに淡々とした言葉で述べられる報告だった。個人の感情はそこにはなく、ただ任務に対しての報告だった。

「そう……ウエルズ様は逝ってしまわれたのですね」

「はい。そして、これがウエルズ様より託されたものでございませう」

ルイズはアンリエッタに才人から手渡された風のルビーを見せた。

「これはアルビオン王家に伝わる風のルビー……」

「ウエルズ殿下よりアンリエッタ姫殿下に贈られたものです。これを直接殿下から受け取ったサイトがウエルズ殿下からアンリエッタ姫殿下に贈られた言葉があります」

「私に……?」

「『これは僕が君を愛した証だ。ここから先は僕のことを忘れて、愛する者を見つけてほしい』これがウエルズ殿下よりサイトが託された一字一句違えない言葉です」

アンリエッタはその言葉を聞いた瞬間、目から涙が零れ落ちた。それまでは何処かまだウエルズの死を事実として受け入れられて

いない部分があった。だが、その最期の言葉はアンリエッタの心の堤防を決壊させて感情を溢れさせるのに充分だった。

「私は残念ながらワルド子爵の攻撃によって気絶したため、ウェールズ様の最期を直接見ることは叶いませんでしたが、サイトはともご立派な最期だったと申しておりました」

「そう……殿方はいつもそうね。残される女はどうしたらいいのかしらね……」

「恐れながら姫殿下に申し上げます。ウェールズ殿下は王族としての責務を全うしただけにございます」

「王族としての責務……？」

アンリエッタはルイズのその言葉の意味が理解できなかった。だが、ルイズの瞳に宿るその強い光が、アンリエッタ目をルイズの目から背けさせることを許さなかった。

「王族は国家を守るためにその身を捧げることが義務なのです。ウェールズ殿下は最期までアルビオン王国を守ろうとしていたのです」

「……私の事は眼中になかったということね」

「ええ。ウェールズ殿下は最期まで王族として、ご立派にその責務を成し遂げました。たとえ、命を散らした場所が戦場でなかったとしても、私は戦場で散ったほかの王族や貴族たちに決して劣らぬものであったと私は信じております」

ルイズは敢えてアンリエッタの言わんとしていることを無視して、

ウェールズは非常に勇敢な死を遂げたということを誇張していた。最期を見取ることが出来なかったことは非常に齒痒く思ったが、それでもウェールズの死は勇敢なものでなければならぬのだ。

死ぬ最期の一瞬までアルビオンを守るうとした男の名誉は、何が何でも守られなければならないものなのだ。

「そう……。ルイズ」

「はい」

「あの人の最期の言葉を届けてくれて……。ありがとう」

「……もつたいないお言葉でございます」

二人はそれ以上の言葉を交わせなかった。言葉以上のものが、双方の心の中にいくつも湧き上がってきており、双方はそれを必死になつて押さえ込んでいた。そうしなければ、二人ともこの場で大声を上げて泣き出してしまいそうになつたからだ。

それからしばらくして、ルイズはアンリエッタの部屋を出てシルフィードに乗って魔法学院に戻つた。学院に戻ると、才人もルイズもすぐに寢床に入った。

とにかく今は、ただ眠りたかつた。起きていれば何かを考えてしまふ、何も考えなくて済むようにただ眠りにつきたい。

あの激しくも…悲しい出来事はこうして幕を下ろした。

国を愛した一人の男の壮絶な死をもつて……。

それぞれの想い（後書き）

G・W中に一気に書き上げたいと思い、今回は三つを一気に上げています。

ようやくアルビオン編は終わりました。ここから先はまた主人公やその他の方々の悪巧みが始まりますのでよろしくお願いいたします。

しかし、元々使い果たしたとはいえストックがもうない……何とかしなければ。

親子の対話（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

親子の対話

才人たちがアルビオンに向かっている頃、ゲルマニアの首都ウィンドボナでは謁見が行われていた。

「久しぶりに会うのだが、相変わらず壮健のようだな」

「恐れ入ります、閣下」

アルブレヒト三世の前で膝をついているのはヴァルデス、トリステイン魔法学院に入学してから一年ぶりの再会だった。

「結婚式が間近に迫っているが、奥方：いや、婚約者たちとは仲良くやっているか？」

「はい。正直、女同士での争いなどが起こるのではと危惧はしましたが、彼女たちは彼女たちで仲良くやっており、家の中は平和そのものでございます」

「そうではない」

「は？」

アルブレヒト三世にそう言われて、ヴァルデスは思わず聞き返してしまっただが、すぐにアルブレヒト三世が何を言っているのかに気がついた。

「失礼いたしました。私と彼女たちの仲も良好です」

「それは結構。一日も早い二世の誕生を期待しているとお前から伝えておいてくれ」

「閣下にお気遣いいただき、ありがたき幸せにございます。必ず今のお言葉は伝え、私自身もこれまで以上に勤めに励む所存であります」

「うむ」

二人の会話を聞いていて周りに控えている重臣たちも安堵の表情を浮かべていた。少なくとも、夫婦仲は安泰であり、結婚が壊れるなどということがないことを確認できたからだ。ヴァルデスの結婚が滞りなく行われれば、その時点でゲルマニアは始祖の決闘を継いでいる国々と対等になり、アルブレヒト三世は各国から陛下と呼ばれるようになるのだ。

仮に結婚したのがヴァルデスであるからアルブレヒト三世はその限りにあらずと、各国が否定したとしてもヴァルデスが次期ゲルマニア皇帝になることは既に確定事項のようなものだから、それが早いか遅いかだけの問題である。それに、元々国力においてはハルケギニアで一番の国なのだから他の小国がそんなことを言えるはずもないのでアルブレヒト三世が陛下と呼ばれることになるだろうと考えていた。

「ところで、母上がヴァリエール公爵の娘と愛人をあてがったと聞いた」

「はい。仰る通りでございます」

「愛人の方は何度かお前と一緒にいるところを見ているのでどんな

女なのかはわかるが、ヴァリエール公爵の娘というのはそんなにいいの？」

「いい……と申しますと？」

「あの母上が妙に褒める女だからな。少なくとも、わしが今まで手を出した女たちよりずっと器量良しだと言っていた」

実際、ツエルプストー辺境伯と犬猿の仲であるヴァリエール公爵家の娘を手中に納めたことはアルブレヒト三世にとっては決して悪い知らせではなかった。ツエルプストー辺境伯家との間に少ししこりができるかもしれないが、時間さえ経てばそのしこりが小さくなり、やがてはヴァルデスを通じて両家を上手く仲裁することも可能であると考えているからだ。

「綺麗な女性であることは間違いないですね。病弱だったとのことですが、イリーズ様の治療によってもう健康な体になりましたのでお勤めのほうも全く問題はありませぬ」

「そうか……結婚式の場で会つのが楽しみだ」

それからしばらく色々なことを互いに話をしたのだが、その中で自らの娘であるエルティナの話は最後まで出ることにはなかった。そもそも、結婚をしていないアルブレヒト三世にとって、エルティナは私生児であるのでその存在を自ら口にすることはできなかったし、今はまだその時期ではないと考えていた。

ヴァルデスもヴァルデスでそのことをしっかりと理解していた。アルブレヒト三世やイリーズからはそのあたりの事情を詳しく聞いたことはないのだが、エルティナ本人がベッドの上での寝物語にそ

のことを話していた。だからこそ、そのあたりの事情を察したのでアルブレヒト三世に突っ込むような愚かなことはしなかった。エルティナは一応は貴族の娘であるが、それよりはアルブレヒト三世の娘であるということの方が諸外国に対してのイメージが違ってくるので、正式にそのことを発表する機会をうかがっているのが現状だった。

それから謁見は終わり、ヴァルデスはそのままウィンドボナにあるコーラッド家の別邸に向かって馬車を走らせた。馬車から見るウィンドボナの街は活気に満ち溢れていた。街路の何処にもゴミは散らかっておらず、衛生管理はしっかりと行われていることがわかった。

「ん？」

すると、コーラッド家の別邸に実家のものとは違う馬車が停まっているのを見つけた。そこにはゲルマニア皇室の紋章がしっかりと刻まれており、ヴァルデスはそれを見て物凄く嫌な予感が頭によぎった。

「あら？ おかえりなさい」

「……お久しぶりでございます。イリーズ様」

コーエンやエレネが待っているはずの部屋では、まるで彼が今日来るのをわかっていたかのようにイリーズが紅茶の入ったカップを片手にそこにいた。コーエンやエレネもイリーズを前にしてすっかり恐縮してしまっていた。

「どう？ その後は」

「ははっ。おかげさまで仲良く過ごしております」

「それは何よりだね。さあさ、紅茶もあるんだしお座りなさいな」

「失礼いたします」

ヴァルデスは促されるままに席に座った。本来なら、この家の主はコーエンであり、ここは生家の所有物なのだから遠慮する必要などないのだが、王族と呼ばれる身分の者が一人いるだけでそんな理屈が通用しなくなるところが何とも理不尽であるが、これが現実というものでもあった。

「結婚式ももうすぐね。閣下は何て言っていたの？」

「一日も早い二世の誕生を期待している、とお言葉をいただきました」

「ふふふ。私も早く貴方の子供の顔を見たいわ。ねえ、コーエン殿、エレーネ殿」

「はい」

「仰せの通りにございますわ」

イリーズの言葉にすぐに二人は同調した。このあたりはヴァルデスも予想していたことなので、今更それについてどうこう言いつつもりはなかった。それに、子供を儲けることは貴族の義務でもあるのだからそれを怠ることは最初からできないのだ。

「私や彼女たちも一日も早く皆様に子供の顔を見せることができるようこれからも努力してまいります」

「ええ。その時は是非声をかけてね。そうそう、エルティナの子供の名前は私がつけるからね」

貴族は爵位が高ければ高いほど、生まれてくる子供の名前を生みの親がつけることが難しくなる。慣習として、生まれてきた子供は両親がつけたり、高名な占い師などに縁起のいい名前を考えてもらうことが多いのだ。

はつきりと口に出されてはいないが、イザベラの子供はジョゼフが、シャルロットの子供はアルブレヒト三世が、カトレアの子供はヴァリエール公爵が、エルティナの子供はイリーズが名づけるということは最初から決まっているようなものだった。だから、イリーズの申し出に対して驚くようなことはなかった。父親側の両親であるコーエンやエレネが名づける余地がないのが残念であると思っていたのだが、二人もさすがに相手が自分よりも爵位が上の貴族や王族なので文句を言うこともできなかった。二人が名付けられるとすれば、第二子以降の子供からである。どちらにしろ、生みの親である二人が名づけることなど出来ないのだ。ただ一人、愛人であるネージユを除いては。

スクウエアメイジであれ、今は平民であるネージユに貴族が名を与えることなどするはずもない。だから、生まれてきた子供の名は二人でつけることになるのだ。

「心得ております」

「ありがとう。いい名前を考えておくから期待していてね」

「はい。よろしくお願いいたします、イリーズ様」

ヴァルデスはそう言ってイリーズに向かって一礼をした。イリーズは微笑を浮かべながら、未だ見ぬ自分の孫の姿を頭に思い浮かべていた。コーエンとエレネも早く自分の孫に会いたいという思いが募っていった。

「ところで、結婚式についてなんだけど」

すると、イリーズは話題を変えてきた。

「はい」

「ちょっと問題が起こりそうなのよね」

「……アルビオンですか」

「察しがいいわね」

イリーズはそう言って更に口角を上げた。

「あそこがいよいよ危なくなつたのよ。多分、近日中にもアルビオン王家が倒れるわ」

「始祖の血統を持つ国が倒れるということになったら大騒ぎになる。教皇聖下も結婚式どころではなくなるといっわけですか」

「ええ。まあ、ゲルマニアとしては今回の結婚式にアルビオンは全くの無関係だからどうでもいいんだけどね」

イリーズにとってアルビオン王家のことは本当に他人事だった。むしろ、せっかくの結婚式が台無しにされそうになっているので不快な思いさえしているようだった。

「アルビオン次第では結婚式が伸びてしまうのは腹立たしいわ」

「……まあ、さすがにこればかりは仕方ないでしょう。一応、私もアルビオンの情勢は把握できるようにしています」

「とつくに手は打っているってわけね。余計なおせっかいだったかしらっ。」

「いいえ。わざわざ気にしていただけで恐悦至極でこそあれ、おせっかいなどは決して思いません」

ヴァルデスのその言葉を聞いて、イリーズは少しだけ機嫌をよくしたようだった。コーエンもエレネもイリーズの機嫌がよくなつて、表情には出さなかったが心の中で安堵していた。

「ま、詳しいことはもう少し先になりそうだからわかり次第連絡するわ」

イリーズはそう言うのと席を立ち上がり、周りもそれに合わせて立ち上がるうとしたが彼女はそれを制した。

「見送りは結構よ。数年ぶりの親子の再会なんだからゆっくり過ぎしなさいな。では、失礼」

イリーズはそう言って屋敷を後にした。見送りは結構とのことだ

つたが、それでも侍従たちは彼女をしつかりと見送った。

「イリーズ様、お帰りになりました」

「ご苦労」

侍従の一人がそう報告すると、三人もようやく一息つくことが出来た。

「やれやれ。イリーズ様がこの屋敷にお越しになられたときは驚いたぞ」

「そうですね。私は初めてお会いしましたわ」

「お前は何度かお会いしているそうだな、ヴァルデス」

コーエンもエレネもイリーズに直接会うのはこれが初めてだった。そもそも、宮内でもイリーズに会えるのは極僅かな人間であり、機嫌が悪いときにはアルブレヒト三世でさえ彼女に会うことは叶わない。彼が唯一頭の上がない人間がイリーズであり、さすがに自らの生母だけは彼でも幽閉できなかった。

それにアルブレヒト三世でさえ、イリーズは手に余る存在だった。頭の回転も良ければ、メイジとしての実力はまさしく超一級のものを持っているので、下手に手を出せばただでは済まないことを彼も理解していた。

「はい。孫であるエルティナ様をご紹介いただいた折にお会いいたしまして、それからご縁ができました」

「そうか。大変光栄なことだ」

「ははっ」

「それにしても、久しぶりに会ったけど随分と立派になったわね、ヴァルデス」

エレネにしてみれば十一歳のとき以来の再会である。突然皇帝に仕えることになったことは光栄なことではあったが、母親にしてみればまだまだ成長していく過程を見れなかったのが少し残念だったが、今のこの姿を見れば立派になったことはすぐにわかったのでエレネは安堵していた。

「それにしても、お前ほど良縁に恵まれている男はいないだろうな」

コーエンがヴァルデスにそう言った。実際、どんな爵位の高い貴族だろうとこれほどの良縁に恵まれるということなど今後百年経とうとも有り得ないというのが貴族たちの共通の認識だった。彼らはこれを世紀の奇跡だと噂していた。

「ええ。全く以って身に余る光栄だと存じています。父上」

「ヴァルデス。久しぶりに会ったけど元気そうで何よりだわ」

「ご無沙汰いたしましたして申し訳ありません。母上」

エレネは立派に成長したヴァルデスの姿を見てやっとこれまで
に耳に入っていた噂や事実を認めることが出来た。夫であるコー
エンからも色々と聞かされてはいたが、自分の息子が本当にそんな人
物であるとは信じられなかったのだ。そもそも、こんな夢物語みた

いな現実を信じるといっほつに無理があるといっものなのだ。

「貴方が元気ならそれが何よりよ」

「ありがとつございます」

「しかし、せつかくの結婚式が随分と面倒なことになりそうだな。我が国でも面倒を起こしてくれたレコン・キスタがまたお前に面倒をかけるとは……」

「父上、これは初めから予想していたものです。結婚式が伸びる可能性があることは彼女たちも初めから承知しております」

「そう……でも、やはり結婚式が伸びると聞いたらあまりいい顔はしなかったのではないですか？」

「まあ……」

ヴァルデスは基本的に聞き分けがいい婚約者に恵まれているのでそれほど説得に苦労しなかったが、それならば尚更お勤めに励んで二世の誕生を促進しなければ、と交代で彼と事に当たっていた。おかげで、彼は少し寝不足気味の生活を送ることを余儀なくされた。

さすがにその事情を話すわけには行かなかったので適当にお茶を濁すことで誤魔化した。

「そうだろうな。人生の晴れ舞台を邪魔されたのだからそれは仕方あるまい」

「早くあの方々のドレス姿を見たいものね」

コーエンとエレーネは上手くヴァルデスの言葉を曲解して、その本当のところを知ることにはなかった。

「私も早く晴れ姿を見せられるように努力いたします」

ヴァルデスはそう締めくくって無理やりこの会話を終わらせた。

「ところで、辺境伯になられてからの領地経営はいかがですか？
父上」

「ああ。最初は領民同士での争いもあったが最近は落ち着いてきた。どうやら、前の領主どもは相当高い税金をかけた上に着服していたらしい。税金が下がったと涙を流して喜んでいたぞ」

「それはまた……」

領主が高い税金をかけて平民から搾取する話はよくあるものだった。だから、領主が変わり税金も下がるとその領主がとてもしい領主のように思えてしまう。これもまたよくある話であった。

「だが、あまりにも広くなったから私一人では最早全てを見る事ができん。だから、ラフィールと私で領内の管轄を決めてみて回ることにしている」

「そういえば、ラフィールもなかなか優秀だと聞いていますよ」

ラフィール、ヴァルデスの八つ下の弟であり、現在は九歳である。ラフィールがなかなか領地経営において優秀さを発揮しているという話は、城にいたヴァルデスの耳にも届いていた。

「うむ。お前の弟もなかなか優秀だ」

「それは何より」

「だが、お前ほどではないな」

すると、コーエンは少し鋭い目つきできっぱりと言い切った。

「父上。お褒めいただくのは恐縮ですが……」

「事実だ。ラフィールは優秀だが、精々いい領主止まりだ。お前のようにはどう足掻いてもなれない。いや、誰もお前のようにはない」

「幸運に恵まれていたことは認めますが……」

「まあ、過ぎたことをどうこう言っても仕方ありませんわ。肝心なのは今とこれからなのですから」

不毛な話し合いが続きそうな雰囲気を感じ、エレネがそう言っただけで割り込んだ。彼女の言葉があまりにも正論だったので、ヴァルデスもコーエンもこの話題をもう取り止めた。

「まあ、何だ。領地のことなどは私やラフィールでしっかりとやるから何も心配するな」

「ありがとうございます。父上」

「結婚式を楽しみにしているとイザベラ様たちに伝えておいて」

「わかりました。母上」

こうして久しぶりの親子の対話を楽しんだヴァルデスだったが、それから数日後、アルビオン王家が倒れたという情報が入り周りが慌しくなった。

アルブレヒト三世の夢（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

アルブレヒト三世の夢

「トリステインから軍事同盟要請ですか？」

「うむ」

アルビオンが倒れてからすぐ、トリステインから軍事同盟を結んでほしいという旨の要請があった。ヴァルデスもマチルダを通じてアルビオン王家が倒れたのをその日のうちに知っていたので、アルビオン王家が倒れたことに対しては驚くことはなかった。しかし、トリステインがゲルマニアに軍事同盟を結んでほしいと歩み寄ってくるとは思いつきもなかった。

そもそも、トリステインの貴族にとってゲルマニアは天敵みたいなものである。歴史も何もない、ただ金や力さえあれば誰でも貴族になれるということを揶揄して蛮人と罵るくらいなのだから。

そんな彼らが自分たちから同盟を申し出てくるなどとは信じられなかった。

「歴史とプライドだけが一流のあの国が、よく自分たちから言ってきましたね」

ヴァルデスは正直なところ、トリステインという国をあまり好きにはなれなかった。学院の生徒には好きになれる者がいたが、それでも生徒でさえその大半が妙にプライドだけが一流で、肝心なところを押さえられていないという者が多かった。生徒でさえそうなのだから、国政に携わっているような大物貴族はもっとその傾向に強いのだらうと思っていた。要は極端なのである、プライドだけが一

流でその他が三流という貴族か、プライドはそれほど高くなくその他は一流であるというのがトリステイン貴族の特徴であった。もっとも、あの国においては前者が圧倒的にその数が多かった。

「マザリーニ枢機卿が無理やり押し切ったらしい」

「なるほど」

「それでお前はどう思う？」

「同盟ですか？ 受けるメリットが何処にありますか？」

ヴァルデスはあっさりと否定の言葉を述べた。そもそも、レコン・キスタならばゲルマニア一国だけでも充分対処できる相手なので同盟を結んだところでゲルマニアに全くメリットがなかった。そもそも、ガリアと良好な関係を築いている今、他の国と同盟を結ぶことはガリアを刺激することにもなりかねないのでゲルマニアとしてそれは避けなければならなかった。

「ま、そのとおりだな。だが、トリステインとしては我が国に断られたらそのプライドを思いっきり傷つけられたと思うだろうな」

「別によろしいのではないでしょうか。そもそも、彼らは我らに文句を言う前にレコン・キスタを何とかしなければならぬでしょうし」

「文句を言うてくるとしたらもっと後ということか」

「もっとも、アンリエッタ姫を人質にして同盟を結ぶと言うことならば話は別ですが」

「今更アンリエッタは必要ない。イザベラ姫やシャルロット姫、それにトリスティン貴族ではヴァリエール公爵家令嬢がお前に嫁いでいるのだから今更厄介ごとを抱え込むだけだ。それとも、お前が娶るか？」

「遠慮させていただきます。これ以上、眠れない夜が増えると体を壊してしまいますので」

「仲が良くて結構だ」

アルブレヒト三世はそう言って笑った。ヴァルデスにしてみれば決して笑い話では済まされない。子供を儲けることが義務である以上、必死になって励まなければならぬし、五人も女がいるとその疲労度もかなり高いといえる。人生の最期が腹上死ではさすがに格好はつかないが、腹上死している男の貴族と言うのは意外と多い。もっとも、妻の上で死んだのならばまだ格好はつくが、妻に隠して付き合っていた愛人の上で死んだということはかなり格好が悪い。

「まあ、そういうことならばトリスティンとの同盟はとりあえず結ばないことにしよう」

「ですが、本当によろしいのですか？」

「ああ。元々、最初から同盟など受けるつもりはない」

「まあ、そういうことでしたら……」

「とりあえず、婚約者たちが恋しくなるかもしれないがもうしばらくゲルマニアにいる」

「かしこまりました」

ヴァルデスはそう言って謁見の間を出た。それから牙部隊に顔を出したり、書類の処理などをして過ごしていたがある日事態は一気に変わった。

「トリステインがレコン・キスタを打ち破った？」

「ええ。忍ばせておいた密偵の者からそう報告がありました。トリステインに進軍していたレコン・キスタの空軍をトリステインはアンリエッタ姫の指揮の下で見事に撃沈したと」

「アルブレヒト三世が信じられないのも無理はない。ヴァルデスでさえ、密偵のこの報告を俄かには信じられなかった。しかし、一人ならまだしも複数の密偵からトリステインはレコン・キスタの進軍を見事に食い止めたということで勝利ムードに湧いているとの報告までもたらされているので事実として受け止めるしかなかった。」

「信じられんな……トリステインの脆弱な空軍でアルビオン空軍を打ち破るなど信じられん」

「密偵の報告だと打ち破ったのはトリステイン空軍ではないとのことです」

「ほう……」

ヴァルデスの言葉を聞いてアルブレヒト二世は面白そうにそう言った。

「今のトリステインに協力する国があったとでも言うのか？」

「それが……」

ヴァルデスもここに関してはどう報告していいかわからなかった。報告した密偵でさえ、状況がよくわからずに非常に抽象的な表現でしか報告してこなかったからだ。

「どうした？」

「密偵からの報告では、見たことも聞いたこともない新種の竜が一騎でアルビオン空軍を撃沈したと……」

「一騎だと……？」

「はい。風竜の如き速さと火竜の如き攻撃力にて敵の竜騎士団を撃沈させ、最後にどんなドラゴンのブレスやスクウェアアスベルでさえ上回るほどの火球によって軍艦を全て撃沈させたとのことですよ」

「……夢物語を語っているというわけではないのだな？」

「もちろんでございます」

だが、傍から聞けば夢物語にしか聞こえないのも事実だった。だ

が、現実にトリステインは戦勝ムードに沸き立っていると言うのだから、これは紛れもない事実か、事実に近いものであることは間違いないかった。そもそも、ヴァルデスの密偵はマチルダ以外にも優秀な人間を選別してことに当たらせており、その全員がほぼ近いことを述べていれば事実だと認めざるを得なかった。

「……トリステインは新兵器でも開発していたのか？」

「ですが、そのような兵器があるにも拘らず、直前までレコン・キスタと話し合いを持つとしていたとのことです。恐らく、トリステインが用意したものではないと思われます」

「では、何だと言うのだ？」

「残念ながら現時点では何とも言えません。引き続き調査をさせております」

「なるべく早くに確認しろ。脅威になるとは思えんが、万が一ということもある。トリステイン如きにアドバンテージをとられるようなことだけは絶対にあってはならない。わかっているな？」

「ははっ」

トリステインがゲルマニアを嫌っているように、ゲルマニアもトリステインを嫌っているのだ。始祖の血を手に入れた今、歴史と伝説しかないあの国の下にゲルマニアが甘んじなければならぬという状況だけは絶対に受け入れられないものだった。アルブレヒト三世もこれまでは仕方ないと閣下という呼称に甘んじてきたが、これから先は始祖の血統のある点では対等になるが国力ではるか上に立つことができる。トリステインがゲルマニアの下に甘んじるのが当

然であるというのが彼の考えだった。

「しかし、仮にトリスティンが新兵器を持っていたとして。我らに同盟を申し出たのは新兵器の存在を隠すためのブラフということだったのだろうか？」

「どうでしょう？ 本当に新兵器を持っていたのなら考えられなくもないのですが……そもそも、あの国に新兵器を開発するような余裕があったとも思えません」

「……まあいい。お前はそのあたりを調べ上げる。ヴァリエール公爵あたりならば何かの情報も持っているだろう」

「かしこまりました」

「ここまで来るのに多大なる労力と時間がかかったのだ。これ以上、くだらぬことで回り道など出来ぬ」

ヴァルデスはアルブレヒト三世が殊の外、トリスティンに現れた新兵器に対して脅威を抱いていると感じていた。ヴァルデスにしてみれば、確かに強いことで知られるアルビオン空軍を一騎で倒したという事実には寒気さえ覚えるが、所詮は個人の力。本当に結束の固い組織力の前ではたいした脅威にはなりえない。

だが、アルブレヒト三世がここに至るまでに辿ってきた道のりは決して甘いものではない。自らの権勢を確保するために、親族をも幽閉するという徹底振りを発揮しているにも拘らず、それでもまだアルブレヒト三世を玉座から落とそうとする輩はおり、アルブレヒト三世が皇帝に就任してからはずっとそういう連中との暗闘が続いていたし、一度足りと負けたことはない。それゆえ、彼は些細なこ

とでも、それがはつきりとするまでは決して見逃すようなことはない。さすがのヴァルデスもこれだけは重ねてきた経験が違つたために思いを馳せるには至らず、ただ疑問として残つた。

「ヴァルデス」

「はっ」

「……ゲルマニアはハルケギニア統一ができると思うか？」

この言葉には周りにいた重臣たちも目を丸くして驚いていた。誰もが一度は冗談として口にする夢物語、それを正式な謁見の場で聞くことになるうとはこの場にいる誰一人として予想もしていなかつたことだからだ。ただ一人を除いて。

「もとよりそのつもりでございます」

「そうか……もういいぞ」

「失礼いたします」

ヴァルデスは一礼をして謁見の間をあとにした。後に、この一件は城の中を駆け巡つた。いくら同じ家臣であつてもそのような夢物語をあのアルブレヒト三世が口にしたということには、それだけの驚きを与える要素があつた。

その後、ヴァルデスはトリステインにある別荘に戻つていった。

アルブレヒト三世の夢（後書き）

一週間ちょいぶりの更新です。

久しぶりに我らが主人公も登場いたしました。これから頑張っても
らいます。

魅惑の妖精亭（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

魅惑の妖精亭

ヴァルデスがゲルマニアから戻った頃には学院は夏休みに入っていた。ほとんどの生徒が実家に帰省していたので、ヴァルデスも学院には行かずに屋敷でのんびりと過ごしていた。

特に課題が出ているというわけでもないのに、ヴァルデスは屋敷の護衛を相手に稽古をしたりして毎日を過ごしていた。それに才人が時々屋敷を訪れては自分の世界のことを話していた。ルイズもそれについてきてカトレアとお茶を楽しんでいた。

密偵から聞いた新種の竜については才人の持っている飛行機というものであることはわかったが、アルビオン空軍を一気に全滅させた巨大な光については何も語るうとはしなかった。ヴァルデスは才人が何かを隠しているとは感じていたが、無理に聞き出すことはしなかった。元々、お調子者な性格であることはヴァルデスも重々承知していたので、そのうち上手く聞き出そうと考えていた。

才人は話をするだけでヴァルデスから貰えるお小遣いが嬉しかったし、ヴァルデスはヴァルデスで今まで聞いたこともないようなことばかり聞くことが出来たので楽しかった。

だが、才人も毎日来るわけではなかったものでそれ以外は退屈な毎日を過ごしていた。それに、それは婚約者たちも同じだった。

学院に行っていれば色々と暇を潰すこともできたのだが、屋敷に籠りきりでは退屈しかないのだ。イザベラもシャルロットもガリアに帰るつもりもないし、他の三人についても同様だった。だから、どうしても出来ることは限られてしまうのであり、男女がすること

と言うのは古来から変わらないことだった。

おかげで、日に日に艶やかになっていく婚約者に対し、ヴァルデスは少し疲れを感じており、時折欠伸を必死になって噛み殺すようになっていた。

そんな時、キュルケが面白い店がトリスタニアにあるということ でシャルロットを誘いに来た。

「面白い店？」

「そうよ。なかなか繁盛しているらしいわ」

「どんな店？」

「ちょっと変わったお店らしいんだけど、味の方はなかなかよ。どう？ 行ってみない」

「……」

すると、シャルロットはヴァルデスを見た。ヴァルデスもその視線に気づき、少し考えてから承諾の返事をした。

「せっかくだから、俺も行ってみることにしよう」

「いいの？ 屋敷から離れても」

キュルケはそう訊ねたが、ヴァルデスは問題ないと言返して終わった。そもそも、やることがあまりにもなさすぎるのでちょうどいい気晴らしになると考えていた。

「せっかくだから他の皆も誘ってみるか」

「え？」

「ちょっと待っててくれ」

ヴァルデスはそう言ってシャルロットの部屋を出た。キュルケもまさか他の婚約者たちを巻き込んでくるとは思わなかったので、少し驚きを隠せなかった。

「いいの？ 他の方々を巻き込んでも」

「大丈夫。大したことじゃない」

これだけの王族が一気に訪れるという事態は充分大したことである、とキュルケは思ったし、それは他の誰に聞いてもキュルケと同じ感想を抱くほどのものだった。

それからすぐにヴァルデスは部屋に戻ってきて、全員がその店に出かけるということを伝えた。外を見ると、全員のお出かけということで護衛の人間たちが慌しく動いていた。それを見ると何だか申し訳ないような気がしていた。

「さて、それじゃあ行くこうか」

「え、ええ」

一同が表に出ると、そこにはギーシュとモンモランシーもいた。キュルケの話だと、寮に残っていたのだがやることがなかった上に、

この暑さで妙なことをギーシュが考え出したのでモンモランシーを守る意味でも連れ出してきたとのことだった。

「なるほど……」

「女子寮で襲い掛かるとはなかなか度胸のある男じゃないか」

ヴァルデスは呆れていたが、イザベラは少し面白がっていた。

「まあいい、そろそろ行くぞ」

一行は数台の馬車に乗ってトリスタニアを目指した。それはさながら大名行列みたいであったが、乗っているのが王族なのだからそれは間違いではなかった。

「そう言えば、ルイズやサイトは一緒じゃなかったのか？」

ヴァルデスは同じ馬車に同乗しているキュルケに訊ねてみた。

「はい。ダーリンもルイズも寮にいなかったのです」

「実家にでも帰ったか？」

「さあ？」

「……まあいい。せっかくだし今度顔見せにヴァリエール公爵家に行ってみるか」

何となく言ったことなのだが、こっちから一度自分たちの義理の両親に会いに行くということをしたことがなかったので、この夏休

みにそれを済ませてしまおうと考えていた。

「ヴァリエール公爵の顔を一目見るのも悪くない」

「そうですね。私は旦那様と初めてお会いしたときに一緒に顔を合わせていますけど、それ以来ご無沙汰ですもの」

「ええ。きっと父も母も喜ぶと思いますわ」

そんな話題をしながら馬車は数時間かけてトリスタニアにたどり着いた。空は茜色に染まり、もう少して夜を迎えるところだった。

「相変わらずこの町は少し汚いわね」

キュルケはそう呟いた。町の入り口で馬車を降りて、護衛の数を少し絞って町を歩いていた。あまり目立たないように護衛たちは少しだけ距離を置いて歩いていた。

「それでその面白い店は何処にあるんだ？」

「もう少し行った先ですわ」

「そうか」

すると、そこは既にたくさんのお客でごった返していた。主に男の客が多いというのが第一印象だったが、その理由はすぐにわかった。

「飲食店にしては露出の多い衣装だな」

「そうですね」

ヴァルデスが何処か冷めたような口調で言うのに対し、それに同意したギーシュは明らかに興奮していた。そして、それを後ろで見ているモンモランシーがまた怒りがふつふつと湧き上がってきていた。

この『魅惑の妖精亭』では、ウエイトレスが全員ビスチエ姿という一風変わった格好で接客を行っており、見えている胸元や見えそうで見えないデルタゾーンに男の視線が注がれているのだ。さすがにこの店に女性一人で来るのは勇気がいると思った。

「しかし、これだけ客がいると座るだけでも苦勞しそうですね」

「よろしければ店に行つて席を空けさせましょうか？」

すると、ギーシュの言葉を聞いた護衛の一人がヴァルデスにそう言った。

「いや、そんなことをしなくていい。料理屋では待つこともまた一興だ」

「ははっ」

護衛はそう言つてすぐにヴァルデスの傍から去つていった。一行は席待ちをしている平民たちに混じつてその列に並んでいた。貴族が平民の列に並んで待つというのはやはり異様な光景であり、身なりや立ち居振る舞いから彼らが貴族であるということは並んでいるものたちにもわかつたので、列と列の間が彼らで少し空いていた。

「さすがに少し目立ったか」

「そうかい？ まあ、こっちだってちゃんと列に並んでいる客なんだからいいじゃないか」

キュルケたち学生組みは並んで待つということに少し苦痛を感じているようだったが、ヴァルデスの婚約者たちは全然そういうのを苦にしていなかった。むしろ、珍しい経験だと楽しんでた。待つ間に料理の味を想像したり、他愛もない話をしたりと普段ならば絶対にできないようなことを経験することに楽しさを覚えるということに関しては年の差など関係はなかった。むしろ、待つことに楽しみを覚えることができるのは人間として成長している証のようなものでもあった。

「大変お待たせいたしました。こちらの席へどうぞ」

三十分ぐらい並んだ頃、ようやく一行が座れるだけの席が空いたのでウエイトレスがその席に促した。テーブルは二つあり、大きなテーブルにはヴァルデスとその婚約者たち、小さなテーブルにはキュルケたち学生組みが座る形になった。キュルケとしてはシャルロットと座って色々と話をしたかったのだが、さすがにこの状況でそんなことを言うわけにはいかず、おとなしく席に座ってギーシュやモンモランシーのやり取りを見て楽しむことにした。

「お待たせいたしました。ご注文をどうぞ」

すると、ウエイトレスが注文を取りに来たが、どういいうわけかトレーで顔を隠していた。

「君、どうして顔を隠しているんだ？」

ヴァルデスが訊ねたが、ウエイトレスはただこう言った。

「いえ。私如き卑しい身分の者が高貴な身分の方にお顔を見せて不快な思いをさせないためですわ」

その言葉を聞いて全員が顔を見合わせた。そもそも、ピンクブロンドの髪をしている女性などこのトリステインでも相当珍しい部類に入るし、その声にははつきりと聞き覚えがあった。

「君、私はそんなことを気にしないから顔を見せたまえ」

「い、いえいえ！ そんな滅相もない！」

そして、ヴァルデスの言葉に対してもウエイトレスは断固として顔を見せようとはしなかった。どうしようかと考えている時、イザベラが何かに気づいたかのようにいった。

「お、あの坊や。なかなかいい女に声をかけているじゃないか」

「何ですって!?!」

イザベラのその言葉に反応して、ウエイトレスはトレーから顔を出して厨房の方を覗き見た。

「ルイズ！」

「あ………！」

カトレアが名前を呼んだのと同時に、ルイズは自分の顔が全員に

見えてしまっていることに気がついて短く呻いた。

「何で貴女がウエイトレスを!？」

トリスティンでは知らぬ者はいないとまで言われるくらいの名門貴族であるヴァリエール家に連なる者が、料理屋で働いているなどということは誰も信じられないことだった。全員がルイズに当たりをつけていたが、どうして働いているのかという理由にまで行き当たる者は誰もいなかった。

「ち、ちいねえさま! えっと……」

ルイズがあたふたして言い訳を考えているのを見て、厨房にいた才人は大きくため息を吐いているのがヴァルデスの位置からでもはっきりとわかった。

「ねえルイズ。お小遣いが足りないのならば私が少し都合してあげるわよ?」

カトレアが真剣になってルイズを説得し始めたのを見て、自然と周りの注目も集まり始めていた。

「カトレア、そこまでにしる」

すると、注目されることを嫌がったヴァルデスがカトレアの説得を遮った。

「でも、あなた……」

「ルイズにも色々と考えがあるんだろう。俺たちが色々と言ったと

「ここで意味はない。好きにさせてやれ」

「……はい」

カトレアは少し納得がいかないような様子だったが、それを見てヴァルデスは彼女の頭を撫でた。体つきや雰囲気が非常に大人っぽいから誤解されがちだが、彼女にはこういう子供っぽいところがあ
り、頭を撫でられることも好きだった。

歳だけで言えばカトレアの方がかなり上なのだが、ヴァルデスも歳の割には熟成した雰囲気を持っているので傍から見ればヴァルデスのほうが大人っぽく見えてしまうし、彼女たち五人もヴァルデスを常に上に置くようにしていた。自分より上の立場の人間に褒められることはやはり嬉しいものであり、撫でてもらうことや褒めてもらうことには心の底から喜びを感じていた。

ちなみに、それを見てギーシュたちが羨ましそうにしており、ギーシュやモンモランシーは互いにこっそりと視線を送りあっていた。

「まあ、せっかくだから今日は料理を楽しもう」

「そうだね。じゃあ、お嬢ちゃん。メニューの端から端まで全部持ってきて頂戴」

イザベラはメニューを指でなぞりながらルイズにそう言った。

「たくさんのご注文、ありがとうございます。イザベラ様」

「気にすることはないさ。全部、あんたの奢りだから」

ルイズが礼の言葉を述べると、イザベラはそのルイズを硬直させるような一言を述べた。あまりに突然の発言だったので、ルイズはその笑顔が固まったかのような状態で訊ねた。

「あ、あの……イザベラ様」

「何だい？」

「私の奢りとは……？」

「ヴァリエール公爵やその夫人がこのことを知ったらどう思うだろうね？」

「……わ、わかりました」

イザベラの半ば脅迫じみた言葉にルイズはただただ涙を吞んで従うしかなかった。カトレアはその様子を見て可哀想に思い、ヴァルデスはただただ呆れるだけだった。実家が余り裕福でないギーシュやモンモランシーはルイズに同情し、イザベラとキュルケは楽しそうにそれを見て、他の婚約者三人は特に何も感じずに料理が来るのを待っていた。

「やれやれ……」

「まあ、どんな料理が出てくるか楽しみじゃないか」

さすがにルイズを少し哀れに思ったが、ヴァルデスはそれ以上何も言わなかった。言ったところでイザベラが考えを改めるようなことをしないとわかっていたし、ルイズの実家ならこれぐらいの出費ぐらいたいした痛手にはならないことを知っていたからだ。ルイズ

が実家を頼るかどうかは別の話になるが。

「お待たせいたしました」

すると、ウエイトレスたちが総出で全員の机に次々と料理を並べていった。

「へえ、なかなか美味そうじゃないか」

料理があらかた並んだところで一斉に食べ始めた。日頃、別荘や学院で味わうような高級な料理とはまた違った趣があり、生まれたときから高級なものばかりを食べてきたイザベラたちにとっては面白いものばかりだった。ヴァルデスは今では高級なものを多く口にするようになってきているが、幼い頃にはそれなりに質素な生活を心がけていたので懐かしいという思いがあった。

「美味しい」

「美味しい」

「生まれて初めての味ですわ」

「美味しいですう」

「美味しいです」

婚約者五人は庶民的な味に満足しているようだった。ネージュは他の四人とは違い、ヴァルデスと同じく懐かしいという思いを味わっていた。ギーシュたちのテーブルでもこの味に満足しているようで笑顔がこぼれていた。

料理を運んでくるルイズの表情が何処か暗いものになっていたが、それ以外は楽しい食卓だった。使用人たちの目をあまり気にせず、自由に食事を楽しめるといふのはよかった。それに、一ヶ月近く離れて生活していた彼らは色々話すがたくさんあった。ヴァルデスは普段から寡黙なのであまり喋ることはなく、婚約者たちの話を黙って聞いていた。

「おや？」

すると、賑やかな声が聞こえてきた。見ると、剣の形の杖を腰に差し、広い鍔つきの帽子を粹に被っているところから王国の士官だろうと思われた。彼らは席に座ると店にいる女の子たちを口々に批評しあっていた。だが、店にいる女の子で気に入る子はいなかったようで、その視線がヴァルデスたちに向けられていた。

ヴァルデスもその視線に気づいていたが、いちいちそんなことを気にするようなことはなかった。そもそも、ゲルマニアにいる時もいつも何かしらの注目の視線に晒されていたので、そんなことを気にしていたらやっていられないというのが本音だった。

だが、そんなヴァルデスの思いとは裏腹に男たちはその席に近づいてきた。

「失礼いたします。もし、よろしければ私たちとご一緒にいかがですか？」

ヴァルデスは涼しい顔をしていたが、キュルケたちは驚愕の表情で彼らを見ていた。そもそも、王族の婚約者となっているイザベラたちに声をかけるなど愚かの極みとしか言いようがない。もっとも、

こんな所にそんな高貴な方がいるなどとは思ってもいないだろうから、恐らくはただの貴族の娘か何かだと思って声をかけたのだろう。「申し訳ありませんわ、ミスタ。私たちはこの方に誓いを立てている身の上ですの」

カトレアが代表して断りの言葉を述べた。

「こ、この少年に？」

実際、まだ十七の男が五人の女をはべらせているという状況を信じられないのも無理はなかった。彼らも貴族ではあるが、女を五人も妻に娶れるほど経済力があるわけではないし、士官とは言えまだまだ見習いの域を出ない程度のものだった。それゆえ、まだまだ未熟なところも多く、血気に走るところがあつた。

「失礼だが、トリステインでは見たことがない顔だが……」

「私はゲルマニアの出身だ」

「ゲルマニア？ あの蛮人の国か」

「何？」

店内が一気に険悪な雰囲気になった。ヴァルデスも陰口でそう叩かれる程度のことならば黙っていることもできるが、正面きつてそんなことを言ってくる輩を無視することはできなかった。ゲルマニア王族に名を連ねる身としては、堂々と自分の国を避難されるようなことをされて黙っているわけにはいかなかった。

「失礼だが、初対面の相手に対して少々無礼が過ぎるのではないか？」

「何!？」

ヴァルデスの言葉に男たちも凄んで見せた。しかし、すぐに護衛の人間たちが店の中に踏み込んできて男たちを取り囲んだ。

「な、何だ？」

「殿下! ご無事ですか!？」

護衛の一人がヴァルデスに掛けた言葉に、男たちの表情は見る見るうちに蒼白になっていった。

「で、殿下?」

「無礼者! この方は帝政ゲルマニアのヴァルデス・ウエストリ・コーラッド殿下である!」

「ヴァ、ヴァルデス殿下!？」

この言葉に店中の客が驚きを隠せなかった。ルイズを貴族と見抜いている店の人間たちでさえ、まさかこの場に王族が来るとは思いもしなかったのだ。ただ驚くばかりであった。

「さて諸君、この無礼をどう償ってくれるというのかな？」

ヴァルデスのこの言葉は事実上の死刑宣告に近いものだった。王族に対してあのような無礼を働いたのだからこの場で殺されても文

句は言えない。男たちもそれを悟っているため後悔の念でいっぱいになった。

「お待ちください」

すると、彼らの助けに入ったのはカトレアだった。

「ヴァルデス様、どうかこの者たちの処分は私にお任せください」

「お前に？」

「はい。私、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ドラ・フォンテーヌが必ずや」

男たちはその名前を聞いて更に驚いた。カトレアはこの国で二二を争う貴族であるヴァリエール公爵の娘であることは有名であり、彼女の口からヴァリエール公爵に今回の一件が耳に入ることの意味していた。つまり、たとえ命が助かるうとも、彼らの今後は冷や飯食いという立場に甘んじなければなくなることが決まったからだ。いや、下手をしたら勘当されて貴族ですらなくなるかもしれないのだ。自業自得ではあるが、こんなことは一生に一度あるかないかのことなので事故みたいなものである。但し、その代償があまりにも大きい事故ではあるが。

「興奮めだね」

イザベラはそう言って席を立ち上がった。それに続くかのように他の婚約者たちも席を立った。

「カトレア、彼らの処分は任せたまえ」

「はい」

ヴァルデスもそう言って店を出て行った。あとに残ったカトレアが彼らの名前や所属を聞きだし、とりあえず今日は帰すことにした。軍事教練が終わり、楽しい夜を過ごすはずだった彼らはただただ肩を落として家路についた。今後、自分たちにどんな罰が下されるのか、ただただそれに怯えて過ごすことになった。

「ちいねえさま……」

「大丈夫よ、ルイズ」

心配して来たルイズに対し、カトレアはいつものように優しく微笑んでそう言った。

結局、この一件はヴァリエール公爵を通じて処罰されることになり、三人の男たちは全員お役御免となることで罰とした。全てが済んだ後、ヴァリエール公爵が謝罪しに来たがヴァルデスはこの処罰に対して不服を申し立てるようなことはしなかった。そもそも、もうヴァルデスは彼らのことをすっかり忘れ去っていたし、ただの事後報告の一つでしかないという認識だったので何も言わなかったのだ。

ちなみに、この一件のせいでルイズが『魅惑の妖精亭』で働いていたことが実家に露見し、カリーヌに痛みを伴う叱責を受けたのだが、もちろんヴァルデスにはどうでもいいことだった。

ヴァリエール公爵家にて（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ヴァリエール公爵家にて

「トリステインがアルビオンに宣戦布告か……」

夏休みのある日、ヴァルデスの元にその一方が届けられた。

「でも、トリステインが自分から打って出るなんて愚策でしかないね」

イザベラは呆れるようにそう言った。ヴァルデスもトリステインの出撃に対して同じような感想を抱いていた。そもそも、空軍でアルビオンに大きく差をつけられ、空中大陸だからろくに補給できない。更に兵力にも大きな差が生じている。そんな中で自分から打って出るのは愚策以外の何物でもなかった。そもそも、マザリー二枢機卿はこの出撃に最期まで反対の立場をとっていたのだが、女王に就任したアンリエッタの強い意志によって出撃せざるを得なくなっていたとのことだ。

「まあ、そのとおりだな」

「でも、トリステインが戦争状態になるのなら、私たちはどうしましょうか？」

「そうだな……戦争状態になったらさすがにここにいるわけにもいかない」

「私とエレーヌはガリアに戻るってことかね」

イザベラはシャルロットの肩を抱いてそう言った。

実際、正式に結婚をしていないので二人が戻る場所はゲルマニアではなく、現状ではガリアが正式なものということになるのだ。ヴァルデスとエルティナとネージユはゲルマニア、そしてカトレアのみがトリスティンということになるのだ。もともと、婚約者には違いないのでカトレアをゲルマニアに匿うことはできないわけではないのだ。

「本当はそうしたくないのだがな」

「でも、戦争になったらそうするしかない」

シャルロットが呟いた言葉を誰も否定することはできなかった。

「とりあえずヴァリエール公爵のところに行ってみるか。あの家なら今の状況をよく知っているだろう」

ヴァルデスのその言葉でヴァリエール公爵家行きが決まり、今はそのヴァリエール公爵家に向かう馬車の中だった。別荘を出発してから約二日、ようやく馬車はヴァリエール公爵家の敷地に入ったところである。

「しかし、さすがヴァリエール公爵家。何て広さだい」

イザベラは呆れたようにそう言った。実際、今まで訪れたどんな貴族の屋敷より、このヴァリエール公爵家の敷地は比べ物にならないほどに大きいものだった。

「俺もこれほどとは思わなかった」

かつてのコーラッド家の敷地とは比べ物にならないほど大きかった。現在の実家の領地はどれほどのものになったのかは知らないが、それでもこれに匹敵するには至らないだろうと思っていた。

「ところで、カトレアには姉がいたな」

「え、ええ。エレオノールという姉がいます」

ヴァルデスが何となく話題を振ってみたのだが、カトレアは何故か姉についての話題をあまりかたろうとはしなかった。

「どうかしたんですか？」

カトレアの様子があまりにもおかしいので、エルティナが訊ねてみた。カトレアは少し考えるような素振りを見せてから、意を決してこう言った。

「その……エレオノールお姉様は最近婚約を解消されたそうなので、あまり機嫌がよくないと思うのです」

「婚約解消とは穏やかじゃないね」

「何故？」

そもそも、貴族同士の結婚というのは政治的な意味合いが強い場合が多いので、それを解消するというのはかなりの大事であった。それもヴァリエール公爵ほどの大貴族の娘の婚約が解消されるといっうのは普通ではありえないことだった。

「私も詳しくは知らないのですが、何でも『もう限界』とのことで

す

「男が女にだらしなかったというわけか」

「だったら、いいんじゃないか。そんな程度の男に嫁ぐよりは婚約解消のほうがましさ」

ヴァルデスとイザベラはそう解釈したが、それでもカトレアはまだ言いにくそうにしており、視線も宙を彷徨っていた。

「それが……相手の方が『もう限界』とことで……」

「相手からの婚約解消？」

それもまたおかしな話だった。そもそも、公爵家令嬢との婚約など望んだところでそんなチャンスがあるわけでもないのに、そのチャンスをわざわざ自分から断るような男がいるとは俄かに信じられなかった。

「それもまたおかしな話」

「ですね」

シャルロットとエルティナの言葉は正論だった。カトレアは何と書いていいか言葉に迷っているような感じだった。

「その……エレオノールお姉様は非常に綺麗なのですが、その性格が……」

「どんな性格なんだ？」

「……今のルイズをそのまま大きくしたと思っただけならば」

「……納得した」

ルイズもたいした癩癩持ちであったので、それが大きくなったと考えれば『もう限界』の言葉の意味も理解できるというものである。それと同時に、結婚のメリットよりも精神的苦痛からの開放を相手に選ばせたのがどういう女性であるかにも興味が湧いていた。

「ですので、お姉様の前で結婚の話は……」

「わかった。好き好んで虎の尾を踏む趣味はない」

全員がヴァルデスの言葉に賛同した。こうして馬車の中で一つの約束が結ばれて一行はヴァリエール公爵邸に入った。

「先日は失礼いたしました。ヴァルデス殿」

屋敷に通されるとヴァルデスたちは全員上座に座らされた。ヴァリエール公爵もヴァルデスに対しては最敬礼をとっていた。そもそも、トリスタニアでの一件以来、ヴァルデスに頭が上がらないという状況なので仕方ないといえば仕方なかった。

それよりもヴァルデスはこの場に同席している顔ぶれに驚いていた。

「どうしてお前がいるんだ？ サイト」

誰にも告げずにここへ来たはずなのに、何故かルイズと才人がこ

の屋敷にいたのだ。しかも、シエスタを連れて。

「ルイズのお姉さんに連れてこられて……」

才人はそう言いながら視線だけその主に向けた。

長い金髪にすらりとした長身、胸のほうはいまいちではあるがそれでも間違はなく美人と呼べるだけの器量を持っている女、それがエレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールだった。一目見ただけならば人目を引く美女だと思っただが、彼女が身に纏っている雰囲気と、その鋭い目つきが男を遠ざけているような気がしていた。

「はじめまして、ヴァルデス殿下。カトレアの姉でエレオノールと申します」

「ああ。よろしく」

何となくだが、ヴァルデスには『もう限界』のその言葉の意味が判ったような気がした。確かに素振りなどはちゃんとした教育を受けたものであるということはわかったが、それでも本人が生来身に纏っている雰囲気だけは隠しようがない。必死で取り繕っているつもりだが、内面に隠そうとしているものはどうしても隠し切れずにいた。

「しかし、当家にお越しになるのですしたら事前に連絡をいただければ歓迎準備もいたしましたのに」

「ヴァリエール公爵、今日は急ぎの用で来たので歓迎は結構。それよりも伺いたいことがある」

「ははっ」

「トリステインは本気でこの戦争に勝てると思っているのか？」

「……耳の痛い話ですな」

ヴァリエール公爵はため息を吐きながらそう言った。これだけで少なくとも、ヴァリエール公爵が戦争反対派であることは明白となった。

「正直な話、今回の戦争は女王陛下に軍部が乗っかって無理やり押し切ったというかたちになりますな」

「勝てる見込みはないと？」

「ヴァルデス殿下なら戦況の予想はできるかと……」

「……なるほど。では、ヴァリエール公爵は戦争には参加しないと」

「勝てないとわかっている戦争に領民たちを向かわせるわけにはいきません。金で済むなら安いものです」

それにカトレアがヴァルデスの嫁になるのだからその程度の出費ぐらいはたいした痛手にはならないとヴァリエール公爵は考えていた。それに、正式に婚姻が結ばれればゲルマニアから便宜を受けられて領地発展することもでき、今回の出費よりも大きな収入を得ることができるとあってありうるのだ。それを考えればこの程度の出費はたいした痛手にはならないのだ。

「ですがお父様、女王陛下のお考えに背くようなことは……」

すると、ルイズが弱々しくも反論してきた。この間のカーリーヌのお説教がまだ尾を引いているのか、彼女の目を気にしながらルイズはヴァリエール公爵にそう言った。ヴァリエール公爵はルイズの傍に行って優しく諭すように言った。

「いいかい、ルイズ。自分から攻めるには相手の三倍もの戦力を必要とするんだよ。今のトリステインにはそれだけの戦力はないし、何よりもアルビオンは空中に浮遊する大陸であり、空軍はトリステインよりもずっと強い。たとえ上陸できたとしても、補給路を潰されてしまつては長くは戦えない。だから、この戦争に勝てる要素がないのだよ」

「でも……」

「ルイズ、お前が戦争のことを考えなくていい。戦争のことは私に任せておけばいい」

ルイズが少し気落ちしているのに対し、才人はヴァリエール公爵の言葉に安堵していた。恐らく、ルイズが戦争に赴こうとしており、両親の許可を取りに来たというところだろう。才人は無理やり戦争に連れ出されそうになつていたので、ヴァリエール公爵の言葉にやっつと安心を得ることができたというところだろうとヴァルデスは思つていた。

「ヴァリエール公爵の言うとおりだな」

助け舟というわけではないが、ヴァルデスはヴァリエール公爵の言葉に続いて話し始めた。

「そもそも、アルビオンは攻めにくい国であるのに違はないが、逆を言えば空に浮いているから補給が満足にできないという弱みもある。わざわざこちらから攻め込まなくても補給路を地道に潰していけばそのうちにこっちへ降りてこなければならなくなる。そのときに迎え撃てばいいだけの話だ。攻め込むよりも迎え撃つほうが被害も少なくて済むはずだ」

「でも、だったらどうして姫様はそんな結論を出したんだ？」

才人が疑問の声を上げるとエレオノールが鋭い視線を向けた。才人はひるんだが、その疑問に答えるかのようにヴァリエール公爵が言葉を続けた。

「女王陛下が何を考えるのかはよくわからぬが、女王陛下は攻撃をお望みだ。それに軍部が乗ったというわけだ。リッシュモン高等法院長が汚職でいなくなり、文官たちの力が弱くなったからさすがの鳥の骨も止められなかったというわけだ」

「どうしてそこまでレコン・キスタにこだわるのだろうか？」

ヴァルデスはそのあたりの事情をよく知らなかったが、才人やルイズは何となく察しがついていた。亡くなったウェールズとアンリエッタは恋仲であったことを二人は知っている。恐らく、アンリエッタはウェールズの敵討ちをしたいのだろうと推測していた。

そして、それはヴァルデスも同じだった。何度かウェールズとアンリエッタと会ったことがあり、二人の仲も大体推測がついていた。だが、それゆえよくわからなかった。どうして国家元首たる国王が恋人のために戦いを始めるのだろうか。

仮にイザベラやシャルロットが殺されても、ヴァルデスは敵討ちなど考えないだろう。少なくとも、最優先すべきは国家の利益であり、その上で敵討ちが有効的な手段ならばそれを選択するという程度の認識である。無論、夫婦の愛というものは持ち合わせているが、それを最優先して国を巻き込むほどヴァルデスは無責任なことではきなかった。どうしても敵討ちがしたいなら、今の地位を全て捨ててから赴く。それが前世で何も持たずに腕一つだけで生きてきた男としての考え方だった。

「まあいい。トリステインがそういう考え方なら俺がこれ以上言うことは何も無い」

ヴァルデスはそう言って席を立った。

「いいんですか？ 殿下」

あまりにもあっさりとしているので、才人はヴァルデスに訊ねてみた。

「ああ。だって俺はゲルマニア人だからな、トリステインの戦争に関与するつもりはない」

「はあ……。でも、カトレア様は……」

「無論、カトレアは守る。だが、それだけだ。もし、トリステインがレコン・キスタに敗れ、ヴァリエール公爵家がゲルマニアに亡命を申し出た場合もそれを受け入れる。だが、この国のために何かをするつもりはない」

あくまで、ヴァルデスにとって重要視するのはゲルマニアであつて、トリステインなどどうでもいいのだ。むしろ、一度レコン・キスタに滅ぼされて占領された方が戦いやすいし、王権に刃を向ける逆賊として退治することも可能なのでヴァルデスにとってはレコン・キスタが勝ってくれたほうが非常に助かるのだ。

「サイト、お前も万が一のときは亡命を受け入れてやる」

「あ、ありがとうございます。殿下」

そもそも、戦場に駆り出されようとしているような状態なので、負けはすなわち死を意味するも同然である。才人にしてみれば、何とかここでルイズを説得して思いとどまらせたいのだ。そうすれば、最悪トリステインが負けてもゲルマニアでヴァルデスが安全を約束してくれるのだから。

「ところで、どうして戦場に行きたいんだ？ ルイズ」

ヴァルデスが兼ねてからの疑問をぶつけてみた。そもそも、ヴァルデスでさえ戦場なんかには行きたくないと思うくらいなのに、ルイズが行きたいと思う理由がよくわからなかった。

「そ、それはもちろん女王陛下のお力になるために……」

「ちびルイズ！ 貴女が戦場で何の力になれると言うの！？ 碌に魔法も使えないくせに！」

エレオノールの言葉にルイズも少し厳しい視線を彼女に向けたが、すぐにそれを上回るエレオノールの視線に負けてしまっていた。

「わ、私だって魔法は使える……もん」

「へえ、コモンマジックでさえ碌に使えない貴女がどんな魔法を使えるのかしら？」

「エレオノール、ルイズ、ヴァルデス殿下の前ですよ」

カリーヌの言葉で二人ともおとなしく引き下がったが、代わりにヴァリエール公爵がルイズに訊ねた。

「ルイズ、系統に目覚めたのかい？」

「はい、お父様」

「何の系統だい？」

「……火ですわ」

「火か……お前のお爺様と同じだ。破壊を司る罪深い系統だ。だから、戦争に興味を示しているのだね」

ヴァリエール公爵はそう言って宥めていたが、ヴァルデスは系統を告げたルイズの表情が何処か曇っているのを見抜いていた。少なくとも、真実を語っているわけではないということは間違いないだろうと思っていた。ただ、それを今本人に問い詰めても何も語らないだろうということもわかっていたので、あとで上手いこと才人から聞き出そうと考えていた。

「だけどねルイズ、戦争はルイズが思っているほど格好いいものじゃない。戦争で勝てれば名誉というものを貰えるが、負けたら全て

を奪われる。それにたくさんの人が死ぬ」

「でも、女王陛下が私の力を貸してほしいと……!!」

ルイズのその言葉を聞いた瞬間、それまで穏やかだったヴァリエール公爵の表情が強張った。それは普段は優しい父親で接してきていたルイズやそれを見ていたエレオノールを驚かせるのに充分すぎるものだった。

「何と言うことだ……女王陛下が私の娘に戦争へ行けと命じたというのか！」

ヴァリエール公爵はそう言って机を思いっきり叩いた。そのあまりの迫力にルイズやエレオノールは何も言えずにただただその様子を見ていることしかできなかった。この場で平然としているのは、妻であるカリーヌとヴァルデスたちだけだった。

「誰か竜籠を用意しろ！　すぐにトリスタニアに向かう！」

「あなた！」

激昂しているヴァリエール公爵を止めたのはカリーヌだった。カリーヌには逆らえないのか、ヴァリエール公爵も少し頭を冷やしたようで、息は荒かったがそれでもいきなり出かけるということとはしなくなった。

「失礼いたしました、ヴァルデス殿下」

「気にしていない。気持ちはわからないでもないからな」

ヴァルデスに謝罪の言葉を述べて体裁を整えたが、頭の中では王室に対しての怒りでいっぱいだった。それでもこの場においても身分が上であるヴァルデスを置いていくなどという愚拳をしなくなっただけ冷静になったと言える。

「しかし、一学生に戦争へ行くように女王が自ら言うとは……この戦いの先は見えたな」

トリステインで一二を争う貴族の前でそのようなことを言うのは本来ならばありえないことだが、ヴァリエール公爵が戦争反対派なのでさして問題にもならなかった。そのヴァリエール公爵もアンリエッタが行ったことに対して怒りを感じているくらいなので、この場においてたいいていの発言は見逃されると誰もがわかっていた。

「ヴァルデス殿下、盛大な歓迎はできませんが、どうぞ今晚は当家にお泊まりください。できる限りの歓迎の宴を催させていただきます」

ヴァリエール公爵がそう言ったので、ヴァルデスもその言葉に甘えることにしてその日はヴァリエール公爵家に泊まることになった。ヴァルデス一行は翌日にはヴァリエール公爵家を去ったが、その後、王室とヴァリエール公爵との間で一悶着があったことは公然の秘密となった。

ロマリアからの使者（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

ロマリアからの使者

トリステインの宣戦布告はすぐにハルケギニア中を駆け巡った。戦争が始まるということで、商人たちはこぞって軍に物資を高値で売りつけ始め、多くの平民が徴兵されていった。

最初は大人だけだったが、元々人数が圧倒的に不足しているトリステイン軍は、夏休みをあげたばかりの魔法学院の男子生徒までも徴兵していった。徴兵が決まると、広場では恋人関係にあった生徒同士の別れを惜しむ姿があちこちで見ることができた。その様子を才人とヴァルデスは遠めで見ていた。

「しかし、どうして戦争なんてやるんですかね？ 殿下」

「決まっている。金のためだ」

ヴァルデスは才人の疑問を金の一言でばつさり切り捨てた。さすがに才人も、王族であるヴァルデスから金のためと言っ言葉が出るとは思ってもいなかった。その言葉に唾然としていた。

「覚えておけ、サイト。戦争というのは一種の外交手段であり、経済を活性化させるための起爆剤のようなものだ」

「そ、そうなんですか？」

「大抵の戦争はそうだ。レコン・キスタだって王権を認めず、貴族での共和制を実現しようという建前はあるが、本音を言えば国王から利権を奪い取りたいという連中の集まりだ。一応、エルフから聖地奪還というブリミル教の教えに背いていないように見せかけては

いるが、本音は金だ」

「はあ……なんか空しいですね」

「まあな。アンリエッタ女王のように恋人の敵討ちという純粋な動機での戦争というのは珍しい」

「やっぱりウエールズ殿下の復讐なんですかね？」

才人はもうヴァルデスには全てわかっているだろうと思っていたので、下手に隠し事をするのはやめた。あんまりヴァルデス相手に秘密を作ると、いつかそれを逆手に取られてとんでもない目に遭いそうだと本能が警鐘を鳴らしていた。

「さあな。アンリエッタ女王の本心まではさすがに俺もわからん。ただ、見返りを何も考えずにした戦争は勝ってもその報いを受けることになる」

「報いというと？」

「戦争というのは勝ったときに利益を上げられなければ何の意味もない。そもそも、戦争するからということでも物資などを大量に購入しているのだから、支出を上回る利益がなければ結局国は滅びてしまふのだ」

「なるほど。じゃあ、トリステインは……」

「買っても負けてもどっちにしろただじゃすまないだろうな。それこそ、国家は空っぽになるだろう」

ヴァルデスの予想はあながち間違いでではなかった。実際、自分から打って出るトリステインにこの戦争で得られる利益などほとんどないに等しいものなのだ。支出だけがかさんでいくので、国の財政をかなり逼迫するのは間違いない。名誉だけは元手がかからないのでいくらでも与えることはできるが、報奨金などを与えるのは難しい。結局のところ、アルビオンでの略奪でそれを補うしかないだろうというのがヴァルデスの予想だった。

「ところで、ルイズは考えを改めたのか？」

「さすがにお父さんと姫様が喧嘩したということになったからおとなしくしてます。俺としてはありがたいですけど」

「そうだな。戦争など参加しないに越したことはないからな」

当然のことながら、ゲルマニア人であるヴァルデスは今回の戦争には参加しない。だから、目の前で繰り広げられている恋人同士の別れのシーンも何処か他人事のように思っていた。

そんな時だった、彼が空からやってきたのは。

「何だ、あれ？」

生徒の誰かがそう言って空を見上げた。それに倣うかのように生徒たちは次々と空を見上げ、近づいてくるそれに注目が集まった。

「何でしょうか？ あれ」

才人も太陽を背に受けて陰になっているそれを見ながらヴァルデスに訊ねた。

「恐らく……竜だ」

ヴァルデスもそれを見ていたが、いつでも戦闘体勢が取れるように剣に手をかけていた。

空を旋回しながらそれはゆっくりと地上に向けて降下を始め、やがて学院の広場に着陸した。

それはヴァルデスの見立てどおり竜だった。ただ、白い綺麗な肌をした竜であり、またそれに騎乗している男もまた見目麗しい美男子であったために、先程まで恋人との別れのシーンを演じていた女子生徒たちの視線を集めていた。

「だ、誰なんですか？ あれ」

「俺も知らんが……どうやらロマリアからの客人らしいな」

竜に騎乗していた男は、竜から降りると真っ先にヴァルデスのところに向かって膝をついた。

「失礼いたします。ヴァルデス殿下とお見受けいたしますが……」

「いかにも」

「私はロマリアで神官を務めておりますジュリオ・チェザーレと申します」

そう言って優雅に振舞うその姿に、女子生徒たちから黄色い歓声が上がっており、男子生徒はそれを面白くなさそうに見ていた。

「ロマリアの神官殿が何の用かな？」

「ちょっとした待ち合わせでございます。ヴァルデス殿下のお姿を拝見いたしましたのでご挨拶をさせていただきたく、こうしてまかり越した次第でございます」

「待ち合わせ？ 神官が来るということはマザリーニ枢機卿でも訪問されるのか？」

戦争に全く関係のないロマリアの神官がわざわざ戦時中のトリステインに来てまで会おうとする人物は限られる。ましてや、この国の宰相であるマザリーニ枢機卿はかつて教皇候補にまでなったほどの人物である。当然のことながら教皇でもない限りは、自分たちから出向いて会うのが礼儀である。

「いいえ。マザリーニ枢機卿とは別の方です」

「そうか……」

「では、失礼いたします」

ジュリオは優雅に一礼をして去っていった。ヴァルデスとの会話が終わると、ジュリオの周りにはさっきまで別れのシーンを演じていた女子がいつせいに押し寄せ、さっきまでのあれは何だったんだと思わせるような光景が広がった。

「何だか気に入らない奴ですね」

「ああ……」

才人は単純にジュリオが女子生徒にもてているのを僻んでいたのだが、ヴァルデスは何だか嫌な予感がしていた。そもそも、ジュリオが何をしにこんなところまで来たのか、その理由が未だにわからなかったからだ。

ジュリオがヴァルデスに用があるということならば結婚式関連のことなのだろうと考えられるのだが、戦時のトリスティンにわざわざやってくるほどの用とは何であるのか、それを考えると嫌な予感しかしてこなかった。

「ところで、ルイズは何処に行ったんだ？」

「え？」

ルイズの姿が見えないのでヴァルデスは才人に訊ねてみた。才人はその質問をされると、一瞬だがヴァルデスから視線をそらしたが、彼はそれを見逃しておらず畳み掛けた。

「サイト、お前の主は何処に行った？」

「えつと……」

才人がルイズの居所を知っているのは明らかだった。恐らく口止めをされているのだろうが、これだけ態度が露骨だと隠し事があると言っているようなものであった。

「もう一度だけ言う。ルイズは何処だ？」

「……その、何か来客があるとかで学院長室に……」

「来客？」

ヴァルデスはそこでサイトへの追及をやめた。それどころか、それを聞いて更に嫌な予感が膨らんでいった。

「何か嫌な予感がするから俺は早退する」

「え？」

「誰かに俺の居場所を聞かれたら、俺は煙のように消えたと言っても言っておいてくれ」

ヴァルデスはそう言って、才人が聞き返す前に馬車に向かって歩き出し、そのまま学院を出て行った。そのあまりの速さに才人はただ呆然とするだけだった。

屋敷に戻ると、ヴァルデスは護衛の人間たちに誰も通すなと厳命した。

「ロマリアの神官ねえ……」

屋敷に戻ると、イザベラたちを集めて学院でのことを話した。嫌な予感が何であるかわからない以上、全員で情報を共有する必要があると思って集合をかけた。いきなり下校したので、シャルロットに関しては再び護衛を学院に向かわせて戻ってくるように仕向けておいた。今はまだ戻っていないがもうしばらくしたら戻ってくるだろう。

「どう思うっ？」

「ロマリアの神官がわざわざ来るなんて普通じゃないね。神官なんて戦争には関わらず、平時に浅く広く金を絞る連中だからね」

「では、どうしてロマリアからわざわざ？」

カトレアはジュリオの来訪にただ疑問を抱いているだけだったが、ヴァルデスやイザベラは何となくだが当たりをつけ始めていた。

「まあ、恐らくはレコン・キスタだろうな」

「だろうね」

ヴァルデスの言葉にイザベラは同調した。

「レコン・キスタ？ どうして、ロマリアが彼らのこと？」

「そうですね、一応彼らも聖地奪還を掲げている以上、ロマリアが出てくることはできないのではないのですかあ？」

「建前はそうだろうな」

「でも、レコン・キスタはアルビオン王家を滅ぼした。ロマリアとしても勢力を広げてくるのは嫌がったところだろうね」

「では、ロマリアはレコン・キスタに異端認定を出したということですか？」

異端認定、それはブリミル教の総本山であるロマリアが異教徒、あるいは教えを破る異端の存在であるという認定のことである。

このハルケギニアでは圧倒的にプリミル教が力を持っており、それ以外の勢力を認めようとはしない。もともと、現在の神官のほとんどが腐っているので、本来の始祖の教義に立ち返ろうという新教徒という新しい勢力なども生まれるなど、決して磐石とは言えなかった。

だが、それでも勢力はハルケギニア中に広がっているので異端認定を出されると、ハルケギニアに安心できる場所がなくなるといことはある。それを恐れているため、正面きつて今のプリミル教を批判する勢力は少なかったし、神官の言いなりになるしかないというのが現状だった。

「いや。聖地奪還を掲げているため、彼らに異端認定を出すことはできないだろうな」

「要するに裏帳場にしたってことだろうね。表立って異端として処理はできないが、それでもレコン・キスタの存在は邪魔なものであることに違いはない。だから、裏帳場にして支援すると言ったところだろうね」

「まあ……」

「あら〜」

ヴァルデスとイザベラの言葉に、カトレアとエルティナは呆れと驚きの感情を半々抱いた。少なくとも、光の国と呼ばれている国がやるようなことではないと二人は考えていたが、現実主義者であるヴァルデスやイザベラにとってはこの程度のことではあって当然のことと考えていた。

「問題なのは、もし私たちの考えている通りのことが起こっているとしたら……だろ？」

イザベラはヴァルデスの顔を見ながらそう言った。

「ああ。もし、裏帳場とは言え、ロマリアがレコン・キスタを排除しようとするとなると、俺も他人事とは言えなくなる。」

そう、ロマリアが動き出したということになるとトリステインとレコン・キスタの戦争という話だけではなく。実質上の異端認定ということになれば、ゲルマニアやガリアも協力せざるを得ないからだ。特に始祖の子供が国の起源であるガリアは逆らうことはできなくなるのだ。

「では、あなたも戦場に駆り出されると言うことですか？」

「可能性はある。だから、万が一のときの覚悟だけはしておいてくれ」

ヴァルデスがそう言うと、周りを重い雰囲気包み込んだ。それぞれが何を考えているかは、その暗い表情からおおよその察しがついた。

「教皇自ら執り行うと言っている結婚式の新郎を戦場に駆り出すとはね……神官が聞いて呆れるね」

「ヴァルデス様、殿下は何があっても必ずお守りいたします」

ネージユはそう言って剣を掲げた。

「失礼いたします」

すると、護衛の一人がそこにやって来た。

「どうした？」

「はっ。シャルロット様がお戻りになられました」

「そうか」

「ですが、サイトと名乗る者も一緒にこの屋敷に来られました」

「サイトが？ 俺に用なら適当に言って帰ってもらえ。今は人に会う気分ではない」

「いえ、御用があるのはカトレア様とのことです」

「私に？」

カトレアはそう言われてヴァルデスの顔を見た。結局のところ、ヴァルデスが会うなと言えばカトレアは決して会うことはないのだ。

「会ってやれ。俺は少し休む」

「かしこまりました」

ヴァルデスがそう言って席を立つと、カトレアを残して全員が席を立った。やがて、護衛に案内されて才人がカトレアのところへやって来た。

「いらつしゃい。サイト君」

「突然押しかけてすいません、カトレア様」

「かまわないわ。それに……」

すると、部屋のドアが開いて動物たちが部屋に押しかけてきた。

「貴方が来るとこの子達が喜ぶの」

動物たちは才人のところに殺到して足にすがりついたりして喜びを表現していた。才人も一匹や二匹ぐらいなら笑っていられたが、多種多様の動物たちが十匹以上押し寄せてくると苦笑いを浮かべることができなかった。

「それで、御用とは何かしら？」

「あ、はい。その願いがありました……」

「あら？ 何かしら？」

カトレアはいつもの笑顔でそう訊ねたが、才人は意を決した表情でカトレアに願い出た。

「ルイズを止めてください」

「ルイズを？」

「はい。あいつ、まだ戦争に行くつもりで……」

「まあ……」

「それにロマリアから来たジュリオって奴にお前の力が是非必要だつて、姫様と一緒にそんなことを言われてすつかりその気になつて……」

才人はそこまで言っただけで思いつきり大きいため息を吐いた。それを見るだけでサイトがどれだけ気苦労を重ねているかがはっきりと見えた。

そして、その様子を他の部屋でヴァルデスたちも見ていた。

「何でロマリアの神官があのお嬢ちゃんに力を入れているんだい？」

かつて、オスマンとコルベールの会話を盗み見たエルティナの持っているあのコンパクトでしっかりと二人の会話を聞いていた。

「さあな？ サイトが何かを隠しているのは気づいていたが、恐らくそれに関係していることなんだろうな」

「だからって、ロマリアが出張ってくるほどだからただ事じゃないだろう？」

「そうですねえ」

「どうする？」

シャルロットがヴァルデスにそう言ったが、ヴァルデスは特に何かしようとは考えていなかった。そもそも、才人はトリスティン貴

族であるヴァリエール公爵家三女ルイズの使い魔なのだから、所属はトリステインということになる。ゲルマニアのヴァルデスが何かをするわけにはいかなかったし、何かをしてやるつもりもなかった。才人一人のために厄介ごとを抱え込むわけにはいかないという事情もある。

「ほっとけ。カトレアに全てを任せる」

結局、この場で何とかできる可能性を持っているのはルイズの姉であるカトレアだけであり、その点では才人がカトレアを選んで頼みに来たことは正解だと言える。

ヴァルデスがカトレアに一任すると結論付けると、すぐにコンパクトは閉じられた。それから侍従を呼んでお茶やお菓子を持ってこさせてお茶会を始めていた。

一方、才人とカトレアの話し合いも終わりを迎えようとしていた。

「サイト君、残念だけど私にはどうにもできないわ」

「どうしてですか？」

「姉としてルイズに注意を促したり、父や母に言って説得をしてもらうことはできるわ。でも、私ができるのはそこまで……そもそも、私はゲルマニアのヴァルデス殿下と婚約を結んでいる身だから、建前上はまだトリステイン貴族だけど実質的にはもうゲルマニア貴族なのよ」

「……つまり、ゲルマニアの人間がトリステインに何か言うことはできないということですか？」

「そう。貴方には悪いけど、私ができるのはそこまでのの。どうする？ それでよければ注意してみるけど……」

「……いいえ。どうもありがとうございます」

「お役に立てなくてごめんなさいね」

才人はカトレアに礼を言って屋敷を出て行った。せめてものお詫びとして学院までは馬車で才人を送ってやるように手配をして、彼女もヴァルデスたちの部屋に戻った。

ロマリアからの使者（後書き）

一週間ぶりの更新です。

ジュリオも登場しました。この辺りはアニメ版のほうの流れを参考に話を進めていますのであしからず。

いつもたくさん感想をありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

三姉妹の夕食（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

三姉妹の夕食

「えい！ えい！」

広場で女子生徒たちの訓練の音が今日も元気に響き渡る。アンリエッタの近衛である銃士隊が彼女たちに対し、魔法ではなく武器による訓練を行っていた。

メイジである女子生徒たちは最初は反抗したが、銃士隊長であるアニエス・シュヴァリエ・ド・ミランによつて実力行使という名の説得で説得させられ、今では誰一人文句を言うこともなくおとなしく従っていた。その中にはルイズの姿もあつた。

ヴァルデスはその様子を才人と共に見ており、その隣にいるシャルロットはガリア王族であるため、訓練を強要するわけには行かないという理由で免除されていた。ただ、ゲルマニア貴族であるキュルケがどうして訓練に参加させられているのかがわからなかったが。

「あれが役に立つの？」

「さあな。やらないよりはましかもしれないが、普段から武器を持たない奴が使い方だけ覚えてもしょうがないと思うけどな。その場に武器がなければ技術の活かしようがないからな」

結局、メイジの武器は魔法であり、いくら普通の武器の使い方を知ったとしても普段から持ち歩くことをしなければ何の意味もないと言える。

「私も覚えたほうがいい？」

「芸は身を助けると言うからな、覚えておくに越したことはない。だが、俺が傍にいる限り、お前たちは俺が守る」

ヴァルデスはそう言ってシャルロットの頭を撫でた。一方、傍に控えていたネージュは指導に当たっているアニエスにずっと注目していた。

「気になるか？ ネージュ」

「いえ……」

ヴァルデスの言葉に対し、ネージュはすぐにそう返した。この場において優先すべきはヴァルデスたちの身の安全であり、自分の興味など二の次であることをわきまえた彼女の発言である。

「強いと思うか？」

「剣はかなりの使い手だと思います。ですが、負けるほどではありません」

「そうか……」

ヴァルデスもアニエスの実力に関してはそれなりのものだと見抜いていた。だが、真っ向勝負しても負けないだけの自信もあった。

「やめ！」

アニエスの声がかかると女子生徒はすぐに手を止めた。これまで魔法で全てを行っていた彼女たちにとって、これらの訓練は重労働

であり、肩で息をしている者もいた。

「本日は諸君らに実戦的な魔法の使い方を教えてくれる講師をアカデミーよりお招きした」

すると、そこに現れたのはエレオノールだった。相変わらず取り繕うのが上手く、表面上は非の打ち所のない笑顔で生徒に接していた。年こそかなり上だが、エレオノールも充分美人の部類に入る人間であり、その人あたりのよさそうな笑顔はすぐに生徒たちに受け入れられた。生徒の輪の中でげんわりとしているルイズを除いて。

「エレオノール・ド・ラ・ヴァリエールです。これから皆さんと楽しくお勉強しましょう。ね？」

眩いばかりの微笑み、何も知らない他人が見れば思わず見とれてしまうほどのものだったが、ヴァルデスにはいかにも作り物というような感じが付きまわっているように見えた。

「……カトレアを呼ぶ？」

「そうだな……」

シャルロットはシルフィードを呼んで、カトレアを連れてくるために一度別荘へと戻っていった。飛んでいく瞬間は人目を集めたが、訓練と無関係のシャルロットだとわかるとすぐに生徒や銃士隊の間は訓練へと戻っていった。

それからエレオノールによる魔法の講義と実戦練習に入っていたが、生徒たちにはこちらの方が受けがよかった。やはり、普段から使っている魔法と言うのと、教師となっているのが平民の銃士で

はなく、貴族の中でも身分の高いヴァリエール公爵の長女であるエレオノールが教えているというところが生徒たちへの受け入れをよくしていた。

しかし、エレオノールもまた戦争を知らない貴族だった。確かに学院で学ぶことよりは幾分か実践的だったが、それでも基礎的な部分に留まっているので臨機応変な対応ができるようにはなれないと思っていた。

（まあ、基本的に体力づくりが甘い生徒たちにはちょうどいいのかもしれないけど）

ヴァルデスは教えている内容はともかくとして、エレオノールの教え方は上手いと考えていた。学院の優しい教え方に慣らされている生徒たちに合わせてエレオノールも優しく教えていた。だが、間違っていることに対しては決して見逃さず、かと言って厳しい口調は使わず優しく訂正していく。

もつとも、普段の彼女を知るヴァルデスはその作られた笑顔が何とも微妙であり、彼以上に彼女を知っているルイズにしてみれば気味が悪い以外の何物でもなかった。少なくとも、本当に普段からあの態度ならば『もう限界』などという発言は決して出てこないだろうと思わせるほどに。

「あなた」

すると、シャルロットがカトレアたちを伴って戻ってきた。結局、シャルロットが一度別荘に戻ったところで他の婚約者たちも学院に行ってみるということになったので全員を伴ってこの場に参上していた。

「来たか」

「本当にお姉様が教えていらっしやるのですね」

「なかなかさまになってるじゃないか」

「お似合いですね」

エレオノールもカトレアたちの姿を確認したが、教えている間は全くこつちのほうを見ようとはしなかった。そのあたりは下手な貴族よりよっぽど仕事に対して誠実であると言える。優秀すぎる人間は何処か浮いてしまう、エレオノールの婚期が遅れている原因はそういうところなのではないかとヴァルデスは最近になって気づいた。

「それでは本日はここまでにいたします」

エレオノールがそう宣言した後、彼女はヴァルデスたちのところにやって来た。

「ヴァルデス殿下、ご機嫌麗しゅう」

「ああ。だが、貴女が講師として教えに来るとは思わなかったな」

「女王陛下からの勅命とあってはどうしようもありませんわ」

「アンリエッタ女王の勅命？」

「ええ。どういうわけか、アカデミーに陛下直々に顔を出されて、ルイズに協力してあげてとお言葉をいただきました」

「なるほど」

形式的にはお願いであるが、最早これは女王から臣下への命令に他ならない。何よりも性質が悪いのはルイズのために、という言葉で自分は強制しているわけではないという意味を匂わせているところである。身内への協力なのだからするもしないも本人の自由のはずなのだが、そこに女王という権力がついてくるので必然的に命令になってしまうのだ。

「あの方もなかなか狡猾になってきたな」

「それに関してはコメントを控えさせていただきますわ」

家臣であるエレオノールはアンリエッタを批判することを言えないのは当然のことなのだが、あえて言わなくてもいい拒否の言葉を述べることで彼女の内心を窺わせていた。

「あなた、一つお願いがあるのですが……」

「何だ？ カトレア」

「実家に帰ったときは何だかんだあったので、久しぶりに姉妹で過ごしたいのですが……」

「そうか。じゃあ、別荘へ招くか」

「殿下。お言葉はありがたいのですが、私も一応は講師としてのこの学院に派遣されているので終わるまでこの学院を離れるわけには……」

……」

「ならば、私が高日はこの学院に滞在しますわ。エレオノールお姉様やルイズと一緒にお話をするにはその方が都合がいいのでしたら」

「……わかった。では、護衛の人間を少し残していくことに……」

「大丈夫ですわ。ここは今やトリステインの銃士隊が学院を護衛しているのですからわざわざあなたの護衛を外す必要はありませんわ」

ヴァルデスはそれでも護衛をつけようと何度も言ったが、カトレアは頑として受け入れなかった。そもそも、姉妹一緒にいたいというわがままを叶えてもらっているの、これ以上彼の好意に甘えるわけにはいかなかった。護衛を割くということは、それだけヴァルデスを守る人間が減ってしまうことになるので、彼に万が一の事態が起こってしまうことはカトレアにとって一番望ましくない事態だった。

それはトリステインとゲルマニアの国家間に亀裂を与えてしまうこともそうだったが、カトレア個人としてもヴァルデスを愛しているのが彼が傷ついたり、死んだりするようなことになったら彼女の悲しみは計り知れないものになってしまう。だからこそ、彼の護衛を減らすようなことはできるだけ避けたいというのが本音なのだ。

「わかった。但し、何かあったらすぐに別荘まで逃げてくるんだ」

「わかりましたわ、あなた」

ヴァルデスはそう言って別荘に向かう馬車に乗り込んだ。基本的に、学院は既に無期限の活動停止状態に入っているのだからというまいと関係ないのだ。暇だし、特にゲルマニアに何かをしてくと

いうわけでもないから学院に来ているだけであり、ゲルマニアにも何かあるようならば即座に本国に戻り、婚約者たちは確実に保護されるように事前の手配だけは済ませていた。

言い知れぬ不安が残ったが、カトレアの言うとおりでもあったのでヴァルデスはその場をおとなしく去っていった。

その晩、学院の食堂はいつもより静かだった。カトレアがいるので周りが気を遣っているということもそうだったが、普段騒がしい男子生徒が一人もいないのでどうしても静かになり、寂しい夕食となってしまうていた。

「まったく……どうして女王陛下が貴女に協力しなさいと言ったのかしら？　ねえ、ルイズ」

「ひたひれふ、ええおのーうねえはま」

口調は穏やかだが、エレオノールはルイズの頬をつねりながらそう言っていた。ルイズは必死で弁解しており、カトレアは穏やかに微笑を浮かべながらそれを見ていた。

「しかし、あの場は止められないから黙っていたけど、本当に殿下

のお傍を離れてもよかったの？ カトレア」

「ええ」

エレオノールの問いに、カトレアはいつもの笑みを浮かべながらそう言った。

「あの殿下の機嫌を損ねたりしたんじゃないかしら……結構気難しそうな方だし……」

「ふふふ。確かにあの方と初めて会った方は皆そう言いますわ。でも、ああ見えて優しい方ですわ」

「でも、護衛を断った時は不機嫌そうな表情をしていたじゃない」

「あれはあの方が私を心配してくださっているからですわ。自分の信頼している者を置いておかないことに少なからず不安を感じているのですわ」

カトレアから出た不安という言葉にエレオノールもルイズも思わず眉をひそめた。あの普段から確固たる自信を持って行動しているように見えるヴァルデスが、不安を抱くというのは似合わないこの姉妹は共通の見解を持っていた。

「あの殿下が不安……ねえ」

「とてもそういう感じには見えませんでしたけど……」

「あまり感情を表に出す方じゃないからそう見えるだけですわ。だから、色々と誤解されてしまうけど、私や他の方々を一切分け隔て

なく、平等に、それでいて全力の愛を私たちに注いでくださいますわ」

「……幸せなのね、カトレア」

カトレアは一瞬、エレオノールの婚約破談のことをすっかり忘れてしまっていたので、藪蛇になったかと思っただが、当のエレオノール本人は優しい笑みでカトレアを見ていた。

「正直なところ、少しだけ不安だったのよ。私の知らないところで貴女の病気が治ったと同時に婚約まで決まってしまった。ゲルマニアの貴族と聞いたときもそうだったけど、実際に殿下にお会いしてみても貴女が大切に扱われているかという不安だけが募ったわ」

「お姉様……」

「でも、今の言葉を聞いて安心したわ。昔から、貴女の人を見る目だけは確かだったし、貴女が幸せを感じているのなら、それが何よりよ」

「ありがとうございます。エレオノールお姉様」

カトレアは感謝の言葉を述べて深々と頭を下げた。エレオノールもその様子に微笑を浮かべていたが、それが終わると急に普段の鋭い目つきになって今度はルイズに言った。

「でもルイズ、あの平民だけは許しませんからね」

「え？ ええっ!?!?」

珍しくエレオノールの機嫌がよかったので安堵していたルイズだったが、急にエレオノールから才人のことを振られて思わず慌ててしまっていた。

「いくら何でも平民の男なんて絶対に認められないわ」

「サ、サイトとはそんなんじゃないもん！」

「嘘おっしやい！ 実家であれだけ騒いだくせに」

「あの……何かあったんですか？」

そのあたりの事情を全く知らないカトレアがエレオノールに訊ねてみた。

「ああ、貴女はヴァルデス殿下と一緒にすぐに帰ってしまったからいなかったわね。それがこの子だったら……」

「エレオノール姉様！ オスマン学院長が呼んでいますわ！」

すると、ルイズの言うとおりに確かにオスマンが手招きしてエレオノールを呼んでいるのが見えた。エレオノールは仕方ないと立ち上がり、ルイズは安堵のため息を吐いていたが、すかさず彼女から言葉が掛けられた。

「ルイズ、いい機会ですからこの際しっかりと話し合いましょう。色々よね……」

それだけ言ってエレオノールはオスマンの所に向かっていった。ルイズはその言葉を聞いて、今度は落胆のため息を吐いていた。

「あらあら、何だか大変ね。ルイズ」

「もう、エレオノール姉様ったら……」

ルイズは頬を膨らませ、カトリアはそれを見ていつものように微笑を浮かべていた。

「でも、ルイズも恋する年頃になったのね」

「ええ！？　そ、そんなんじゃないもん！」

「隠すことないわよ。ルイズだってもう恋をしてもいい年頃だわ」

「サイトなんて関係ないもん！」

「あら？　私はサイト君のことだなんて言っていないわよ」

すると、ルイズの顔は見る見るうちに赤くなってそっぽ向いた。

「ちいねえさまなんて嫌い」

「あらあら、嫌われちゃった」

カトリアはその様子を微笑ましく見ていた。相変わらずそっぽ向いているルイズに、普段自分がヴァルデスにしてもらっているように頭を優しく撫でてやった。

「ルイズ、その気持ちが本気なら大切にしなさいね」

「ちいねえさま？」

「私もルイズが幸せになってくれることを願っているわ」

カトレアはそれ以上何も言わなかった。ルイズもカトレアの優しい笑みを見て、それ以上何かを言う気にはなれなかった。言葉はなくとも、その表情や雰囲気から何か伝わった、ルイズはそんな気がしていた。

「そうだ、せっかくだから今日はルイズと一緒に寝ましょうか？」

「はい。ちいねえさま」

ルイズはカトレアと一緒に寝ることを喜んだが、それと同時に才人をどうしようかと考えていた。

（まあ、今日ぐらいは何処かで寝るでしょうし……ま、いつか）

そんなことなど露知らず、当の本人である才人は厨房で賄いを食べており、食事が終わってルイズの部屋に戻るなり追い出されることとなり、とぼとぼと学院内で眠れそうな場所を探して彷徨った。

三姉妹の夕食（後書き）

最近になってランキングタグというものの設定というものを学びました。

意味があるかどうかはわかりませんが、気が向いた方はばちっとお願いいたします。

最近、ゼロ魔SSで面白い作品が増えてきたので楽しみに読んでいます。私も楽しい作品を作れるように頑張ってまいりますのでよろしくお願いいたします。

炎蛇の贖罪と少女の憎悪（前編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

炎蛇の贖罪と少女の憎悪（前編）

その晩、アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランはベッドの上で眠りについていた。彼女の宿敵である、リツシユモンを倒すことはできたが、彼女の生まれ故郷であるダングルデルを焼き払ったその張本人は未だに見つかっていない。

生まれ故郷を失ったあの日から、彼女は火のメイジを嫌い、夢にはいつもあの燃え盛る故郷の情景が何度も繰り返し現れていた。

夢の終わりはいつも誰かの背中に負ぶされるところで終わる。自分を背負っているのは誰、夢の中の幼い彼女はいつもその顔を見ようとするのだが、その顔を見ることがなく夢は終わってしまう。かろうじてわかっているのは、背負っている人物が男であることと、その背中に大きな火傷があることだけだった。

だが、今日に限っては珍しく何の夢も見なかった。いや、夢を見していないというわけではなかった。ただ真つ暗な闇だけが広がっており、自分はただそこに立ち尽くしている。それを夢と呼ぶべきなのかどうかはわからないが、今はそういう夢を見ている。彼女はそう自覚していた。

そして、感じていた。今日は何かが起こると……。

彼女はそう思った瞬間、目を覚ました。普段と変わらない静かな夜、だが明らかに漂う雰囲気違った。

彼女はそれを認識するとすぐに手元に置いてある剣を取り、扉の傍に立ち廊下の様子を窺った。

(……………いるな。確実に)

彼女は息を潜めてそれが来るのを待った。敵の数は複数、それもかなり腕利きと見える。

すると、彼女の部屋の戸が開かれ、招かれざる客が入ってきた。

「はあっ！」

明らかに学院関係者でないそれを見て、彼女は迷うことなくその剣でその心臓を一突きにして、一瞬で相手を絶命させた。

「魔法学院に賊か……………」

「アニエス隊長！ ご無事ですか！」

彼女の部屋に彼女の部下が慌てて入ってきた。

「ああ。お前たちも無事だったか」

「はい。私たちの部屋に二人」

「我々の部屋に三人来ました」

「よし、五分で準備しろ。賊の一掃にかかる」

『はっ！』

彼女たちは敬礼をしてアニエスの部屋を出て行った。アニエスも

すぐに自らの装備を整えた。アニエスの部下たちも五分以内に装備を整えて彼女の前に整列していた。

「いいか、敵の数は不明だ。だから、一人では絶対に行動するな。A班はミシエル、お前が指揮をしる」

「はっ！」

「B班は私が指揮する。敵は恐らくメイジだ、魔法を使ってくるから決して油断はするな」

『はっ！』

「では、作戦開始！」

こうして、闇夜の掃討作戦は開始された。

一方、アニエスたちが動き出した頃、アルヴィーズの食堂では学院に残っていた女子生徒や教師たちが杖を奪われ、縄で縛られた状態で集められていた。

「ふふふ、おとなしくしていれば諸君に危害を加えるつもりはない」

食堂にいる一人の男がそう言った。彼がこの場にいる全てのメイジたちの上に立っている人物だということは、これを見れば誰もがわかった。

彼の名はメンヌヴィル、二つ名を『白炎』と言った。傭兵の間では異常者ということでは有名な男だった。人間を焼くことに異様なこだわりを見せるメイジであり、味方にしていれば頼れるが、それでもその異常性にたまに当てられてしまつて嫌悪感を覚えている者もいた。

「いったい、君たちは何をしようとしているのかね？」

同じく縛られているオスマンがメンヌヴィルに向かって訊ねた。

「これはこれは……高名なオールドオスマン殿。お会いできて光栄だな」

「思つてもいない世辞を言われても嬉しくないわい。それより、諸君らの目的を聞かせてくれんかの？」

「決まっている。諸君らを人質にトリスティン王家とアルビオン侵攻について交渉するためだ」

「王家が交渉に応じると思つのかね？」

「思つさ。いくら王家といえども、貴族たちを見限ることなどできん。所詮、王家など貴族なしでは何もできぬのだからな」

メンヌヴィルの言っていることは正論だった。王家というのは貴

族の忠誠があつてこそ、その権威を維持できるのであつて貴族たちからそつぽ向かれたらそれこそレコン・キスタに攻め入られる前にトリスティンが国家として維持できなくなるような事態に陥つてしまふのだ。

「だが、それをするにはちと人数が多過ぎやしないかね？」

「ん？」

「どつじやろう？ この老いばれが残るから生徒たちは解放してくれんかの？」

「悪いが、あんた一人だけでは交渉材料にはなりえない」

「では、私が残りますわ」

すると、エレオノールが声を上げた。

「私はヴァリエール公爵家の長女、エレオノール・アルベルティエヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール公爵家の長女なら交渉材料になるでしょう」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール公爵家の三女よ」

「私はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ。ヴァリエール公爵家の次女よ」

当初は余裕の笑みを浮かべていたメンヌヴィルも、カトレアの名前を聞いた瞬間にその表情をがらつと変えた。明らかに動揺してい

るのは誰の目から見ても明らかだった。

「カトレア……？ まさか、ゲルマニアの！？」

本来、ここにいるはずもない人間がいることにも驚いていたが、その相手が非常に厄介な立場にいる人物であることにメンヌヴィルは思わず舌打ちをしていた。

「……悪いが諸君らは重要な交渉材料だ。誰一人として解放はしない、彼女を除いてな」

すると、メンヌヴィルはその杖でカトレアを指した。

「何故私だけ？」

「我々が交渉するのはトリステイン王家だけだ、ゲルマニア皇室と事を構えるつもりはない。だから、貴女だけはすぐに解放する。そのまま立ち去ってくれてかまわない」

「そうはいきませんわ。他の方々を見捨てて、私だけ逃げるような真似はできません」

「勘違いしないでください。我々が必要としているのはトリステイン貴族であって、既にゲルマニア貴族である貴女に用はないというだけだ」

すると、食堂の扉が激しく叩かれた。

「中にいる賊よ、聞くがいい！ 私はトリステイン王国銃士隊長のアニエス・シュヴァリエ・ド・ミランだ！ 貴様らは完全に包囲

されている！ 人質を解放し、降伏すると言うのならは命まで奪うつもりはない！ しかし、あくまで徹底抗戦を貫くというのならこちらも容赦はしない！」

アニエスの言葉を聞いて、ますますメンヌヴィルは表情を曇らせた。

「トリステインの犬め、何とタイミングの悪い……」

まだカトレアを解放できていないこの状態でアニエスたちが乗り込んでくるのは最悪のタイミングと言ってもよかった。このままでは、カトレアを解放することもできなくなり、それを理由にゲルマニアまでアルビオンに宣戦布告してくるなどという最悪の事態さえ想定できる。

そもそも、メンヌヴィルがここにやって来た理由はトリステインの足を止めるためであり、足を止めるどころか余計な敵まで増やしてしまうことになるのは決して望むところではなかった。

トリステイン一国ならばアルビオンでも十分に勝算のある相手であるが、ゲルマニアは違う。かの国の軍備は他国よりもはるかに充実しており、軍としての練度もトリステインよりも高い。ゲルマニアを敵にするぐらいならば、トリステインだけを相手にしているほうがずっと楽な戦いになることは間違いようもなく、それゆえにメンヌヴィルはこの場にカトレアがいたことを心の底から呪っていた。

「どつやら、形勢はかなり不利になったようね」

ルイズがそう言った瞬間、メンヌヴィルは彼女の前まで歩み寄って、その頬を思いつき張り飛ばした。乾いた音がアルヴィーズの

食堂内に響き渡り、その音を聞いた女子生徒たちは恐怖に震えて、今まで必死にこらえていた声を上げだした。

「いやあー！」

「助けてえー！」

「うるさいー！」

メンヌヴィルはそう言つて巨大な炎の球を作り出した。最低でもトリアングルクラスであるその炎を見て、騒いでいた生徒たちは更なる恐怖によってその口を閉ざされた。

「トリステインの犬ども、よく聞け！　今すぐここにアンリエッタ姫かマザリーニ枢機卿を呼んで来い！　その両名以外とは一切交渉はしない！」

メンヌヴィルの言葉を聞いて、外にいた銃士たちは苦い顔をしていた。ただの平民の人質ならば多少の無茶はできるかもしれないが、人質全員が貴族の子供ということになるとそれはできない。

杖をもたなければただの人、その言葉どおりに普段は威張り散らしている彼らもこの時ばかりはただの足手まといにしかなくなっていた。そうならぬように、普段の訓練で武器での戦い方の心得を多少なりとも教えていたのだが全く役に立たなかったらしい。

「隊長、トリスタニアに急使を飛ばして増援を頼みましょう！」

「無駄だ、人質がとられている以上、味方が増えても無意味だ！」

「いいか！ 今すぐ決断をしろ！ 決断を下さぬ場合は、五分ごとに一人ずつ殺していく！」

「おのれ……」

アリエスはまだ見ぬ賊の頭領の狡猾さに苛立ちが募り奥歯を軋ませた。

中ではメンヌヴィルの言葉を聞いた生徒たちが、いよいよ自分の命も危ういということに恐怖に体を震わせていた。目から涙を零す者がたくさんいたが、泣き声を上げる者は誰一人としていなかった。聞こえてくるのは泣き声を必死でこらえようとする嗚咽だけだった。生徒たちもわかつていた、ここで目立つことや泣き声で相手を刺激するようなことをしては真つ先に自分が殺されてしまうということ。

「さて諸君、そういうことだ。外にいる銃士隊とやらが早い決断を下してくれることを祈るのだな」

メンヌヴィルは先程とは打って変わって穏やかな口調でそう言ったが、その表情が決してその内心が言葉どおりでないことを物語っていた。

一言で言うならば交渉が決裂すればいい、明らかにメンヌヴィルがそれを望んでいるのははっきりと顔に出ていたし、彼の性格からして早く誰かを焼いてしまいたいという欲求がここに来て強く出始めていた。人を焼いた時に漂うあの匂い、メンヌヴィルはその匂いに異様なまでの興奮を覚え、それこそ性的快樂にも等しいものが全身を駆け巡るのを感じる人間だった。

「ルイズ、大丈夫？」

カトリアは先程頬を張られたルイズを心配して声をかけていた。痛々しく腫れている妹の頬に手を当ててあげることさえ出来ないこの状況を、自分が何もできないことを歯がゆく思っていた。

「だ、大丈夫ですわ。ちいねえさま」

「あの男、助かったら絶対に許さないわ」

エレオノールの目は明らかにルイズを傷つけられたことによる怒りと憎悪に満ちており、それを隠すことなくメンヌヴィルを射抜くかのようにずっと睨み続けていた。

時間が経つのはあっという間である。五分という時間は生徒にとっても、外で包囲している銃士たちにとってもあまりに短い時間だった。

「五分経った！ 宣言どおり、一人を殺す！」

メンヌヴィルのその言葉を聞いて、生徒たちはいつせいに怯え、また外にいたアニエスも慌てた。

「待て！ もう少し時間をくれ！」

「いいや、駄目だ！ 俺は五分ごとに一人殺すと明言したはずだ！ 決められないお前たちが悪い！」

「くっ………！」

アニエスは拳を思いつき握り締めていた。現在のこの状況で自分が出ることなど何もない。そもそも、この場にアンリエッタやマザリーニを連れてくることなど初めから選択肢に入るわけがない。どちらを欠いてもこの国は大きく揺らいでしまうことになる、それがわかっていてこの状況下で優先すべき命がどちらであるかは誰の目から見ても明らかだった。

だが、それでもアニエスは何一つできない自分に腹が立った。かつて故郷を焼かれた時も泣いているだけで何もできなかった、それと同じ無力感と腹立たしさが彼女の中を駆け巡っていた。

「さて……では諸君の中から一人を殺すことにしよう」

メンヌヴィルはそう言うと、生徒たちをぐるっと見回したが、メンヌヴィルはルイズを見てにやつと笑った。

「では、まずお前から焼いてやろう」

その言葉を聞いてエレオノールとカトレアはルイズをかばうようにその前に立ちはだかった。

「外にいる奴ら、よく聞け！ 今からヴァリエール公爵家のルイズ嬢を殺す！」

メンヌヴィルが口にした名前を聞いて、アニエスはますます焦った。

「待て！ 今、城に急使を向かわせた！ だから殺すな！」

もちろん嘘であったが、嘘を吐いてもメンヌヴィルにルイズを

殺させるわけにはいかなかった。他の貴族ならばまだ後でどうとでもすることはできるのだろうが、ヴァリエール公爵だけはいかにアンリエッタやマザリーニの力をもってしてもどうにもならない有力貴族の一人だった。

そもそも、少し前にそのルイズに戦争参加をアンリエッタが要請したということで、トリステイン王家とヴァリエール公爵家との間で一悶着起こしたことは公然の事実であり、それは城にいるほぼ全ての人間が知っている。

ただでさえ、両者の仲が悪い現在、これ以上その関係がこじれることは最も忌避すべきことだった。ヴァリエール公爵家はトリステインで一二を争うほどの大貴族、それがトリステイン王家に対して反旗を翻すということになると、いったいどれだけの貴族がヴァリエール公爵についてしまうかは想像も及ばないほどになるだろう。

元々、この戦争はアンリエッタの強い意向に軍部が乗った形で開戦へと押し切ったものであり、本音では賛成していない貴族のほうに圧倒的に多いのだ。ヴァリエール公爵家はそんな彼らにとつてこれ以上ないくらい頼りになる旗頭になることは間違いなく、今の王家を倒してヴァリエール公爵を新たな王に据えようという動きが出てきてもおかしくない。

そうなればその裏でアルビオンが高笑いを上げるのは間違いない。理由こそ違うが、現在の始祖の血統に対して反旗を翻したという点ではレコン・キスタと同類という扱いを諸国からされてしまうのは想像に難くない。ヴァリエール公爵は王家の庶子の一族であるから、血統的には全く無関係というわけではないがトリステインという国が諸国からの信頼を著しく失ってしまうことは避けられない。

それに、平民である自分を貴族に取り立てて、姓まで与えてくれたアンリエッタを苦境に追い込んでしまうことだけは何としても避けたい。アニエスはその思いから吐いた嘘であった。

しかし、そんなアニエスの嘘もメンヌヴィルには全く通用しなかった。

「嘘だな」

「嘘ではない！」

「ならばどうして！ もっと早く言わなかった！ 本当は何もしてないからだろうが！」

「くっ……」

「そこで聞いているがいい！ この女の断末魔の叫びを！」

アニエスは何度も何度も扉を思いつきり叩いたが、メンヌヴィルはもう見向きもせず、ルイズに向かって杖を向けた。

「恨むのならアンリエッタを恨むのだな」

メンヌヴィルの杖の先に炎が生まれ、そしてルイズへ向けて繰り出される刹那

「何？ あれ」

すると、一人の女子生徒が窓から入ってきたいくつもの紙風船を見つけた。他の生徒やメンヌヴィルの部下たちもそれを見た。

全員に注目が集まったその瞬間、紙風船に火が放たれ、室内に強烈な光を放った。

「うわっ！」

「きゃあ！」

「今だ、サイト君！」

「はい！」

強烈な閃光の中、二人の男の声が聞こえた。光によって視力を奪われて混乱している最中、侵入した才人は迷うことなくルイズの元に行ってその縄をデルフで切った。

「サイト！」

「大丈夫か、ルイズ！」

才人はカトレアが来るということで部屋を追い出されていたことが幸いし、賊に鉢合わせすることもなかった。そこで同じく賊の気配を察知して隠れていたコルベルと出会うことができ、二人で救出計画を進めていた。

ルイズが殺すというメンヌヴィルの言葉を聞いて、二人は作戦を実行した。幸運にも作戦は見事に成功し、才人とコルベルは次々と生徒たちの縄を解いて行き、中の様子が変化したことを察知して強行突入してきた銃士たちに誘導されながら逃げ出し始めた。

「危ない！」

コルベールは逃げようとしていた生徒の一人を突き飛ばし、杖を構えて飛んできたファイアー・ボールを打ち消した。

「お、お前は……」

すると、メンヌヴィルは突然体を震わせ、その表情が狂気の愉悅に歪んだ。

「おお！ 隊長殿ではないか！？ いやあ、お懐かしい！」

「……お前は相変わらずのようだな」

興奮しているメンヌヴィルとは対照的に、コルベールは普段は決して見せることのない冷たさを感じさせる表情で彼を見ていた。

「隊長、お知り合いですか？」

部下の一人がメンヌヴィルに向かって訊ねた。既に視力も回復しているため、サイトやコルベールを取り囲むようにして杖を構えていた。銃士たちも中にいるが、睨みを利かせているため逃げ遅れている生徒たちを助けることもできずにいた。

「ああ。二十年前、『魔法研究所実験小隊』^{アカデミー}という実験小隊と一緒に仕事をした間柄だ。俺が副隊長で奴が隊長だった。俺たちは命令でとある村を焼き払った。家も家畜も人も、全てを俺たちは焼き払った」

アニエスはその言葉を聞いて、全身に寒気が走った。

炎蛇の贖罪と少女の憎悪（後編）（前書き）

この小説はゼロの使い魔の舞台をモチーフにしたファン小説です。
オリジナル主人公が活躍するため、原作とは大きく異なる点もございますのでご了承ください。

炎蛇の贖罪と少女の憎悪（後編）

「『魔法研究所実験小隊』？ 聞いたことありませんね」
アカデミー

「今もあるのかどうかは知らないが、魔法衛士隊が花形なら俺たちは裏方と言ったところだな。魔法衛士隊ではできない汚い裏仕事をやるのが俺たちだったということだ」

「なるほど……」

メンヌヴィルの言葉を全員が黙って聞いていた。いや、黙って聞くことしかできなかった。

メンヌヴィルは朗々と語っているが、その間も二人の間には緊迫感が漂っており、下手に手を出すことも逃げ出すこともできないような状況だった。

「そこで俺は隊長と出会った。俺も自分の炎には自信があつたが、隊長の炎は俺の炎を遥かに凌ぐものだった。俺は生まれて初めて恐怖した。そして、俺は試してみたくなつた。俺の感じた恐怖が本物なのかどうかを！」

「……それで結果は？」

「このざまだ」

部下の言葉にメンヌヴィルは己の目を指差した。その目の周りには古い火傷の痕があり、その目は何も見えていなかった。

「だが俺は後悔していない。貴族の名を失い、光を失い、人殺しに成り下がったが力を得ることができた。その力を得るために多くの人間を焼いたがな」

「なるほど」

「そして、この話には壮大なオチがあった」

「オチ？」

「ああ。俺たちは疫病蔓延を阻止するためという名目の元で村を焼き払ったのだが、その実はロマリアに金で頼まれた、ただの新教徒狩りだったのさ」

「そうだ。我々は罪のない人々を焼き殺してしまった」

コルベールは悲しみに満ちた表情でそう言った。

「あの日以来、私とお前は小隊を去った。そして、私は破壊以外の火の道を探し始めたが、お前は何も変わらなかったようだな」

「ふふふ。まさか、『炎蛇』と恐れられたお前が教師をしているとは……どつりで戦場で出会うことがなかったはずだ。俺とお前、過ごしてきた二十年はまるで違うものだったのだからな」

「愚かなことだ。二十年前のダングルデル、あそこで私とお前の人生は二度と交わることはないと思っていたのだが……」

「貴様らあ……！」

すると、剣を構えたアニエスが二人に向かって斬りかかってきた。

「何だ？」

「アニエス君！ 落ち着きたまえ！」

「うるさい！ 貴様らが私の故郷を！ 私の家族を！！」

アニエスは最早敵味方の区別なく、二人に向けてその剣を振るい続けた。

「ほう……お前はあの村の生き残りというわけか。まさか、こんなところで二十年前の任務の失敗を突きつけられるとは人生とは本当に面白いものだ」

「うるさい…」

アニエスが振るった剣を、メンヌヴィルは自信の持っている鋼鉄で固定化のかかった杖ではじき返した。甲高い金属音が食堂内に響き、そこでようやくアニエスも少し冷静さを取り戻してメンヌヴィルの隙を窺うようになった。

「ふふふ。せつかく拾った命をまた捨てにくるか」

「うるさい…」

「そもそも、俺たちが行ったことは少なくとも国家の命令だ。人殺しを正当化するような恥知らずな真似はしないが、少なくともあの時、お前たちは国家から人間ではないと言う烙印を押されたんだ！

俺たちが事の真相を知ったのは随分後になってからのことだが、

それでもあの時、お前たちは国から人間ではなく、疫病を蔓延させる病原体だから焼き払えと言われたんだ！ 真相はどうであれ、お前たちは捨てられたんだ！」

「うるさいうるさい！」

「メンヌヴィル！ やめろ！」

しかし、メンヌヴィルはコルベールの言葉を聞かずに、更に言葉を続けた。

「二十年前には、お前が仕えているアンリエッタは生まれてもいなかった！ だが、この国がお前たちを捨てた事実は変わらない！ それでもお前はこんな国に仕えるか、小娘！」

「うるさいうるさいうるさい！ 黙れえ！」

アニエスはメンヌヴィルの言葉に何を信じてよいかどうかわからなくなり、頭を思いつきり振ってその雑念を振り払おうとした。しかし、それでも疑惑と不信感だけが次々と湧いて出てきており、アニエスの心はそれに押し潰されそうになっていた。

「もういい！ メンヌヴィル！」

「『炎蛇』よ！ お前もそう思っていたはずだ！ お前は俺と違って職務に対しては非常に忠実だった！ お前もあの時、国家のためと言う大義を掲げてあの村を焼き払ったはずだ！ あの時、お前は一切の容赦なく村を焼き払った！ お前の頭にあつたのは疫病を蔓延する原因を排除する、ただそれだけだったはずだ！ そこで焼き払ったのが家であろうと人であろうとどちらでも同じ程度のものだ

「つたはずだ！」

「……確かにそのとおりだ。私は国に病気が広がらないようにするため、それを正義だと考え、彼らを焼き尽くした。だから、その真実を知ったときは愕然とした。私は信じていた国に裏切られ、何の罪のない人々を金のために殺す道具として扱われた。その真実と、私が信じていた正義というものは決して唯一絶対のものではないということを知った」

コルベールの告白を生徒たちは静かに聞いていた。普段はちよつと変わっているが、明るく優しい教師という一面しか見せないコルベールに、こんな悲しい過去があったなどと誰も信じられなかった。コルベールの過去を知っているオスマンも、こうして改めて本人とその当事者たちの口から聞かされた真実に何とも苦い思いを味わっていた。

「だから、私は小隊を去った。そして、この学院で教師となり教える子たちを導く道を選んだ。私のように道を誤らないようにするために」

「偽善だな。どんなに言葉を飾ろうとも人殺しは人殺し、お前も俺も同じということだ」

「そのとおりだ。だからこそ、お前はここで止めなければならぬ」

「おっと。俺を止めるつもりなのは結構だが、お前の大事な生徒が人質であるという状況は変わっていないぞ」

メンヌヴィルの言葉に合わせるかのように、その部下たちは杖を生徒たちに向けていた。すでに呪文の詠唱は終わっており、いつで

も生徒たちに向けて術を放てる状態になっていた。

「この期に及んでまだ生徒たちを人質にするか!？」

「悪いが俺も仕事だ。そう簡単に諦めるわけにはいかない」

「くっ……!」

確かに生徒の半数ぐらいは逃がすことに成功しているが、それでもまだ半分の生徒を人質に取りられてしまっただけで手は打てない。もっとも、メンヌヴィルたちもすっかり包囲されていることには変わりはないので、互いに膠着状態が続く……かに見えた。

「随分と楽しそうにしているじゃないか」

突然聞こえてきたその言葉に、全員の注目が集まった。

「あなた……!」

「まさか……ゲルマニアのヴァルデス……」

メンヌヴィルは両目が見えない。そこに何かがあるという判断は、傭兵としての勘というのもあったが、メンヌヴィルが目を見失ってから培われた絶対的な温度感覚によるものだった。人間の温度を感知する敏感な感覚、それによってメンヌヴィルは敵の居場所をほぼ正確に察知することができるようになっていた。

だが、メンヌヴィルが察知できるのは人の気配だけなのだ。後は周りに教えてもらうか、この場において誰がそのピースに当てはまるかを推理して話す。

しかし、そんなメンヌヴィルでも彼が誰であるかはすぐにわかった。本来、この場にはいないはずの人物だが、それでも彼の気配だけはメンヌヴィルにも特別であると思わせていた。

それは何とも不思議な気配だった。実戦慣れしている傭兵にも似ているが、それとは根本的に何かが違う。傭兵よりももっと底知れぬ何かがあり、それと同時に思わずひれ伏してしまうような畏怖を与えてくるような感覚。今まで、メンヌヴィルが出会ってきたどんな人間にも当てはまらず、彼は目の前に対峙しているのがヴァルデスだと結論付けるしかなかった。

「どうしてここに？」

「馬鹿か。戦時中の国にいるのに、飛行するものの調査を怠ると思ったのか？ 私の護衛が夜中に飛行する怪しい気球を見つけ、それが魔法学院に向かってしていると報告を受ければどんな間抜けでも怪しいことに気づく」

「くっ……！」

ヴァルデスはカトレアに視線を向けて、それから改めてメンヌヴィルを見た。

「俺の女の身柄を押さえてゲルマニアを脅迫するつもりだったか？ 浅はかなことだ」

「お前の女がいたことは全くの偶然だ。我々がゲルマニアと喧嘩することに何の意味もない」

「……なるほど、嘘は吐いていないようだな。だが、俺の女を人質にとったことは事実だな」

メンヌヴィルはヴァルデスから放たれる雰囲気明らかに変わったことを察した。目が見えない分、気配を察知することが敏感になっているので、彼から放たれる重圧の感じ方は常人よりも重くのかかっていた。

「殿下、こつちには人質がいることをお忘れ……」

メンヌヴィルがそこまで言いかけたとき、周囲から悲鳴が聞こえた。メンヌヴィルは自分の部下が次々と倒れていくのを感じ取り、改めてヴァルデスに話しかけた。

「遍在による不意打ちとは……随分と王族らしくないやり方をなさるものですね」

「貴族の名を捨てて貴族の戦いというものを忘れたらしいな。笑顔で対峙して寝首を搔く、これが貴族の戦いであり、俺が城に上がったから今日に至るまで続いているものだ」

ヴァルデスはここに入る前に自身の遍在をいくつも作り出し、その遍在で油断していたメンヌヴィルの部下の心臓をナイフで一突きにしていったのだ。全員の注目が入り口にいるヴァルデスに集まっていたため、誰一人として遍在に気づくことはなく、メンヌヴィルの部下たちも対処しようもなくあっさりと絶命していった。

「どうやら殿下は相当荒事に慣れていらっしやるようだ」

「それでも、かつては一部隊を率いていた身だ。甘く見るな」

部下は全てやられ、作戦は最早完全に失敗していた。生徒たちも既に食堂を離れ、中にいるのはヴァルデスとメンヌヴィルとヴァリエール三姉妹と才人、そして、コルベールとアニエスだけとなった。

「あなた」

「カトレア、外に出ている。少し荒事になる」

「ですが……」

「護衛は既に待たせてある。彼らに任せれば問題はない」

「……ご武運を」

カトレアはそう言ってルイズたちを連れてアルヴィーズの食堂を後にした。メンヌヴィルもこの状況ではどうにもできないため、ただそれを見逃すことしか出来なかった。

「お前は私が相手をしてやる」

「殿下自らお相手いただくとは光栄だな」

「殿下！　どうか、その男は私にやらせてください！」

すると、アニエスがヴァルデスにそう願いだした。しかし、ヴァルデスはアニエスの願いを聞き入れなかった。

「ここまで失態を重ねてきたお前をどうして信用できる？　笑わせるな」

アニエスは臍をかむような思いだったが、ヴァルデスの言うことの方が全て正しかった。魔法学院に常駐していたにも拘らず、賊に簡単に押し入れられ、あまつさえ生徒たちを人質に取られてしまったというのは失態以外の何物でもない。

この件が済んだら、恐らく自分は銃士隊の隊長を下ろされる。アンリエッタよりせっかく賜ったシュヴァリエという身分も、ミランという姓も失うことになるかもしれない。だから、そうなる前にこの男を自分に手で殺したい。それがアニエスの願いだった。

「さて、始めようか」

「殿下は不意打ちがお得意のようですが、真つ向勝負はどうでしょうかね！」

メンヌヴィルはそう言ってヴァルデスに向けて炎を放ってきた。最早、この状況においてゲルマニアどこを考える余裕はない。ただ、目の前の敵を倒して逃げ延びる。それしかメンヌヴィルの頭にはなかった。

自分に向かってくる炎をヴァルデスは剣を抜いて、風を発生させることによつて軌道を逸らした。ヴァルデスは全く動揺することなく、冷静に戦いをこなしていた。

今のヴァルデスを例えるなら、それは先端の尖った氷のようであり、その先端をメンヌヴィルの喉元に突きつけている。アニエスとコルベールにはそんな風に二人は見えていた。

「ウィンディ・アイシクル」

ヴァルデスは炎をそらした直後に呪文を唱え、すぐに術をメンヌヴィルに向けて放った。風に乗ったいくつもの氷の刃がメンヌヴィルめがけて飛んでいく。一つ一つは小さいので致命傷にはなりにくい。それでも直撃すれば相手の機動力を大きく奪うだけに威力はある。

「ぬるいわー！」

メンヌヴィルは再び炎を放って、飛んでくる氷の刃を全て溶かしてしまった。

「くら……！」

メンヌヴィルはそのままヴァルデスを焼き払おうとしたが、即座に術を止めてその場を離れた。メンヌヴィルが離れた直後、彼がさつきまでいた場所には巨大な氷の刃ジャベリンが突き刺さっていた。

ヴァルデスはウィンディ・アイシクルを囿として使い、本命はこのジャベリンでメンヌヴィルの体を貫くことだった。ジャベリンはウィンディ・アイシクルとは違い、氷の刃が大きいために直撃すれば充分死に至るだけの威力を持っていた。

「見えない目でよくかわせたな」

ヴァルデスはメンヌヴィルに賞賛の言葉を贈ったが、その表情は全くの無表情だった。二人の戦いを見ていたアニエスは今のジャベリンについては完全に見落としていたし、コルベールも遠めで見ていたからこそ気づけたものの、自分がメンヌヴィルの立場だったらどうだったであろうか、と悩んでいた。

一方、メンヌヴィルも彼が情報を視覚に頼らず、周りの温度変化によって情報を得ているからこそ、室内とはあまりに違いすぎるジヤベリンの氷点下との気温差でそれに気づくことができている。彼もまた、追い詰められて必死の戦いをしていた。

「なるほど。殿下は相当戦い慣れをしているようだ」

表情こそ変えないが、メンヌヴィルは明らかに焦っていた。不意打ちはともかく、メイジとしての実力も自分より上をいつていると思われるヴァルデスをどうすれば出し抜けるかを必死になって考えていた。

メンヌヴィルが全力で放った術ならば、炎は熱風を生み出し、気流の変化をもたらすこともできるので、効果をあげることもできるかもしれないが、あのヴァルデスがそのことを考えていないとは到底思えない。だからと言って、他系統の術に関しては火系統とは比べ物にならないほど威力は弱く、使える術のレパートリーも少ない。

正直なところ、まだ戦いを開始して僅かな時しか経っていないが両者の格付けはこの時点で既に終わっていた。後は強者であるヴァルデスがどのようにしてメンヌヴィルを殺してしまうか、最早この戦いにおける見所はそこだけになっていた。

それは傍目で見えていたアニエスとコルベルにもわかっていた。決着は、呆気なくついてしまうだろうと。

(考える！ どうする！？ どうすればいい！！)

メンヌヴィルはこれまでにないくらいに必死になつて頭を働かせていた。今までの戦場では相手の焼ける匂いを嗅ぐことに執着し、その無慈悲な力を振るい続けてきた彼が、今はかつて自分が殺してきた者たちと同じ立場に立たされていた。

そして、この湧き上がってくる感情は、かつてコルベールと初めて出会った時に感じたものと同じものであることを理解していた。

それは恐怖。幾多もの戦場を生き抜いてきたメンヌヴィルをもつてしても、ヴァルデスの前では恐怖を感じずにはいられなかった。自分のような狂人ではなく、ヴァルデスはあくまで理性的に相手を殺す。はつきりとした目的意識があり、それに則つて彼は人を殺す。

ただ快楽を求めるために殺す自分とは違い、己の分をわきまえ、その上で利益を得るために殺す。これは最も怖いものである。目の前で食事を共にしている相手を笑いながら殺すことのできる人間、対等の立場から捕食者へと瞬時に立場を切り替えることの出来る人間は何よりも怖い。

あえて言うなら異常者である。正常な状態から狂ってしまった狂人とは違い、初めから何かが違う。生まれながらにして普通の人間とは違う何かを持っている、あるいは何かを失っているというのが適切なだろう。何かを失っているからこそ殺しという最も卑しい行為にも抵抗をなくし、何かを持っているからこそ利に聡くなり、殺しという最も卑しい行為を受け入れるだけの度量を持っている。持っている者なのか、失っている者なのかは誰にもわからないが、それだからこそ異常者なのだ。

「さて、夜も更けてきた。俺も今夜のお勤めがまだ終わっていないからこのあたりで終わりにしようか」

そして、捕食者はとどめの一撃を加えようと獲物に狙いを定めた。

「おのれええ！！！」

メンヌヴィルは渾身の力を込めて無作為に術を何発も放った。当然、そんな術がヴァルデスに当たるはずもなく、彼が作り出していた風の障壁であっさりと防がれていた。

しかし、メンヌヴィルの術と風の障壁が触れた瞬間に術は爆発音と爆煙をあげ、煙をすぐに払ったがメンヌヴィルの姿は何処にもなかった。

「なるほど。術を目くらましにして逃げたか」

「す、すぐに追え！」

「必要ない」

アニエスが銃士たちに慌てて命令を下したが、ヴァルデスはすぐにその命令を撤回させた。

「ちゃんと準備はしてある。あいつが生きてこの学院を出ることはまずない」

ヴァルデスはそう言って剣をしまった。

一方、メンヌヴィルは成功確率が万に一つの可能性であった逃走という手段が成功したことに心から喜んでいた。当然追っては来るだろうが、ヴァルデスを相手にするよりは他のメイジや銃士を相手

にするほうが、かつて自分が恐怖を抱いたコルベールを相手にするほうがずっとましだと思っていた。

ヴァルデスに比べれば、他の連中はまだ正常な人間だからだ。正常な人間、あるいは狂人ならば自分でも対処できると思っていたが、異常者だけはどうにもならないことを彼はこの戦いで知ることになった。そして、あれを超える異常者はこの世にいないだろうと思っていた。

「待て」

すると、メンヌヴィルの前に一人の騎士が立ちはだかった。

「誰だ……お前」

「私の名はネージユ。メンヌヴィル、貴方をここから生かして出すわけにはいきません」

隙のない立ち方、それを見るだけでも銃士という連中よりは明らかに実力が上の存在だとわかった。だが、あの異常者が放つ恐怖に比べれば、この者が放つ威圧感はいかに及ばない。メンヌヴィルはそう判断し、安堵していた。

だが、それは大きな間違いであった。普段の彼ならばその程度のことでは安堵など絶対にしなかっただろうが、ヴァルデスという異常者が放つ恐怖によって、彼が持っていた勘を大きく狂わせてしまっていた。

「死ねえ！」

メンヌヴィルはネージユに向かつて杖を構えた。しかし、既に彼女は行動を開始しており、一気にメンヌヴィルの懐にまで距離を詰め、彼の心臓目掛けてその刃を突き刺した。

「ぐっ!？」

メンヌヴィルは見誤った。ネージユがメイジであることは見抜いていたが、メイジが必ずしも魔法で戦いを挑んでくるなどという誤った先入観を抱いていた。

それは、先程戦っていたヴァルデスが剣を杖にしていたのに武器として使ってこなかったことが原因に挙げられる。どんな形をしていようと、メイジが持っている以上、それは杖にしかなりえない。そんな誤った先入観をあのかいでメンヌヴィルが抱いてしまった。それは間違いなくヴァルデスが放っていた恐怖によって植えつけられたものに相違なかった。

「お前の敗因は一つだ」

薄れ行く意識の中、メンヌヴィルは確かに悪魔の声を聞いた。

「お前はメイジを言う枠を外すことができなかった。魔法で戦うからメイジ、その先入観こそがお前の敗因だ」

それがメンヌヴィルがこの世で聞いた最後の言葉となった。その言葉を聞くと同時に、彼はこの世を去った。

「ご苦労だったな、ネージユ」

「はっ!」

「今夜はもう遅い。抗議は明日にして帰ることにしよう」

「かしこまりました。ヴァルデス様」

メンヌヴィルの死体を銃士に引渡し、二人は護衛たちが待っている馬車に戻った。そこにはカトレアたちも既に控えていた。

「お疲れ様でした。あなた」

「お前も災難だったな」

「いえ……」

「では、戻ることにしよう。お前たちも今日は我が別荘で休むがいい」

「ありがとうございます。殿下」

エレオノール以下三人はヴァルデスに対して深々と礼をした。

「ネージュ」

「はい」

「今夜は久しぶりに興奮した。今夜のお勤めは激しいものになりそうだ」

「この全身全霊を持ってヴァルデス様の寵愛を受ける覚悟でございます」

「いい返事だ」

こう言ってヴァルデスたちは馬車に乗り込んだ。エレオノールとルイズ、そして才人はその言葉に頬を朱に染め、カトレアはいつものおりの笑みを浮かべていた。

こうして長い一夜は終わった。

炎蛇の贖罪と少女の憎悪（後編）（後書き）

メヌ又ヴィル編でした。

まともにヴァルデスが戦った珍しい話でしたが、結局とどめはネー
ジユでした。

まるで某将軍が「成敗！」の一言で自分の手を汚さないようなシー
ンが浮かびました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5334k/>

生まれ変わりは貴族？

2010年10月9日21時07分発行